THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附錄號

第廿三年 第[illegible]號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

四月一日より

染織競技會開催仕候

新案芦手摸様と稱し最も優美高尚なる圖案を應用せし
新製品澤山陳列仕候
右應用の衣裳を六歌仙に因みたる六個の人形
に着用致させ店内に陳列御觀覽に供し候

◎仕立洋服發賣仕候間御用命奉願候

◎よせきれ見切反物大賣出し仕候

東京日本橋

白木屋呉服洋服店

新學年校

●各科共四月初旬——新學年第壹號——發行す●

早稻田中學講義

二年卒業

本講義錄は全然文部省令の中學校教授細目に準じて掲載學科を編成し然も之れ以上に實用的智識を得せしめんが爲め尤も時勢に適切なる學問實業藝術を加へたり且つ本講義錄の特色は教育界**第一流の大家**を講師とし**教授法の斬新**文章の平易**短期の修了**學資の低廉等にあり而して學科の配當も五學期に劃して中學校五學年の進度に倣ひ難讀の文字には悉く**振假名**を附したれば如何なる人も講讀に適す加之每號優美なる**繪畫**を添へ**雜錄、雜報**にては社會一般の新智識を得せしむ

◉道德の要領　文學博士　坪内雄藏
◉倫理學一斑　文學博士　坪内雄藏
◉國文　永井一孝
◉文法　文學士　横地清次郎
◉作文　五十嵐力
◉漢文　文學士　丸井圭次郎
◉習字　小山雪潭
◉國文學史要　土屋詮教
◉英語(發音、綴字、讀方、會話)　マスター、オヴ、アーツ　岸本能武太
◉英語譯解　増田藤之助
◉英文法作文　二木千年
◉支那語　青柳篤恒　宮島吉敏
◉獨、佛、羅甸、希臘、露、朝鮮語發音文字　各專門講師

◉日本史　文學博士　原秀四郎
◉東洋史　文學士　高桑駒吉
◉西洋史　文學士　本多淺次郎
◉日本地理　農學士　志賀重昂
◉外國地理(亞細亞、大洋洲、亞弗利加)　理學士　山上萬次郎
◉同(歐羅巴、亞米利加)　野口保興
◉地文學　理學士　石川成章
◉算術　理學士　吉田好九郎
◉代數　理學士　吉田好九郎
◉幾何　理學士　田邊尚雄
◉三角法　理學士　田邊尚雄
◉鑛物　理學士　瀧本鐙三
◉動物　吉田貞雄
◉植物　理學士　草野俊助
◉生理衛生　糸左近

◉化學　理學士　池田清
◉物理學　理學士　田中三四郎
◉法制　法學博士　高田早苗
◉法制　法學博士　有賀長雄
◉經濟　法學博士　添田壽一
◉繪畫の栞　川端玉章
◉圖畫　山口大藏
◉音樂　東儀季治
◉簿記　商學士　吉田良三
◉農業大意　農學博士　横井時敬
◉工業大意　米國工學士　關口八重吉
◉商業大意　石川文吾
◉自修法　土屋詮教
◉體育　安部磯雄

早稻田商業講義

二年卒業

◀最新刊之珍籍▶

大使館三等書記官 奥田竹松君著

佛蘭西革命史

新刊發賣

佛國革命は獨り世界近世史中の最大史實たるのみならず實に振古未曾有の最大史實たり。十八世紀の舊天地より世界の根軸を撼かして之を現代の新天地に移し得たる大史實たるなり、又其の外觀內容に於て壯觀悲絕又慘絕を極めたるのみならず、後世に及ぼせる影響の顯著重大なるより觀て之を近世史に於ける大分水嶺なりといふを得べし。苟も佛國史を講究して治亂興敗の蹟を明かにせんとする者は素より世界の歷史を討尋せんとする者は須く熟誦を要す。

大判全一册
四百四十頁
正價七十錢
郵稅十錢

理學博士稻垣乙丙君
齋田農學博士島崎藤村君序
田中貢一君著 滿谷國四郎君口繪

花物語

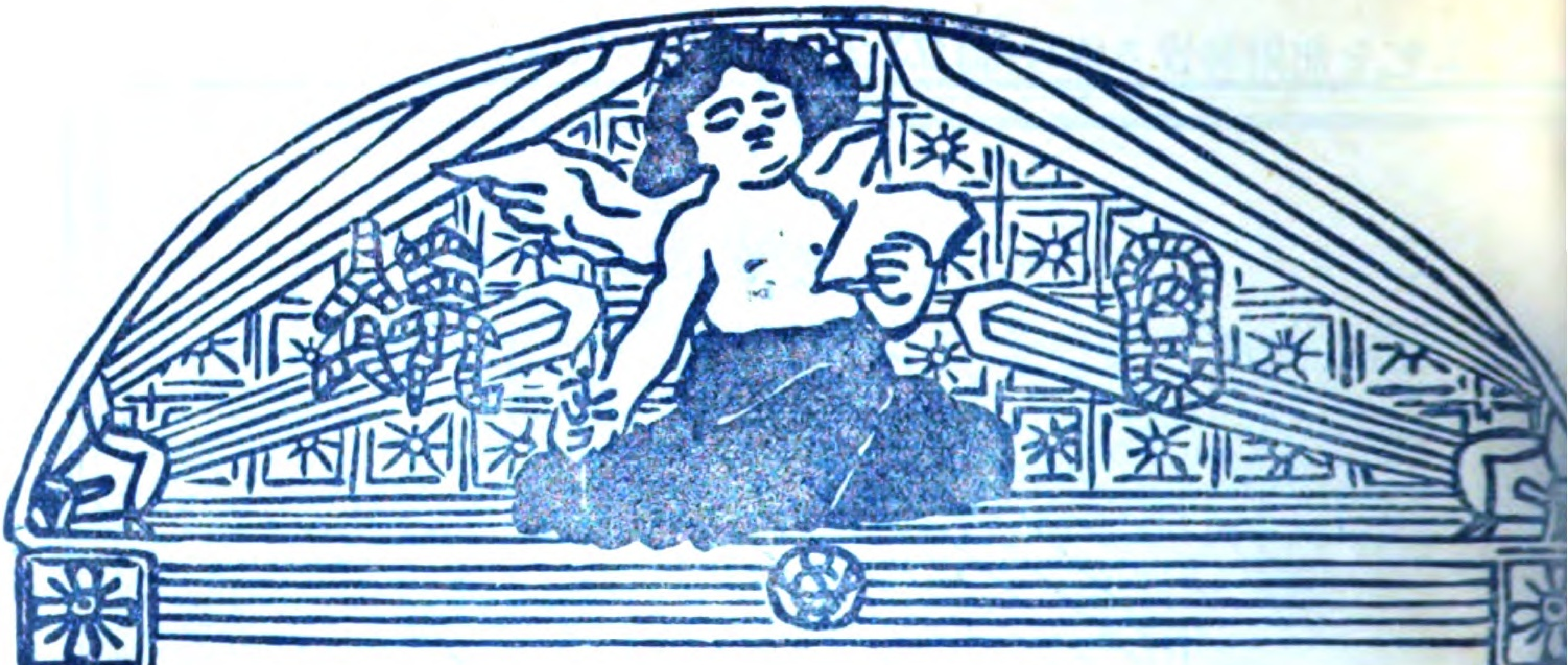
著者は植物學者にして豫て文學に對する趣味深く其造詣殆ど不可測ものあり、本書は凡そ花界百般の事項、即ち形態、生理、色彩、香氣、若くは花と昆蟲との關係に就て、最も該博なる識見と、婉曲なる筆致とを以て、茲に一篇の小說を構成せるもの、着想絕妙、辭藻優麗、眞に之れ生命ある花物語なり加ふるに精巧なる挿圖數百個ありて克く本文を活躍せしむ、本書は獨り自然科學界空前の大著たるのみならず現代文壇の一異彩たるべく一般家庭は云ふに及ばず、學生、詩人、哲學者、科學者の必讀すべき珍書也

菊判總クロース美裝
石版木版寫眞版挿入
總紙數四百九十餘頁
正價 壹圓五拾錢
內地（小包料十二錢）
滿韓、臺灣（郵稅十六錢）

(東京) 博文館 (本町)



中央公論第二十三年第四號春期大附録號目次



春期大附録

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



"CROSSING THE BROOK"



By J. W. M. TURNER, R. A.



第二十三年第四號
春期大附錄號
(第二百二十九號)

米國艦隊來航の眞意

(一)

最近に接手したる報導に據れば、我が東洋に來航すべき米國艦隊は、既にマゼラン海峽を通過して三月中旬マグダレナ灣に到着したり、思ふに五月には桑港に到着すべく、其のホノルヽを經てマニラに着するは、早くも六七月頃か、然らずんば秋風吹き到る頃にもあるべきか

米國は何の必要あつて其の艦隊を東洋に派遣するに至りしか、諸說區々にして、我が新聞紙の之を論ぜしものまた二三四五に止まらざるも、未だ吾人の腑に落ちたるはあらず、依て試みに今吾人の揣摩する所を陳じて江湖參考の一端に供せん

(二)

所謂十六隻の米國艦隊といふもの、實は下の二個艦隊より編成せらる

第一艦隊

	噸數	速力
第一分隊		
コンネクチカット（旗艦）	一六、〇〇〇噸	一八節
カンサス	一六、〇〇〇噸	一八節
バーモント	一六、〇〇〇噸	一八節
ルイジアナ	一六、〇〇〇噸	一八節
第二分隊		
ジョルジア（旗艦）	一四、九四八噸	一九節
ニウゼルシイ	一四、九四八噸	一九節
ロードアイランド	一四、九四八噸	一九節
バアジニア	一四、九四八噸	一九節

第二艦隊

	噸數	速力
第三分隊		
ミンネソタ（旗艦）	一六、〇〇〇噸	一八節
メイン	一二、五〇〇噸	一八節
ミソリイ	一二、五〇〇四	一八節
オハイオ	一二、五〇〇噸	一八節
第四分隊		

アラバマ（旗艦）	一一、五五二噸	一六節
イリノイズ	一一、五五二噸	一六節
カーサーヂ	一一、五〇〇噸	一六節
ケンタッキー	一一、五〇〇噸	一六節

全艦隊を率ゆる司令長官はエヴアンス少將にして、コンネクチカットを旗艦とし、兼ねて第一分隊を直接指揮す、第二分隊司令官はエモリー少將にしてジョルジアに坐乘す、第二艦隊の司令長官はトーマス少將にしてミンネソタを旗艦とし、兼て第三分隊を指揮し、第四分隊司令官はスペリー少將にしてアラバマを旗艦とす、最近の歐電によれば、エヴアンス司令長官は病氣のため、スペリー少將（第四分隊司令官）之に代るべしといふ、エヴアンス少將は南北戰爭、米西戰爭に參加したる老將にして、齡已に六十を超ゆ、即ち今明年中には當然退役と爲るべき年限なり、思ふに少將はマゼラン海峽を通過したる等のため痛く健康を損せしなるべし

米國艦隊は右の外コルン少佐の率ゆる驅逐艦ホイツプル、トラクスタン、ローレンス、ハル、ホプキンス、ステワードの六隻と母艦アレスサ、工作船パンサア、供給艦カルゴア、グレシア、病院船ヤンクトンの四隻を有し、尙ほ左の二隻の裝甲巡洋艦を率ゆ

	噸數	速力
ワシントン	一四、五〇〇噸	二二節
テンネツシイ	一四、五〇〇噸	二二節

此の二隻は去年秋ノーフオクを拔錨し、今度マグダレナ灣に於て本艦隊と合する筈なりき、即ち來航

すべき、米國艦隊は軍艦十八隻、驅逐艦六隻、計二十八隻と附屬船四隻と也

其の艦型の統一せるは、此の艦隊の特色なるべし、唯だ第二艦隊即ち第三第四の兩分隊に於て聊か噸數の異なるあるも、速力は各分隊各一定し、最低十六節を有す、實に正々堂々たる大艦隊なりといふべし

但しルータアダル氏の評せるが如く、米國軍艦は一般に吃水深く、水に近き舷側の裝甲薄きに過ぐる弊あり、殊に來航すべき艦隊は長程を航走するため多量の石炭を搭載すべきが故に、吃水愈よ深きを加ふると共に、艦首益々低く、敵に對して操砲の自在ならざる虞ありて、恰かも對馬海峽に於て日本艦隊に撃滅せしめられたる露國軍艦と同一の缺點あるを免かれざるに似たり、是れ米國人が俄かに周章して海軍當局の一員（航海課長ヴラウンソン少將）を辭職せしめ、尙ほ海軍々人以外のものにして海軍大臣たるの非を極論しつゝある所以也

（三）

遮莫、米國政府は何の必要ありて艦隊を太平洋まで廻航せしむる乎、幾んど太西洋方面の海上防備を空虛にまでして、斯く正々堂々たる艦隊をして遠く辛苦を凌ぎて東洋まで廻航せしむるは果して何の意ぞや、或は大艦隊の遠航を以て演習上最も必要とするものあり、マハン大佐の如き現に之を主張し、米國政府また玆に藉口するも、恐らくは是れ口實のみ、眞意は別に存するなるべし

吾人の信ずる所によれば、其の原因は現大統領ルーズヴェルト氏の政略に出づ、而して其の政略の主

なるは、パナマ運河の開鑿を遂行するに在り

此の運河開鑿は、ルーズヴェルト氏が後世に貽すべき自家の大事業と做す所なるも、其の工事の困難にして而して費用の巨多なる、動もすれば中途阻折の掛念なきに非ず、スエズ運河の開鑿すら彼の如く至難にして、單に米國新聞を買收するのみにも幾千萬金を要せしに徵すれば、パナマ運河の工事の前途略々想ふべし、況んや米國の資本家を網羅して株主とせる各鐵道會社は、自個の利益上より運河開通に反對し、機會有あらば猛然起たんと欲して、恰かも虎視眈々たる狀態なるをや、ルーズヴェルト氏は乃ち艦隊を廻航するに、遠くマゼラン海峽を通過するの甚だ迂にして且つ最も困難なることを事實に證明し、此の實物教訓に由りて、米國民の腦裏に深くパナマ運河の必要なることを印象せしめんとす、是れ識者間に兎角の議ありしを排して、艦隊廻航を斷行せし第一の理由ならざらんや

（四）

米國大統領の政略の二は、新聞紙の非難を避けて、來るべき大統領改撰期に、自黨の勢力を支持するに在り

米國民は平生資財を作るに鋭意し、一向專念の拜金宗者として幾んど側目も振らざる狀態にあり、國家の政治等は深く其の心に關する所にあらず、而かも清國人の如く全然國家思想なき者にあらざるがために、常に新聞紙の議論記事に重きを措くの風あり、唯だ新聞紙の議論の得失、記事の眞否の如き、必らずしも深く問ふ所にあらずとす、且つ所謂米國のレヂィスなるもの丶饒舌の種子、主として新聞紙の

記事に存するがために、新聞紙の多數國民間に勢力あると實に吾人意料の外にあり

然るに米國の諸新聞紙たる、素より國民を善良に指導し、堅實なる輿論を表明して、以て國家及び社會の向上に資するが如き高遠なる思想を有するものに非ず、其の議論は昨日是としたるものも今日非として怪まず、風向き次第、黄金又は御馳走の有無次第、勝手放題に號叫するのみ、其の記事も確實ならんよりは徒らに讀む人の好奇心を刺激し、感情を煽揚するを主として、唯だ多く賣らんとを求め、人氣を發動せしむることをのみ專一とす、現に日米開戰說の如き、政府當局、軍人、學者、紳士等總て其の無根且つ無稽なるとを主張し、實際又開戰の理由も根據もあらざれども、新聞紙の多數は單に世上の好奇心を刺激するがため、盛んに日米開戰の記事を捏造して、誇張誇大に之を吹聽し、而して黄金萬能を夢むる外、寸分も思索を費すとなき米國國民の多數と、饒舌と御洒落とを能事とする所謂米國の貴女等は新聞紙の記事の正邪眞否をば聊かも考慮する所なく、一議もなく然り然るべしと唱和して、茲に日米開戰說は滔々として米國諸州に横溢するに至れる也

此の時に方つてパーストなるものあり、銀鑛王たる父の遺產を受けて、學校を飛出したるまゝ年少氣銳に任せて、紐育ウヲルトとジアナルとを買收し、煽動的記事を主として盛んに人氣を引立てしめ、今やシカゴ、セントルイス、桑港の各市に亘りて多くの新聞紙を所有し、其の爲め米國政界に少からざる勢力あり、將さに大統領候を補手はんとする氣勢を示せると一再ならず、善し米國の如き普通撰擧の國に在ては、少數の識者有力者の信用を得るよりも、多數國民の人氣を博すると、却つて遙かに有効なる

とあるが故に、新聞王たるハースト氏の如き、其の識力地位尙ほ眇たるも、選擧には頗ぶる大なる勢力家たらざるを得ず、然るに此のハースト氏自から署名して其の所有せる重もなる新聞紙上に日米開戰論を掲載し、武力を以て日本を取挫かざる現大統領の政策を暗に軟弱として非難する色を示せしかば、ルーズヴェルト大統領は。次期の改撰期に於て或はレパブリカン黨の勢力に影響を及ぼし、延きて自家の大統領として推選すべきタフト氏の聲望をも墜さんことを掛念するに至りしも、亦必らずしも無理ならず。

蓋しルーズヴェルト氏の富豪征伐の如き、例せばトラスト攻撃、石油大王の撰擧、鐵道王の告發の如き、一代の快心事に相違なきも、然かも資本家の怨恨を招けるや疑ひなく、甚だしきは財界の恐慌を以て大統領に責を歸せんと欲するものすらあり、ルーズヴェルト氏は改撰の近く來るに方つて、少くも他の怨望を招くが如きは其の欲せざる所なるべし、假令少數資本家の怨みを招くも、多數國民の人望を支持するに全力を盡すべきや言を俟たざらん、一方に富豪征伐に由て一部資本家の怒りを求めたる上、更らに新聞紙の非難に由て多數國民の人望を損ずるが如きは、ルーズヴェルト氏の寒心せざらんと欲するも得ざる所なるべし

故に吾人は以爲らく、大統領が強ひて其の艦隊を遠く東洋に派するは、其の武力を用ゆるをも辭せざる決心を暗示して、以て煽動的新聞紙の非難を免かれ、來るべき改撰期に於て自黨の勢力を墜さゞる目的ならんと

（五）

米國の前國務卿ルート氏の支持せる淸國の領土保全主義のため、米國政府は今や日本が滿洲に利勢を獨占して、淸國分割の端を啓くを掛念し、斷乎として日本の罪を問ふ決心あり、其の艦隊を廻航せしむるも亦此がため最後の決意を日本政府に明示せんとするに外ならずと做すものあり

此の說一時各國の間に傳はり、現に愚蒙なる淸人中、之を信じて米國の後援に由り、竟に日本を挫くことを得べしと做すものあるに至れり、彼等は日米關係を以て恰かも明治三十七八年に於ける日露の關係に齊しとする也

斯の如きは全く根據なき空說のみ、日本は滿洲に於て未だ機會均等主義を空言たらしめざれば也、淸國の領土保全に重きを措き、英佛露との同盟又は協約に於ても、明白に此の主義を支持すれば也、意味を强くしていへば、淸國が今の如く列强中の野心あるものに侵略せられざるは、日本其の背後に立て淸國保全を唱導すれば也、米國政府にして前國務卿以來傳統の政略を支持せば、心密かに日本に感謝すべし、寧ろ日本と協商し提携して、以て淸國保全に盡すべし、何ぞ日本と抗爭するの非禮不法を敢てす可んや

蓋し斯の如き風說を生ぜる所以は、米國商人の滿洲に於て志を得ざりしもの、南滿洲鐵道會社に慊焉たらず、又日本の軍政時代に、嚴格なる武人に待遇せられて豫期の利便を得る能はざりしものあり、然るに日本商人の如く柔順に默止せず、其の固有の流義を以て口八釜しく日本官憲を攻擊し、而して領事

其の他また之に左袒するあり、在韓の米人亦爲めにする所ありて日本を非難し、而して日本と同盟國たる英國人亦往々にして滿洲に於ける日本の處置を愁訴するに至つて、米國民の多數或は日本政府の措置實に滿洲の勢利を獨占すと速斷したらんも知れず、此の速斷と彼の米國政府の軟弱を非難する説と、相合して日本の倨傲を膺懲すべしと爲すもの、米國民中に少からず

大統領ルーズヴエルト氏は、此の民論を正面より訂正せず、恰かも民論に從へるが如く裝へるに似たり、吾人は之を以て又其の艦隊廻航の政略の一に數へざる能はず

* * * * *

米國艦隊の廻航は、斯の如くにして計畫せられ實行されしのみ、日米開戰説の如きは、全く信用す可らざる一場の夢のみ

然れども如何なる事情あるにせよ、此の廻航を以て日本を威嚇し得るものと爲すが如きあらば、是れ實に言語道斷の沙汰也、バルチック艦隊を廻航せしめたるにも倍する愚擧也、然り、無算、無稽、冒險の極也、吾人日本國民は冷然として一笑に附して可也

若し夫れ米露協商、米獨同盟といふが如きは、是れハースト一流の架空的思惑のみ、眞面目に之を評論するも尚ほ分別無きに過ぐ

辰丸事件を評す

（一）

所謂辰丸事件なるものは、竟に清國政府の屈服に由て落着したり、汽船辰丸は三月十九日を以て釋放せられ、同時に清國政府は其の軍艦をして、禮砲を發射せしめて以て謝罪の意を表したりき、想ふに辰丸の損害も不日調査確定の上仕拂はるべし

然れども廣東の清國商人等は、之に復讎するため日本商品に對してボイコットを行ふことを決議したりといふ、想ふに本問題の解決に方つては、我が執る所此の外に出でざるべきも、平生清國に對する不注意の責は我が官民に於て辭す可らず、吾人は今少しく其の然る所以を辯明すべし

（二）

辰馬商會の汽船第二辰丸が神戸より將さに澳門港に入らんとするや、清國軍艦來りて之を拘留し、且つ其の搭載せる銃器彈藥を沒收したりき、蓋し之を密輸入品と認定したるためなるべし、武器の密輸入は日清條約に於て禁止せる所なれば、其の武器にして果して密輸入されたるものなるに於ては、此の處置實に當然なりとせざる可らず

之を事實より觀るに、此の武器は清國の領土外なる澳門港に揚陸せらるゝも、是より後秘密に清國革命黨員若くは暴徒の手に密賣さるゝものたるや爭ふ可らず、故に清國官憲及び人民の多數は、平生之を

嫉視して、苟くも機會あらば斷乎たる處分を加へんことを豫期せしが如く、現に北京廷も亦豫め其の内訓を下し置けるに似たり

然れども辰丸は第一澳門政廳より武器輸入の公認狀を所持せるに止まらず、神戸稅關の檢査をも受けて公然たる積荷證書を所有し居たりき、即ち手續に於ては何等缺如したる處なし、又國際法上密輸入と認知することを得ざるものたり、清國軍艦にして、苟くも國際法上の知識を有せば、先づ此の點に於て一應の檢査を行ふ可かりし也、清國軍艦は國際法上の智識なくして、恐らく何等の檢閲をも加へず、單に辰丸の搭載物中に武器ありしを發見して、直ちに密輸入と斷定し、有無を言はせず、武力を以て之を拘留し沒收したりしならん、吾人は清國軍艦及び廣東總督等の不用意を惜むと共に、併せて北京廷が豫め其の邊に周密なる注意を拂はざりしを嘆ぜざる能はず

（三）

國際關係よりいはゞ、其の國の商船が恣に他國の軍艦に拘留せられ、其の搭載貨物を沒收せられたる時、對手國政府及び軍艦の責任を不問に附せんか、其の國の貿易は勢ひ絕滅せざることを得ず、商船にして謂れなく拘留せられ、其の搭載貨物にして理由なく沒收せらるゝも、之を救ふことなくんば、商人等覺に全く手を貿易より引くに至らんこと必然なれば也

故に日本政府が遲疑する所なく、北京政府に交涉し、頗ぶる强硬なる態度を執れるは實に當然の措置にして、又全く已むを得ざるに出てたることを知らざる可らず

日本政府の北京政府に對する要求は、第一辰丸を釋放すること、第二沒收貨物を返附すること、第三拘留者を責罰すること等なりき、此の談判に就て、北京政府は例の不得要領的に曠日彌久せんとしたるも、英國公使の密かに居中斡旋するあり、竟に屈服して第一辰丸を釋放すること、第二軍艦をして禮砲を發射せしめて以て謝罪すること、第三拘留責任者を調査して相當の責罰を加ふること、第四辰丸及び其の積荷に對する損害を調査の上賠償することを承諾したり、而して辰丸の搭載せる武器は、革命黨員又は暴徒の手に入るを欲せざるがため、清國政府に於て相當の價を以て之を買取るに決したり

（四）

霞ヶ關附近の巷説によれば、我が外交當局が北京政府の不得要領を怒て、任意の行動を執ることを聲明したる最後通牒（アルチメタム）を贈るや、實は英清間に密約の存在することを忘却したるらしく、爲めに英國より根強き質問を受けたりき、外交當局は其の所謂任意行動を執り、我が海軍をして先づ清國の福州を占領せしむる準備を爲したるも、英國より底氣味惡き質問を受くるに及んで、俄かに之を中止したり、此の結果として、最後通牒も事實上最後通牒たらず、再び北京政府の決答を求むるに數日を費すの醜態を演出せざるを得ざりき、幸ひにして英國公使の居中斡旋により、清國政府を屈服せしめて以て僅かに我が面目を保つことを得たりしなりといへり

外務大臣は衆議院に於て英國政府より本問題に就て何等異議に接したることなしと明言して、以て英國より質問ありしといふ事實を否認したりき、吾人は未だ全く外務大臣の明言を信ずる能はざると共に

又巷說の悉く眞實なることを保證するものにも非ず

但し辰丸の拘留が、二月下旬にして、我が政府が直ちに北京廷に交涉を開始し、而して其の最後通牒を發したるは三月上旬にして、而して北京廷の屈服を見たるの實に其の中旬（三月十六日）なることを記憶するのみ

（五）

吾人は我が政府及び一部商人に希望なき能はず、自今清國政府者以外に武器を賣渡すが如きこと莫き是れ也

辰丸の搭載せる武器は、勿論神戸稅關の檢査を經たるもの也、然かも稅關、否、日本政府は此の武器の賣込まるゝ先き〱如何と考慮したりしや否や、考慮して然る後其の輸出を認許したりしや否や

夫れ清國への輸入武器が、政府者注文の外は、殊に南清地方へ輸入せらるゝ物の幾んど全部が、革命黨員又は暴徒の購入する所たるや言を俟たず、日本政府殊に稅關にして、此の事情を知悉する以上、其の輸出を禁止するを當然とす、暴徒は勿論、革命黨員の暴發を助くるが如きは、素より我が國民の意思に非ざれば也

清國の革命黨員にして、若し清國官憲の逮捕を免かれて來朝せば、我れは國事犯として清國政府へ引渡すが如き慘酷を敢てす可らざること勿論也、國際の通義素より然れば也、然れども陰にも陽にも革命黨員の暴發を幇助すべき武器供給の如きは、斷じて之を爲す可らず、是れ善鄰國の皇室と政府とを脅かし

むるものなれば也、我が商人假令利を重んずと雖も、斯る用途の武器を賣附けざる位ゐの德義は、愛國心ある國民として當然之を有すべし、二三の姦商假令密かに之を企つるも、政府は嚴に之を取締り、而して稅關に於て斷然其の輸出を禁ずべきと勿論なりとす

吾人は獨逸商人が淸國へ武器を密輸入すと聞くだも當ほ嫌惡の情を禁ずる能はず、況んや日本商人にして之を爲すをや

廣東の淸人は、辰丸搭載の武器の竟に暴徒又は革命黨員の手に密賣さるゝを切齒し、國際法の通義を知らざる爲め、漫りに其の解放に反對すると共に、日本人の武器を輸入したるを憎惡し、今や日本商品に對してボイコットを行ふといふ、燃ゆるが如き愛國心よりして然る以上、必らずしも多く咎む可らず唯だ彼等をして情僞を知悉せしめて然る後其の渙然氷釋するを期すべきのみ

我が外交當局は、北京廷に約するに、將來武器の輸出を取締るべきを以てしたりといふ、是れ當然也、吾人は政府が速かに之を實行するを望むと共に、商人も亦深く心して再び輸入を計畫せざるとを忠告せざる能はず

淸國政府及び國民の心事を察せず、單に國際法に反したるの故を以て、頻りに其の無禮非法を鳴らし其の間何等の同情なきが如きは、思はざるの甚だしき也、吾人は此の點に於て聊か我が外交當局最初の態度に遺憾を覺ゆると齊しく、當時多數の新聞紙の主張にも亦心服する能はざるもの也、官民共に斯の如くんば、日淸の間竟に深き溝渠を造らざらんと欲するも得可らず、抑も斯の如くにして何の利益ありや、淸國民が徒らに排日本の感情を煽揚すると實に惜むべく、而して日本官民の動もすれば却つて排日本の氣焰を煽するが如き原由を作るは、吾人の最も痛惜する所たり



將來のローマンス類

三宅雪嶺

今の文學は單調ならず、多くの種類を有すれど、近來自然主義の勢最も盛なり。自然主義にも種々ありてその解釋の區々なるにせよ、ローマンス(傳奇物)類は全く忘却し去られたりとなすべし。ローマンスは範圍廣く、その或る部分に關係あるローマンチック派はクラシックに反對して自由を求めたるもの、それが却て寫實派に移り、次いで自然派に歸する傾向ありたるにせよ、それにてローマンスは衰微し、滅亡同樣となりたるものか、或は後に再び盛になるべきか、時代の異なるに從ひ性質の變ずるは勿論なれど、幾許か系統を同うするものあらざるべきか、以上を考ふるには社會全體の變遷よりせざるべからず。

古より詩文に種類あり、今日行はるゝ如きものも、或る程度まで曾て存したりきとして妨なきが、概見すれば絕えずローマンスの要素の勝ち居り、現し方こそ變じたれ、兎に角一般に行はれたるなり、然るに近年に及びて著しくその量を減ずるに至れるは注意を値ひすることゝ謂ふべし。久しくローマンス類の行はれたるには、多樣の事情の存するなれど、超自然の觀念と探檢すべき餘地ありたることとは最も與かれる所なるべし。自然以外に何等かの力あり、自然の法則にて律すべからざるものありとは、絕えず何人の腦裡にも浮び居りたりき。その大なるものは神の力にして、神は自然の法則を作り又之を破るもの、神の力によるものは自然の法則を破るを得べく、奇蹟の如きは即ち是れなりとし、之れに伴ふて神話なるもの、多く世間に行は

る。人の登らぬ山嶽に或る不可思議のもの丶住む、深き森林に、或る怪異なるもの丶栖む、デモンあり、ウオッチあり、さては河畔にフェリーの降りて水を浴むが如きもの之なり、當時は人跡の及ばざるところ甚だ多く、隨處に或る測られざる部分の存在し居る感ありき。旅行も困難にて、土地の明白に知られたる處にのみ試みられ、彼のアルプス登山者の如きも中世紀頃迄絶えて無かりしものなり。種々の怪物の想像せられしも異とするに足らず。されど世運の進みて漸次に事物の理に通ずるに至り、特に科學の進步の著きを致せる爲、前に不可思議視せられしものにて最早や不可思議視せられざるもの多し。時に往々解釋し難きものあり、或は宗教に於て故らに解釋を厭ひ、勉て科學に反對するが如きもあれど、行く〱皆科學の前に抵抗し得ざるべく、今日猶ほ科學の不充分なるにせよ、最早超自然の法則ありと考へられず、少くも知識あるものには自然の外に不可思議のものありと認められず、自然にて滿足し得ぬところあれば、假令、超自然といふが如きに想及することあるも、猶ほ遂に自然の法則より免る丶能はずとせらる。

且つ昔時危險を冒して發見に從事するが如きは人の好んて爲さんと欲するところ、大なり小なり武者修行の類が面白く感ぜられ、人跡入らざる深山に行くとが膽力の試鍊となりたりき。その後山系水脈漸く明知せられ、最早や附近に冒險の餘地の乏からんとする頃、マルコポーローの亞細亞旅行あり、次いでバスコ・ダ・ガマ・コロンボ等の新航路發見あり、新に新世界經營といふの現れ來り、探檢なるものは人の熱心に從事するところとなれり。されど更に歲月を經て各地の探檢も略ぼ遂げられ、最後の暗黑地たる亞弗利加も全く分割せられ、各々殖民に專念し、此末新に發見すべきところ殆ど之れなき有樣にて、尙ほヒマラヤ山なり南北兩極なりに、足跡の印せざるところあるも、之は不明といはんよりも寧ろ人の踏破せざるといふに過ぎず、踏破すればとて多大の價値あるべしと思はれず。要するに今日地球上の事は盡く人力の及べりと稱して可、新に地

球上に何をなさんと言ふ希望なし。國家として領土を擴むるも、そは他の土地を奪ふことにて、發見の權利の下に之を獲得せんことは思ひ寄らぬことなり。加ふるに何處に住むものも皆法律に制せらる、己が保護せらるゝと共に、又漫りに人を殺す能はず、往時冒したる危險の如きは今日敢てなす能はず、夫の山中に堡砦を作りてそれより時々襲ひ出づるの類は全然爲す能はず。戰爭は以前に比して幾層倍大規模のものの、演ぜらるゝも、特に規律及び機械に賴ること多く、昔のいくさ事と違ひ、個人的の面白味なし、孰れかといはゞ工場に働くと同じ。

凡てが此の如く、盡く自然の法則に從ひ居り、此末人の爲すべき事には略ぼ限りあり、地球上にて爲すべきことは現に爲し居るものを續くるの他なく、特に新なるものゝ出づべき道なし。傳來の習慣にて神を拜するも、實際は人間以外に怖ろしきものもなく、それだけ又た面白味も減じたりといふが如きが今日の狀態にて、約するに超自然の現象の消滅し、之と同時に危險を冒して前人の未だ窮めざる處に到るべき希望なく、人間界の事は大凡そ知悉し了り、ローヤンチックの生活を送らんとするも得べからず、ローヤンスを作らんとするも、ローマンスの材料なきを奈何すべき、ローマンスは過去に埋沒し、現在に之れなし、現時は人皆知悉し了れる人間の上にて快樂及び苦痛を感ず、自然界に恐ろしきものなくして兄弟牆に鬩ぐといふべきか、專ら現在の人事に就き、現行の儀式が果して守らるべきか將た之を破りて自由を得べきかといふ、斯かることにのみ苦心するの狀態なり。今の自然派は單に現狀を描くにあらず、人生の眞實の那邊に在るかを尋ぬるに專なりといふの、その範圍は如何にも知れ切れたる人事の上に止まる。漸次その觀察の緻密になり行き、男女關係の描寫に思を凝らすものあり、これ最も人心に入り易きものとはいへ、小說の能事は玆に全く終るべきかといふに、恐らくは然らず。唯從來の勢より見れば、今日は既に到達すべき處に到達せる跡なきにあらず、既に超自然を思ふ能はず、新に探檢すべき

所も僅少なり、人間界の事盡く知れ盡したるらしきも、このまゝ永く過ぎ行くべきかは極めて疑はし、現に新なる發展の見らるべき徴候あるに非ざるか。

今人は唯此地球上の事に委くして其のみにて滿足し居るも、更に科學的知識の普及するに至らば如何なるべき、地球に百萬倍する太陽と同大なる恒星が、今日既に一億ばかり數へられ居り、その不明なるものは尚ほ幾千あるや知るべからず、星にも種々のものあり、如何に望遠鏡の力を强むるも、遂に十分に觀測し得べからざるあり、その光線の地球に達するまでに、數萬年を要するものゝ如きは、現在如何の狀態にあるかは固より不明なり、此かる天象が漸次明瞭となるに至らば、從來神と思ひし如き思想の復活されずとも、或る驚くべき力の活現し居り、靈妙不可思議等の語を以てするも能く形容するに足らざるものゝ存在に想ひ到らざる能はざらん。自然は自然なりとするも、普通に人の知るところを以て甘んずるに由なく、別に感嘆して已まざるべき現象に接するを免れず、更にそれより小なるものに於ても感嘆すべきものゝ種々あるべく、此頃少しく知れ來れる太陽より地球に及ぼす電氣作用の如きも、亦事の微妙なるを思はしむるあり、超自然ならざるの明白なるも、殆ど超科學といふべし。

且つ陸上並に海上の旅行は既に地球に普ねしとすべきも、空中旅行の盛なるに至らば、吾人の思想は之が爲に動かされざるを得ず。飛行船は僅に成れるのみにて、以て自在に旅行せんには尚ほ少からぬ歲月を要すべきも、一たび空中旅行の實行し得べきの確定せば、或る土地に行くに如何なる邊より如何なる風行に從ひ行くが最も便利なるかといふ事、學術上よりも、貿易上よりも、その他種々の必要よりして頻に探求せらるべく、軍事上にも重大視せらるゝべし。空中に探檢の餘地の廣がるべきが、更に潜航水雷艇既に緒に就けるあり、之にして一歩を進むれば、軍事以外にも大に用ひらるゝこととなるべし、即ち海底の探査に用ひらるゝこととなるべし。陸上の鑛山は大抵知れ亘り居るも、陸に三倍する海底には如何なる鑛物が潜在するかは猶ほ

未だ知られざるところ、一旦金鑛なり、銀鑛なり、或は金剛石鑛なりにして發見せられば、各國民相爭ひて海底の捜索に從ふは言ふまでもなく、曾て金を求めて亞米利加若くは濠洲へ馳せ集りしよりも更に幾層の盛大を見るべし、此の如く見來れば探檢の餘地や却て往日よりも多く、從つて人心も今の如くに狹隘ならず、新に不知の域に尋ね入るの熱心を生ずべし。

今日は超自然の事の消滅し、探檢すべき餘地の乏しく、唯現實に存在するものに就いて研究する丈けになり居るも、一面に於て眼界新に擴まり、而かも之より大に擴まらんとしつゝあり、眼界の擴まれば到底今日滿足するが如く、滿足し能はず、或は前に不思議を喜び之を追うて奔走せし如きことが、玆に大なる規模に於て再演せられんも知るべからず。感嘆の情の燃え冒險の心の富まば、其處にローマンスの歡迎せらるゝは當然なりとせざるか。但し人の驚くは變化の急なる場合に於てす、變化の漸なるは別段に注意せられず、從つて感觸も平生と異ならず、故に漸を追うて空中飛行器の改良せられ、漸を追うて潜航艇の改良せられんには、之に對する吾人の感觸は比較的薄からんも、然らずしてその變化の急速なる、宛も米國發見の如きことありとせば、人は一時狂するばかりとならん。事實は急漸の孰れに出づべきか、或は其の中間に位するかは今日固より未定なるが、甚だしく遲緩ならずんば、世人は以前にローマンスを愛せしと同一感情を有するに至るべく、知識の進めるだけ、それだけ吾人の今日想像せざる如き狀態に至らんも圖られず。昔時のローマンスが復もや繰返さるゝと斷じて之れ無かるべきも、更に一層雄大にして一層趣味あるものゝ現れざるべきか。今の自然主義も或る過程として缺くべからざらんも、斯くて止まるべしとするは謬見ならずとせず。固より將來に出づべきは獨り新ローマンスにあらず、他に新なるものゝ續出すべけれど、差し當りローマンス類が全然自然主義の爲めに亡ぼさるゝと考ふるが如きは、心すべきことゝ謂はざるべからず。今日の爲めのみに筆を執るとせば又言はず、少しく將來に想到せば別

に筆を着くべき點の甚だ廣きを認めざるか。（筆記）

青年とアンビシヨン

竹越與三郎

【早稲田大學越佐會にて】

私の學校に居ります頃は只今も市島君の言はれたやうに稍や喧嘩を好きな方の一人であつて、常に薩摩や長州の人間と喧嘩をした、所が私は常に一人ボッチで、さうして薩摩長州は始終團體でやつて來る、けれども私は始終勝つたと言ひたい、さういふやうな譯で、どうも狹い日本の中で我は長州だの薩州だのと云つて地方團體を組むといふやうなことは極めて鎖國的の奴等であるといふ考を持つて居つた、さういふやうなことから學校の中で地方團體を作るなどゝいふことは極く嫌いな方であつた、其中世の中に出ても忙しいのと且つ學校に居つた時の考が遺つて居るので、實は越後の會などに曾て出席したことがない、故に越後から出た紳士諸君の顏も、二十年、三十年前に知つて居つた人の外は新に顏を知るといふ人がない、さういふ譯で誠に郷里の人に對しては相濟まぬ次第であるが、此間こちらに斯ういふ會があるといふことで、會員の數を聞いて見ると四百何人あるといふ、今夜て承ると八百人もあるといふことである、それで地方の會は餘り贊成しない私がそんな大きな會なら稍や惡くないと斯う思つて、而して茲に來て諸君の顏を見ると、如何にも顏に一つのマークがあつて、我々の兄弟と同じタイプを具へて居らるゝ、如何にも愉快に私は思ふ。

さて私は地方團體は甚だ好かぬと言つた、それは薩摩や長州の人間がツライブを作る、あれは薩摩や長州の人間はどうもまだ發達しないで、日本の中に居つて一種のツライブが出來て居る、さういふ意味に於ては嫌ひであるけれども、さういふ意味を離れての點から言へば地方といふことも亦一つの大なる意味があると思ふ、諸君も御承知でせうが、佛蘭西にユウゼヌ、ハシユ

ーといふなか〳〵有名な小説家がある。是が「豺狼の獨太人」といふ小説を書いた、其中にアラスカの近邊の北氷洋で友達同志が互に見失つた、それを尋ぬることを書いた、アヽいふ天涯萬里と云はうか、天涯千萬里も先で友達に別れて、如何に心細きかと思つて頻に探して歩くと、其氷の上に靴の跡があつた、是は多分自分の友達ではないかと思つたが、併し北氷洋に來た者が外に無いとも限らぬから、果して友達であるか能く分らぬ、併し能く見たら其靴の跡は踊つた跡である、氷の上の誰れも居ない所で口笛でも吹いて踊つた者は自分の國の者、即ち佛蘭西人の外、先づ世界中にあるまい、して見れば自分の友であると云つて判斷したといふことがある、是は能く説明して居ると思ふ、國民的氣質はさういふ所に現はれて居る。

今朝或殖民論者が私の所に來て、頻に殖民政策に付て英吉利の政策は善い、佛蘭西の政策は惡いといふやうなことを言ひましたが、それは政策論ではない、英吉利の連中はあんな寒い所に居つて、强いウヰスキーみたやうな酒を飲んで居る、故に是は暖い方に行道があればドン〳〵行つて皆天地を開く、佛蘭西はシヤーレマン以來の大帝國で、世間で最も良い文明を持つて居る、故に是は離れ難く思ふのは無理もない、そこで佛蘭西人は出無性である、英吉利人は出好である、是が殖民政策の岐るヽ本である、英吉利の政策が良いばかりではない、是は國民の氣質が良い、何ぞ必ずしも政策の如何に拘泥せんや、是は國民の氣質から論じなければならぬといふことを今朝答へて別れたのである、さういふやうな譯で國民の氣質といふものがある以上は、國民の中の或地方の氣質といふものを亦研究せねばならぬ、此點に至つては我越後はどうである、多く是は自慢して宜いと思ふ、堅忍不拔といふ一點は我越後人の專有物と云つて宜からうと思ふ、故に中には薄志弱行の人もあるであらうが、併し先づ概してさういふ譯であれば、我々が斯ういふ同じき氣質を持つて居る人間が相合して、而して互に助け合ふといふことは日本全體の爲めにも甚だ惡くないことであらうと思ふ。

斯ういふと私は初めなんだか地方團體を嫌ふと言つたのが、非常な好きのやうな譯になつて仕舞つたけれども、それはさうとして、今市島會頭から有益な御話がありましたが、私も此點に於て御同感に存ずる、是は併し同感といふことは年の問題から生ずる、市島君も私も諸君とは大分年が違つて居る、年を取ると兎角昔は／＼といふことを言ひたがるもの、故に我々の言ふことも或は例の老人の昔物語かも知らぬが、兎に角今市島君の言はれたことは御同感である併しさういふやうに昔と今の氣風が違つたことが何から來たかといふと、私は聊か諸君の爲めに――諸君ではない、今日の學生の爲めに辯護しなければならぬことがある、今の青年はだん／＼政治上のアンビションが少くなる――如何にも御同感である、併し今日の如く秩序が立つて、世の中が秩序づくめで、階級づくめで、何處には誰が行く、どの商賣は誰がすると、ちやんと秩序が定つた以上は、蓬頭亂髮の先生が飛出して、我は總理大臣になると言つても、なか／＼夢にも行はれない、是に於て乎意氣沮喪せざるを得ない、又昔は何とかして陰麗華を妻とするといふやうなことを言つた、我は天下第一等の美人を妻とするといふ考があつた、それが夢のやうな考で、其夢のやうな考でドライブせられて、大分アンビションを出したものがあつた、所が今日は婚姻すらも黄金の勢力の下に在る、然らば素寒貧の連中がどんなアンビシヨンを出しても出來はしない、從て又其アンビシヨンが衰へざるを得ない、さういふやうな譯であつて、其上に試驗といふものが大に頭を惱ます、試驗が濟む、卒業をして世の中に出て、月給を幾ら呉れるといふことが是れ亦大問題である、さういふ世の中で破格なことを一つ考へやうと思つても考へられぬではないか、アンビションのなくなつたのは青年の罪ではなく、寧ろ時代の罪である、併しながら此處で更に一歩を轉じて考へるせて戴きたい。

今日の學生は如何にも着物の着方、髮の刈り方、言葉の遣ひ方、如何にも上手になつた、如何にも通用し得る人間になつて來た、常識が發達し、おとなしくな

界、言語に稜がある、我々が積年唱へた通りになつた、我々が蓬頭亂髮の書生を見れば、アヽいふ亞細亞的の人間は駄目だ、おとなしくなければならぬと言つて居つた所が、そんなになつた、人の所に蓬頭亂髮で出て失禮千萬だといふ議論を唱へたが、それは其通りになつた、――餘りなり過ぎて困る、常識は無論なければならぬ、おとなしく無論なければならぬ、併ながら稍や行き過ぎたと思ふ、又もう一つは生活といふことだ兎に角學生の頭を惱ます問題である、學校を出る、衣食の道を講じなければならぬといふので、是に至つては支那の學生が汲々として綠の髮から白髮に至るまで勉强した其結果は何かといふと、文官試驗に及第して所謂科擧に及第して、北京の役人になるといふことを學生の目的としたといふことゝ、日本の學生は稍々同じことになる、勉强をする、肺病やみのやうになる、而して學校を出る、其目的は何乎、先づ家を造つて、月給を貰つて、相當な妻君を貰つて緣日の晩には花を買ひに行く――是は誠に困つたもの、常識といふものは我々はさういふ積りで言つたのではない、常識といふものは小家庭を目的とすることになつて仕舞つた、學問が皆經濟的の價になつて來た、學問の爲めに學問するではなく、學問が幾許か經濟上の結果を生ずるかといふことが、問題となつて來た、アートフヲア、アート、學術の爲めに學術を研究する人は少い、學問の爲めに學問をする人は無くなつた、是では少々困る、是に於て乎私は一轉して、稍々常識のある人も結構であるが、其の中には時々變つた變物も出て貰いたいと思ふ。

それで生活といふことは誠に人間の大切なことで、皆それは心配しなければならぬ、「斯く申す拙者」も其心配黨の一人である、併ながら生活といふものは大抵限りのあるもので、私などは能く友達に金持を持つて居ますが、其友達の金持はどうするか、金が出來て、骨董が出來て、別莊が出來て、而して其人は死んで仕舞ふ。といふ譯である、又其人が死ぬ後に巨萬な富が遺る、其富はどうしたかといふと、富なかつせば子孫は

大に奮發して勉强したかも知れぬが、金がある爲めに子孫は先づ新聞に書かれるといふやうなことが多くなつて來る、是も亦考へもの、金の無い時は金が欲しいと思ふが有る人のことを思ふと金の無い方が寧ろ幸ひではないかと、斯う思ふことがある、先づ金は有るも良し無くとも良してあるが、どうか金以外に考を轉じて、何か少し本當なアンビシヨンらしいことを一つやるやうな人が出て貰いたいと思ふ、と云つても私は必ずしも諸君が實業家になるとを批難する譯ではない、實業も面白いと思ふ、併し實業も唯金を少し溜めて見たいといふやうなことでなく、帝王を業とすると同じやうな心持で實業をやつて、之を男子の快心の事業とするといふやうなことでやつて貰ひたいと思ふ、さうなつたらば最早アート、フヲア、アート、藝術の爲めの藝術であると同じ心持になると思ふ。

此間亞米利加から歸つて來た人の話でありますが、それも又聞きてすが、非常の大事業家に會つて來た、其事業家は非常の富を持つて居る人である、自分の別莊から汽車で毎日紐育に通ふ、其目的は何かといふと、金はもう溜つて別段溜めたいこともない、又友人をも隨分救つて居る、此上金の欲しいといふことはない、併ながら唯其仕事をするのが樂みである、さういふやうなことで仕事を樂みにして居るといふことである、是に至つては事業も亦ノーブルのものといはねばならぬ、此學校の出身の昆田君なども御關係のある古河市兵衞といふチヨン髷を結つて居る老人があつた、此老人なども金は儲ける、併し其金を自分の利益の爲めに作るといふことは樂みではない、鑛山を掘り、山を打壞し、天然の精力と戰つて、さうして天然力を征服する、之を一つの樂みと思つて居たやうに聞いて居ります、是なれば實業も亦一つのノーブルの仕事である、斯ういふやうな譯であるから必ずしも金を持つてことが惡いことゝは思はぬけれども、どうか一つ事業の爲めに少し大きく考へて、帝王の業といふやうなことを一つ考へて貰ひたい、マアさういふ人が出て貰ひたいと思ふ。

人は二十にして戀を思ひ、三十にして功名を思ひ、

四十にして黄金を思ひ、五十にして安靜を望む、之が天下古今を通じての人情である、二十にして戀を思ひ、三十にして功名を思ふ、此邊が實に少年の極く貴い所である、是が少しく金を思ふやうに至つては最早ディヴァインではない、ジスレリーが言つたことがある、自分は少年必ずしも天才であると云はぬ、併し少年の天才あるものは實にディヴァインである、神聖的である、其少年のゼニアスなるものに至つては實に之は手を合せて拜むべき價があるといふことを言つて居る、なぜである、まだ黄金とか功名といふやうなアシツドが這入つて居らない、酒で言へば芳醇にして純粹なもの、花で言へば咲き掛けたものである、さういふディヴァインである、併し二十、三十にして最早如何にして生活せんかといふやうなことを考へるやうになつては一片の酸味が這入つて居る、是は決して尊敬すべきものではなからうと思ふ。

さういふやうな譯であるが、併し青春は長く留まつて居るものでない、青春は日々夜々に去つて居るのである、ピタードピンダーといふ人は死する時に當つて色々なことを友人が言つた、所が我は何にも言はぬ、唯我に青春を返せと云つて死んだといふ話で、それを聞いた者は悲慘に堪えなかつたといふ話である、併ながら凡そ我邦今日の人々が其死する時に當つては、我に青春を返せといふ心持の無い者は殆ど無からうと思ふ、青年は實に此青春の時に於てアンビシヨンを思はねばならぬ、アレキサンドルが大兵を率いてペルシャに向つた時に、有せる財產から金を皆に分けて仕舞つた、是だけのものを分けてお前はどうするのかと言つたら、我には殘て居るもの唯一つある。何がある。望があると言つた、望といふものは青春の時でなければ無い、青春がまだ手の中に在る時に此アンビシヨンといふものを起して戴きたいものである。

併し諸君、此アンビシヨンは唯起し得るものではない、私は敢て無情なことは言はないのである、諸君と均しく我々は飯も食はなければならぬ、諸君が男女に付ての慾があるのも是も無理とは言はない、併ながら

私は此處で支那の詩人の言葉を一つ言ふ、六朝あたりから支那に行はれた端唄のやうな詩がある

勸君勿惜金縷衣、勸君須惜少年時、金鏤衣可再買、
少年時不可再買

少年時不可再買、これです、唯此一瞬時です此一瞬時にアンビションを起すと起さないで一生の價値は極る。

我々の眼前には支那大陸といふ大きな問題が殘つて居る、政治上にも社會上にも今や大變亂の前兆を呈して居る、正にそれ青年の材能を悉くすに猶餘りある秋である。我々が船に乘じて支那の沿岸を通して行けば新嘉坡と相對して瓜哇といふ大きな島がある、此瓜哇がどうなるかといふことは世界の大問題である、抛つて置けば獨逸が取るかも知れない、拋つて置けば外の國が取るかも知れない、併し此瓜哇と開發して歐羅巴から來る船の關門を扼へて、新嘉坡をして英吉利の物たらしめ、瓜哇をして○○○たらしめたならば、東西兩洋の關門は○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、此の如き問題を解決するも亦青年諸君の力である、或は又太平洋の向ふには南米がある、此南米はコロンビアを首として今こそ亞米利加の勢力の下に在あるやうであるが、此日本に向つては非常に親厚なる同情を表して、日本から有爲活潑なる青年が來て、其處に土着して、而して新しき血液を注いで呉れたならば大に歡迎するといふ心持になつて居る、是は亞米利加に對する反感惡感から來たかも知れないが、兎に角非常に日本の少年の來たることを望んで居る。

諸君、此の如き大問題が眼前に在る、斯ういふ大問題を若し解決することが出來たならば、我歷史上の英雄豪傑の事業を悉く合しても此大事業には及ばない、是だけの大事業がある、而して是には名譽も附き、黃金も附き、而して若し望むならば美人も附いて居る大事業である、何ぞ齷齪として内地に居つて、卒業したならば會社に御採用を願ふとか、或は一本を轉じて小

役人になるとか、さういふやうに卑屈千萬な考を棄てい、斯ういふ所に行つて大事業を企てるやうにして貰ひたいと思ふ。

諸君、歡樂極而哀情多、諸君は内地に居つて金を溜めるも宜からう、又戀を遂げるも宜からう、併ながら人生幾許ぞ、實に人生といふものは矢の如く過ぎて居る、私は少年時代に四十、五十の人を見ると、ア丶實につまらむもの、ア丶なつては實に馬鹿〳〵しいものだが、自分は二十から三十までの間には何か面白い事をしたいと思つて居つたが、歳月流る丶が如く、今は最早四十を越して居る、而して一事成すことなく、實に裏心悔恨に堪えぬ、私が二十まで、まだ大丈夫、二十五まで大丈夫と思つて居る間に四十を越えて仕舞つた、歳月流る丶如しといふとは青年諸君には分らぬ、三十を越さなければ歳月のスピードは分らぬ、諸君は恐くはもう四五年の中に歳月のスピードを感ずる時代が來る、感じては最早遲い、人間歳月の速さを感じない中にアンビションを出さなければいけない、歳月如流水、歡樂極而哀情多、諸君は僅々生活上、黄金の爲めから行つたならば、黄金を積んで而して哀情が多い、戀を目的とする、戀を遂げて而して悲みが多い、友人親戚と最後の別を告ぐる時でも、莞爾として滿足して、自分の後には何等の大事業が遺つて居るといふことを記憶して死なれる丈けのことをやつて貰ひたいと思ふのである、而して是は内地では出來る時でない、既に秩序が立つて仕舞つた、此の如きものを相手としてやつた所が糟糠をとぢくるど同じでと、それより寧ろ天涯萬里の異域に身を投じて、日本の帝國膨脹史の一頁にその名を留めて貰ひたいと思ふ、而して此望たるや青春の時に起さねければいけぬのである、老人はな〳〵脊中に重荷がある、爵位、黄金、閲歴此の如きのは偶々人の肩に乘る重荷である、斯ういふものつた者は迚も海外で大事業をするなど丶いふことは來ない、私はたゞ一場の説として述べて居るのではない、私の家には海外に去るといふ人が始終相談に來る、而して伊太利語をやる人、西班牙語をやる人、和蘭語

をやる人、斯ういふやうな人々が相談に來るのを見ると實に私は愉快に堪らない、是は少年の夢とは思はれない、此の如き人からして日本の新なる運命が出來るかと思ふと、其人を送り出して、私は實に言ふべからざる感じがする、私は切に現代の青年が此日本帝國膨脹の大事業に身を投ずるアンビシヨンを起さんことを望むものである。

「自然主義」の理論的根據

中島德藏

(一)自然主義の概念一斑(二)自然主義と哲學倫理(三)最眞即肉慾說の理論的價値(四)藝術の主義としての自然主義(五)約論

(一)

(1)最近自然主義てふ叫び聲が盛んに聞えて來た。一體其の本質は何ものか。聽いて見れば甚だ取止めがない。フオルケルトなどは、『其は彼の無趣味な不運な名稱を冠する所謂「現代人」の代表者に、統一ある美學上の目的、一定の美學上の主義があつて、其れを實現せんと勉めて居る譯ではない。彼れ等の企圖の中には、區々な、而して幾分は矛盾さへして居る美學上の原理が不明に、又た錯雜して入り交つて居る。まことや「現代人」の代表者の心裏に發酵し騷立ちつゝある此れ等雜多の見地の間にも、亦た血緣や共通點がないではない』と言つて居る。而して彼は其の共通點として、現實感覺(wirklichkeitsinn)の敏銳と、個人主義の旺盛とを擧げ、此の二大綱の下に倘ほ種々の目を擧げて論評を試みて居る。今吾人により多く關係ある個人主義に就て言つて見れば、(1)自然主義は作家の個人性の發揮さるべきことを期する、隨つて新奇の技巧を愛し、優美や深厚を二の次とすること、(2)直感を尊み、其の極、野卑未熟に走るも顧みぬ傾あること(3)ニーチエの感化を受け、極端の利己主義或は無道德主義にかぶれてるなど等である。又たエンサイクロペヂア十版に、ベナリンダ氏は『自然主義は二派に分ち得られる――一方

には印象派で、其の目的とする所は自然を譯解するにある、而して此派の人には自然から受けた印象は、各自の人格を言ひ表はす一方法である。而して他方に於ては、本義の自然主義者の目的は、絶對的の、客觀的の實在たらんを期成するにある」と説いて居る、西洋の自然主義の何たるかは略ぼ此れて見當がつく。ペアリングの解は、特徴を擧げて論理的概念を納得させる都合がよく、フォルケルトのは事實の大體を概想さするに適當であるが、兩者指す所は殆んど同じて、共に觀念的存在に反對して、現實的存在其儘、或は其の味を現はさんとして居るものであることは明瞭である。又た現今日本文士の主張は、幾分之れと相違した所があるに相違ないが、各家の織色の互に似て、而も異つてる所、又た「人生の眞」「赤裸々」などといふ所、概して同じものと見て差支あるまいと思ふ。唯だ日本文士は創作に急であつて、理論的説明には其の盡力がまだ及ばないらしい。勿論吾人の見聞も狹いに相違ないが、一寸自然主義者の主張を見たいと思つて、參考書或は論文を求めても、其の整頓したものは殆んど見當らない位である。恐らく中に就て最も卓越したのは、本年一月號の「早稻田文學」島村氏のであらう。同氏のは遉がに堂々たるもので、吾人を益する所が多かつたが。併し自然主義の解に就て、其の大體の意見はペアリングに出てゐやうである。今更らに、這般思想を明らかにし、又た日本に於ける有數な自然主義者の考を知らんが爲めに、此所に其の一部を抄出すれば、

描寫の方法態度から自然主義を分解する時は、純客觀的と主觀挿入的との二つになる、……極致は二者の調和にある。

自然主義はひとり眞(Truth)を寫すといふ。眞といふ語は、自然主義の生命であり、モットーである。自然主義から言はすれば、理想といひ現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にしか立たぬ、……此等の上に立つて第一義の標的となるものは眞に外ならぬ。最も眞に寫さんとするには、一切人工虚飾の分子を擺脱するを要する、赤裸々の人間、野性、醜、描い

てとゝに至れば最も眞に近づく、最も痛切てある。肉感はすなはち實際哲學が證して最も確實な知識とするもの、之に訴へる現實は最も眞なるべき理てある。肉感に近づくだけ、其の刺戟は眞實になり、隨つて痛切になる。卑近の境は、最も多くの人が最も多く實驗する現實てあるし、自然物は最も明確て且つ虛僞なき樸直な現實てある。自然主義は現實を斯やうに考へる。

と此うてある。

之れによつて見ると、島村氏は眞を客観の眞と主観の眞とに分つて、次に眞とは確實な知識の對象て、即ち肉感の境、即ち獸性、醜を最眞とするらしい。かく最眞即肉感とするに至つて、氏の自然主義は、最も猛烈な最も極端な部類に屬するらしい。而して今日我が文藝界て、最も注目されて居る自然主義の小說といふも、多く此の種の理論の血肉を得たもののやうてある。

吾人は殆んど文藝の門外漢てはあるが、這般思想に向つては、聊か馬耳東風の觀をなす能はぬ所がある。即ち其れが非常に密接に道德と關係して居るからてある。換言すれば、自然主義者は彼れ等の口吻に從へば、世界觀て人生觀て、宛然一種處世の主義てあるからてある。實に彼れ等は嘗て一たび樗牛竹風などが呼號したやうに、哲學者倫理學者を貶斥して、自ら傲然天下に號令せんとする概があるからてある。が併し、彼れ等は果して哲學道德を敵とすべきてあらうか、又た其の言ひ條は、兎も角も實際、彼れ等は何等の哲學說道德說を有つて居ぬてあらうか。淺薄な自然主義者は、勿論自己の本體の何たるかをさへ意識して居らぬてあらうが、實は自身の體中には、幾千年來の哲學原理の血が循環してあらぬてあらうか。彼れ等の主張聲言は客觀的に幾何の根據を有つて居るてあらうか。美術上の鑑識論は別として、今少しく理論的に吟味して見やうと思ふ。

（二）

ベアリングは自然主義が明らかにコムトに系統を有つて居ると言つて居る、島村君も之れを認めて　る。

がコムトといふは未だ近すぎる、フオルケルトのやうに、經驗的、自然科學的な、一般近世的哲學傾向に追隨するが一層正しからう。「眞」は感覺で知られるとは、方に感覺派で、感覺の對象即ち「物」が、而して物のみが實在とするらしき點に於ては、唯物論で、遙に古のデモクリタス、詭辯家、エピキユラスとも相呼應して居ることである。して見れば、何の、自然主義者が哲學の敵であらう。唯理派の哲學、超絶派の其れと相提攜することこそ出來ぬものの、彼れ等は依然哲學の後援を假りて居るのである。文藝の士として、彼れ等は哲學者でない迄で、立派に哲學者の子なのである。弟子なのである。其れを左も不倶戴天の間柄でもあるかのやう、大聲疾呼するは、所生の恩を忘却するといふものである。思ふても見よ、眞即感覺の對象とか、眞即獸性とか、其言は如何にも常識を飛び超えたもので、甚だしく俗耳を聳かすではないか。

世が全く俗人の世であつたなら、這般主張者は、疾くの昔に瘋狂院の中に祭り込めらるゝ筈であつたに、哲學發達の有り難さに、多少なりとも世間が彼れ等に耳を假すやうなつたのではないか。彼れ等の後にデモクリタス以來一切の經驗派感覺派が控へて居て、幾分なりとも既に衆愚の蒙を啓いたからのことではないか。此う考へて見れば哲學を罵る權利は毫頭彼等にない。

道德說は大體哲學說と密切の關係を有つて居るものである。哲學上の唯物說は多く其れに相當した道德說を有ち、觀念說は亦た其れ相應の道德說を有つて居ることは今更ら言ふに及ばぬ。彼れ等が個人中心と唱ひ、或は利己主義と叫び、或は法律道德律の無價値を主張するとふも、本はと言へば、皆な倫理學者の教へたことで、西洋では詭辯家以來、東洋では老莊以來、綿々として絶えざる歷史系統を有つて居ることである。單に其れを祖述し、又は應用するのなら、自然主義者は依然一派の倫理學者の子、又は弟子に過ぎぬ。其れとも理論的研究の才にも長じて、分析と綜合兩つながら可なること、シルレルやゾラのやうな人であつたなら、其の知的仕事に從事して一定の主義を定める限り、彼

れ等は倫理學者と名くべきで、其の主義に從つて行動仕事に着手する限り、何處迄も一種の道德家なのである。主義の相違は自ら價値の相違となる。知的にも、行的にも、甲主義の徒が乙主義の徒を呼んで不眞不正として、乙主義の徒が又た甲主義の徒を呼んで不眞不正とするは、事態の性質上已むを得ない。

が、結局人生は主義の爭、道德の爭で、何人も此の外に出ることは不可能である。して見れば、自然主義者が眞を世界觀人生觀として道德を斥くといふは、實は道德說や道德を斥くることではなく、我れに反對の道德說や道德を斥くの意味である。且つ又た文藝の士が時に習慣、法律、道德律などを罵つて、之れを第二義諦のものとなして、さも痛快を感じて居るらしいが、此は倫理的研究より必然來らざるを得ぬことで、倫理學者は古來家常茶飯として居ることである。道德の研究といふことは元來第一義諦と第二義諦とを分つことを本領として居る。而してより慥かに、より重く第一義諦を取らうとすとすれば、勢ひ第二義諦は或は之れを斥け、或は之れを修正せられるのは固より已むを得ない。其れを彼れ等が今更らしくもて囃やすは、其の幼稚寡聞驚くべきではないか。

自然主義者は哲學者、道德學者の子である、弟子である。其の優秀卓越せる者は、哲學者道德學者でもあり得られる。故に一派の哲學者、道德學者として、他派の哲學者、道德學者に當るは可能であるが、もし哲學道德全般を敵とする時は、併せて同時に自家の本體をも滅却せざるを得ぬ。創作家に向つて哲理倫理を談ぜよと要求するは無理のことで、聊か無粹であらう。吾人は之れを敢てしない。が併し、彼れ等も知らざるを知らずとして、餘りに高言放論せぬが可い。俗を惑はし、世を欺く害あるばかりでなく、自己の愚を表はし、自己の德を傷くる損あることを記憶せねばならぬ。

（三）

其れは其れとして、自然主義の哲學說倫理說には幾何の價値あるか。超絕派に對する經驗說、觀念說に對する感覺說、又た公共主義に對する個人中心主義、利

他說に對すに利己說等の是非は如何のものであらうか。此れを此所に詳說するは到底出來得べきことではない、何れ其の道々の專門的硏究に委せねばならぬ。が併し、哲學史上大勢から言へば、自然主義の奉持して居る經驗說、感覺說、個人主義等は決して弱勢のものでないことは明らかである。然らざるも、此れ等は十分反對者からも敬意を拂はれてる學說とは云へるのである。唯だ目下吾人の論評せんとする問題の要點は、よし感覺を、感覺のみを實在の左券とするにせよ、即ち眞即感覺の言を許すにせよ、其れから直に最も眞なるの即肉慾獸性と云へるであらうか、換言すれば、感覺主義の極端說が成立し得るであらうか、如何にして成立し得るであらうかと云ふ所に存する。此の事丈けは差向き一つ明にしたいと思ふ、先づ天地人生といふ實在が存するといふ一事は何人も疑を容れぬ。が、天地人生の眞相は感覺機關によつて觀じ得られるといふか。感覺は個々的な、主觀的な、一時的なものである。然るに天地と云ひ、人生と云ふものは、全一的な、客觀的な、永存的なものである。此の前者が如何にして又た後者で有り得るであらうか。天地も剎那的のもの、人生も剎那的のものと云ひ切つて了へば其れ迄であるが、其れでは自己自身の經驗さへ說けぬであらう。そこでヒユームも「習慣」として因果律を認め、ユムトも「一般的事實」として法則を認め、此やうにして何んな唯物論でも感覺論でも、全一的、客觀的、永存的の或る物を認めざるを得ぬのである。少くとも吾も人も天地と云ひ人生と云つて居るやうな、全一的、客觀的、永存的のものを認めざるを得ぬのである。然らずば天地も、萬物も、人生も皆な剎那剎那的存在ほか無いこととなる。之れを剎那主義と云はうか。剎那主義は提出者自ら之れを破らずには置けぬのである。

早い話が、暴漢が有つて卒然剎那主義者を撲つたとする。感覺の銳敏な、而して感覺を唯一の生命とする剎那主義者は、定めて劇しい苦痛を感ずるであらう、暴漢は直に逃げ去つたとする。次の剎那に苦痛激怒は過ぎ去つたとする。其の時剎那主義者は一切復讐の念

も打ち忘れて、再び彼の暴漢に逢つても、全く他の別人に逢つたやう應接するであらうか。此はよもや彼にも出來得ぬことではないか。猾奴が有つて、言葉巧に刹那主義者から金錢を借りたとする。さすがに刹那主義者も、返金を欲するに相違ない。が次の刹那刹那には、他の種々異つた感覺を經驗するとする。彼は催促することもなしに、其れなり猾奴の横着を責めぬであらうか、此れもよもや彼れに出來得ぬことではないか。而して此やうなこととの出來ぬは、畢竟人に始終に渉つて自己同一といふ信念があるからである。而して自己同一は、少くとも前刹那後刹那の連結を要することで、到底感覺し得られぬことである。して見れば、言に刹那主義を唱へる者も、行に超刹那主義を現はさねばならぬ。是れが史上に見えた刹那主義者の張本者、感覺派の總本家たる、詭辯家又はアリスチツパスの徒をしてさへ刹那的性慾の滿足に躊躇せしめた所以である。

普通の經驗さへ持たぬ者なら知らぬこと、矛盾に陷ゐらうが、撞着に出逢ははうが一切無頓着といふのなら知らぬこと、左なきに於ては、感覺論者も、何ぞ刹那の感覺以上の力があつて、其れて始めて多少なりとも全一的、客觀的、永久的な眞が認られると爲なければならぬ。譬へばカントの解性のやうなものである。解性は亦た感覺論者として、感覺の發達したものと見るも、低級原本の感覺から派生されたものと見るも一向差支ない。が併し自己一切の云爲行動が低級原本のものから出でないて、寧ろ高級派生のものから出る以上は、原本なるが故に其の眞としての價値高く、派生なるが故に、眞としての價値低いとは言はれないことは明らかである。隨つて『肉感はすなはち實際哲學が證して最も確實な知識とするもの、之れに訴へる現實は最も眞なるべき理である』と輕々に斷じ去ることは出來ぬのである。最眞即肉感と云ひ得ぬのである。實際（實驗或は實證）哲學は、決して此かゝる無謀の決論を下しては居ないのである。然るに今日本の自然主義者—其の輕躁浮薄の者は暫らく措いて—特に學殖に富んだ先達者たる者までが、敢て此の言を出すに至つ

たのは何故であるか。哲學上倫理學上如何なる確信あつてのことか。吾人は其の詳を聽くことを希ふものてある。一歩を進めて言へば、學者てある以上、一見危險有害らしく思はれる這般の提言を出すに先つて、十分其の理論的基礎をも表明するの義務あることと思ふのてある。島村君の所作の此所に出てなかつたは甚だ遺憾てある。

（四）

以上は眞の解釋上から、聊か最眞即肉感說の確實の根據なき旨を說いたものてあるが、此れから自然主義といふ藝術上の主義を吟味して見やう。論者は實在其物を其儘に描寫するといふ。其れ故時折無理想なりとの主張を聞く次第てあるが、元來書くの、作るのといふことは、無意識に出來るものではなく、必らず意志を要する、善く書き善く作る爲めには更に偉大の意志を要することは明らかてある。而して旣に意志を要する以上、目的なく理想なくして成立せぬは言ふ迄もない。もし强て無理想といふならば、其の無理想が理想となり、感覺といふならば、感覺が理想となる。即ち自然主義者の告白に從へば、「眞」が理想となるの外はない。して見れば所謂無理想とは實は「眞」理想なのてある。けれども其れは藝術の目的てはない。もし實在其儘を事とするものならば、寫眞、新聞、歷史、科學或は哲學と撰ぶ所がなくなつて了ふ。實に此れ等は、有を有の儘に、其の眞を得ることを理想として居るのてある。が併し藝術は此れ等とは異なつて、娛樂の爲めに眞を模寫するを本領とする。隨つて眞の約束を脫することは出來ぬが、眞其儘てはない。趣味の指導に從つて、眞の可能の範圍内て取捨撰擇、料理按排を加へて創作されたものが即ち藝術品なのてある。純粹に眞を事とするは知の職分て、學者の職分て、情を主とし創作を主とする藝術家の事てない。寫實主義は此の點て藝術の主義としての本領を沒却して居ることは、旣に人々の多く批評した所てある。而して此れしきのこと、藝術家に分ぬ程のことてはない、ソコデ彼れ等の或る者は、眞を其の儘に見た上に、更に主觀の感じた價値

を忌憚なく修飾なく發表するといふ。かくて印象主義は藝術の主義となり得られる。恐らく何の自然主義者でも、實際に感じ、實際に想ひ、實際に行ふ所は方に此樣なのであらう。其れとして印象主義は正しき言ひ現はしを得たものと云へるのである。

印象主義の見方も、また現實中心主義で、精神を無視した所あるは正當に異論の生ずべき點であるが、此れは感覺派唯物派として餘儀ないことで、此所には異つた立脚地から無用の長談議を試みず、暫らく其れが藝術の主義となり得ることを認めておく。扨て印象主義には主觀の自由がある、隨つて作家の個人性は縱橫に其中に發揮される。而して自由と云ひ個人性の發揮と云ひ、皆な吾人の之れを愛し又た之れを樂しみとせぬ所でないからには、皆な人が此かる文藝上の主義に向つて異存を挿さむべき道理のあらう筈がない。が併し、自由とは何であるか、個人性とは何であるか。彼れ等の所謂自由、所謂個人性は頗る放縱暴慢に過ぎて居る、最眞即肉感說の其れに至つては尤も甚しい。吾人は到底之れを是認し得ないのである。成る程人が始めから感覺感情のみのもので、知力も意力もないものとすれば、自由とは即ち野獸のやうに、林禽のやうに肉慾に耽ることが其の自由の趣味であらう。然るに知力あり意力あり、而して次第に廣く、次第に大きく、又次第に高く生活するを好むの天性もありとすれば、而して又た左樣に生活せねば劣者となつて敗滅するものとすれば、人の眞の趣味は必らず知と意とに制限されたものでなければならぬ。美の趣味は十分善と眞とを含蓄したものでなければならぬ。進化論者の言を假りて言へば、善と眞との約束を奉じた美を樂しむ趣味のないものは劣敗するのである。そこで趣味は自由とは言ふものの、野育ちの人の趣味は本義の趣味でない、本義の趣味は、多大の學習研究、又た奮鬪克己によつて始めて養はれたものである。最眞即肉慾的趣味は最劣等の趣味といふべきである。

論者は言ふであらう。趣味は各自の主觀が最後の判斷者である、我れ以外の人の判斷我に於て何かあらん。

畢竟水掛論に過ぎぬてはないかと。成る程其れも尤てある。が併し趣味に一般的流行のあるは事實て、西洋に自然主義が行はるれば、東洋て直ぐ眞似られる。東京て個人主義が行るれば、田舍が直に風靡する。其れ許りか藝術の士が適ま己れ獨特の趣味を有つたとすれば、天下は無頓着に其の消息を聽く推輿さへないにもかゝはらず、新聞に雜誌に、論議し、勸誘し、開發し、强迫し、冷笑し、甚だしきは罵詈讒謗を逞しくして迄も、公衆を自己の趣味に同化せんとするは何事てあらう。是れ自由と云はれる趣味にも、自ら一般性客觀性あり。又たあらねばならぬといふ確信を外にしては決して領解し能はぬ現象てはあるまいが。眞の趣味といふものは、直ぐとは言はぬか、大體に於て、遂には、天下を征服する所の最優勢のものといふことを豫想せぬ限り、奇々怪々事件てはあるまいか。今過去幾千年來、幾多の浮沈競爭を經ながらも、倘ほ遂に文化の人民を一統した趣味の何たるやを思ひ見よ、肉慾其儘が趣味か、或は肉慾を掩ふが趣味か。もし文化の人民が天眞を失すと思ふなら、野蠻人に就て一瞥を垂れよ。彼れ等の先づ掩はんとするは何れの部分てあるか。もし更に隔靴搔痒の憾あらば、請ふ自然主義者自身の趣味を細檢せよ。よく着實に自己の何たるを知る時は、即ち其の自ら欺けることを知る時てあらう。

此の事は更に個人性といふことから考へても同樣てある。自然主義者の本尊として、尊崇啻ならぬ個人性は、未だ自然人類には發達してない。其の發達は方に文化の階級と平行するのてある。換言すれば、個人性といふ表には、必らず公共性といふ裏がある、而して裏なしに表あることは能はぬのてある。して見れば、個人性の價値を保たしむるものは公共性てある。實に各人の趣味の異り、又た異るべきは其の面の如くあるが、其の一面に於て異り、又た異るべきは、他の一面に於て大同が生じたからてある、大同が益すに從って又た大異が益すのてある。是れも文明人と野蠻人、都人と田舍人とを比較すれば一目瞭然てあらう。趣味は決して他人社會を離なれた一私的のものてはない、事

ろ極て親密に他人社會と結合したものであり、又た結合すべきものである。今最眞肉感説の趣味は、此の要件を滿たしてたものと云へるのであらうか。其の中には社會性の發揮もなく、随つて個人性の發揮もない、唯だ器械的生理的一致の單調のみである。もし内面的意識的精神的の一致を閑却して、單に大同の故を以て、强て其所に人生の本領趣味の極致を求めんとするならば、人間最優者の趣味よりも最劣者の趣味が標準となり、人間最劣者の趣味よりも動物趣味が標準となり、以下遞下して植物趣味、無機的趣味、遂に萬物に共通なる物的趣味こそ最上趣味たるべき筈である。論者は何故に尙ほ幾分精神的要素を殘留する感覺性慾に踏み止つたのであるか。無氣力か、不徹底か、將た沒道理か。咄、肉慾文學趣味！

（五）

肉慾主義は必らずしも自然主義の概念に必然なものではない。此の一派は大膽な、淺見な、下劣な趣味を代表する者と云つて可い。印象主義の定義中には、十分眞と共に、美との約束を容れられ得るに相違ない。が併し、此れ迄の自然主義者は、實際に於て其の作品中に此の理想を實現して居らぬらしい。此は自然主義が學説を主とせずに、單に一種の運動たる限りは固より己むを得ぬことゝである。唯た實際の運動として評すれば、其は哲學上より、倫理學上より、又た美學上より見て、共に遺憾の點があると言はねばならぬ。

が、吾人は自然主義の功をも認めぬではない。其の經驗を重んずることに於て、其の實感實經驗を尊むに於て、其の現在の天地社會に親接するに於て、其の所謂平凡醜劣の中に眞個の非凡優秀を認め出すに於て、其の天眞自由を謳歌するに於て、其の個人性を發揮して意氣虹の如くなるに於て、何れも吾人衷心の同情を禁ずる能はざるものがある。而して此れ等の長所によつて、祖先傳來の理想を一層適切にし、明白にし、擴大し、清新ならしめた所あるは疑を容れぬ。もし彼れ等が眞の女神に捧ぐると同一の　熱心を、又た善の男神に捧ぐるならば、もし彼れ等が自然の一部に偏執す

るゝことなく、豊富な廣大無邊な自然の全體に着眼するならば、もし彼れ等が分自然主義、小自然主義を改良して、全自然主義大自然主義となすならば、吾人は一種美術上の主義として自然主義に貴重すべき使命あるを認むるに躊躇せぬであらう。而して其れは彼れ等に望み得られぬことではないと思ふ。が、かくては自然主義の滅落に終るといふならば、吾人は唯だ「去れ、決して殘り惜しからず」と挨拶する許のことである。

最近に現れた二大論文

向　軍治

最近に現れた二大論文とは、ドイツのウオツヘーと云ふ雑誌の本年一月十八日發行(第十年第三)號に載せてある、ルーメニアの皇后陛下なる女史カルメン、シルヴァの敎育論と、同二月一日發行(第十年第五)號に載せてある、ベルリン大學の敎授なる哲學者フリートリッヒ、パウルゼンのそれとてある、女史は一八四三年生て、敎授は一八四六生てあるから、其の立論が兩方共老人が少年を戒める樣な口吻のあるのは當然の事てある、從て其の議論は必ず我國の老人の氣に入ると同時に若手には歡迎せられないかも知れないが、我國の現今の敎育社會に取りては實に頂門の一針てあると思ふから紹介して置かう、女皇エリサベットはドイツのライン河の邊ウィートのヘルマン侯の息女て、一八六九年ルーメニアに嫁せられ、詩小説御伽話旅行記ルーメニアの詩人の著作の飜譯等中々著述が多いがドイツの貴族の門から出られた丈に、其の幼時の敎育は餘程嚴格なものてあつたと見えて、習が性となつた結果、六十四才の今日「天保だとて人が笑つても自分は其れて滿足だ天保風は私の癖だから」とて滔々と現今の社會の墮落の風を攻擊して居られる所餘程面白い點がある、女史の説の大略は左の通てある。

敎育は他人の自由を害せぬ樣に自己の自由を制限することを敎へるのてある、即ち敎育とは——今の人が聞いたら天保風だとて驚くだらうが——克己と

義務に忠實なることを敎へ、餘りに狷介に陷らぬ樣にするため御伽話的要素を與へるのである、今は循弱な惡い風習が流行して居るから、私が子供の時からスパルタ的に育てられた模樣を話して聞かせたら今の人は酷いめに逢はされたものと思ふだらう其れでも母上樣は始終少し柔弱に流れたといつて居られた、子供は獸の樣なもので眼に觸れた物を欲しがる、克己の始は胃の慾を制するに在ると云ふ主義で、私等の食物は牛乳古パン（バタ抔一切付けず）肉野菜果物である、砂糖菓子は一切家の中に無かつた、齒は日々三度血が出る程磨がされた、其の御蔭で六十四の今日口の中には一本の義齒も無い　晩食は六時で、牛乳と古パンと時々林檎、それで朝は六時から勉强させられて、朝食は八時半、空腹を訴へると「それを忍ばなくて」と叱られる、朝夕冷水浴、硬い粗末な寢床、少し不快の時は直に就蓐發汗、二十才までは醫者と語つたこともなく藥を飮んだこともない、一度六時間横になつて居て、唯一度母上樣に頰を撫でもらつた時の嬉しさ今に忘れられない、「接吻抔はあまりするものでない、惡習慣である、愛情はいくらも外に表し方がある」と始終敎へられた、食事の時は一切嫌を云ふことが言はれない、晝食に食はぬ物は夕刻其儘出されたる、常食の牛乳は出ない、「我儘は食事から始まる」と叱られた、十七才まで甘味のある食事はしたことがない、糖分は牛乳や果物や豆類の中に十分あると言はれ、バタ藥味等は子供には有害とて禁ぜられた、其代り生涯神經性とは何んなことか知らない。

十二才から大人同樣に扱はれ、日々少々宛の務を命ぜられ、常に「是々を爲してはならぬ」と云ふ命令のの爲方でなくて「是々丈はしても宜しい」と云ふことであつた、十九才の時始て晩に小說を讀んだ、但しスコツトの「アイヷンホー」とフライターハの「ソル、ヷントハーベン」と丈であつた、御伽話も僅に保姆が話して呉れたのである。

婚姻は自由戀愛に基かねばならぬ抔敎へる人があ

るが、若し其れが眞理なら我々貴族社會には碌な子は出來ない筈だ、貴族社會には戀愛結婚は稀だ、貴は世間にも此れは少いのであるが、其癖隨分偉人も出て居る、私は夫婦の間は義務の觀念に支配せらるべきものと思ふ、元來結婚するのは子を生まんがためである、母たる者の務ほど大切なものはない、婦人會の事業と云ふ樣な事に私は餘り賛成しない、眞の母の務を盡す人には餘計な事をする暇のあるものではない、母上樣は子供が大きくなつたら、書物も讀んで聽かせなくても濟み、自分で勝手に讀まれる樣になるとて其れを樂にして居られた、我々の時代が過去に比べて大なる進歩をなしたのを考へて見ても、未來の進歩を双肩に負擔すべき子供を育てる親の責任は容易でないことが分る、吾人の機能は皆吾人の完全なる發達のために用ふべき者である、濫用誤用すべきものはない、「私は之を喰ふと胃を病んで困る」と曰ひながら其物を食せずに居られない人がある、犬にも劣るではないか、犬は毒と知つたら幾ら空腹でも喰ひはしない、物を見さへすれば欲しがる、情を矯めさすには鞭に勝るものはない。我々の時代には此のスパルタ的の教育が行はれたのである、果して此れがために社會が退歩したであらうか、成程衛生の事、體躯の構造の事、遺傳の事、資性の事等に就て一通りの理會をして居る必要があらう、併し天然すら恥かしさうに匿すものを態々さらけだす必要があらうか、母上樣は始終言つて居られた「知らぬ」と云ふことほど罪惡に對する良き武器はないと、私は稍年を取つて社會に罪惡の多いことを聞いて其んな不潔な世の中なら生きて居る甲斐はない、一層の事死んで了はうかと思つた位である、私は男子で斯樣な事を成るべく婦人に知らせない樣にし、子供で親の前では丸で罪惡を知らぬ樣な振舞をする者を澤山知つて居る、私は之を僞善とは思はぬ、儀作法に適つて居ると思ふ、衣の裾さへ汚したくないから外出の時には之を手に執る、大事な腦髓を汚穢の中に塗 さしてたまるものか、私の若い時は金

體の話をするのは肌の話と同じ樣に卑しまれた、今の人は金や肌よりもまだ甚しい事を平氣で話す、謂ゆる良風俗は果して悉く僞善であらうか、まさか話の材料が盡きた譯でああるまいが、何分近頃種々な發見や發明があつて、人間が少し生意氣になり過ぎた、子供の癖に生意氣なと父の神が懲しめに鞭を揮りなさる樣な事にならねばよいが。

一體天然は人間と云ふ大なる團體の中にも、種々雜多の種類の存立するを欲して居るのである、故に太猴は二人集つて、家族を造つて繁殖する樣に出來て居る、新しき種類を造り出すための二人の責任は中々大なるもので、個人〱の幸の不幸のと我儘言ふべきではない、私の時代には大なる發明も澤山あつたから、當時婚姻は先づ幸福なる婚姻であつたと見なければならぬ、個人〱は必ずしも左樣でなかつたかも知れぬが、人類社會進歩のためには慥に左樣であつたな。

獸類も良種を欲せば種を選び代を重ねなければならぬ。家柄の尊いのも同じ理である、通常子供は夫婦の最も善く調和した時の產、即ち末子を最も完全なるものとするのである、夫婦の間に美術心が盛んであると親は醜くても子は殊に末の子が美いことがある、兎角子を產むのを好まぬ風があるが、誰がレントゲンや、キユリーや、エディスンや、モールスの親であるか知れないではないか云々。

又パウルゼン教授は曰く。

今の教育は柔弱に流れる風がある、動もすれば課程が重過ぎるの、學生の趣味を喚起しないのが惡いのと曰つて、成るべく子供に骨折らせない樣にする、我々の時代には學生の成績が惡いからとて、決して教師が惡いの教則が宜しくないの學科が多過ぎるのと言はれたことはない、必ず學生の勉强が足らない、注意が足らない、精神が籠つて居ないとて叱かられた、今の幸福なる「子供の世紀」が羨ましい、併し不思議にも斯樣に大事に育てられた子供等は不平だらたら、酷い目に遭はされた我々は却て不平が無かつ

た、畢竟柔弱の取扱が却て子供を我儘にするではあるまいか、雑誌を見ても新聞を讀んでも親が惡いの教師が馬鹿の子供が可愛相のと云ふこと計りあると子供は増長せざるを得ないのではあるまいか、故に余の考では時弊を救ふ最も良き方法は昔の嚴格なる教育に立歸り、過勞論、柔弱主義の立脚點を斷然棄てるのである、眞の教育の三命令は曰く、順ふことを學べ、曰く努力することを學べ、曰く制慾を學べである、

順へとは我を折つて長者の意に從へと云ふのである、教ふる者は我儘をせで恩威並び行へ、努力せよとは意志の力で我慾を抑へて目的に向つて勇性直進せよと云ふのである、さればとて子供に向つて大人同様の請求をしてはならぬ、故アルチンシャタインが中學以上の學生に毎日十一時間の課程を與ふるを過重でないと曰つた抔は言語同斷である、併しせめて未來三十年間は一切過重論を止め、遺傳論を止めて、唯精神一倒何事不成とのみ說聞かせることにしたいものである、體育は進歩したから此上は德育及び智育に力を入れたい、昔の諺に體に得て德に失はば是れ得よりも失多きなりとあるが、今の世では體に於て進んで智に於て後れば是れ進歩よりも退歩大なるなりとても曰ふべきか、醫者や何かは體の事計り大事にして學校の本來の目的を外にして困る。

制慾を學べとは子供の時から慾を制するとを學んで勤儉の習慣を造れと云ふのである、昔時の子供は屋外の亂暴な遊を好んだものであるが、今の都會の子供はやれ芝居の音樂會の博覧會のと云つて日々に惰弱奢侈に流れる、固より今の世の中に子供をして全く文明の快樂に預らしめぬと云ふことは出來た話でもなく、又する必要もない、併し質素簡單なる生活は子供に取りて唯一なる健全の道である、許されたる快樂でも之を缺ぐことを誇とするが如き克己心を養成さしたいものである。

以上三種の命令を守らす樣にするとは即ち子供に强き意志の力を與ふることとて、此力が養成せらるれば

青年の陷り易き罪惡にも勝つことが出來るのである、現今流行して居る「色情に關する知識を與ふる」と云ふ說も必ずしも不贊成ではない、用意周倒で親切のある醫師が青年に衞生上に罪惡の畏るべきものなることを說聽かせて、之を畏れ遠ざかる樣にするは決して無益ではあるまい、柔弱怠惰放恣と云ふことが抑も罪惡の入り來る門である、要するに子供の時から從順努力制慾に由りて克己の力を養成することが業をも成し身も立てる基である云々。

敎育にも形式に屬する部分と主義に屬する部分とがある、エリザベット女皇の敎育の形式は境遇と時代とが大に與つて力がある、我國でも過去に於ては之と殆と寸分違はない敎育が行はれたと曰つても差支はない、然れども今日は最早子供の周圍の事情が異つて居る、時代の要求が異つて居る、徒に形式を襲うて其の主義を失鑒すると惡果は生じて來ても決して善功は收められない、然らば女皇の敎育の主義とは何であるか、曰く意志の敎育である、パウルゼン敎授の論は善く女皇の敎育主義を實際的に說いたものである。

現今我國の敎育は徹頭徹尾形式に流れて其の弊や擧げて言ふに忍びない、當局者は之を救ふに復形式を以てせんとして居る、我れ未だ其の可なる所以を見ずとでも曰ふべきである、昔は體育も意志を堅固にするための用に供したのである、今の體育は徒に技藝を事として精神を度外に置いて居る、修身の敎も兒童の意志の發動を促すほどに强い處が缺けて居る結果子供には昔物語を聽くだけの感化しかない、智育は敎師たる者の腦力の遲鈍なる結果學生は「常識に乏しくて綜合の力がない」此に至る所以は外ではない、意志の敎育が缺けて居るからである、然るに今の敎育家は自ら意志の確固たる者を有して居ない、藝のある木偶に過ぎない、此れが學生を感化誘掖し得る筈がない、蓋し其の本に反れてである、先づ學生に意志の强固なる者を與へさへすれば目不視惡色耳不聽惡聲的の人物ともなり、雖袒裼裸程於我側爾焉能浼我的の人物ともなり、各人各々其の性の近き處に居つて一人前の働を爲すて

とが出來る筈である、自由戀愛を主張するエレン、ケイ一派(同著者の「子供世紀」日本橋丸善書店にあり壹圓)の説も一讀の價値がないではない、無論ケイの基督教攻撃もニーチエのそれと同じく缺點のみを擧げての攻撃である、基督教で十分立派な教育が出來るとはストッルムフェルスの「愛する婦人のなして差支なきこと」と云ふ本にも(此れも丸善にあり七十五錢)善く書いてある、ドクトル、ヒルシュフェルトの「愛の本體」は刑事學者豫審判事抔の必ず讀むべき本で、學生抔には勸めたくないが併し其本の結論には「色情に關したる不道德者は病人で未來の判事は醫者であるべきである、意志に十分なる識別の基礎を與ふるが必要である、知らしめざるは却て害を遺すなり云々」と曰つてある、(丸善にあり)エリサベット女皇の母の論は良妻賢母主義の人に誤解せらるゝ恐がある、カルヽ、シュミットの「新婦人」と云へる女子教育の新案(同上)クレンケの著書等を參考せば可ならんか、皆穩健なる女子教育論である。

世界の平和と國家

法學博士　浮田和民

將來の國家は之を人道主義より見るも、單に一國家となるは不幸なり、一國家主義は即單調主義なるべければなり、之を個人の場合に徵するも然り、完全なる人格は決して形影相弔する孤立生活の下には求むべからずして、隣保相依り鄕黨相睦む社會的生活の間に於てすべく、自己と同じき獨立なる人格者が他に在りて其處に自己の人格の發達あり、社會に共存せる同等の人格者が、互に獨立して人格を完成し行くに伴ひ、其處に又自己自身の人格の發展ある者、國家に於けるも亦然り、數多の獨立せる國家併存して國際公法を完全に發達せしめ、それに規定せられたる權利義務を互に全うし行くところに、世界の平和は來り、其處に又人類全體の進步發展あるべし、世界を一國家として相互の藩籬を撤し去らんとするが如きは、此人生をして單調ならしめ、社會をして平坦ならしめんとするもの、斯ゝる單

調、平坦の下には進歩發展の道は壅塞せらるべしと信ず、此意味に於て予は彼のエスペラント、即ち世界語なるものをも餘りに尊重せず、勿論世界語なる者は或る目的の爲には有用なるべしと雖ども、然かもそれのみを存して他の獨、佛、英、米、日等一切の國語を擧げて絶無に歸せんとするが如きは決して人類の幸福にあらざるなり、國語なる者は元と〳〵民族の特徴を表現する者、故に各種各樣なる民族間には自ら各種各樣の國語の要求せらるゝものにて、それなくては各自遺憾なく自己の思想感情を表現する能はざるなり、されば彼の拉典語の如き、中世には歐洲一般に用いられ尊ばれたりしに拘らず、能くその感情を寫し得ざるの缺陷あるが爲に、新に伊、英、佛、獨等の諸國語獨立して特種の文學を構成し事實に於て希臘、拉典の古文を凌駕するの文化現れ、伊、英、佛、獨等の文學各々その特徴を發揮して、七色彩爛の美人目を眩するに至れり、萬有一色に歸することあらば美はその中にあらざるなり、知るべし各國語なるものは各々その特徴を有し、互に切磋琢磨の功を重ねて發展し存續し來れるもの、之を消滅せしめて一となすは人類の不幸たるを免からず、但し前に或る目的の爲にはといふ、即ち旅行等の事に於て世界語も亦必要あり、無視せらるべきものにあらずとはいへ、坤圓球上唯その一語をのみ用いんことは、元々不可能の事なると共に亦決して希望すべきことにあらず、國家のことも之より推知すべし、各國各々特徴あるに、強いて之を一國家の下に統轄し去らんか、其特徴なる者は頽然として潰滅し去らんのみ、世界の平和は固より吾人の理想とするところ、人道行はれ、正義尊ばれ、斯くして戰爭の止まんは深く期待する所なり、然れども如何にしてそれを實現せんかの方策に移れば、予は世界を一國家となすの道を選ばず、列國は列國として併立し、互に發達し行きて、互に實力の他を侵し得るものあるも相侵さず、能く堅忍し、能く抑損して、一切の處決一に唯國際公法の條規に待つとする、此の如き道を取らんことを欲するなり、即ち予の持論は、國際公法の上に立つ世界の統一に在り國際公法は

各國の併立を意味す、國際公法は各國の平等を意味す、此併立と平等とを意味する公法の上に世界の統一ヲ組織せざるべからずとなすなり、斯くて一切の紛糾は內に戰ふ可き實力を有するも、而かも戰はずして盡く之を世界の輿論により裁斷すべきのみ、例へば海牙平和會議は進化してウォールド、パーリアメント（世界會議）の如きものたらんを要し、一に之によつて國際間の紛糾を一掃し去るべきのみ、海牙會議は予の最も重きを置きて注意を拂ひつゝあるもの、想ふに百年、二百年の歲月を積まば、次第に完成せらるべく、今度開かれたるものゝ如きも、予は決して見るに失敗を以てせず、否な寧ろ非常の成効と思惟せるなり。

蓋し徒らに國家の數多ければとて、用をなすものにあらず、事實に於て今後はその數大に減ずべく、權力の平均上その能く獨立に堪えざるものは、早晩解體し去りて全く滅亡に歸するか或は他の附庸となるべし、而かもそは決して惡現象にはあらず、國家は有機體なり、故に生存の機能なくんば勢必ず滅亡し去らざるべからず、個人的觀察點よりすれば一の國家の滅亡してその民族の他に屬隸するは不幸として悲むべきことなるも世界的觀察點よりすれば、寧ろ幸福として喜ぶべきを見るべく、强國は又能く小弱國を保護し愛撫し提撕し行くを以て念となさんか、人道の上より見て何の非難か存せん、又た之れを歷史上より見るも、小弱國は徒らに他に誘惑の目標となり禍亂を釀成するものなるを以て、寧ろ其の亡ぶべきを可とすべく、實際に獨立の機能あるもののみ斯くして殘存するを宜しとす、世界には六大陸あり、國家の數も亦少なくとも五六ヶ國以上十ヶ國位までは必要なるべし、電信、電話等のあるあり、交通の利便大に開けたりとはいへ、その遠隔せる各地方及び各民族を滿足に統治せんとするには機關として以上程の國家の數は必要なるべし、世には國家を一にせざれば世界の平和は齎されずと信ずるものあり、さはれその實現の不可能なるが上に、更に好しそれの叶へばとて、進步の活動力なるものが、全くそれが爲に沮礙せらるゝことの不可なるを見ず

や、物は對立者ありて始めて競爭あり、競爭ありて始めて進歩あり、之を宗教に於て見るも、世界唯、一宗教とならんには必ずや其宗教の衰頽を見ん、之を我國の近古に見るも、夫の德川の治世中、宗門改めの制度の下に佛教を保護したる如き、外觀佛教の隆盛を見るべきが如くにして、實は佛教の萎靡を致せるもの、信仰自由の明治の今日に至りて却つてその活氣を認めずや、耶蘇教とても亦然り、キヤソリツク、プロテスタント等の諸教派あり、更に又諸分派の有るに從つて、互に磨勵し、啓發し行くところに常に淸新の氣の宿るにあらざるか、予は釋迦基督孔子の諸聖を以て敢て特異の悟境に在りとはなさず、同く一條路の立つものとは信ずるも、而かもその爲に此世の宗教の一つに渾化し去れとは望まざるが如く、國家に就いても同一見解を有するものなり、世には勿論世界的ならざるべからざるものあり、即ち電信の如き、貨幣の如き、乃至度量衡、衛生規則の如きそれにして、其他尙ほ諸種のもの次第に生ずべく、學術的のものにも此類のもの多かるべしと信ずれど、政治上よりしては飽くまで列强の併立を是認するものなり、一色は美を爲さず、美は七彩映發するところにあるが如く、國家も亦六ヶ國乃至十ヶ國迄は如何なる世の末にも必要なり、斯くて世界は一の聯邦組織をなし、日本は日本として日本の國體を維持し、亞米利加は亞米利加として亞米利加の國體を存續すべきなり、予は平和を理想とすれども、而かもその爲に列國の解體し去りて一國家を組織せんことには贊するを得ず、好しや幾歩を讓りて之れに贊すとするも、古來何人か能くその理想を現實にしたるものかある、一時武力を以て之を試みたるはあり、ナポレオンの如きアレキサンダーの如きシーザーの如きシヤーレマンの如き、將た我秀吉の如き、而かもその多少の統一さへ僅かに一時に止まり、能く長時日に渉りて全世界を統一したるものあることなきを如何せん、好し又更に百歩を讓りて之が現實にせられたりとするも、此の如くして得られたる平和は死默せる平和なり、國民の意力の沈滯せる平和なり、民俗は惰弱に流れ民性

は昏愚に歸せんのみ、戰爭は吾人の欲する所にはあらずと雖も、而かも戰爭を爲し得るの實力は養ひ置かざるべからず、之を個人の場合に見るも、敢て格鬪を挑まざる迄にも、事あるに於て格鬪し得るの膂力は養ひ置かざるべからず、さる膂力なき程の者は到底健全なるものとは許し難く、猶ほそれ以外諸多の活動にも堪えざるものなるを證するが如く、戰爭の實力なき程の國家は既に國家として健全なる資格有りとは見るべからざるにあらずや、人には由來アニマルスピリットあり、それある以上は格鬪の心も併存すべしと雖ども別に理性の存するあり、それに指導せられて行動するが合理的個人の場合なると同く、國家も亦格鬪の實力は充實し居ながら而かも世界の輿論に鑑みて容易に發せず、常に人道に準據して進退するを可なりとすべし。

世には理想を平和に置き、極端なる世界一國家主義を信ずるものある他面に於て、更に又その所謂理想を平和に置くことに疑を挾むものあり。想ふにマルサスの人口論の如きが、その累をなす根底たるべし、マルサスの所説は眞理とすべしとするも、それには或る邊と或る時とを限らざるべからず、普遍に亘りて正確を失はずとは斷ずべからず、見よ、實際多く精神的に勞するものは、之を他の勞働者等に比するに生殖慾の寡少なることを、下世話にもいふ貧乏ものゝ子澤山なる事實能く之を證す、更に現在の狀態を見るに中流以上の婦人の結婚期は次第に後れ、二十四五才にして始めて他に嫁する有樣となれり。三十以後にして結婚する婦人の生殖力は非常に減少して僅に二三兒を擧ぐるに止るもの多しといふ事實あり、之よりして推せば生殖の力は人類の進步に逆比するの傾あり、又亞米利加インジアン並にアイヌ族等の如き野蠻民族も次第に人口を減しつゝあるを見る、左れど健全なる人間には勿論マルサスの法則を許さざるべからざるも、左すれば更に又人爲を以てその蕃殖を制限するの方法も（實際に必要を感ぜば）案出せらるべし、人類は必ず生存競爭を以て原則となすも生存競爭は漸々進化しつゝあるが故に、いつまでも同胞の鮮血を鋒尖に見るを要すとは

斷し難し、今日は尙ほ開拓し移住すべき餘地乏からず、吾人は生活に資せんが爲に大に自然と戰ふべきもいつまでも人類相屠るの慘禍を持續せざる可からざる必要はあらざるなり、科學の進步は將來是等の問題を解釋するに十分なるべし。今日世界の各處に人種問題起りて或る人種が他の人種を排斥せんとして或は法律に訴へ、或は暴力に訴へんとするが如きは生存競爭の方法未だ十分に進化發展せずして非科學的程度に居るの致す所なり。ニーチエの如きは生存競爭の原則を極端に推及して超人說を唱へ、愚者は賢者の犧牲たらざるべからざるが如くに論ずるもそは決して人類の爲めの福音にはあらざるなり。

愚者を救はずして之を犧牲に供せんとするが如きは眞に超人とは言ひがたし。ニーチエの主義行はれて基督や釋迦の福音長く衰ふることあらば、そは世界人類の進化にあらずして退化なるを知る可し。

故に理想を眞正なる平和の上に置くことは、之を現實にするの不可能なるものにあらざると同時に、又吾人の靈性の要求上當に然るべきものなりとするなり。(談話筆記)

社會主義とカント

藤井健治郎

社會主義は我邦においては警視廳の問題である間に、獨逸では大學講壇の問題となつて居る。我邦では一部法科の問題である間に、獨乙では兼ねて哲學科の問題となつて居る。我邦では唯〻單に社會運動の旗幟である間に、獨乙ではその他のあらゆる『イスムス』と同じやうに認識系統の一說となつて居る。

然り事實は次の如くである。『社會主義』なる語は眞に多面相の語で、動もすれば社會の安寧秩序を害するやうな危險なる思想の分子をも含んで居る。生產、分配、殊に分配に關する經濟問題の答案である。貧民、勞働者否凡そ『人』てふ者の尊嚴と幸福とに關する倫理問題の解決である、個人と社會との關係てふ歷史哲學

問題の根本的說明てある。要するにソーシアリスムスは之を認識系統の一說として見る時は、その他のあらゆるイスムスと同じやうに、經濟、政治、立法、倫理、哲學等に關する諸問題の解釋の總稱てある。』

謂ふまでもなく、オーエンや、マルクスや、エンゲルスや、ラッサルやの個人々々の說に是等のすべてを包含して居るといふ譯てはない、唯、今日の學壇に用ゐられて居る社會主義なる概念の中には、此等の各種の要素が含蓄せられて居るといふのてある。

故に此意義に於いての社會主義は、各專門の學徒によつて解釋せらるべき二十世紀の好問題てある。從て哲學、倫理の學徒としての余が社會主義を見るのは、專らその方面からてある。

近世科學的社會主義の鼻祖と稱せられて居るカール・マルクスは、脚をヘーゲルの哲學に立てゝ其の說を論述して居ることは普く人の知る所てある。然るにそのマルクスの流を汲んて社會主義を唱導して居る學者の中に、ヘーゲルを通り越してカントに返れと叫ぶ人々のあるは注目すべきことてある。ベルンシュタインの如き、ヴルトマンの如きそれてある、又同時に脚をカントに立てゝ居る哲學者て、道德、敎育、立法等の社會的意義に重要を置く人々のあるのは更に注目すべき事柄てある。コーヘンや、ナトロプや、スタムラーの如きはそれてある。

カントの哲學、殊にその倫理哲學は、果して社會主義に其立場を與ふる者てあらうか、社會主義、倫理の一說として見たる社會主義は、カントのそれと安全に手を握ることと出來る者てあらうか。飽くまで個人主義の上に立つと見ゆるカントの倫理哲學は、徹頭徹尾社會全體の安寧幸福を人生の歸趣となすが如くに見ゆる社會主義と、如何にして相互に容るゝてあらうか。社會主義派の學者の『カントに返れ』の聲は果して眞實の根據を有するてあらうか。所謂『新カント』學派の人々の社會的意義を絕叫するは、果して何等かの理由を有し得るてあらうか。

こは面白い興味ある問題てある。カントの倫理學を

理解する上に於いても、社會主義その者を研究するに於いても如何やうにか之を解釋することは、決して無益の業でないのである。

同じ新カント派の人でカール・フォーアレンダーといふ人が、『カントと社會主義』てふ書物に於いて、以上の諸問題に向て解釋を試みて居る。此書物に一たびヴァイヒンガー主宰の『カント研究』てふ一雜誌に於いて公にしたものを、後又多少增補して作くられたる。書物である。余は氏の論旨には首肯しかぬるの點少からぬを認めて居る。しかしカントの如き大哲の思想は眞にスフィンクスである。見方によつては如何やうにも解釋出來る者であらう。フォーアレンダーの見方も一種の見方に相違あるまい。又社會主義の解釋にも今一息と思はるゝ節もあるやうに覺える。しかしカント倫理哲學と社會主義倫理哲學とは、互に手を握ることの出來る契機の存在することを、カントの典籍の諸所から引證して論述せられて居るのは此書物に於いて多とすべき點であると思ふ。同好の士の爲めにその大意を抄して見やう。

此書物は三編に別れて居る。第一編に於いては、カント倫理哲學は社會主義のそれに根據を與へ得る者なることを立證し、第二編に於いては新カント派學者の社會科學の諸立脚點を吟味し、第三編に於いては社會主義學徒のカントに近接するとの當否を案檢して居る。今茲に抄せんとするは右のうち第一編のみである。

カントの思想と社會主義との交涉はその法理哲學に於いてゞなく、全くその倫理學に於いてゞある。カントの倫理學は、如何にも個人主義の倫理のやうに見ゆるけれども、その最後の根帶に於いては社會倫理(Gemeinschaft-Ethik)である。而して社會主義のそれもそれに外ならない。そこに兩者が互に手を握る契機が存するのである。カントの考によれば理性的生類としての各個人は、その理性的なるの點に於いて各人平等で、皆不可侵の尊嚴を有つて居る者である。斯かる各個人が秩序ある結合をなし、系統ある團體を爲すの處に、道德界は存し、目的界はあるのである。彼の『自他の

人の中に存する、人の人たる所以の者は常に目的として取扱はるべく、決して唯々手段として取扱はるべからず」といふカントの無上命令の第三原則は、是まで他の二の原則のやうに唯々個人的にのみ解釋せられて居つたが、それはしかのみ解釋せらるべき者でない、是は實に彼の道德界、目的界の社會原則である。凡そ理性的生類としては、極めて貧窮な日傭人でさへ、それ自ら目的として生存して居る、決してその他の人々の意志の機械でもなければ方便でもない。吾人の中にあつて神聖なる者は『物』でない『人』である。人間の自由の行動を制限する所の最高の原理は、『人』はそれ自ら目的であるてふ原理に外ならぬ。社會主義の倫理的原理も眞に此に外ならぬである。

次にフオーアレンダーはカントの純粹理性批判に於いて有名なるイデー論の中、カントがプラトーンの『國家』(共和國)を評して居る一節を引用して居る。カントはいはく、人はプラトーンの國家を以て癡人の夢に過ぎないといふ。そは間違つて居る。吾等はプラトーンの國家をたゞの空想に過ぎぬなどゝ一氣に唾棄し去らないで、むしろ彼を迎つて哲學的思索の境に遊び、新しい光を以てプラトーンの哲學的思索を觀るの工夫をしなければならぬ。到底實行することも出來ない空想であるなどと一概に排拆し去るは思はざるの甚しい者である。各人が各々其自由を保留して人格それ自らの修養をなすに適當して居る所の、最大可能的自由の國家の憲法は、唯ゞ國家を原始的に組織するに當りてのみ非常に重要なる者でなく、すべての法則の根帶に存する所の者である。而して最初に於いては、此等に對して起り來る所の障礙について注意するの必要がない。而かもその障礙なる者は、恐らく人間の本性より必然生じ來る者でなく。人が眞正の觀念を閑却し去ることより發する者であらう。凡そ哲學者に取つて最も恥辱なることは、哲學者が無難作に所謂矛盾に富んで居る經驗その者を楯に取つて深く其根帶まで詮索せざることである。若し觀念に從て適當の時に於いてそれ等の制度がうち立てられ且つ粗雜なる概念が一切の善

き目論見を萎靡せしむるやうのことがなかつたなら、彼の經驗なる者も存在せぬであらうといふて居る。

一千七百八十四年に『世界民の目論見に於ける一般歷史についての觀念』と題して、ある雜誌に揭載せられたカントの論文中にも同樣の思想が見えて居る、といふので、フォーアレンダーは又之を引用して居る。人類の最高の職分、最終の目的は、すべての人が皆その自由を保て、他人の自由を侵さないといふ外、何等の者によつても制限せらるゝ所のない自由を保つ所の社會を形成することである。人の人たる所以の一切自然の素質が、其の天分に從て充分發展し得る狀態に達するにある。或る一部の人々が特別な便利を得るが爲に、他の部分の人々が益々不利の地に立たねばならぬやうなことのない社會を造るにある、これは實に難い問題に相違ない、人類が最後に解釋し得る問題であらう。それは曲つた材木から直な柱は到底作られないからである。人類がかゝる思想に到達せんには、少くとも三つの豫想が必要てある。一はある可能的憲法の本質についての正しい概念、二は多くの世界經過によつて錬られたる大なる熟練、三はそれを承認するまで準備せられたる善意である。此の三つの豫想は頗る難い者で、よしそれが起るにしても、極めて晩く、多く無益な試みをやつた後に始めて共に現はれ來る者であらう。しかしこは僅かに吾人に向て幾度か革變の後には、如上の最高の狀態が達し得る者であるとの希望を與へるのである。斯かる未來の希望は、誰か無雜作に之を捨てる者があらうか。

カントの晩年の作たる『理論と實際とに關する俗論について』、『永遠の平和について』、『分科の諍論』、『法理哲學』等の中には、諸所の如上の思想が散見して居る、フォーアレンダーは、それ等を指摘して、彼は別に『斷定力批判』中の、一節を引用して居る。今新たに一大國民によつて企圖せられた、國家改造の時に際して、吾人は組織(オルガニザチオン)なる語、否全國家團體なる語を最も巧妙に利用することが出來る。何となれば、吾人は斯かる全體の中に於いては、唯ゞ單に他の手段でなく、同時にそれ

自ら目的たらざるを得ない、加之個人は全體の爲に貢獻する所あると同時に、又銘々の位置と職能とに從つて、全體の觀念によつて規定せられざるを得ざるからである。との一節を引いて居る。れこはカントが彼のフランスの大革命の始めて火蓋を切つて以來一ヶ年の後に謂つた語である。

カントは「ウトピア」(理想國)についても、如上の思想と一致する者を以て述べてあることを著者は『分科の辭』中より證して居る。プラトーンのアトランチカや、モーアのウトピア、ハリントンのオセアーナや、アレーのセヴェラムビア等の如き理想國家が何時かは完成せらるゝだらうとは、如何にも美はしい夢であらう。しかし漸々それに近よることは啻に考へ得るばかりでなく、それが道德法と一致する限りは、しかすることが實に吾人の義務である。無論是には國家の主宰者の方からの手酷しい反對はあるであらう、が國家の人民の方からは何等の故障もあるまい。と述べてあることを引用して居る。

カントが國家は革命(レヴオルチオーン)の手段でなく進化(エヴオルチーオン)の手段によつて漸次自ら改革して、理想の狀態に進まねばならぬ。その理想の狀態は、共和的憲法を有するの狀態で、國家の形を取るよりも、むしろ普遍的正義の原理に從ふ所の狀態であるといつたり、人民が政治に求むる所の者は慈善でない、正義である、そは苟くも自由を有する所の生類は、單に生活上の愉快を以て滿足する者でない、その愉快を生ずる所の原理を得て始めて滿足する者であるからであると論じたり、又彼のフランスの革命黨に勝利を與へた者は實に人民の正義の意識である。そは眞の熱狂は常に理想的の者、即ち純粹の道德的の者に向ふ者である。正義の概念についても亦同様であると說いたりするに至ては、宛然として社會主義者の口吻でないか。

彼の法理哲學の如きも普通には純粹に個人的で自由的であるやうに思ふて居るが、決してそうではない。彼は權利を定義して、各人が普遍の法則に從て、各々其自由を保つに於いて要する所の交互の强制の可能であ

ると說いて居る。又『人類學』に於いては、人類敎育の目的は、銘々を自由にして、而かも法に適する所の强制を打ち立てるやうな憲法を打ち立てんとするにあるといひ、カントは又法理哲學中に、原始時代に於ける土地共有の問題について、それは事實でない、しかしそは吾人の觀念であると述べて、次の如く說いて居る。法律的行動の未だ明了せざる以前に當て、地球上の一切の人間が皆土地を所有して居つたといふことは、實に原始的の共產狀態である。しかしその槪念は經驗的の者でなく、實に實踐的理性の槪念である。此理性の槪念があるが爲めに、吾人は正義の法則に從つて此地球上にある場所を所有することが出來るのである。此の如き論述には眞に今日の社會主義者の主張の俤が髣髴して居るではないか。

若しそれカントの典籍中から斯かる思想の散見して居る部分を拾ひ集めたなら、まだ〳〵外にも澤山ある。要するにカントの政治理想は、自由思想である。今日の社會主義が、カントの批判哲學と手を握るの契機は、實に彼の道德法にある。無上命令にある。凡そ人に於ける人の人たる所以は、單に手段としてのみ取扱ふべきでない、同時にそれ自身目的として取扱はれねばならぬといふ無上命令にある。カント自身は、その命令を充分實際界にまで應用することについて說いて居らぬ。が、之を實際界に應用すればさながら今日の社會主義となるのである。コーヘンが、獨乙社會主義の眞實の開祖はカントであるといつたのは、只此點に於いてのみいふべきであらう。

事實は然りである。然るにカントは實際に於いて是れ迄社會主義に大なる影響を及ぼさずに居つたのは何の爲か。獨乙社會主義者の中、最も哲學的頭腦を有つて居るラッサルでさへ、フィヒテを以て社會主義者の一人に數へながら終にカントに及ばなかつたのは何の爲めであらうか。

カントは右の根本原理を打ち立てたのみで、之を實際界に應用する所の社會倫理の系統を書かなかつたからである。然るにフィヒテは少くとも『孤立せる商業國』

てふ冊子に於いて兎に角社會經濟の方面にまで切り込んで居るのである。

カントは彼の政治書中最も重要なる著述たる法理哲學に於いて、充分正直に彼の無上命令の原理を打ち通して居らぬやうである。彼は此の書中に於いて一切市民は法律上自由で、平等で、獨立であることを認めて居る。しかし下等勞働者までをも市民の部に取り入れて、論じなかつたので是れまであまり目を注けられず居つたのである。

以上は是れフォーアレンダーの第一編の大旨である、彼は次に新カント派の學者の社會科學の立場を檢し、最後に社會主義者のそれを調べて居る。

フォーアレンダーの此書は一千九百年に出版せられて居つて其後、新カント派の學者にも、又社會主義者の方にも共に新しい研究、新しい書物が出版せられて居る。それ上第二、第三編の抄錄は、餘程補增を要するのである。

社會主義と個人主義、其語義に於いては僅かに黒白相容れない程の者である。しかしカントの個人主義、今日の社會主義者の社會主義はその發源と徑路と內容とを辿つて見ると、其間に餘程密接して居る點がある。チーグラーが先年公にせられた『社會問題は倫理問題なり』の第一章の社會主義と個人主義とを全く相反對の者のやうに說かれたのは、彼は唯く一斑の觀察で全豹の觀察でないと思ふ。

凡そ個人の不可侵の尊嚴を誠意正心から確信して動かぬ人は、同時に法律的意識の非常に强烈なる人で、社會國家の秩序を非常に重んずる人である、標本は、予は之を哲學史上ソークラテースとカントに見るのである。(完)

次號の本欄には池邊吉太郎、新渡戸博士外數氏に寄稿を依賴せり



空中の征服

山縣五十雄

此頃歐米諸國に於て世人が最大の注意を拂ひ、最大の興味を感じつゝある問題は確に空中の征服、換言すれば完全なる空中飛行船若くは飛行器の發明に關するものこれなり、近着の外國諸新聞雜誌を見るに、これに關する記事論說を揭げざるは殆どなし、現今英米に於て教育ある社會に最も多數の愛讀者を有する英國の小說家ウエルス氏は理科學の造詣頗る深く、其作る所の小說は概ね此學問を骨となしたるものなるが、此有名なる科學小說家は英國第一流の雜誌『ポール、モール』の紙上に本年一月より『空中の戰爭』と題する續き物を揭載し始めたり、これは其題の示す如く、空中飛行器の完成せらたる曉に起るべき空中に於ける列強の戰爭を假想したる物語にして、從來此種の小說は世に現はれざりしには非らざれど、これ等は皆第三流以下の平凡作家の筆に成り、荒唐無稽の御伽話に過ぎざりしに、今やウエルス氏の如き大家が此種の小說に指を染め、而して第一流の雜誌が之を揭載し、教育ある人々が之を愛讀する事實によりて推察すれば、如何に空中征服の問題が西洋諸國に於て緊要視されつゝあるかを知るに足らん、こゝに於て余は今日空中飛行船及び飛行器の發明が如何なる程度に迄進步したるか、又其完成の曉には如何なる影響を人事に及ぼすべきかにつき暫く語る所あらんと欲す

輕氣球の歷史

人が鳥の如く空中を飛行し得んとの考へは早くより人の想像に上りしものなり、既に三百餘年前に於て英國の哲人ベーコンは之を豫言したれども、然れども人が實際に空中に昇り得たるは遙かに後の事なり、何人も知る如く最初に輕氣球を造り出したるは佛國のモンゴルフィエ兄弟にして、彼等は今より約百二十餘年前空氣を熱して之を稀薄となし、之を布帛を以て製したる球中に容れ、其球を上昇せしめたり、次て巴里のチ

ヤールスなる人水素を布帛の球に充たして風船を作り之に乘して空中に上昇したり、其後久しからずしてブランシャードなる人ゼフリス博士と共に始めて風船に搭じて英國海峽を越えたることあり、斯の如くにして輕氣球は次第に實用に供せらるゝに至り、今より百四年前輕氣球は氣象空中の溫度等を研究するの具として始めて用ひられ、以來氣象學の進歩は輕氣球に負ふ所頗る多し

學術用としての輕氣球

輕氣球に由り今日迄に最も高く空中に上りしはグレーシャ、コックスウエルの兩氏なり、此二人は今より四十六年前七哩の高さに昇りしが、空氣の稀薄なると寒氣の酷しきとの爲め二氏は殆ど生命を亡はんとするに至れり、即ちグレーシャ氏は正氣を喪ひ、コックスウエルス氏は僅に齒を以て輕氣球の瓣を開閉する紐を引きて瓦斯を洩出せしめ、地上に降下するを得たり、近頃に至りて最も高く上昇したるはジューリング博士にして、此人は今より七年前豫め準備せる酸素を呼吸し、よく三萬四千呎の高さに昇ることを得たり

永久の氷雪の妨害の爲めに海又は陸によりて達することの困難なる北極の探檢を輕氣球に乘り空中の途によりて成し遂げんとの考へは今より凡そ十年前アンドレー、フレンケル及びストリンドベルグトといふ三人の瑞典人によりて試みられたり、即ち彼等はスピッツベルゲンより風船に乘りて北極に向ひしが、出發後傳書鳩に因りて傳へられたりる三回の書信の他杳として消息なし、途中難破の災に遭ひたるものと察せらる、近くは昨年九月米人ウエルマン氏特製の空中飛行船によりて北極探檢を企てたれど、中途に失敗して空しく歸り來れり。

軍用としての輕氣球

以上述べたるは輕氣球が學術用に供せられたる事の略史なるが、それが軍用に供せられたる事も亦甚だ早し、即ち輕氣球に乘じて空中より敵の陣地軍勢の配置等を偵察するに用ひたる次第にして、最初に軍用に供せられたるは今より百四年前佛國の革命戰爭中佛軍ジョルダン將軍がフラースの戰役に之を用ひて、功立てたるを嚆矢となす、普佛戰爭中巴里が普軍の圍む所となりし際には佛軍が輕氣球を放ちて市外と消息を通ぜんと試みたること六十回に及び、中にも彼の有名なる政治家ガンベッタ氏はこれに乘りて佛國の南部に逃れ出て、巴里救援の軍を組織したることあり、又米

國の南北戰爭近くは南阿戰爭にも輕氣球は大に軍用に供せられ、日露戰役中我軍が旅順の包圍の際輕氣球によりて敵の狀況を偵察したること屢々なりしは世人の記憶に猶ほ新なる所なるべし。

空中飛行船の考案

すべて此等の輕氣球はよく空中に昇り得れど、風に逆ひて任意の方向に進むを得ざるものにして、目下研究されつゝある空中飛行船の親ともいふべきものなれど、これと種類を異にするものと知るべし、斯の如き輕氣球は充分に實際の用を爲さゞるが故に、人は早くより風の順逆に拘はらず、任意の方向に進み得る風船即ち空中飛行船を作らんとの考へを起したり、此考へを最初に實地に試みたるは英國の人ジッフアード氏にして、氏は今より五十六年前輕氣球の籠に一の小形なる蒸氣機關を据へ付け其運轉により、任意の方向に進行せんことを企てたり、後三十年許を經てチッサンチエ氏は電氣を利用して之を試み、又佛國陸軍のクレブス、ルナー兩大尉も電氣を動力としてラ、フランス號と稱する空中飛行船を造り、一時間六七哩の速力にて巴里とミユードンとの間を飛行するに成功したり。

空中飛行器の考案

然れども此等の空中飛行船は猶ほ種々の點に於て不充分なりしかば、發明家の中には、鳥が其體重空氣より重きにも拘はらず、よく空中に浮び、風の順逆に關せず進行し得るの事實に鑑み、空中飛行を輕氣球に由るの考へを捨てゝ、鳥の體格、其兩翼の構造、其飛翔の方法を研究し、一の空中飛行器を創造せんことを志したる者あり、此方面の研究が始まりしは今より十九年前にして、其考案は之を極めて簡單にいへば、螺旋の作用にて一枚の板を水平に急に廻轉すること猶ほ我國の小兒の玩具なるトンボの如くせば、よく空中に上昇する事實に基くものなり、此考案によりて研究を重ねつゝある學者は英國のマキシム氏（有名なるマキシム砲の發明家）米國のラングレー氏等にしていづれも多少の成功あり、又米人ライト氏兄弟も成功する所あり、電話器の發明者ベル氏の如きも亦此種の研究を爲しつゝあり、獨逸のリリエンタール氏は鳥の兩翼に似たる空中飛行器を創製し、これに依りて空中飛行を試みしが、一昨年其實驗中器械の破損の爲め、空中より墜落して即死するの不幸に遭へり。

成功せる空中飛行船

斯の如く空中飛行の目的を達せんとするに輕氣球の

みに由らんとするは勿論不可なり、さりとて器械のみに因らんとする考案も成功いまだ充分ならず、こゝに於てか二者の折衷ともいふべき一の考案起れり、即ち輕氣球に由りて上昇し、器械に由りて任意の方向に進まんとの考案にして、目下成功に近づきつゝある空中飛行船は此種のものに屬す、此種の空中飛行船中最も早く多少の成功を博したるは獨逸のツエッペリン伯が今より八年前工夫したるものにして、よく一時間十八哩の速力を以て任意の方向に進むことを得たり、又今より七年前佛國の專門家サントス、デユモン氏は石油發動機を動力とする空中飛行船を作り、巴里に於て上昇したることあり、今より六年前には曾て我國にも來遊じたることある英國の專門家スペンサー氏がメリン號と稱する空中飛行船を作り、之に搭乘して倫敦の市上を横斷し、一昨々年は英國のバルトン博士が一の空中飛行船を作りて多少成功したり、然も此等の飛行船は成績いまだ充分ならざりしが、昨年に至り、始めて殆ど完全に成功したりともいふべき空中飛行船が佛國に於て作り出されたり、これ即ち有名なるパトリー號にしてこは佛國陸軍の專門技師の手に成り、昨年七月二十二日巴里に於て試驗されたる際には首相クレマンソー氏陸軍大臣ピッカール將軍と共にこれに座乘して約一時間巴里市の上を航行したる後、無事に其出發點に歸着したることは當時の海外電報が傳へたる所なり、パトリー號は其後巴里よりヴエルドンに飛行中暴風に遭ひ、遠く愛爾蘭の海岸迄も吹き飛ばされて遂に破壞したるが、佛國政府は更に同型のもの五隻を新造するに決し、既に工事中なりと傳へらる。

獨逸の軍用飛行船

獨逸の陸軍に於ても空中飛行船の研究に熱心なるは毫も佛國に讓らずして、一千二百の將卒が空中飛行船隊に隷屬し、專門に其研究に從事し居れり、而して佛國のパトリー號が成功したると殆ど同時に獨逸に於ても其陸軍の工夫にかゝる軍用空中飛行船をシヤーロッテンブルグ附近に於て實驗したるに、何等の故障もなく運轉し得て、四千乃至五千呎の高さに上昇し、一時三十哩の速力にて飛行したり、最近にはツエッペリ伯が更に新工夫を凝らし、種々改良を加へて一隻大なる空中飛行船を作りて、之をマンスタンス湖上於て試驗したりしが、其當時十人これに座乘してよく二百五十哩の距離を飛行し、途中地上に降下して乘客を下船若くは上船せしめたり。

英國の軍用空中飛行船

英國も亦アルダーショットの造兵廠に於て秘密に其工夫にかゝる空中飛行船を製造中なりしが、昨年の秋完成して九月五日倫敦を去る三十五哩のファーンボロより出發して倫敦に來り、市上を一時間十五哩の速力を以て飛行して、非常なる喜を倫敦市民に與へたり、此空中飛行船の氣球は長さ一百呎直徑三十呎の葉卷煙草形のものにして、船は端艇の形を爲し、アルミニユームと布とを以て作られ、よく三人を載するを得、機械は石油發動機にて運轉されたり、此飛行樹も亦佛國のパトリー號の如く、昨年十月十日倫敦の水晶宮に繫留中暴風雨の爲めに破壞されたるが、英國の陸軍は直にこれに代るべきもの數隻の製造に着手したれば、遠からずして完成するならん。

成功したる空中飛行器

空中飛行の問題に關し最近に世人の耳目を聳動したるは英人ヘンリー、ファーマン氏なり、氏は空氣より重くして氣球を有せざる一の飛行器を發明し、本年一月十三日巴里に於て自ら之に乘りて上昇し、數百の參觀人の面前に於て一千三百メートルの距離を往復して二萬圓の賞金を獲取したり、氏の飛行器は巨大なる紙鳶を數個組立てたるが如きものにして自動車の如きものを仕掛けあり、非常の速力を以て之を廻轉し、空中に上昇するものなり。

前述の如く進行自在の空中飛行船も飛行器も共に完成に近づきつゝあり、此上に幾度か研究に研究を重ね、實驗に實驗を重ねたる後、共に、若しくは其一つが完全に成功する時が遠からずして來るべき事は最早や疑を容れず、さて愈々其時が來りて人が鳥の如く自在に空中を飛翔し得るに至らば如何なる變化が人事に來るならんか。

戰術の大革命

先づ何人の頭にも浮ぶならんと思はるゝは戰爭に及ぼす影響ならん、偵察用としてこれに優るものはなかるべく、陣地の形勢、軍隊の配置、堡壘の内狀、軍港の情況等空中より瞰下せば歷々として見るを得べし、こゝに於て空中に向けて發射する大砲の必要も起るべく、軍法軍略は全然改革されざるべからざるべし、更に又空中より爆裂彈を投下して城市を破壞し、軍隊を全滅せしめ、軍艦を轟沈せしむるが如き事も出來得るならん、但し當初は空中飛行船の積載力少きが故に、さしたる事もなかるべきも、追て改良されて積載力が

加はらば、此等の事が出來ずとは斷言すべからず、遂には今の海上の艦隊の如く空中艦隊が組織されて、空中の戰爭が起るに至らん、兎に角最初に全完なる空中飛行船を有する國民は其武力に非常なる勢力を加ふべきは言ふ迄もなし、英國のマキシム氏は曰く『最初に全完なる空中飛行船を有する國民は世界の地圖の色を一變すべし』と、いさゝか誇大に過ぐるかの如く思はるれど、頗る味ある言といふべし。

人事に及ぼす影響

空中飛行船及び飛行器の人事に及ぼすべき影響の如何に大なるべきかは殆ど想像以外なり、前述ウェルマン氏の企てたる北極探檢の如きは容易に成し遂ぐるを得べし、又國の境界なるものは殆ど無意義となるべく、稅關の如きは廢物とならん、何となれば空中には境界なるものなく、稅關は之を設置するに由なければなり、然る場合には世界の商業は悉く自由貿易となるの他はあらざるならん、交通の方法に於ても多大の變化あるべく、汽車汽船の如きは比較的便益少なきものと見らるゝにも至るべし。

更に又山嶽の價値大に上るべしと思はる、今は交通不便なるが故に高き山は住居の地として不便なれど、人がよく空中を飛翔し得る時には健康の地として山嶽を選ぶに至るべく、市街に於ては屋上に店舖の開かるゝこともあるべし、此等の他人事上に來るべき變化は猶ほ頗る多かるべく、想像するは一の興味ある仕事なり、讀者諸君餘暇あらば試に之を想像せられよ。

米人の消滅

近世の北米合衆國は物質的に巨人の步調を以て進步したれども、精神的には其反比例に退步したること否むべからず、其政界の腐敗は頗る甚しきものありて、賄賂請托は殆ど公然に行はれ、官吏公吏の公金を私する者絕ゆることなく、上流社會の道德は亂れてこゝに最も醜惡なる罪は常に犯されつゝあり、質素朴實の風は奢侈淫靡の俗に壓せられ、建國の基礎たる自由を尊び正義を重んずる精神は地を掃ふて去り、人種的憎惡の感情は其國民の精神を支配して帝國主義は跋扈跳梁を極む、若しもワシントンやフランクリン等が再生して現時の狀態を見るならば、彼等は其建設したる大共和國の墮落の甚しきに驚愕するならん。

米國は何が故に斯の如く墮落したるか、其一因は確

かに富の増加が餘りに大に餘りに急速なりしに在るべし、人は衣食足りて禮節を知るとはいふもの丶、足り過ぐる時は奢侈に流れ淫靡に移り、精神的に墮落するものなり、米國は天然の富を有すること過大なる以て其の國民はこれが爲めに其嘗て健全なりし精神を毒せられたるなり、然れども米國の墮落につきては他に猶之より大なる原因あり、正眞のアングロ、サキソン人種の裔なる米人が次第に消滅して、他の外國人が代りて米國を組立つるに至りたる事即ちこれなり。

此事實をば佛國の學者ダヴネル子爵は同國第一流の『兩世界雜誌』の近刊に於て詳細なる統計を擧げて指し示し「今アングロ、サキソンの血を受けたる正眞の米國人は地球の表面より次第に消滅しつ丶あり、遂には米國土着の印度人もユーロン若くはイロクオイス種族の如く絶滅するに至らん」と述べ、今の米國人は國語に於てのみ英國人及びアングロ、サキソン民族なりと斷言したり、子爵のいふ所に據れば、米國諸市府の住民は大部分歐洲諸國より移住したる者にして、正眞の米國人は甚だ少なし、例へばシカゴ市の如き總人口二百萬人のうち正眞の米國人は僅々三十七萬五千人あるのみ。

然らば今の米國々民の大部分を組立つる移住民は歐洲の何れの國より來りしものなるや、前には獨逸人と愛爾蘭人とが移住民の主なる者なりしが、近頃は其他の歐洲國民が大部分を占む、即ち一千八百四十年より同六十年に至る間の移住民中四割三分は愛爾蘭人にして三割五分は獨逸人なりし、之を最近一千九百一年より同六年に至る間の狀態に比較するに此等二國よりの移住民は僅に五分に止り、九割は其他の歐洲諸國より來れる者にして、之を細別すれば二割八分は伊太利人、二割七分は墺匈人、二割は露國人若くは波蘭國人なり、而して總て此等の移住民は繁殖力頗る强盛なるに反し、正眞の米國人は子を生む力甚だ乏し、斯の如くにして正眞の米國人は次第に他の國民の爲めに驅せられ、滅ばされつ丶あるなり。

即ち知る、現今の米國々民といふ者の大多數はワシントン建國時代の米國人の子孫に非ざることを、米國近世の墮落は實に此事實によりて多く解釋さるべし。

鼠の征伐

ペストの傳播者として我國に於て近頃殊に忌み嫌は

れ、頻に人間の征伐を受けつゝある鼠は近頃英國に於ても亦一の大敵に向はざるを得ざるの運命に遭遇したり、即ち同國に於て先日鼠族撲滅を目的とする一の國民的大會が組織されたるなり、鼠の如き些細なる害物に對し一大國民が擧りて開戰を宣告するはいさゝか滑稽に聞ゆれど、鼠が人間の健康と財物とに及ぼす害の大なるを考ふれば、一笑に附し難きを知るに足らん、倫敦の週刊雜誌『スペクテーター』の紙上に於て一記者は鼠を絶滅せざるべからざる事を論じたるうちに述べて曰く。

「英國に棲息する鼠の數は約四千萬と概算さる、彼等が一頭一日に財物に與ふる損害を一ファーシングと見積れば、彼等總體が吾人に與ふる損害は毎日四萬一千六百六十六磅毎年一千五百萬磅(我一億五千圓)に上る、此金額は餘りに過大に見ゆれども、之を小區域に於て算すれば其然らざるを知るべし、近く倫敦の市會が二三の街を改築するに當り、家屋を取毀したるに、鼠群が此等の家屋の什器其他に及ぼしたる損害は五千磅(我五萬圓)に上ること發見されたり」

我國に於ては家屋の構造缺隙多くして特に鼠の棲息繁殖に便なるが故に、鼠の數は英國に於けるよりも大なるべし、今假りに全國の戸數を一千萬と算し、毎戸に棲息する鼠の數を五頭と見ば、全國に於て五千萬頭の鼠あるべし、此等の鼠が財物に與ふる損害を一日一厘と假定すれば、彼等の總體は毎日五萬圓毎年一千八百二十五萬圓の損害を吾人に與ふる勘定なり、一千八百餘萬圓の金は貧乏なる我國にとり非常の大金なり、況んや鼠はペストを傳播するのみならず、腸チブス其他の病氣を傳播すといはる、我國に於ても鼠族絶滅會の必要あるべし。





書籍談

徳富蘇峯

△日本人が讀書的國民であるか、ないかといふ事については多少の疑問がある。或人は日本人が汽車や電車の中で書物を讀んで居ないから讀書嫌ひであるといふやうに見て居る。けれども、さういふ事は一つの習慣であつて必ずしも其一事で直ちに讀書嫌ひであるといふ事は出來んと思ふ。今でも新聞に廣告が載らず、批評が載らず、學者先生の眼に嘗て觸れた事のない書物が年々幾萬、幾十萬といつて賣れて居る。夫等の書物は誰が讀むかといへば下層社會の人が讀んで居るのである。彼等下層社會の人の收入からいへば一卷の書物を買ふといふ事も容易の事ではない。直ちに生活の一部分と見なければならぬ。それが大阪邊で出來る所謂赤本といふやうなものを買つたり、若しくは貸本屋から借りたりして讀んで居る處を見れば、讀書といふものは彼等にとつて直ちに生活の一部分となつて居るといふ事をいひ得る。自分は歐羅巴や亞米利加の下層社會の讀書的傾向と我國のとを比較して、どちらに團扇を上げてよいかといふ事については今尚迷うて居る。

△只上流社會、中流社會に於てはどうであるかといふに餘り讀書といふことに重きを置かぬ樣である。さうして書物などを讀んだり若くはいぢくつたりするやうな事は寧ろ當世流でないやうになつて、何だか氣の利いた人は書物などは讀むものでないといふやうな傾がある。で學校では隨分讀書の習慣を養うた人も學校の門戸を出づると同時に其習慣を學校の中に殘して了ふといふやうな事も稀ではない。さうして書物臭い話をしたり、書物の上から議論をしたりするものは一種の奇物變人、さうでなければ單に學者といふ一つの階級の仕事になつて居て、所謂ゼネラル、パブリックの

連中は餘りさういふ事には頓着せないといふやうな風がある。それで持て居る書物を態々戸棚の隅に押し込んて置く人はあるけれども之を應接間などに飾て置く人は寧ろ少ない。どこの家でも一切の生活費を統計して見たならば、書籍購求費といふものは寧ろ最も少ない部分に屬するてあらうと思ふ。千圓の收入の人が百圓を書物に費すといふやうな事は吾々の眼からいへば寧ろ甚だ少額てあると思ふが、其少額の比例すら我國には多くないだらうと思ふ。

△然しこれは只今日の傾向についていふた迄の事て元來日本人が讀書嫌ひの人民だといふ譯てはない。必要があれば隨分讀書をする。然し日本人にとつて一つの間違つた考は書物といふものは六づかしいもの、面倒なもの、或は嚴師良友の間にあるが如きものといふやうに思うて、書物に向ふと兎角に堅くなる癖がある。堅くなれば面白くもなく樂くもないといふ事は當り前てある。それて書籍を我伴侶とはして居るけれども、餘儀なき伴侶、止むを得ぬ伴侶、有益なる伴侶、義務的の伴侶といふやうな譯てあつて、一日一所に居るよりは半日、半日よりは一時間といふやうに、成るべく短かく切り上げたいといふやうな模樣が見える。それで書籍とは親しまない。書籍を自分の遊び友達のやうに容易く自然に取扱はないのである。

△以上の考を以て書物に向ふのであるからして書物に對する鑑識もなければ愛情もない。只中の正味さへあれば何てもよいといふ事になつて居る。讀んで了へばもう書物には用はないといふ譯になつて了ふ。で、書物は總ての家とはいはないけれども多くの家に於ては玄關番の食客以下の待遇を受けて居る。主人の眼から見れば奥さんの次には書物が大切であるといひ、奥さんの眼から見れば主人の次には書物が大切であるといふ譯で書物が一家の生活に於て最も優待せられ最も好遇せれて居るといふやうな事は比較的少ない。それはホンの書物道樂とか學者とかいふ家ではさういふ例も偶々あるけれども、一般からいへば書物は一家の生活の中に於ては全くとはいはんが殆んど無視せられて居

るやうに思はれる。

△成程書は姓名を記すに足るといふやうな筆法て見れば、書物は書物其者よりも書いた中の事が大切てあるといふ事はいふを俟たざる所てある。同じ論語てさへあれば大道店て賣て居る近頃の活版刷の一册五錢以上十錢以下の論語も、或は五代將軍綱吉公が特に出版させた道春點の論語も、若くは慶長時分に活版て――即ち同じ活版とはいふものゝ今の活版とは大いに趣を異にして居る當時の活版て――印刷した論語も、或は天文年間に堺の南宗寺版の論語も、或は前にも後にも天下一品といはるゝ正平版の論語も、論語といふ點に於ては全く差別がない。てこういふ調子て見て行けば何てもよいのてある。然しながらこれが即ち日本人の支那人若くは歐米人に些か劣つて居る處てあらうと思はれる。彼等ても悉く皆然りといふのてはないけれどもが、彼等に於ては善本と普通本との區別は極めて精嚴てある。若し日本人が書畫骨董に於ける程の十分の一の嗜好を書物に傾けたならば日本の――大きくいへば日本の文運は今日よりも餘程異つたてあらうと思はるゝ。處が飲めるものならば正宗ても、ドブロクてもよい、食ふものならば肥後米ても南京米ても選ばないといふやうな調子てあつて、外の事には其趣味の甚だ精細てあつて其鑑別の甚だ詳審なるに拘らず、書物に至ては前申す通りの次第てあるといふ事は如何にも不思議千萬てあるが、之れは或は朱子學で記誦詞章の學といつて總て讀書を義理一遍の講究に止めて置く癖があつて、書物を大切にするとか愛するとかいふ事は學問の外道てあるといふ習慣を養ふたからてもあらうが、其弊が今にも傳はつて居る。

△て元來書物を讀むものとのみ思ふのが間違の基てある。元より書物の大いなる目的は讀むといふ事にあるけれども今一つの目的は傳へるといふ事にある。讀まなければ傳へることが出來んといふのてはない。傳へて置けば讀む事は何時ても出來る。又傳へるといふ意味の中にはいろ／＼の意味が籠て居る。一卷の書物にも之を味ふて見ればいろ／＼の事がある。單に其書

物の中に書いてある内容ばかりではない。其書物夫自身が其出版せられた時代を語て居る。例へば元祿前後の書物が經書てあると佛書てあると若くは小説雜著の類てあるとを問はず、自ら德川氏の繁昌を語て居る。慶長元和から寛永正保の書物は戰國の餘臭を受けて何となく濶大な處がある。壯快な處がある。ちつともケチ〳〵した處がない。文化文政頃になれば殆んど總ての事が纎巧になつて德川の文明が漸く衰弱して居るといふ事を示して居る。少し心を用ひて見れば其紙の上にも、又は刻てある字の上にも、若くは其表紙の模樣の上にも悉く時代の面影が殘つて居る。此點からいうて見れば一つの書物は其出來た時代のモニユーメントである、紀念碑である。て若し審美的眼光を以て見れば其挿畫若くは彫刻、印刷、綴ぢ方、一として鑑識を要せないものはない。のみならず、古い本は書物屋からして直きに今日まで傳はつたといふのではない。幾多の持主を經て傳はつたのである。其本に捺してある藏書印を見ても、若くは書入を見ても、なか〳〵古が偲はれる。同じ論語でも今活版屋の手から出て其れが二束三文に夜店に投げ出されて居るものと、今から六百年も前に出版されて一代の大人學者といはるゝ人の手澤を經て今日に傳はつたものとは決して同日には論じられない。其書物に時代が潜んで居るのみならず、幾多の人物が潜んで居るやうに思はれる。さういふ本は開けて讀まなくとも其れを只見て居るばかりで一つの學問になる。一つのインスピレションを得る。で自分は書物は必らず讀まねばならん、讀まない本を買ふのは無用である、亂費であるといふ考を除けて貰ひたいと思ふ。書物は必ずしも讀まなくともよい、見ればよい、傳へも置けばよいといふ風にしたいものと思ふ。

漱石先生

馬場孤蝶

漱石先生は明治文界の巨人である。縱橫自在なる筆力、該博なる學識、徹底する觀察眼、溢るゝ如き頓才

に於て、少くとも、現今の文壇に獨歩の觀がある。と、先づ、こゝまでは確だが、これから進んで、先生の作物及び藝術上の氣質を論じやうと爲ると、僕には、甚だ困難である。これは先生の著作を餘り多く讀まないからである。何も、小說といふものは、主人公が性慾に悶へたり、追想に耽つたりするのに限ると思つて居る譯では無いのであるから、先生の著作を面白く思はぬといふ次第からでは無い。先生の著作は、別に新しい所を、新しい所をと、ねらつて居るのでは無いから、左樣急いで讀む必要も無いので、落著て讀む機會を待つて居た、といふのが理由の一つ。それから、僕の友人で、大學に於て先生の敎を受けたもので、先生の著書を皆持つて居るものがあるので、それから借りて讀まうと思つて居るうちに、まだ、その折を得無いといふのが理由の二である。

そんなら、何故、漱石論を草する仲間入りを爲たのだといふ人があるだらうが、これは、決して僕の好んで爲るのでは無い。全く瀧田樗陰大人の咎である。大人の猛烈なる徵發に逢つて、全く逃げ場を失つて、止を得ず筆を執つた次第である。大人の仰せらるゝ所に曰く、作物を讀なければ、何か直覺で書いて吳れ、何う爲ても、作物評が出來なければ人物論でも宜いと。僕は、それでは、何か書きましようと約束は爲たけれども、何うも書くことが無い。ヨシ〳〵ぐず〳〵して居れば、編輯期日が過ぎて、僕のやうな木ッ葉は、自然期滿免除となるに極まつて居ると、横着を極めて居ると、何ういふ事の間違か、大人特使を遣して、この使のものを待たせて置て、二枚でも三枚でも書いて遣せといふのであるっで、僕のことだから、前の約束は虛僞だとも云へぬこともないが、さうすると、文士などゝいふものは、虛僞をいふものだ、道義心の乏しいものだなどゝ極め付けられては、文士ならぬ僕の爲に、眞正の文士諸君が飛んだ迷惑をかぶらるゝ譯になると思ふので、云ふことは何にも無いけれども、大奮發で、筆を握つたのであるから、漱石先生は勿論、讀者諸君にはまことに、お氣の毒であるが、これは、大部分、

瀧田大人の咎であると承知せられ度い、と、まア、宜加減なことを云つて、枚數を殖やして置て、漱石先生にかゝる肝腎の評言の方を成るべく短く爲る仕度に取りかゝるのである。

近頃の小說には、作家が一と月位前に讀んだ書物がそのまゝ紙面に躍り出してるやうなのがある。僕などは、さういふ小說を見ると、まことにご苦勞樣なことて、何んぼお附合でも、遠方のォヂさん達の見たやうにわざ〳〵人世を見ずとも、何とか、ご自分の面白いやうに世間を見ては、何なものかと、思はれてならぬが、漱石先生の著作に接すると、先生の人生の見方に對する僕等の贊否は兎に角、先生の見られた人生、先生の描かれた人物は、確に、先生ご自身で、拾ひ出された世間なり、人物であることが確に感ぜられる。これが、僕には、甚だ面白い。先生に對しては、甚だ失禮ではあるが、或は、泰西の名作から脫化して來た部分があるのかも知れぬが、若しそれが有るにしても、十分消化されて居るのであらう、僕等には、何處が何うと一寸云ひ得無いのである。

先生は、極めて鋭敏な人である上に、なか〳〵廣く世間に觸れた人のやうである。その故か、物の特徵を捉へて、ゆつくりと、明に讀者の面前に列らべらるゝ所は、殆ど現代に於ては比類を見無い。『草枕』の山路の描寫、殊に、床屋さんに至つては、生きて動いて居る。――尤も、作物のある部分では、時々、筆が廻り過ぎて、牛刀雞を割くといふやうな感のすることはあるけれども。

流石に大都で生まれ、大都で成長された人だけあつて、書かるゝものが皆モデレエトである。人物の行動にも、描寫の行き方にも、無理が無く、自家の性情推し得られ、洞察せられ得る範圍外に出らるゝこと決して無いやうである。

先生は理性の強い感情家である。他人のことは眞目に考へらるゝのであらうが、ご自分のことになると、よし、一時はクワッとせられても、直ぐ、あとで腹のなかでは笑つて居らるゝといふやうな人ではあるまい

か。作物に表はれた方でいふと、自分をも笑らつてかゝらうとするやうな調子の見える所が、先生の、性格とはいへぬにしても、氣質の一角の發露かと思はるゝ。て、その缺點とも、僕に思はるゝのは、眞劒に怒つて居るべき筈の人物が、わざと怒つて居るのではあるまいかと思はるゝ場合のあることとである。『虞美人草』のなかの何とかいふ人が、家人と喧嘩して立退かうとする所などが、何うも少し落著いて居無いやうに感ぜられた。勿論漱石先生が、さういふ場合を滑稽にも、芝居がゝりにもご覽になるのは一向差支は無いが、作中の人物自らが、眞劒の場合に噴き出しさうな顏で怒つて居ては、少々面白く無からう。但、これは、僕が、漱石先生ご自身のお人柄を想像してその眼て見るのて、さう見えるのかも知れ無いから、これは、決してさうだと斷言する次第ては毛頭無い。——然かし、ご自身がモデレエションのある人て、盲動せられぬのてあるから、盲動するやうな人物を書かるゝことは餘りお得手ては無いとだけは云へやうと思はるゝ。

漱石先生の作物に對する時、作者の理性の働、學殖の該博、沈着なる觀察等を味ふことが出來無ければ、さういふ人に對しては、先生の作物は全く猫に小判てある。唯々滑稽だとか、可笑しいとか、アッサリ爲て居るとのみで、先生の著作を讀む者は、決して先生の味方では無い、少くとも、永遠の味方では無い。或は恐る、さういふ人々の多數が、先生の著作をこれまで無暗に持ちあげたのでは無からうか、漱石の名聲稍傾けりといふやうな聲が何處かで聞えたやうに思ふが、これは、先生の眞價を認め得ぬ低級の輕浮な渇仰者の反去に過ぎぬのてあらう。

小説の讀者の多數が、歐洲大陸の近代作家の愛讀者や、モオパッサンの英譯本を二三冊讀むと直ぐ小説を作る氣になる青年等ばかりてあるならば、さういふ文界て讀者を得るには、漱石先生は餘まりに醒めたる人てあり、餘りに、芝居氣少く、小説氣少なき人てある。併し、藝術は、主義、傾向ばかりて旨く出來るもので無い以上、藝術家たるに最も必要な資質を多く具へた

漱石先生の著作が、所謂る自然主義の諸作と相對峙して、永久にその光輝を減ずることの無いのは、確なる事實である。

漱石先生は尙春秋に富まるゝのであるから、その理性、觀察の運用は、今後ますく巧妙に立至るであらうし、思想も今一層皮肉にもならうし、從つて、今一層痛切に、適切に人生を描いたものが、その筆端から現はれて來るに違ひ無い。僕等は、この頓才に富める作家の前途に多大の希望を懸けるものである。が、併し、漱石先生をして、今十年遲く生れさして見たかつたやうな氣が爲るのは、敢へて僕ばかりでもあるまい。

これまでは、二月二十三日頃に書いたのだから、三月號に間に合ふか何うかと疑かつて居たところが、果して、間に合はずに、四月號へ廻はるといふことであるので、尙考へて見ると、餘まり上走つた調子で書き立たので、讀者には、別に面白くも無からうと思ふから、その埋め合はせに、漱石先生には迷惑かも知れぬが、先生の逸話を發表する。尤も、僕は、是非これを發表するといふ積りでは無かつたのであるが、三月の『新潮』を見ると、僕が今こゝに發表しようとする逸話が大部曖昧に出て居て、而も、それが、僕の口から間接に訛り傳はつたことになつて居はせぬかといふ虞があつて、若し、あれが漱石先生の眼に觸れた場合に、先生のあの明晰な情理並び到るといふやうな話の內容を僕が聞き違へたとでも思はれるては厭であるから、いよく決心して、こゝに大凡先生から聞いた儘の所を書いて置くのである。

漱石先生の帝國大學に居られた時分は、英文科の先生の組の學生といふのは先生一人きりであつた。所へ、プロフエツサア・ウードが英文科の教師として渡來せられた。ウード氏が始めて大學へ出席された日、漱石先生に教科書彼此れは相談の上で極めるから、旅宿の帝國ホテルへ來て吳れといふのであつた。で、漱石先生は、外國人を訪問するのだからといふので、出來るだけハイカラに仕立てゝ帝國ホテルへ出掛けた。尤も、當時のハイカラは今日の蠻カラで、漱石先生其の日の

おん出て立ちといふのは、その時分流行つた、縮の——節は夏である——折襟の、前は紐で締めるやうになつて居る襯衣の上へ、直接にフランネルの金鈕附の制服を着して居られたのである。所で、ホテルではボーイに案内されて行くと、ウード氏の寢室へ連れて要かれた。ヘンな所へ案内するものだとは思つたものゝ、左様いふ習慣もあるものかと思つて、室へはいると、ウード氏はフンとか何んとか云つて、一向に挨拶もせずに、室にある革匣に指をさした。漱石先生には、一向何だか合點が行か無かつたが、多分は、革匣のなかには書籍が入いつて居るから、開けて出せ、さうした上で、いろ／＼相談しようといふ意味であらうと推したので、直ぐ立寄つて、跪がんで革匣の蓋を開けた。所が、なかには、襯衣だの衣服の古などがはいつて居るのみで、書籍らしいものゝ影さへ無い。何うした事とも解からぬので、蓋を兩手で押し上げたまゝで、ウード氏の顔をジッと見あげて居ると、やがて、氏は、傍へ來て、蓋に手を掛けて、元の通りに蓋を爲ようとするので。漱石先生は、直ぐに元の通りに蓋を下したと、ウード氏は、又、蓋を手に掛けて開けようとするので、漱石先生も、一緒に蓋を持ちあけた。漱石先生には、何の事やら一向に解からぬ。かういふ同じ事を二三度繰り返した後て、漱石先生も堪らへ兼ねて、これは一體何ういふ譯なのかと問いた。ウード氏は、錠前が毀はれて居るといふ。漱石先生はます／＼解せず、錠前は成程損はれて居るが、その錠前の損はれて居ることゝ、我輩との間に何等の關係があるのかと、斯う哲學的に尋ねた。すると、ウード氏は、でもお前は錠前直しだらうと云つた。漱石先生こゝに至つて、憤然と立ち上がつて、否と答へた。所で、そのnoなるものが如何にも激烈な調子で言ひ表はされたものなので、漱石先生の如何に錠前直しと呼ばれたのを憤つて居るかゞ明に知り得られたから、ウード氏は、少時呆れて、漱石先生の顔を見て居たが、やがて、君はそれでは何ういふ人なのかと問いた。イヤ、自分は文科大學の學生で、かう／＼いふ用向で來たのだと、漱石先生が説

明するといふと、ウード氏大に慌はてゝ、ヤア、それは、飛んでも無い間違であつた、實は錠前直しを待ち受けて居た所へ、君が入いつて來られたので、一圖にさうと思つて、誠に何うも失禮を爲た、疎忽の段は幾重にも勘辨せられ度い、I beg your thousand pardons といふやうなことを云つて、改めて、漱石先生を應接室へ通らせて、書籍の相談を爲たといふのである。一體ならば、前日、敎場で差向ひて話を爲たのであるから、ウード氏は漱石先生の顏を覺えて居るべき筈であるのであるが、ウード氏は、日本へ來たての西洋人に有勝な通り、日本人の顏が皆同じに見えて、區別が付か無かつたので、かういふ事が起こつたといふのである。漱石先生のいはるゝには、その後、西洋へ行つてから考へて見ると、自分の當時の服裝は西洋人の眼で見たら何うしても錠前直し相當のものであつた。

この話は、僕等のやうなウード氏によし半面でも識あるものには、特に面白いのである。あの人柄な、訥辯なウード氏が、初め漱石先生を錠前直しと思つて扱かつた態度と、後の慌はて方とが、何となく眼前にチラ付くやうな氣がするのである。

暴露序に、今一つ、漱石先生の逸話を紹介する。これは、明治二十三年の秋かと覺えて居るが、本鄕の若竹へ越路が掛かつた。漱石先生その時、令兄より拜領の外套――中古ではあるが、仕立のなか〳〵良い――を着せられて大分得意で、聞て居ると、傍にアグラをかいて居たヘンな男が、今日は休みかと聞いた、漱石先生は、無論、先方が此方を學生と認めて聞くことゝ思つて、今日は休みだと答へた。それから、先方がいろ〳〵のことを聞くので、相當の返答を爲て居ると、段々、話が喰ひ違つて來るやうになつて、これは少し變だと思つて居るうちに、とう〳〵先方から、判然とお前は造兵へ出るのかと聞いたといふのである。この話は、漱石先生が、前の話ほどデスクリプチイブには話されなかつたので、是れつ切しきや書け無いが、何にしろいろ〳〵な者に間違へられたものである。

僕は、これて、漱石先生を賓物に爲ること、一月の

「趣味」の分を加はへて、前後二回て、漱石先生に對しては、何共相濟まん譯て、恐縮の至ではあるが、あの落著た眞面目な漱石先生のご人物と對照すると、かういふ逸話は、何んだか一種の藝術品のやうな氣が爲て唯一人で賞鑑するのは、何うにも惜しいやうな心持に堪えられぬので、かう二度までも世上に發表するのである。普通の禮法で行くと、あるまじき事かも知れぬが、全く人の噂を爲て見度いといふ好奇心ばかりでは無いのであるから、漱石先生は元より讀者に於ても、この點は十分に寛恕せられ度い。

漱石論

柳川春葉

現在の作家の一人をつかまえて、やはり作家の一人に之を論じろと云ふのは隨分困つた注文である。論じられる人も論ずる者も、双方とも迷惑な話だ。猶正直の處小生は夏目さんの作物を論ずる資格は無い。又同氏には一度もお目に懸つた事が無い位だから、人物を評する事も出來ぬ。で、御需に應じて書く事は漱石論では無く、唯夏目さんの物を讀んだ時の感じを並べるのみだ。

小生は此間偶と斯ういふ事を思つた。各自の傾向とか主義とかを別にして、單に文章といふ事を見ると、今の文壇に五大文章家が有る。二葉亭、漱石、澁柿園、鏡花、風葉の諸氏だ。それから又此五家を色別にして見たら、靑が二葉亭氏、黄が澁柿園氏、綠が鏡花君、紫が風葉君で、漱石氏は紅であると思ふ。理屈は無い、唯小生には然う感じられる。

夏目さんの文學論は見た事が無いが、作物の何れを讀んでも、確に氏が或趣味を以て人生を見、氣に入つた處をチョッと摘み出しては寫してゐるのが能く解る。其心持は何處までも冷に洒脱に、雨あがりの道を低い駒下駄で拾つて歩いてゐるかたちがある。其ともう一つはつまらない中にも何か興味を見出して、自分だけでも面白くしやうといふ輕い樂天觀がある。

是を單に江戸趣味と云つたら語弊があるかも知れないが、都會の人が生れながらに持つてゐる趣味の一つだらう。それが能く現れてゐるやうに思ふ。夏目さんの作物は能く書いてあるが好かないといふのは此趣味を好かないので、小生などが面白がるのは此趣味好な爲だ。

所謂寫生文に俳諧の影響の多いのは無論の事だが。それも形より見方の上てある。是は發句ては解らんが、芭蕉あたりの俳諧(連句)を見ると、たしかに特有の俳人的趣味で世の中を見てゐる。

　片隅に虫歯かゝえて暮の月
　二階の客は立たれたる秋

だの

　終宵尼の持病を押へける
　こんにやくばかり殘る名月

だのといふ連句の移りを見れば、何とも言はれない氣の利いた、練れた處があるので、是が江戸趣味の極好い處だが、夏目さんの物にも猶且此句が籠つてゐるやうだ。先日も他て例に引いた事だけれど、「野分」の中の、

「夫は人に依りはしませんか。」と高柳君はおれが暇さへあればといふ處を暗にほのめかした。

「人にも依るてせう。然し今の金持といふものは………。」と道也は句を半分て切つて机の上を見た。

机の上には二寸程の原稿がのつてゐる。障子には洗濯した足袋の影がさす。

といふ邊の行方なぞは何うしても俳諧的て、調子の可い、思ふ壺をうまく射てゐて、然も裏をかゝない手際が實に美事てはないか。

俳諧だ〳〵と云つて、夏目さんの小說を何ても俳諧にして了ふのぢや無いが、此見方で新らしい時代を見てゐる處が如何にも面白い價値のある點てはないかと思ふ。

終に臨んで言ふ。小生は勿論小說は寫生文に限ると言はんし、又自分が此形式をやつて見やうとも思はん。然し是は是として何うだと言ふなら、大に好だと言ふ。

小生だつて一般の讀者だつて、作家が書かぬ物を要求する權利は無い。夏目さんの作に有るものだけて滿足出來なければ、欲しいものは他に求めれば可いのである。

現代人物評論(三)

大石正巳論

匿名氏

△大石君

うむ大石君?! 大石君には以前時々面會もし、議論も聽いた。性格も熟く知つてゐる。併し近來は頓と遇はないので、近況は詳しくは識らぬ、

以前は只普通の政治家で、さまでの手腕を有する人とも思はなかッたが、近來は實に非常な勢だ、宛然たる破竹の勢て、ムク〱頭を持上げて來て、進歩黨の實際の首領たる槪を示して來たやうだ。世間でも、大隈隱退後進歩黨を率ゆる者は、先づ大石だらうと云ふ考を起して來た樣子だ。

議會に於ても、大石君は實際首領らしい位置を占めて働いて居る。又其の行動も堂々たる物て、一黨の首領として實際愧かしからぬ態度を發揮してゐる樣だ。現に委員會、本議會などに於て、政府に質問をするとか、又は演說を遣る場合にも、如何にも一黨を代表したるが如き態度を以て、堂々時の總理大臣を相手として、議論をするの槪が有る。單に辯士と云ふ點から見ると、衆議院には島田君のやうな剛ら物も居る、特に當期議會に於ける島田君は、なか〱奮發した物て、饒舌る點では恐らく島田君一人舞臺の樣な觀を呈してゐる樣だ。

島田君の演說は旨い。夫れは旨いに違ひないが、議論がどうも聊か枝葉に亘る嫌が有る。渠は大事を大に論じ小事を小に論ずるの人てはなく、寧ろ常に局部枝葉の點をつッ突いて得意がる弊が有る。大石は此れと反對て、大問題にあらざれば充分に其の力量が見えて

來ない。總論には力瘤を入れるが、各論には一向骨を折らない風である。常に好んで施設の方針とか、内治外政の大綱に亘つて、大摑みの議論を立てやうとする態度を採る。島田は往々次官局長連を相手に論戰をする場合も有るが、大石は此れを避けて居る。渠は常に總理大臣を目指して、一騎打ちを挑まうとするもので有る。

此の高く地歩を占めると云ふ點は、島田君には到底眞似が出來ない。尾崎も一時は此んな風で有つたが、近來は頓と活動せぬので、今日では議會人多しと雖も、此れは恐らく大石君の獨擅であらう。

どうも此んな點から見るも、進歩黨未來の總理は大石で有らうと想はれる。此の人を除いては、さし向き一黨を統率するに足る器を有する人が見當らぬやうである。成る程、進歩黨には犬養と云ふ剛ら物も居るが、渠は寧ろ帷幄の裡に隱れて、事を計らうと云ふ柄の人で有つて、馬上の實戰はどうも大石の獨擅であるらしい。兎に角、今日進歩黨の實際の首領は、渠の外にはないので有る。

處で、大隈は果して自個の後繼者として、大石に滿足をして居るで有らうか、どうで有らうか。

大隈が渠をどう觀て居るかと云ふことは、頗る興味の有る事であるが、此れには以前吾輩が大隈を訪問した時に、會々座に二三の實業家が在つた。所へ大石君が遣つて來た。其の時大隈が渠等に大石を紹介した言ひ草が面白い。此の大石君は聽えた名士で、或る點に於ては非凡の手腕を有する人だと云ふのだ。大隈伯が或る點と云ふたのは果してどの點で有るかは、吾輩推測の限りでないが、併し吾輩にも又別に吾輩の觀る或る點がある。

それは大石君の極めて押しの強い骨の有る點で有つて吾輩の觀る處では、大石君の骨は骨のうちでも木骨ではなく鐵骨である、而も其の鐵骨を包む渠の肉塊中には、多量の血脈を含んでゐるやうで有る。

世には石を以て鐵骨を包んでゐる人も尠からぬが、がかう云ふ人物は手觸りが全く冷たい。大石君の鐵骨

は血と肉とを以て抱擁せられてゐるので、觸るゝと愉快な温味を與へる。渠には一寸と遇ふた時には、何となく人を惹き付ける力が有るのである。

處が、一度激昂すると渠は恐しい抵抗力を顯にして來る。渠には押すと凹み、放すと膨らむと云ふ彈力性は認むることが出來ないが、只外部より壓迫を加へると、非常な反撥力を出す處がある。

その面白い例は、第二次伊藤内閣の時に、外務大臣は陸奥で、丁度其の頃朝鮮には、防穀事件が持ち上がつて、政府も大分手古摺て居た。大石は當時英國から歸朝して、姑らく閑居してゐたので有るが、陸奥は此の新歸朝者を民間より拔んでて、一躍辨理公使に任じて、朝鮮に向はさうとしたのである。此れは頗る異例の拔擢で大に人目を愕かした次第である。

處が、此の時大石は伊藤陸奥の兩人に向て、拙者既に辨理公使たる以上、此の防穀問題は申すに及ばず、對韓一切の政策は、拙者に一任して貰ひたい、就ては又拙者に下さるゝ御訓令が有ることとならば、只今拙者の面前に於て明白に申し聽けられたい、と遣つた。伊藤陸奥も、聊か毒氣を拔かれた氣味合で、返答がどうも要領を得ない、政府も對韓一切の政策を君に一任する譯には參らぬが、まあ君は存分手腕を揮つて呉れい、くらゐの處で、御茶を濁したさうで有る。

兎に角大石は朝鮮に往つた。處が、愈々國王に謁見をする日に成つて、大石は近眼鏡を懸けたまゝ、平然として國王の前に出やうとするのだ、朝鮮の大臣、此の態を見て大に泡喰つた。不敬だから眼鏡を除れと云ふ、いや拙者は近眼だから眼鏡を除つては、謁見が出來ぬと云ふ幾ら懇願しても、大石はいつかな聽かない、果然渠は渠の特色を表はして來た。渠は不敵にも赴任早々、朝鮮國王に鐵骨の　馳走を捧げんとしたので有る。

初手から此んな鹽梅であるから、大石の辨理公使は隨分の鐵骨公使で、なか〳〵の頑强であつた。防穀事件は兎に角一應解決はしたもの〻、此れが爲めに尠からず韓人の感情を害した事である。此の善後策を講ずるが爲めに、通商局長から轉じて朝鮮に往つたのが原

敬である。大石には此んな風に一克の處があつて、どうも迂廻の手段を採らぬと云ふ風がある。

又此れより少しく以前、多分明治二十四五年の頃だらう。渠が英國に滯在して居つた時の話だ。青木が丁度駐英公使を遣つて居る。處が、大石がロンドンに着するや否や、先づ第一番に在留日本人の口から聽いたのが、青木公使に對する不平の聲だ。青木はどうも我々日本人に對して不親切である。一例を云ふと、我々留學生に對しても、青木は常に學問ならば本國でも出來る何にも巨額の學資を費つて、態々ロンドン三界まで來る必要はない。本國で充分學問をした上に、來るならば視察にでも來れば澤山だ、と云つた風に冷罵を遣る、故に我々留學生は、常に青木は外國崇拜の男で日本人に不親切で、日本帝國の面目を汚す奴で有ると憤慨して居ると云ふ樣な不平だ。

大石は渠等の不平談を聽て、實に青木は怪しからぬ奴だと想つた。外國に來て本國の公使館に、たよらぬことは萬事に不便宜であると云ふことは、充分に感じてゐるものゝ、は例の剛情で公使館の方は見向かうともしない。

處が、公使館の書記官が大石の宿に遣つて來て、君はまだ公使に遇はぬさうだが、夫れては萬事に不便だから、一應遇つて置いては、どうかと勸める。いや御好意は辱ないが、吾輩は青木のやうな奴に遇ふのを潔しとしないと、頑張る。遇ふ遇はぬの押し問答の末、書記官はとう／＼無理々々に大石を公使館に引つ張つて往つた。

處が、大石がドアーを開いて青木の室に入ると、青木は丁度其の時イギリスの女を入れて、會話の稽古を遣つて居つた。大石は部屋に這入つたが、青木は大石の方を見向きもせずに、平然として會話の稽古を續けて居る。書記官も堪らなく成つて、青木に注意をしたのである。此の時始めて青木は豪然として、ヂロリと眼鏡越しに大石を見た。

大石は青木の仕打ちが、グッと癪に障つた。此の奴此の機會に於て手酷しく凹め付けて、高慢ちきの鼻柱

を折り曲げて呉れやうと、先づ喧嘩腰に成つた。挨拶も何にもしないで、先づ

大石「足下の今遣つて居るのは、そりや何か」

青木「英語の會話だ」

大石「何の必要が有るのか」

青木「知れた事よ、交際にさ」

大石「貴樣の遣つて居るのは抑何の役だ。苟くも一國を代表してゐる公使だらう。會話が必要ならば通辯を雇ふが可い。又は書記官に遣らせるが可い。語學に暗いので公使が勤らずばサッサッと辭職しろ。辭職して英語の達者の者と代はれ自體貴樣のやうな馬鹿げ切つた男が、公使などを遣つて居るから、日本の條約改正は何時まで經つても出來ないのだ」

大石は劇烈に持ち前の鐵骨を振り廻さうとする、青木も劣らぬ剛情だから、容易に負けてはゐない。二人の間には火花を散らして激論を遣り出した。書記官先生は蒼く成つて、頻りに大石の袖を引くけれども、鐵骨將軍頑として應じない。とう／＼書記官は部屋を逃げ出して仕舞つた。隣室の外人、頻りに戶を叩いて注意をするけれども、二人は夢中だ。激論數刻、深夜に及んだ。大石はとう／＼大に怒つて、貴樣のやうな奴は議論では効き目が無いと言ひ樣、矢庭に青木の襟頭を摑て、ドアーの外に引つ張り出さうとする。青木も負けず武者振り付く。二人は此處に一場の格鬪を始めたのである。

青木と大石との今に到るまで仲の惡いのは、此れからの事だ。

此んな風に、大石は一旦言い出すと、容易に後へは引かぬと云ふ恐しい勝氣の處がある。故に時として徒らに客氣を以て、自ら悦ぶと云ふ壯士風の所が、以前は有つたのである。だから陸奥が大石を辨理公使として朝鮮に遣はさうとした時にも、反對の第一聲は先づ圓滿なる當時の外務次官林董から起つた。大石はどうも粗暴な男で、常識に外れた事も隨分遣る方だから、渠を朝鮮に遣るのは危ない。事を破る恐があるから、

見合はすに如かずと、云ふので有つた。此れは無論林と大石とは、性質が一致しない處が有るので、林は先づ圓滿の方、常識を貴ぶ方、從つて大石の如く奇拔な事を遣らうと云ふ男を、危險視したのは無理も無い事であらう。

大石が防穀事件て、頻りと奮闘を遣つてゐる時に、どうも其のやり方が餘りに一克て、壯士じみた處が有つたので、伊東巳代治なども、大石は早く引き上げさせるが可いと云ふて當時の日々新聞などにも、大分大石の攻擊を遣らせたものだ。

併し民間ては大石の手酷しい遣り方は、非常に歡迎された。當時は丁度對外硬派などの、盛んに民間に唱えられた頃だから、大石の强硬政略は、旨く此の時代精神に投合したのである。此んな鹽梅だから、渠が朝鮮を引き上げて來て、新橋に着いた時には、盛んな歡迎會も有つた渠は恰も凱旋將軍の如く、意氣揚々として停車場に詰め掛けた歡迎の人衆に向て、一場の答辭的演說を試みたのである。

話は一寸前に戻るが、渠が歸朝後間もなく陸奥伯に知られて、一躍辨理公使と成つたまでの事情を一寸と述べて見やう。

大石は英國から歸朝後、先づ外交問題に着目した、て、稻垣滿次郎などと共に、一時東方問題に熱注して、頻りと演說も遣り、著述もして居つた。

當時民間には、既に對外硬派が起つて居つて、頻りに伊藤內閣の外交の弱腰を罵つて居る。大石が新歸朝の勢を以て、唱え出した東方策は、恰も此の時代精神に投合したのである。

此んな處が、恐らく陸奥をして渠を朝鮮に遣つて見やうと云ふ考を起さしめた點てあらう。大石のやうな骨のある男を遣ると、或は存外成功するかも知れぬと云ふ考を起したものであらう。

處が、大石と云ふ男には婉曲なアートと云ふものが、一向に無い。此れには陸奥も閉口しただらう。大石の荒療治には確かに手古摺つたに違ひない。

大石は以前は、先づ此んな男てあつた。然るに。今

目では餘程如才の無い處も出來、客氣も斂まる、貫目も付く、今では大政黨の首領としても。天晴愧がしからぬ人物と認められて來た。此れは大石君の一大進步と云はなければ成らぬ。

一體、今日日本の政界で總理大臣株、プレミヤシップを有する人物は、存外に尠ない渠は大藏大臣向きであるとか、外務大臣向きであるとか云はるゝ人、則ち一省の長官としては、至極適任者と認められる人は、なか／＼多い樣だが、此のプレミヤシップ、所謂ステーツマンライク(經世的)の型を持つてゐる人はさうたんとは無い。先づ元老と云はれる側の人では、伊藤公の如きは此のタイプ專門の政治家で有つて、大隈伯もさう、山縣公も先づさう、松方侯になると、此れは實は大藏大臣の型であつて、總理大臣のタイプでは無いらしい井上侯も恐らく。さうであらう。次に中老と呼ばれてゐる側に來ると、兎も角桂、西園寺の兩侯はそれに近い。山本伯の如きは人或は總理大臣株の一人と見るかも知れないが、どうも總理大臣としては、聊か窮屈を感ずる人だらうと想ふ。頭腦は極めて緻密で有つて、海軍の行政には巧であらうけれど、一國の總理大臣として內外百般の政務を指導するとは、如何であらうか。單に人格の點より見るも稍嚴格に失して、包容に於て缺くる處があるやうに想ふ。

又政黨出身者のうちでは、故星亨の如きは、寔に卓越せる人格を有する人で有つて、一部の崇拜者の眼には、確かにプレミヤシツプの型を有する一人であるかの樣に映じたらうけれど、渠は寧ろ依然民間にゐて、政黨の親分を遣つてゐる方が、適してゐただらう。

兎も角、星は多數の政客中、嶄然一頭地を拔ん出てゐた剛ら物であつたが、その次ぎたるものは蓋し大石だらう。渠は兎に角大きい事の出來るらしい人であつて、常に眼を大局に注いで、小事には一向拘泥しない、渠が稍もすれば、好て施政の方針とか、內治外交上の政略とか云ふ大體論を遣るのは、恐らく渠自らは高く總理大臣株を以て任じ、常に總理大臣學の修練を怠らぬ證據であらう。

渠は一向細密な行政事項には頓着をせぬ風があるが、一體行政上の事務と云ふものは、頗る科學的のものであつて、政略方針の如何よりも、寧ろ實行上の技術に重きを置くものである。此處が、アートレスの、粗大な大石君の頭腦には適しないので有らう。渠は以前から哲學者と、戰國策士とを搗き雜ぜたやうな頭腦を有する人であつて、物の計劃を立てる場合にも多くは算盤球を彈いて、實際から割り出すと云ふとがなく自然一種の理想から築き上げやうとする。故に渠の說く政略は、往々空想に陷る弊がある。要するに科學的でない、又分析的でもない、直覺的である、演繹的である。

元來土佐人には、理窟好きの策士肌の人物が尠くない。板垣伯の如きも、理窟好きの方、併し土佐人としては策に乏しい人だ。後藤伯は丁度此の反對で、理窟が少く策の多い方、谷子の如きも理窟はなか〳〵の好物と見える。世間では谷は一向無策の人のやうに言ふが。あれでも少しはある。其の他林有造の如き、大江卓の如き、孰れも好個の土佐人のタイプだ。

而も其の策たるや、どうも多くは理窟から割り出されるので、プラクチカルでは無いやうだ。宛然たる革命家の考へ出す樣な策であつて、質實で無い、實際的でもない。

大石君も此の一般の土佐人氣質は免れぬ方であつて、酷く後藤伯に似てゐる處があるが、後藤伯よりは一層文明的で、言はゞ伯に文明の皮を被せた樣な人物である。故に後藤伯の大同團結の時には、大石は確かに有力なる黑幕の一人であつた。松隈內閣の組織も、世間では大石を屈强の參謀と認めて居る。

一體、大隈と云ふ人も、なか〳〵の策略家であるが、併し大隈の策略は常に實際的で有つて、大石のやうに理窟的では無い。大隈と云ふ人は元來餘りに要領を得過ぎる人で、爲めに屢々薩派との衝突を惹き起したのだが、恐らく常に調停の任に當つてゐた者は大石君で有つたであらう。

要するに大石と云ふ人は大同團結の時にても、又は

松隈內閣、憲政黨內閣の時にても、常に離れ離れの物を大きく包合して夫れをエンラーヂしやうと云ふ場合に、策を立てる樣である。破壞的の手腕に到ると、渠は遙かに犬養に及ばない。況して故星亨などに比べると、到底その敵では無いのである。

近來進步黨では、例の旗幟變更問題が起つて來た。當時大石の態度は、極めて曖昧なもので、改革派に贊成するのか、又は現狀維持派に傾いてゐるのか、一向要領を得なかつた。

此の不得要領の處が、蓋し大石得意の處だらう。何故なれば若しハッキリと一方に贊成をすると、何處までも其れを貫かねば成らぬ羽目に陷て、動きが採れなく成つて仕舞ふ。蓋し大石が此んな不得要領の態度を採つてゐたのは、恐らく深く進步黨の分裂を憂えたからだらう。此處いらが大石の大きい處であるらしい。

渠は伊藤公と大隈伯との連合に盡力をしたといふ說が有つたが、事實の如何は解らぬが、兎に角渠の性格より割り出して考へて見ると、此れは隨分有りさうな事である、どうもは渠は加藤高明などと同じく、一時は確かに伊隈聯合を計らんと考へた策士の一人で有つただらう。

此んな風に大石君は極めて調和的の分子に富んだ人であるから、一黨の首領としても、黨員が鬱屈を感ずると云ふ恐れは毫もあるまい。出來得る限りは、他と連合もし、提携もして理想のゴールに達せんと勉むる人であらう。だから鳩山と、犬養との中間に這入つて、終始調停者の役目を勤めたる者は、確かに大石君で有つたであらう。今日でも犬養君一人では、進步黨はとても持ち切れない。必ず分裂する。只だ大石がゐるので、內部の、折り合が付いてゐるのである。

終に臨て、大石君が最初未だ餘りに人に重ぜられなかつたと云ふ證據に、面白い話を一つ出して見やう。憲政黨內閣の時の役割に最初大石を農商務大臣に、肥塚を其の次官に割り當てた。處が、肥塚は大石の下で次官などは御免被ると云つて、とうとう東京府知事に

成つた。當時肥塚の腹の中では、恐らく自分も大石も同等の人間だ位に思つてゐたのであらう。然るに今日では大石を三役格とすると、肥塚は先づせい〲十兩の取り的か、貧乏神ぐらゐの處で有らう。

と云ふのも、大石が常に修養を怠らぬからであらう。渠は新刊物の購入には、絶えず丸善の店頭に、姿を表はす人で有つて、進歩黨中恐らく随一の讀書家だらう。タイムス紙の如きも、常に目を通して居る。近頃又難を遣つてゐるさうだが、此れも渠が修養を疎にせぬ一證據と云ふ可きだ。

渠は近來、大分如才が無く成つて來た様子でも有り、以前は随分と大言壯語もやつたが、近來は修養の結果滅つ切り男を上げた様である。併し思想は相變らず、疎大なやうで、精緻な處はどうも無いやうである。要するに大石君はパアソナリチー(人物)の人で、エビリチー(技能)の人ではないので有る。

△大石正巳氏

三宅雪嶺

大石氏に就いて一の定評ともいふべきものがある、氏は殆んど何事に就いても不器用である、根氣があつて勉強するけれど、質(たち)が悪くて上達せぬ、文章に骨折つたけれど上達(あが)らぬ、碁も頻に打つけれど、上達(あが)らぬ、屢々徹夜までするが、その功が甚だ薄い、外の事にかけても先づさうである、が唯政治上の運動及び之に伴ふ演説類に於て天禀ともいふべきものがある、政治關係の事にかけては早くから秀でゝ居つて、他人の容易に企て及ばぬところがある、特に議會に出て一政黨の院内總理として活動するに至り、今日のところ随一といはねばならぬ、之まで政黨も整はず、院内議事の模様も整はぬので、眞に政黨の駈引で大に見るべきものは少いが、議會に於ける政黨の運動としては總理自ら陣頭に立つて敵に當り、味方を指揮するところあるべきである、然るに今日まで首領といふべきは大抵蔭に居

つて仕事をし、演說の如きは末輩に爲さしむるといふ有樣で、實は演說は有るも無きも宜いといふ事になつて居る、進んで演說するものは陰で笑はれる嫌がある、政友會の長谷場氏は陣頭に立つことを辭せぬけれど、叱咤するばかりて議論を戰はすことが出來ぬ、元田氏は奮鬪に堪へぬ、が大石氏は自づと政黨に首領たるべき資格を備へて居て、不得要領の如くて人を包容する所あると共に、又味方を代表して議論を鬪はすことが出來る、而かもそれが堂々たる風を以てする、元と院內總理は艦隊の旗艦の如きもので、陸軍の總司令部とは違う、旗艦は常に艦隊の先頭に立つて敵の彈丸の集中するところとなるべきであるが、今日議場で左樣の態度を取り得るものは獨り大石氏あるのみだ、氏は實に一黨を率ゐて勇戰するに堪へて居る、唯その體質によるものか、出來不出來があつて、時に甚だ拙いことがあるけれど、兎に角議場に在つて、傑出したものといふべきでてある、生れ付いての議院男といふべきである、斯かる類は外に多く得られぬ、珍しい男として宜い。

けれども果して政治家として稱すべきか否かは俄に決せられぬ、外形に現れた所では氏は功名本位で苟くも功名の求め得べくんば如何なることをも敢てする、勇氣に富んて居る、極めて大膽てある、が特に功名の爲にならぬ場合にも猶ほ力を致すやは疑はしい、カーライルの曰ふ、ヂスレリーは良心がない、けれども自ら良心がないことを知つて居る、グラッドストーンは同く良心がないが、己の爲すところは盡く良心から出て居ると信じて居ると、此評は當れるものでないが斯樣な風に大石氏を評したら如何ならうか、氏に良心なしとはいはぬ、けれども良心なしとしたならば、否良心なしと見る跡があるならば、氏は自らそれを知つて居ろうか知つて居るまいか、氏の友人は、氏を怒らすに君は無主義だといふ樣な語を以てするに如くはないと言つて居る、無主義とか御都合主義とか言はれると不快の情が色に現はれる、けれども氏を主義に忠實なるものとは未だ人の輕々しく許さぬ所てある、政治

事は主義に忠實ならざるべからずとは屢次言はれるところであるが、その人を求むれば多く得られぬ、それ故特に一二の人を責むべきでもない、一黨の首領としては種々の事情がある、自ら枉げて從はねばならぬこともある、けれども事情は事情として何處まで主義を重んずるかは自づと知らるべきであるが、氏は此點に於て信用厚しとはいへぬ、之も氏が餘りに功名心に切なるが故て、次第に老熟したならば眞に政治家たるの資格を備ふる樣になるも知れぬ、近頃は禪と俳句とを勉强して居る、禪て功名心を制し俳句て駄辯を制する効能の有る樣望まるれど、俳句は物にならぬ、禪は望がある、今一層勉めたならば禪僧たるに恥ぢまいともいはれて居る、が禪を修めて善くなるものも有り惡くなるものもある、一概には言ふことは出來ぬが、若しそれて漫に勢利の爲に動くことを制し得たならば、更に進境の見ゆべきである、

氏は勤勉てある。早く起きて絶えず何事かに勞して居る、そして若干の人を纏めて運動することに於て大隈伯よりも適して居るところがある、伯よりも軍隊的に引き締めることがある、けれども伯の如く多趣味てない、伯の如く何處に行くとしても可ならざるなしといふ樣なことはない、伯ほど風呂敷が大きくない、政治にのみ限られて居る、それだけ其處に長所あると共に他に又缺けたところがある、院內て陣頭に立つて戰ふには殆んど申分ないが、院外て倘ほ政黨首領とし、黨を統轄し黨を擴張するに如何程の力が有らうかは未だ知れぬ、舊改進黨員と違つてオツー濟まして居らず、氣障てないのは取り柄てあるが、或る趣味の外のものを引き附けることが出來ぬ、進歩黨に居つて犬養氏と並び立つか、又は之に用ひられるか或は之を用ふるか、黨に於ける氏の將來も猶ほ明白を缺いて居る、けれども大石氏のみてなく進歩黨の領袖は、或る點に於て大隈伯に優るが、伯ほど能力のあるものはない、大石氏は或る點に於て伯の後繼者たるに堪ふる、而かも固より全體の後繼者たることが出來ぬ、時勢の然らしむる所もあらうが、まだ段が違うと見える、氏に於て一

層の奮勵を望む。

△大石正巳譚

池邊吉太郎

○今度は大石正巳論か、どうもいろ〳〵な問題を持て來るね。然し大石を論ずるといふのはちと氣の毒だよ。一體人物論などは得意の時代の人を捉まへてやる方がいゝ。彼だの犬養だのといふのはまア失意境の人だ。そいつを批評の鎗玉に上げるといふのは惡くいへば泣面に蜂だし、されはとゆつて褒める丈けの事がないから又その失意境にも落ちたといふ譯だらうしやア、どうもちと困るな。

○まア、その褒める方からいつて見たいが、といつて私は別に大石君を褒める丈けの事も知らないが、只あの人を褒めた事を聞いた事がある、それは今大使館に居る人でずつと古くから……書生あがりの時分から大石君を知つて居て、今でも相變らず交際して居る人の話だ。その人が私に向て「大石君は自分で注意して居るのだか或は自然になつてあつたのか知らぬが、大分長い間交際つて居るけれども只の一遍も人の惡口を聞いた事がない。反對黨でも友達でも―殊に私的事實、一身のことは一度も噂をした事がない。自分た丈けにいはないのかとも思ふたが、他人も聞かないやうだといふ。其點は非常に敬服だ、殊に政治家として餘程よい資格だ」といふた事がある。成程さう聞いて見ると私も――近頃は餘り附き合はぬが――大石君から人の噂を餘り聞いた事がない。だから多分事實だらうと思ふ。若し大石が人の噂をせぬ事を以て、注意から來たものとすれば餘程注意深い事であつて政治家としては確かに利益あることに相違ない。人の惡口をせぬ人は激烈な敵を作らない。其比較を犬養君などに取つたら忠半ばに過ぎるだらうと思ふ。犬養君はよく人の惡口をやる、影でもやる、面と向てもやる。盛んにやる。又加藤高明も人の噂をやり兼ねない。之れも得な事ではない。大隈といふ人は長い間勝手に人の噂をやつたが其弊も澤山受けて居る。然し大隈さんのはやゝ見も左程アクドクない。が其點は大石君が一番すくな

かない。或は全く離脱して居る。それで若し政治上の意見が一致するといふ事になつたら、あの人は誰とても手を握る事が出來るかも知れないと思ふ。

◎それから他に褒めることは……何かあるかな……演說が旨いやうだ。常に國際上から、外交上から若くは經濟上から事を論じて、議論の立て方が大きい。辯も確かによい。あの人と一所にやつた故馬場辰猪君などは能辯家であつて、大石君よりもずつと上手であつた樣だが、大石君もなか／＼旨い。立言の堂々たる所は矢張り大隈伯を小形にしたやうなものだ。

◎それから惡口の方の側の事では、先生が一番初めに朝鮮に辨理公使となつて行た事がある。民間の人が役人となつたのは當時には珍らしい事であつたが、どういふ理由でなつたのか、兎に角なつて行た。所が例の防穀令でやり損つた。何でものつぴきならぬやうにやり損つたものらしい。で罷めて歸て來たが、其時の外務大臣は陸奥宗光だ、陸奥が其れを評して「どうもアゝでは困る、事件の尻が結ばつて居ない。朝鮮がいよ／＼聽かぬならこれでやるとかこうするとかいふ結末まで極めて居ない。それて押さるれば空々寂々となる。」といつた相だ。其噂を私にしたのは誰だつたか、一寸其人を記憶せんが、然し陸奥から直接に聞いたらしいかつた。これは人の噂、惡口の取次をした丈けだ。先ア此け丈て御免を蒙らう。

△大石正巳氏

松井柏軒

進步黨のリーダアとして大石正巳氏は今や政界の巨然たる一雄將となれり。

氏と常に同列に稱せらるゝ犬養毅氏は、風格高邁智謀鬼神の如きも、察々の明、能く衆を容るゝ能はず、人に長たる度量を缺けるに似たり、大石氏の智謀素り遠く犬養氏に及ばずと雖も、自から雲煙縹緲として迂なるが如く愚なるが如き處あり、淸濁併せ呑みて多

衆を統御するの德は、却て玆に存す。

鳩山和夫氏が曾て大浦氏に走らんとし、原氏に趨らんとせるは、天下の醜として唾棄する所也、大石氏と雖も桂侯と握手せんとし、西園寺侯とアンダアスタンデングせんとしたる事あり、其徑路よりいへば甚だしく鳩山氏と異ならず、然るも天下未だ大石氏を醜とせざるは何ぞや、鳩山氏は自個本位にして、派平に心を寄する單に私家の勢利の爲めにするも、大石氏は進歩黨本位にして進退卷舒總て進歩黨の爲めにす、彼は一身の利便のために進歩黨を犧牲にせんとし、此は己れを空ふして偏に進歩黨の爲めに圖る、其の行徑假令相似たりと雖も心事は乃ち月鼈雲泥の差違あり、彼が天下に唾棄せられて、而して此が漸く器重せらるゝ所以は此の故のみ。

島田三郞氏は口舌の雄也、辯論縱橫、議院の內能く之に當るものなし、然るも經綸に至ては全く空し、大石氏の議論に至ては全く多くの矛盾あり、稚氣あり、非論理的なる處、粗笨なる處、淺薄なる處あるも、然るも一國の長計大策より着眼して堂々正々、殆んど應の材たるを表す、實に大醇にし　あるもの、恐らくは議院中唯一の珍たらん。

大石氏素より粗忽の癖ありしも、今や黨のため全力を擧げて精勵すといふ、今の進歩黨實に此の人なかる可らず、否、今の政界此の人を缺く可らざる也。

△大石正巳論

山路愛山

記者足下。足下は大石正巳君に就きて僕の批評を求められたり。そは大石君は公人なり。僕は公人を研究するを以て一事業とするものなるが故ならん。さりながら僕實に未だ大石君の研究に取かゝらず。故に未だ足下に報導すべきものなし。唯僕が現代史の研究より得たる結果に依りて大石君が三菱會社と離れ難き關係ありしを知り、岩崎家の理想たる伊藤、大隈聯立の內閣が若し實現したらんには大石君も亦二君を繋ぐ結目たる

べきことと猶ほ加藤高明氏に似たるものあるべきを知るのみ。他の語を以て之を言へば今までの大石君は進歩黨の大石君にして又岩崎王國の大石君たることを知りしのみ、さりながら人間の交りは一離一合、朝を以て夕を計り難きものなれば今は如何なりけん、知らず。猶ほ研究して見たく存じ居るなり。

　大石君の演説は信州上田にて聞きたり。疎枝大葉到底書生論たるを免がれざれども、元氣のある、面白き辯説なり。而して其思想は學究臭からぬ學臭、蠻かららしき、はいからなりと感じたり。議會の政治論なども失敬ながら僕等には政治家的の議論とは申上がたく矢張り書生論なりと聞取らるゝなり。書生論と云ふが殘酷ならば大なる書生論、立派なる書生論、花々しき書生論なりと申すべきなり。僕は君の議論を讀む毎に（新聞にて讀むなり）何となく北米の老雄ブライアンを聯想せざるを得ず、君はブライアンの如き空想家に比せらるゝことを好むまじけれども僕には君の言論は何となくブライアンの議論が僕に與ふると同じ感興を與ふるを感ずるなり。

　世には大隈伯を以て放言高論の大將なりとするものあれども、僕の研究したる大隈伯は細心の所あり、愼密の所あるが如く覺ゆ。放言高論の大將は寧ろ大隈伯に非ずして大石君其人なりと謂つべし。君は自己の演説に對して頗る樂天家なり。君は自任頗る高く、自負頗る大にして、自ら言々句々、名論卓説を以て滿ちたるが如く自得するに似たり。君は決して自ら笑はず、自ら嘲けらず。頗る無邪氣にして頗る眞面目なり。君の議論が堂々として、如何なる時にも畏縮の狀なく、未練の態なきものは恐らくは其樂天家たるが爲めならん。

　我等は未だ君を惡むの友人あることを聞かず。君に親近するもの、善く君を親むを知る。君は年は取りても小兒らしき所あり。やり放しの所あり。君に近くものに毫末も不愉快を感ぜざらしむるもの丶如し。我等は此點に於て窃に君に敬服すべき性格あるべしと考ふるものなり。されど我等は未だ君の研究に從事したるにも非ず。君の研究すべき多くの資料を有するものに非れば畢竟大體論に過ぎず。我等の君に就て言ひ得べきは唯是のみ。



東洋拓殖會社法案

『今期議會の一大問題にして、又實に帝國が韓國開拓上に於ける大方針を包める東洋拓殖株式會社法案は、愈々十八日衆議院に提出せられたり』云々

此れは之れ、報知新聞『は東洋拓殖會社法案』と題して述べたる處なるが、東洋拓殖會社の成立は、單に冷淡に、國家經濟上の着眼點より觀るも、彼の東淸鐵道と撫順炭坑とを併せたる南滿方面に於ける國利の吸取に對して、略々相匹敵する程の規模と、更らに一層確實なる危氣なき永遠性とを有するものとも謂ふべく、吾人は斯くの如くにして我が國民が日露戰役の爲めに拂ひたる多大の辛き犠牲が次第に恢復せられつゝあるを見ては、實に衷心愉快に堪えざるの感を覺ゆるものなると同時に、又少しく其の裡面に立ち到りて觀察を下す時は、此の會社設立の眞の發頭人たる桂侯と伊藤統監との間には、寔に奇々妙々なる例の政略上の掛け引きありて、あはや西園寺内閣の運命も此の暗闘のうちに捲き込まん、一時は案外なる邊より案外なる政界の大變動を惹き起さんとしたる形勢なりしも、萬事は一重隔てたる黒幕の裡にて行はれしかば、一向に世人の注意を惹くことなく、表面は至極平凡に、至極に無事に納まりしとなれど、實に近頃黒う人筋の喉を鳴らせる程の、極めて面白き鞘當てたるを失はざりしなり、

さるにても、此の種の問題と來ては毎度奧の奧の奧底まで、看看拔き識り拔いて御座る筈の國民の門外漢氏が、僅かに廿日の『東京だより』に於て

◎東洋拓殖社會法案は、愈よ議會に提出に相成候。此れは隨分難産にて有之候。併し念に念を入れたる結果と見れば、該案の實行上には、却て好都合なるやも不可知也。

◎拓殖會社は、日本の百姓を、韓國に連れ込みて、韓國の土地を、押領せんが爲めにあらず。韓國の廣漠なる土地を、耕耘して。其の資源を開拓せんとするに外ならず候。されば其惠に浴するは、第一が韓國農民也。第二が韓國政府也。吾人は自から損して、他を利せんとする慈善的行爲と謂はず。されど其利を享くる者は、彼にあり、最も多く彼にあり。吾人は韓國に歡迎せらるゝを信ず。而して日韓の協和、此より來らむ歟。

などとシラを切つて澄ましてゐらるゝとは、なんぼう罪深き業なるぞや。

恐らく門外漢先生の位置としては、今日此んな事は欠にも出せぬなるべく、さらば吾人も亦、餘計な道樂の爲めに國家の元老を傷くるとは、先づ姑らく見合はすこととすべし。只だ東洋拓殖會社の成立は、實に重大なる國家的問題の一たるに、馬鹿氣切つたる辰丸事件や醜穢言ふに忍びざる原油問題などの論議に、しかく熱心なりし新聞記者の輩が、其れよりは遙かに興味あり、又重要なる此の問題に對して、案外にも冷淡なるを見て、今の新聞記者どもの馬鹿さ加減には、呆れ置かんと欲する也。

流石に東京朝日は廿日の社説に『拓殖會社設立案』と題して

一時難產と聞えたりし東洋拓殖會社設立法案は、愈提出せられぬ。其目的は會社の名義によりて既に分明なるが如く、東洋、主として韓國に於ける移民拓殖を奬勵し、之が爲に必要なる種々の事業を營むにあり。資本金は一千萬圓なれども、拂込十倍を限度として債券を發行し得るを以て、實に一億一千萬圓の働きを爲し得る大會社なり。此債券に對して、政府が元利償還の保證を爲す筈なるやに傳へられたるも、今回發表の原案には此事なし。但政府は本會社に對して八年間卅萬圓以內の補助を與へ、且總裁以下の役員は日韓兩國政府にて任命するを以て、本會社は純然たる私立會社にあらずして、日韓兩國に於ける半官半民の共同組織といふべきなり。之に就て吾人の想起するを禁ずる能はざるは、獨逸政府の波蘭に於ける殖民事業となす。獨逸は其獨領波蘭を獨逸化し、之に獨逸の農民を移殖するを以て、數十年來の目的となし、現に之れが爲に三億馬克の基金を有す。而も其事業は意外に困難なるが爲、同國政府は既に本年の議會に於て、此基金を更に四億馬克增加して七億馬克となし、且波蘭に於て政府は必要の土地を强制的に買收することを得る旨の法案を提出せり。之に就ては迫の獨逸議會に於ても贊否の論非常に沸騰せり。而して下院に於ては其基金に一億數千萬馬克の大冊減を加へたり。近着の歐字新聞に據れば上院も既に之れに同意したる模樣なるを以て、或は今頃は既に修正の上確定したらんかとも思はる。斯くて獨逸は波蘭に於ける其拓殖事業に就て、極めて困難を感じ居れり。但し吾人は之を例として、韓國其他に於ける今回の拓殖事業が、必ずしも失敗に終るべしとは思はず。是には種々の理由あることなるが、第一に波蘭と獨逸とは獨り人種と言語を異にするのみならず、宗教を異にせり。前者は兎に角、後者の爲に獨逸人と波蘭人とは容易に融合せず。獨逸政府も之には實に持て餘し居れり。加之ならず、獨逸の波蘭拓殖が困難なる最大原因は、獨逸が經濟上の理法に背きて移民を遂らんと欲するにあり。即ち波蘭人は政治上に於てこそ獨逸人に敗北したれども、農業上勤勉なることに於ては却つて其上にあり。然るに獨逸は農業上劣等なる人民を移して强ひて其優等者との間に競爭せしめんと欲す。是れ波蘭移民の最も困難なる所以となす。斯くて獨逸は容易に波蘭人の土地を買收する能はざるより、今回の如き其の强制的買收を企つるの必要をも生じたるなり。然れども日本人が韓國其他を拓殖するに就ては、斯かる困難少かるべし。成るほ

ど言語は異なれども、謂はゆる同文同種なり。就中、宗教の嗜同じきは最も好都合なり。而して農業上の智能に於て、日本人が韓國人に優る所あるは謂ふまでもなし。随つて今回の拓殖會社の目的は農業上の知識經驗の優れるものを其の劣れるもの丶間に移殖せんと欲するもの。獨逸の例とは全く反對なり。斯く觀察する時は、東洋拓殖事業の決して困難にあらざるを知るに足る。吾人は同會社補助案にも同意す。但し先決問題は如何なる人が其衝に當り、何如に之れを監督するやにあり。本案の建議者は桂卿なりといふ。桂卿は在野の政事家に淺からぬ關係を有するの人なり。若し之れを用つて議員操縱の便に供するが如きとありては、必ず失敗すべし。是れ注意すべきなり。云々（全文掲載）

と、云へりしは、池邊主筆の働きと見えたり。

次に時事紙が『東洋拓殖會社法案』なる題下に於て會社設立の理由たる韓國農業の改良進歩を促し半島の土地を開拓し以て富源を開發すると共に日韓兩國の親和を厚くし兩國民間に於ける經濟關係を發達せしめんとするの目的は甚だ可なり我輩の固より贊成する所なりと雖も其營業項目が前記の如く農耕牧畜水産採鑛等の生産業、土地建物の貸借賣買管理經營、移民の取扱、商品の賣買運送等より銀行業、倉庫業製造工業に至るまで殆どありとあらゆる各種の事業を網羅し若しも完全なる成功を期せんとせば其中の事業を經營するさへなか〳〵容易ならざる可しと思はるゝ程なるに斯くの如く繁雜なる諸種類の事業を半官半民なる一會社の手に委して能く其成績を擧げ得べしとは我輩の疑ふ所なるのみならず斯る廣大なる特權を有する獨占的會社の成立は現に韓國に於て着手し又將來着手せんとする個人もしくは團體の事業の發達計畫を沮害し寧ろ國民の企業心を挫折せしむるの掛念はあらざるなきやと顧る掛念に堪へず現に一昨年發企せられたる韓國興業株式會社の如き拓殖會社の成立と兩立す可からざるを以て自ら解散して拓殖會社に合併することゝ爲る筈なりと云ふ未だ充分事業に着手せずして解散合併に便なるものは可なれども既に着手したる事業にして今更ら解散合併の便宜を有せざるものは如何す可きや新會社の影響を受けて或は韓國に於ける草分けの事業を中止せざる可からざるに至るものある可きも測る可からず

と論じたるは、一應尤の説なれど、例の帝國主義など云ふ積極主義より考ふる時は、少々の故障は必しも念とすべきあらざるにあらずや、如何のものにや。

東京朝日は、更らに『東洋拓殖案と各派』と題し、各政黨間の態度を傳つて云ふ

兎角の噂ありし東洋拓殖會社法案は愈々衆議院に提出せられたるが該法案に對する各政派の向背如何といふに大同派は勿論政友會も黨議を以て贊成に決すべく進歩黨猶興會に至つては該會社の設立が果して韓國經濟上其の宜しきを得たるものなりや否や且つ斯る事業は法其の者よりも事業經營者の人物如何によりて始めて能く其の目的を成遂し得らるゝものなるを以て此の點に於て深慮を要するものありとて多少の異議者無きにあらざるが進歩黨にては近日常議員會を開き審議を遂げ其の方針を一定し之を代議士會議に附する筈にて目下の處は多分結局は贊成に傾くべき模樣なれば該法案は終に多數を以て衆議院を通過するに至るべしといふ

と、吾人も亦黨議員議員諸士が、我が帝國前途の膨脹の爲めに、はた積極主義の爲めに、此の際小異を捨てゝ大同を採り、折角の法案を、寧ろ滿場一致を以て可決せられんことを希ふものなり、と云爾。（烏山人）



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被上度候

一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類返速製作賞命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品類
金銀時計類同附屬品

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

豫約募集

矢津昌永・野口保興共著

地名索引 内外地誌

一名 内外地名辭典

◉(附錄)◉地名畫引索引◉地名アイウエオ索引◉外國地名人名取調書(文部省公布)◉

菊版脊皮上製 **全貳冊** 總紙數凡千九百頁 **定價金五圓五拾錢**

豫約全部金參圓五拾錢 外に東京市内四錢内地廿錢清韓臺灣五拾錢の郵送料を要す

申込期日 本年五月十日限り **出來期** 本年六月初より申込順に基き送本す

本書は二千頁に垂んたる大冊より成り内外の地誌と辭典とを兼備せるものなり故に之を通誦すれば趣味津々たる詳細嶄新の地理書たるべく之を檢索すれば無慮壹萬五千の地名を網羅せる内外地名大辭典たるべきなり其の一般讀書家に缺くべからざるは多言を要せず又文部省の公布せる地名人名の取調書には「成吉思汗」(Tchinghis Khan)「窩濶台」(Oghotai)「吐蕃」(Tibet)「白達」(Baghdad)「愛育黎拔力八達」(Ayur-bali-batra)等の讀方を多く示したるを以て漢文家にも亦缺くべからず今豫約方法に依り破格の廉價を以て高需に應ぜんとす好書家諸彥の此好期を逸せざらんことを切望す

詳細見本 調製中なるを以て申込に基き出來次第送附す

豫約申込所 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部**

(取次所) 全國各地著名書肆

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ホトトギス

四月號には左の二大附録を添附す

●創作家の態度　夏目漱石

右は八十頁の長論文

●春の潮（隣の嫁續篇）　伊藤左千夫

右は六十頁の長小説

四月一日發行の處四五日頃發賣すべし

ホトトギス

高等女學館幹事
西田敬止氏校閲
山方香峯氏著
（梶田半古氏意匠）

女子消息文格

最新刊 全一册

實價金七拾錢（郵稅金八錢）

女子の特性
女子の品格
女子の才藻
は其の容貌に於てよりも其消息文に於て窺はるゝ機會多し。

雅びたるは物々しく、言文一致は言文一致らしく、女子消息文はその要を得んこと難し。本書は雅なれども事に切に、簡なれども趣ふかし、その上消息認むる用意數十件をかき添へたれば文を學ぶものには此の上なき栞なるべし。

發兌元（東京日本橋通四丁目角 振替貯金口座一六一七）春陽堂



樂聲

北原白秋

序樂

ひと日、わが想の室の日もゆふべ、
光、もののね、色、にほひ——聲なき沈默
おもむろにとりあつめたる壁の内いと
徐に
薄暮のタンホイゼルの譜のしるし
ながめて人は夢のごとほのかにならぶ。
壁はみな鈍き惱ゆなりいてし
象の古ばみ圓らかに想鎖しぬれ、
その隅に瞳の色の窓ひとつ、玻璃の遠
見に
冷えはてしこの世のほかの夢の空
かはたれどきの薄明ほのかにうつる。

あはれ見よそのかみの苦惱むなしく、
壁はいたみ、圓柱熔けくづれて
壞えはてし熔岩に埋るるポンペイを、
わが幻を。
ひとびとはいましゆるかに絃の弓
はたもろもろの調樂の器をぞ執る。

暗みゆく室内よ、暗みゆきつつ
想の沈默重たげに音なく沈み、
そことなき月かげのほの淡くさし入る
なべに、
はじめまづヸオロンのひとすすりなき
鈍色長き衣みな瞳をつぶる。

燃えそむるヸエスヸアス、空のあなたに
色新しき紅の火ぞ噴きのぼる。
廢れたる夢の古墟さとあかる我室の内、
ひとときに渦卷きかへす序のしらべ
管絃樂部のうめきより夜には入りぬる。

黑船

黑煙ほのにひとすぢ。——
あはれ、日は血を吐く悶あかあかと
濁れつつ淀む惡の雲そのとどろきに
燃え狂ふ戀慕の樂の斷末魔。

遠眼に濁る蒼海の色こそあかれ、
黑潮の水脈のはたての水けぶり、
はたとどろ擊つ毒の砲彈、眞黑き喇叭
薄暮の朱のおびえの戰に
疲れくるめく衰ぞああ音を搾る。

黑煙またもふたすぢ。——
序のしらべ絕えつ續きつ、いつしかに
黑き惱の旋律ぞ渦卷き起る。
逃げ來るは密獵船の旗じるし、
痍き噎ぶ血と汚穢、たた憤怒
おしなべて黃ばみ騷立つ樂の色。
空には苦き嘲笑に雲かき亂れ、
重りゆく煩悶のあらびはやもまた
黑き恐怖のはたためき海より煙る。

黑煙三すぢ五すぢ。——
幻法のこれや苦しき脅迫

いと淫らかに蒸し挑む疾風のもとに、
現れて黑に歎く樂の船、
生あをじろき鰭の腹ただほのほのと、
暮れがての赤きくるしみ、うめきごゑ、
血の甲板のうへにまた爛れて叫ぶ
樂慾の破片の砲彈ぞ慄ける。
ああその空にはたためく黑き帆のかげ。

黑煙終に七すぢ。
吹きかはす黑き喇叭もたえだえに、
渦巻き猛る樂の極、蒼海けぶり、
惡の雲どどろどどろの亂聲に
急忙しくも呪はしき夜のたたずまひ。
濡れ熔ぶる水無月空の日の名殘
はた攪き濁し、暗憺と、あはれ黑船、
眞黑なる管絃樂の帆の響
死と悔恨の闇擾し壞れくづるる。

月の出

ほのかにほのかに音色ぞ揺る。
かすかにひそかににほひぞ鳴る。
しみらに列立つわかき白楊、
その葉のくらみにこころ顫ふ。

ほのかにほのかに吐息ぞ揺る。
かすかにひそかに雫ぞ鳴る。
あふげばほのめく夢の白楊、
愁の水の面を櫂は顫ふ。

吐息のをののき、君が眼ざし
やはらに縺れてたゆたふとき、
光のひとすぢ、顫ふ白楊──
文月の香爐に濡れてけぶる。

さてしもゆるけくにほふ夢路、

したたりしたたる櫂の雫
薄らに沁みゆく月のてしほ、
ほのかにわれらが小舟ぞゆく。

ほのめく接吻、からむ頸
いづれか歓喜の吐息ならぬ。
夢見てよりそふわれら、白楊、
水上透かしてこころ顫ふ。

といき

大空に落日ただよひ、
旅しつつ燃えゆく黄雲。
そのしたの伽藍の甍
半黄になかばほのかに、
薄闇に蠟の火にほひ、
圓柱またく暮れたる。
ほのめくは鳩の白羽か、
鋪石の闇にはひとり
盲の子ひたと膝つけ、
ほのかにも尺八吹ける、
あはれその追分のふし。

雪の印象

太田正雄

雪降る。醫院遊歩場に憂愁の長椅、
はた悩む生の青芽の蕭げる牧歌の中に、
黒き翼、慌急しげにつと來り、鳥は眺む。
河沿に乗合馬車の瘠の市をふためき行くを。

雪降る。静に病室の扃きしめく。
少き日の想像の素肌、大理石血潮迸る。
轟かに湯の滾る息、あはれあれ哥囉保兒
謨は

眩き恐怖の壁ゆ霧の市の笛のあなたへ。
雪降る。やがて黒上衣の醫員は二人、
獸々と青き悔恨の棺衣の擔架のあとに。
また遠く鳥の叫、耳内の丘の古刹
薄暮の早鐘ららと、ららとあな――され
ど暮れゆく。

雪降る。あはれわが庭もつひに暮れゆく。
蕭かに瓦斯の燈は病室の玻璃に咽べど、
燃衝と癌の族は物かげに挽歌うたふ。
るあれわが薄暮の市よ午後六時、雪なほ
息まず。

死の華

秋庭俊彦

苦惱

あはれ見よ、黒染む旗の
かげ垂れぬ、ものうき異童。
毒の息、疫のによび、
それもはた絶えし空には
日のひかり傷き血ながれ、
くわとばかり悲痛は眩む。

づきづきと腦にそひびけ、
腐れたる暗きおもひに。
そこと𛁈う鐵を裂く
絶え間なき火の槌の音、
くるほしき車輪の齒がみ、
もののこゑ、――はた腐れつつ。

ああかくて黃に焦がれたる
わが心息ぐるしくも
まどろめば、この時たたと
汗あゆる爛壞の底を

破靴に踏みこそすがへ。
蒸しよどむ溺死のわめき。

日はいとど悪血のにじみ。
膿湧かむ、水のおもては
宴執の饐えし臭みに。
あはれ見よ、黒染む旗は
重く垂れなほもうごかず、
鬱として悩みをまとふ。

黒曜の森

たそがれぬ、灯ともりぬ、静かなる風の
おとなひ、
樹の花も水枝さす色もわかたず、
ただ甘き穢糞潤る黒曜の森かげ。
ほの紅き憂愁の調べはやみぬ。
髪垂れてうつらに歌ふ節としもなく

ああそのかみの戀語、館のまぼろし、
秘のおもひの蕭やぎに涙ながれぬ。

にほひ泌む靜寂のふかみに
ペリアスの悲みをきく。
凋落のいやはての接吻に
メリサンダ、はた斯くや弾きかなげきし。
黒曜の森かげいま夜のおもひてに入る。

たづたづし、夢の足音、
さはさのふふたりなりしを
けふひとり。あな熟え落つる
木の實の香にも胸ふさぐ。
樹立の奥に常燈の咽びはあれど
なぐさめもなき暗き祈禱よ。
黒曜の森かげ、あなあはれ

はや濕める微風にかよふためいき……。

君

君ありき、華やげるどよみのなかに。
君ありき、凱旋のたかぶりをもて。
うち若きわが夜のおもひあたたかし、
さあれまた、ねたみの曲は騒がしく心みだしぬ。

舞臺ににほふ灯のひかり、
媚のまばゆさ。

君ありき、いま死色のくらがりに。
君ありき、かなしみに白衣ふるふ。
おごそかに冥府の氣寒くみなぎりぬ。
ああ樂音のむせび泣き仄かに青む。

舞臺は消えぬ、光線の
あやかしきたる斷末魔。

一瞥す、あなあはれ
君あらず、君あらず、
白骨のみぞつめたくも闇に光りぬ。



○　　佐野翠坡

春のよひ君さりなげく詐りをまじへてものをのたもふよし

七ツ帆やみなみに消ゆるあかつきの雲ほしげにも海わたりゆく

月光は君がみ魂をかへらすと如くに白う墓にて

るかな
六瓣の花ちる中に笙とれる神あり吹きぬ雪の日の風
かなしみの面をかざる笑みの如消えがての灯は燃えてけるかな
朝の雪あかきしづくすたわ／＼に林檎みのれる北國の家
燒跡や柳四五本月光の靑きにならび雪白う來ぬ
時鳥百合の香まじる谷あひのさ霧にうかぶ有明の月
わが心君にしらるゝよろこびの日の如あさのくだかけはなく

○　眞々田薫

たそがれぬ西方に見る雨の日の七つの丘は蕭條として
櫻ちるものとしもなき寂しみの身に泌みて來ぬ春の日なれど
如月や雪消の水の紫に白き月さし夕べとなりぬ
雪來る濁れる空を北方の巨人かも行く白馬に御して
春の日や霞流るゝ國原の[illegible]に匂[illegible]花

ふたもとの沙羅樹しげれる夜の空に白き煙りす御ほとけの國

○　小川眞清

あゝ日ごと心の琴をかきならし冷めたき歌を泣きつゝぞ彈く
椎の實の廂たゝくを母とゐてわびしうきゝし山家こひしき
春姫が野に忘れたる小さなる魂かとおもひつみてける花
あたゝかう雪消の水に日はさしぬ蕗の臺つむ春の畔みち
たへがたし君にわかれて寂寥のわが世のみちをひとりたどるに
あゝ心森のおち葉の下にゐてとはに日を見ぬ石と悲しき
春の雨梅さく庭にうちぬれてみな蒼みたりさまざまの石

○　梅田酉水

春の來て花苑の花のことごとく咲くとし覺ゆわれ戀を得し
人の世の流の大河むしろ帆に細き棹して吾れさ

かのぼる

山は云ふ風雨の前に幾千年吾れかくたつと偉なるかな

胸の木の果實ことごと笑みわれぬ君てふ鳥よ來てはついばめ

○　庄崎溪石

南へ流るゝ雲をほの白う月は照らせり星ひとつ率て

空翔ける時の威もなくうちよりて波打際に餌をあさる鳥

○　佐藤琢琅

春の日はほのあたゝかに雪解しぬ富士の裾原草若芽して

春の夜や淀よりくだる河舟のおぼろにかすむ灯をかぞへ待つ

○　村田愛美

山の火は風に捲かれて宵闇と燃えぬ眞紅の帷ひくごと

すみれ野や胡蝶の群はわれ中に輪してまふなりたのしき日かな

○　加藤忠治

草場の夜篝火焚きつゝはらからとふたりみ空の星仰ぐかな

ひとつ星われを照しぬ夕ぐれの丘に添ひつゝ牛おひゆけば

○　玉野清一

喜びとうれひのわだちれきろくと胸の街行く晝夜すがらに

○　小林小朴

何を見るつら／＼椿緻蔭のつら／＼椿今日も日を見ず

○　橋田濤聲

このおもひ君をめぐりて明けぬ夜は瀧こそ[illegible]け凶潮の音に

冬の日は鎮守の森の杉の根に野火を興ずる子おもふかな

山かげや固き石きる鑿の音に太古の森の靜けさを聞く

はなちかふ駒のいくつは耳欹てぬ凶煙けふる大阿蘇の裾

○　井出入井

山にくれば葉と葉とすれてなる小笛われをめぐ

りて喜ひを吹く

○　村上秀一

天つ女がぬぎすてたまふ冬衣の袂よりちる春の雪かな

○　佐々木牧童

うすき日の空風わたるかゝる日はわれぞゆらるゝ裸木のごと

○　梶原白花

日はうらゝ野馬の遊べる古牧の麓よりさく山ざくら花

天地はくろ髪匂ふやさ少女夢みるまみにわれうつゝなし

○　大津照水

初雪と共にふり來て人の世の冬を野にすむ小兎のとも

月照れり針かの如く尖りたる冬枯山の木立の上にうれしといひかなしといへばたちまちに涙ながるゝせんなき眼がな

○　樋渡花明

六瓣の花ちらしつゝ天地を狂ひまふなり風の童

壁あかう日に向ひ立つ君か家の上にましろき雲かゞ日よ

きさらぎや野焼のあとの黒みたる土に芽をふくもろ／＼の草

ふるひたる響き音に出づては胸にかなしき色の花さかむ日か

やはらかう芽をふく草に春の日はみどりながれぬ世の若さかな

老ゆる日も知らで追ひゆく明日といふかげにひそまむ愁ひを思へ



接木

老ぬれば木を接ぐだにや目の疲れ　へき生

接ぎてなほ日淺き梨や忘れ霜　同

穂をくれし人の見に來る接木かな　同

眼の老や接木にかすむ古　同

暖かな日に尻向けて接木かな　同
百本の桃接ぐ牛の主じかな　同
村居してあるは接木や詩のいとま　同
呼び接ぎの鉢くゝりたる椿かな　同
梅接ぎて日永し菊の根も分くる　同
如何にしてみんな枯れたる接木哉　同
筆硯の閑挿柳接穗かな　同
接ぎやうも教へてよき穗呉れにけり　同
東山の麓に住みて接木かな　同
垣越しに淵明のぞく接木かな　同
柿接木下手してみんな枯らしけり　同
宵々のぬくき雨降る接木かな　同
叔父の來てついてくれたる林檎哉　同
穗を乞へば臺もくれけり老和尚　同
柿ばかり百本あまり接ぎにけり　同
垣越しに覗いて見合ふ接木かな　同
人來れば必ず見する接木かな　同
梅接いて隣の挿木覗きけり　同
あるは日に三度見に行く接木かな　同
女房の煙草もて來る接木かな　同
田園に老ひて親しむ接木かな　同

石上の忘れ鋏や接木畑　同
接ぎ殘る穗や乞ひければ呉れにけり　同
恙無き接穗うれしや忘れ霜　同
江南の臺江北の穗を得たり　同
山中の閑日月や接木もす　同
挿柳梅の接木は枯れにけり　同
澁柿の甘くなれとて接木かな　波境
開墾や接木の桑の五反畑　僊舟
客待たせ置いて殘りの接木かな　海の人
茄子蒔ひて接木する畑ならしけり　方湖
椽先と庭と語らふ接木かな　秋水
呼接の楓の枝や塀の上　ボク生
かざらふや接木の影と人の影　佐々月
比丘尼より比丘の劣りし接木かな　蝶骨子
二坪の庭に親子の接木かな　露生
椽日南接木の道具ならべけり　竹枝
口笛に目白呼びつゝ接木かな　天唖樓
事なき日郡守は庭の接木かな　螢雪
接木してよき花咲かせ參らせん　冬畝
植ゑかへて呼接するや枝と枝　綠洋
その朝接木の屑を焚きにけり　瓢骨

接木師や接穗を口に二三本　傳馬
先生の講釋うまき接木かな　孤巖
蘆苞に高き接木を圍ひけり　殘雨
門前の小僧習はぬ接木かな　柴茶
接木師は話上手の爺かな　青眉
梅に桃今年柿接ぐ五畝の畑　梛村
小雨して接木の枝の雫かな　吼天
接木して三年の桃咲きにけり　鮪舟
鍬鍛治の古き住居や柿接木　稻村生
學校の植物園の接木かな　雀聲
花守の接木話しや花日和　梨花生
隣人と話しがてらの接木かな　五月坊
爐塞いではや接木する和尚かな　一冬
卓上の盆梅伐って接木かな　泡石
鳥の聲接木なさんと思ひけり　眞佐夫
接木畑地虫蠢めく朝日かな　白藤
村夫子閑居の庭に接木かな　登無
鷄一羽木を接ぎ居れば追はれ來る　レン雀
接木する庭に米搗く響かな　是空
山畑や三月寒き接木の芽　鹿の子
木句知らぬ無爲の日永を接木かな　孝

果樹ならぬ木を接ぐ僧や寺の門　梅魂
またぎゝの覺束なくも接木かな　三好
棒立ちの畑木切つて接木かな　星象
いつ接ぎし桃源平に花咲きぬ　京杜
梯子して柿の老木に接穗かな　刀川
柿の木に接木見て居る鳥かな　桃村居
かの丘に子は雲雀とる接木哉　草童
柿を接ぐ日や梨の穗の芽を吹きし　華星
皆接ぎし緋桃白梅嬉しけれ　渭南
一刀のあや　り枯れし接穗かな　菊舟
さし木ついて接木はつかずしまひけり　朱郎
奇木得て接木呉れたる隣かな　綠水
田の暇に桑接いで居る男かな　木瓜
花咲かぬひよろ高梨に接木かな　尺水
千駄木に閑居久しき接木かな　連雀
一百の鉢並べたる接木かな　梛南
鷄なくや後園の梅接ぎ居れば　四綠
己が下手合點して接ぐ櫻かな　夜光
垣隣り呼び接ぐ梅の古木かな　稚草
嘘つきの婿が接ぎたる接木哉　骨董
木祭りに赤紙貼りし接穗かな　伍平

等閑にせしが芽ぐみし接木かな　鳴子
門番は植木屋にして接木哉　如淵
市に賣る繩なひあげて接木哉　秋葉
接木して日暮るゝまでや草をつむ　むせい
接ぐ果樹に覆や葉蘭を切りつくす　同
戯れの逆さ接穗の芽立ちけり　六絲
そのうちに接木上手や寺男　同
石上の接穗斜や鵲の糞　賓水
藁屑の雑然として接木かな　同
すだれ梅高き古木に接ぎにけり　曉嵐
接木せし臺の芽をつむ寢起かな　同
木の股へ半纏かけて接木かな　癡足
板塀を拔く三尺の接木かな　同
梯子して切り取る梨の接穗かな　壽雄
庭の柿甘さに甘き接ぎにけり　同
ホツ句柿詩の梅二本接ぎにけり　三錢子
落柿舍の主を訪へば接木かな　同
八せんの雨に芽をふく接木かな　一衣
皆つかぬ下手な接木も彌生盡　同
接屑の穗を小日陰にさし木哉　魯斧
遲き日も暮れけり接木終りけり　同

三寸の低きに伐りて接木かな　黄葉村
鉢の木にとり木にしても接ぎにけり　同
門前の柿うち切りて接木かな　不言
庵僧を賴みて柿を接がせけり　同
ころり寢て犬が見てゐる接木かな　奎村
豆柿を妻が好みて接ぎにけり　同
枝癖を抗に矯めたる接木かな　沐雨
接ぎ終へて且つ眺めやる接木かな　同
竹に木を接いで恥ある連歌かな(自嘲)　白蓮
山の手に住んで接木の渡世かな　同
接木しの居れば繪草紙賣りの來る　同
我庭の挿木となりの接木かな　花月
接木する僧の法然あたま哉　同
接木はてて雨よぶ鳩に暮れにけり　同
な折りそと貰ひし梅の接穗かな　三命
片枝に花咲く桃の臺木かな　同
雀囀く雨の臺木の下枝かな　同
接木畑萓畑もある山の家　木蓮
木を接いて百合の芽鉢に移しけり　同
百花園接穗を買ふて戻りけり　同
二叉の接木芽をふく遲速かな　小蔭

梅はついて蜜柑はつかぬ接木かな　小蔭
接木して饅頭笠を被ひかな　同
接木する老の眼鏡の大きさよ　鴎鳥郎
ならぬ梅伐つて臺木や杏接ぐ　同
接木師の眉かすめとぶ小蝶かな　同
梅を接ぎ櫻を接ぎて椿かな　桃紅
接木して隣の鷄を惡みけり　同
柿接ぐは太郎冠者にて候　同
雀子の糞して立ちし接木かな　南若
幾度の下手の接穗を枯らしけり　同
臺木一つ接穗やあまた選り迷ふ　同
寄せ接ぎの枝垂櫻をつくりけり　百句拙
接木など春暮近くなりにけり　同
將棊好きの接木自慢の男かな　同
接ぎ古りし宮の一樹や石寒し　夜色
接木畑二日の月の上りけり　同
接ぎ終へて鉢木に遠く立ちにけり　同
暮鴉啼いて餘りし一木接ぎ急ぐ　李王
背戸の柿籬の桃も接ぎにけり　同
陽炎庭に跣足の接木かな　同
接木して即時の賦ある庵主かな　小魚

湯殿から昨の接木をのぞきけり　同
弟の何木つぐやら黄昏るゝ　同
本の通り繪の通りする接木かな　悠多樓
接木すや小鳥來て鳴隣の木　同
あご鬚を風に吹かせて接木かな　同
隣から講釋聞いて接木かな　同
犬埋めししるしの桃に接木かな　木犀
見て居れば譯なく接ぎぬ脊戸の柿　同
蓆敷いて晝過ぎ親爺の接木かな　同
接木して薄色交る緋桃かな　同
餘り穗を餘り臺木に接ぎ捨てぬ　柳子
穗をもろて鋸借りて接木かな　同
尿する犬を叱して接木かな　同
接木するそこらの隅や鷄せゝる　同
三穗ついて一穗賴みや大柑子　琴星
燒跡の枯れなん柿に接木かな　同
桶の水淺きに接穗ひたしけり　同
邪魔になる鉢片よせて接木かな　同
接木する畑や野風呂の煙が來る　總子
芳草の青さに坐して接木かな　同
接木していさゝか小袴汚しけり　同
覺束な／＼の接穗つきにけり　同

筆株の接穗貫ひに長命寺　董哉
蝶見る日梅の接木をしたりけり　同
蜂屋僵く畑の隅や桃をつぐ　同
人心見樣見眞似を接木かな　同
今や接ぐ接穗や更に選びけり　濛雨
桃の瘤引き皺みたる台木かな　同
散心の心を凝めて接木かな　同
ずね牛を賣りて安堵の桃接ぎぬ　同
畑を打ち木を接ぎて詩に遠ざかる　鬼洗
日がな籠の鳥啼く脊戶に接木哉　同
接木してそゞろ詩思ふ夜の雨　同
鶯の宿の主人が接木かな　同
閑中の忙句を選み果樹を接ぐ　同
雨一過接木の若芽蘇る　桂村
欄に倚れば宿の亭主の接木かな　同
接木して殘る一木や燭を呼ぶ　同
接木すや妹がお花の鋏借る　同
つれ〴〵なるまゝに日暮し接木哉　同
接木枯れて切りし臺木を惜みけり　同
藁とりて見れば臺木の若芽かな　同
接木して五十に一の望かな（應募）　同

木を挿すに雨降り足らず接木哉　靜帆
柿接いで桃接いで我貧に處す　同
鉢の木を庭に下ろして接木かな　同
接木して鷄に垣結ふ小庭かな　同
蚕飼まだ暇ある身の接木かな　同
接木すや日向に移す小鳥籠　同
とかくして一ト日暮れ行く接木哉　同
垣間見る人我れ知らず接木哉　同

本號の應募者は百十七名にして句數は總て二千二百九十一句。投吟の最も多数なりしはへき生、小魚、百句拙、總子、連雀五氏の五十句づゝ、靜帆、濛雨二氏の四十九句づゝ、黃葉村氏の四十八句、木瓜氏の四十七句、夜光氏の四十六句、桃紅氏の四十三句、桂村、雛草二氏の四十句づゝ、李王氏の三十九句、木蓮、南若二氏の三十七句づゝ、癡足、白蓮、吼天、星象、京杜骨童六氏の三十五句づゝ等なりき。

募集課題

百日紅　四月十五日締切
雷　五月十五日締切

應募俳句は東京市本鄉區駒込曙町大谷正信宛の事。秋田湯澤町なる瓢骨君に答ふ。句數は五十を限りとして隨意なり。京橋星象君と麴町夜光君とに白す。御返事は繁忙の爲め少しく延引すべし。



新興の文學は宗教の牙營に切り込めり

戸川秋骨

宗教を分折すれば三個の要素より成る。第一は德操なり、第二は高潔なる情操なり、第三は愛憐の念なり、第一は宗教の戒律となり第二は淨念となり第三は社會的事業として發顯す、宗教は實に此の三要素の化合物なり、此の三要素化合して玆に宗教的情操なるもの起り人生に何等かの意義を與へ、さらに進んで神なる理想的存在物を創造し、隨つて人生はかくあるべく、またかくあらざるべからずと宣傳す。吾人は世の進むに從がひて宗教のその勢力範圍のやうやく狹少となるを見る。古昔にありては宗教は萬事にして學問も教育も政治も凡てその內に含まれたりしと雖も、今やその天地は著しく狹まれり。第一の德操は教育にその大部を委托せり、第二の情操は文藝にその本陣を奪はれんとせり、第三は全く世間的の事業となれり。かの救世軍の如きは名を宗教に存してその實全然社會的事業に專心せるものと見るも大過なしとす、余は宗教の事に關して殆んど門外漢たり、從つてその盛衰若くはその本質の如何を論せんと欲するものにあらず。只第二の高潔なる情操を與ふべき宗教の世界がやうやく文藝の浸入を受けつゝあるのみならず、此一角よりして今日の文藝が世の要求に應じ、人生をしてかくあるべしまたかくあらしめざる可からずと主張する宗教の本陣にまで切り込めるの事實を語らんと欲するなり。

余はかくの如き事實を考ふる毎に今日の宗教の何故にしかく薄弱にしてまた何故に世の要求を滿す能はざ

るかを怪しみ、往々パンを求むるものに石を授くるが如き態度のあるを見て、最早所謂宗教の消滅せんとする時機の到來せるにあらざるかを思はざるを得ず。少くとも宗教の一轉機に際せるを感ぜざるを得ず、余は佛國革命時代の無宗教的思想を以てしかく言ふにあらず、むしろ宗教的思想の偉大なるべきを思ひて此言をなすのみ。



吾人は嘗て美的生活論の文壇に喧傳せられしを知れり。此れ實に現代が何者をか渇望するの聲なりき。さらに過去兩三年の間に於て青年の煩悶なるものを聞けり此れまた人生に何等かの意義を加へんと欲するの聲なりき。余は美的生活を稱導したる結果甚だ不祥の事實の

世に殘りたるべきを想像す。煩悶の事實に至りては現代青年の一部の薄弱なる意志を遺憾なく發露したるものとして、むしろその苦悶者の或るものに對しては面に唾せんと欲するほどの感なきあらざりき。而れどもその末流の如何に不祥にしてまた如何に輕薄なりしとするも、その現代の要求にして人生に意義を求めたるの事實に至りては決して否定すべきものにあらず。而して此の如きは凡て何處より來りしか余は聲を大にして言はんと欲す、これ實に文藝の皷吹したるものなりと。余は敢て斯くの如き要求が文藝より出でたりとの證左を擧げじ何んとなればそはあまりに明白なる事實なればなり。而してかくの如き思想とこれに應ずる救濟の道とが宗教に出でずして却つて文藝其者に出でたるはやゝ怪むべきならずや。而かも美的生活の唱導せられ煩悶の流行するや、教育家と稱するものは殆んどその何事なるかをさへ知らずして、叨りに文藝の社會を荼毒するものたるを言ふに過ぎず、宗教家またしたり顏に自から高ふしてその救の道を己に求むべきを說けるに過ぎざりき何れもその本據を離れたるたるを知らずして恬然として他を難ず、むしろ笑ふにたえざり。

余はこゝに文藝の趣味に就て一言せんと欲す余は文藝の極致を以て恍惚自我を忘る處にありとなす。所謂理智も入るべからざる、善惡を超脫したる處にありと信ず、若し文藝の作物に於て、その本質に對し論議の容るべきものあり、道義の如何を評隲し得べきものあらんか、そは未だ以て上乘の価なきものなりとす。ホーマーの詩かくの如く、ミルトンの失樂園かくの如し、ゲーテのファウストまた然り。吾人は西遊記を喜ぶ、アラビアン、ナイトの如きに至りては全く吾人が理性と德操との外に超脫して、天地別に人間にあらざるの趣あり。余はかくの如き作物を以て絕好の藝術品となす。

然るに時勢は推移せり、一轉せり。吾人の要求も實際の作物も、人生に意義を求むる一點に集中せり。此れすでに宗教の世界に入らんとするものなるに、たゞ

に人生に意義を求めんとするのみならず、進んでは人生を以てかくあるべし、かくあらざるべからずとの主義主張如何を以て作物に對せんと欲するに至れり。此れ明かに宗教の天地なり文藝が宗教の牙營を奪はんとせりといふは即ち此の事なり。見よ現代の人が文藝上の作物に對するや、先づその人生に對して敎ふる所如何を問ふ。たとへばツルゲニエフの人生を見る所と、ダヌンチオの見る處とその異る處如何、イブセンが社會に對する考慮如何、マーテルリンクの神秘思想は如何と、これ等は則ち文藝を評價するの標準となり、決してイブセンの技巧を說かず、ツルゲニエフの書の與ふる快不快を問はず、全然人生問題その人生に對する着眼點の如何を以て第一要義となすに至れり。此れ豈に文藝の宗教的性質を帶び來りたる所以にあらずや、現在吾が青年は宗教にその要求を語りて得る處なく。去つて文藝にこれを求めつゝあるなり。余はかくの如き傾向が果して文藝の本旨なるか否かやに疑ひなき能はず。然れども社會に於ける一事實としてこれを見ればむしろ慶すべく嘉すべき顯象たらずばあらず。これ則ち醉生夢死を欲せずして人生に何等かの意義を與へんと欲する努力なればなり煩悶なればなり。

ニーチエ一派の本能主義と云ひ、現代歐州に行るゝ近代新興の文學的思想と云ひ、皆その說く處主張する處を以て實際に體現せんと欲せり。即ち新興の文學は曾に世相を見るを以て滿足せず、己の思考するが如く世を改造せんと力むるものなり。即ちその文藝上の主義は直に宗敎たるなり、新興の文學は實にその主張者の宗敎たるなり。かくの如き歐州文藝の傾向はまた吾れに侵入せり、今日所謂自然主義と稱する名の下に漠然と唱導せらるゝ處のものは即ち歐州新輸入の文學たると共にまた宗敎なり。故にその主張者は本能主義の場合と等しくその漠然直覺する處を以て作物を評價するのみならず、個人の行動をも律せんとするなり。此れ明かに宗教の範圍に入りたるものといふべし。只それその論議のあまりに多く主張のあまりに甚しきや、その文藝上の作品としての價値に至りてはやゝ懸念なき能はず。何となれば曩きに說けるが如く眞正の文藝的

價値は凡ての論議と凡ての主義とを脱却したる處に於てあるものなりと余は信ずるものなればなり。されば現代思想の一顯象として見ればかくの如き傾向はむしろ敬重し且つ奬勵すべきものにあらざるか。

然るを何者の迂儒か、その實際に顯はるゝ處往々曩日の本能主義若くは煩悶者流に等しき不祥の事あるに驚きて、これを嫌惡し極力此を防遏せんと欲する。吾人は何事にも率先してその迂を發表するに躊躇せざる教育家が未だ明白なる意見を發表せざるを怪む。然れどもその學究的俗論はすでに多少の響を爲せり。宗教家に至りてもまた一定の見識なきか、吾人は基督の自然主義など云ふ怪しき藪から捧の論議を見たる外未だ何等具體的の意見を聞かず。余を以て見れば新興文學のかくの如き態度は教育家若くは宗教家のその本陣に切り込まれたるものとしてその耻辱を明白にしたるものりたと信ず。余は本能主義煩悶及び現在の所謂新文學がみな一貫したる現代青年の努力煩悶なるを思ひ教育家宗教家の切實に此問題を考察せん事を願ふ。同時に文藝としてはその宗教の本陣に切り込める丈けそれ丈け未だ醇平たるものにあらずしてなほ變轉すべき必要あるものにあらざるかを疑ふ。



我輩も猫である　（十三）

白也

「私の取つた手段と云つて、別段奇拔なものではありません、つまり女の知人に紹介して貰つたゞけです」

「それは不都合でしたな」

とだしぬかれた口惜しまぎれに、故意と平氣の態度を取る。案山子君はにやりと笑つて。

「奈何です」

と消息子を入れる、膿も血も出ないて、

「それで奈何發展しました」

と云ひながら、主人は鼻の脂肪を指て拭き取つて、火鉢のふちへなすり着ける、黒柿のふちは脂肪の着い

た處だけ、艶々しく光る、
「それでどすな、愈々百合子さんと親しく物語る事が出來ると思つて、大に樂しんで居ました處、意の如くならざるもの、豈獨り山法師のみならんやてす」
と言葉を切つて、鳥渡主人を見る、主人は一心に火鉢のふちをこすりながら
「不思議だ、奈何も不思議だ」
と變な所で大きな聲を出す
「何が不思議です。意の如くならんからてすか。」と案山子君は反つて不思議さうな顔をして居る。
「これを見給へ、鼻の脂肪と云ふものは、餘程佳い艶



を出すものだ」
と又新らしく拭い取つて、別の所にこすりつけて見せる、
「奈何だ君、こんな寐ぼけた色の黒柿が、斯う光つて來る。ね不思議だらう、君も行つて見給へ。この通りだ」
と矢鱈無性にこすりつける、火鉢のふちの垢は皆指の先きへつく、その指で鼻の所をこする、主人の鼻は變に澁色になつた、
「老ひたかと思ふと雅氣があるね」
と案山子君は呆然として、主人の顔を見て居たが、急に破裂するやうに笑ひ出して、
「火鉢のふちのねぼけ色は、皆君の鼻の所へ轉居して

了つたよ、妻君に見られん内に早く洗つて來給へ」

「妻に見られると奈何かなりますかね」

と泰然自若として掌て撫つた、

「落ちたらう」

「落ちるものか」

「今度は奈何だ」

と唾をつけて撫つて見る、餘り撫つたので少々赤くなつた、

「天狗の鼻は古より赫奕として赤てある……か」案山子君は膝頭を抱いて貧乏ゆすりをしながら、ほくそ笑みをして。天狗の鼻は……と、くり返して居る、

「そよと吹く風の戀や、涙の戀や、嘆息の戀、猫の戀や狸の戀、暴風雨の戀、暦にもない戀と來るだらう、九寸五分の戀が紫て、紫の戀が江戸前の戀、赤は鴨川の戀、黃いのが蝴蝶の戀、戀は色別けになつて、色わけの出來ぬ戀が色盲てある」

「文明の民は色の世界に集るかね」

と主人も出まかせの合槌ちをうつ、

「九寸五分が紫に閃ると怒りの戀だと、小野さんが云ひました」

「嫉妬を味噌漬にして、紫の茄子が濃くなるとか何とか云ふ藤尾さんの說もあります」

「クレオパトラの戀は斯くして紫に終るでしよう」

「君の戀は奈何なり行きました」

と主人が自分でもつれさした言葉の綾を、自分てほごさねばならぬ位置に立つた

「僕の戀は赤です、赤は焰です」

ともつれた言葉の綾は、容易くとけた、

「先づ百合子さんの知人に照介を賴んだてすな、すると實は、その先生も百合子さんに御思召があつて、僕と交通するのを非常に不快に思つて居つた矢先きなのて、勿論僕だつて。それを知つて居れば照介など賴みはしなかつたのでしたけれど。そんな不言戀、忍ぶ戀心に思ふ戀があらうと思はなかつたものて、したから、何の氣もなく賴んだのです、處が先生、非常に憤る戀、嫉む戀、果ては眞黑焦げの戀になつて、僕は非常な目に逢つたてす」

「居守の黑燒は和合の奇樂だそうだが、戀の黑燒は中毒すると醫書にもあるさ」

と主人も面白半分て勝手を云ふ。

「そうでしよう、あの位中毒するものは少いでしようよ、」

「大分當てられたと見えますね」

「いやはやまるでお話にならんです、聞き給へ斯うです、

照介狀を吳れないかと賴んだですな、するど先生、お易い御用だと云ふので直ぐ樣一封認めて吳れた、有難い！と押頂いて、善は急げて即刻百合子さんを訪問して、其添書を渡したのです、處が驚いた、その添書には、この狀持參の者は兼々貴孃と御交通して居るのだが、恐る可き野心を懷いて、奈何でも照介して吳れと迫る、斯る信用の出來ぬ男を照介するのは、甚だ良心に責められる次第だが、殆んど每日のやうに、時には强迫的に照介を迫るので、若し斷然拒絕すれば、こんな無謀な男は如何なる復讐を敢てするかも解らぬに依つて、兎も角も添書は書いたやうなもの丶、貴孃に於ても十分注意して、萬一御面會になるとしても、言を左右に托して、坐敷へ通さぬ方が可い、と斯う云ふ意味の添書てす、尤もこれは後で知れたのでしたが、奈何です君その添書を有難いと押頂いて、雀躍してかつぎ込んだのですな、僕がさ、

誰だつて驚きます、僕だつてそんな添書を持つて來る人物があれば、驚いて警戒します、況んや百合子さんは女です

眼も當てられない冷遇をされて了つたですな、すご〳〵歸る道すがら……と云ふと勘平の臺詞めくが、あれ程にお互に氣をゆるした交通をして居たのに、奈何して斯う冷遇されたのであらうかと、色々に考へて見たが、奈何しても其理由が解らんです、腹も立つが情けなくもなる、何んだかつまゝれたやうな氣もしたですな、歸つてからも二三日はぼんやりして了ひました、

尤も女と云ふやつは、男を飜弄して喜ぶもので、一樣には云はれませんが、隨分思ひ切つた態度をしかけて置いて、土俵ぎわでうつちやりを喰はして。手を拍つて嬉しがるのも稀れではない、ことによると僕もその手を喰つたのかも知れんと、色々な邪推もしたです、例令奈何であらうとも、殘酷な冷遇を被つた事は事實なのだから、この事實に對しても、怒つて見なければ男の意地が立ちません、寸法通り大に怒つ、やりました、恨み文てすな非常な恨み文をやつて、交を申込んて了つた、尤も僕が絕交を申込まんで！、あの添書を信じた以上は、向ふて絕交てしよう、

處がそれから三月ばかり後てす、この話を聞いた例

の先生、僕がまんまと計略に陷つたので、内心大に喜んで、我事成れりかなんかで、早速百合子さんを挑んだものと見えます、女の方では唯知人と云ふだけで、毛頭さう云ふ方面は、夢想だにして居なかつたので、且つ男の行き方が餘程短兵急に接する態度で猛烈にやいのを極めたものと見えて、青くなつて父親に打明けて了つたのですな、すると其父親と云ふのが一酷もので、直ぐに男の處へ怒鳴り込んで、又とそんな穢らはしい事を娘に云ふ樣な事があれば、その分には置かんからと、頭からきめ込まれのですな、女の青くなつたよりも數層倍青くなつて、土蜘蛛のやうになつて、平あやまりで一と先づ濟んだが、お陰さまで先生の戀は鮑の戀で終つて了つた、

この話は一年ばかりしてから、本人から直接に聞いたので、其時例の添書一件も殘らず白狀した、然し其時には既に第二の候補者が出來て、僕は艶殺されかゝつて居た時でしたから、ハヽヽで濟んで了つて、別に腹も立てなかつたです」

「少々龍頭蛇尾ですな」

「蛇尾でも何んでも事實だから仕方がありません。それから第二候補者の物語に歸ります」と云つてお茶を飮んで咽喉を濕した、演說でもする樣な態度で胸を張つて、エヘンと一とつ喉頭の掃除をする、主人は默つて二本指で鼻毛を拔いて居る、

「君に惚れて居る女があるが貰う氣はないか……」

「僕にか？、惚れられても、そんなに幾人も女房はいらない」

「君にではない、僕にです」

「でも今然う云つたぢやないか」

「さうぢやありません、も少し先きを聞けば解ります、君に惚れて居る女があるが、貰う氣はないかと、或日或人が僕にさう云つて來たのです」

「無趣味な事を云つて來る閑人があるな」

「その男は役場の書記です」

「役場の書記にしても閑人ぢやないか」

「中々忙しいのですが、心切に忙しいのを繰り合せて來て吳れたのです」

「それでは物好きな人があるなと斧正しやう」

「君には物好きと見へるだらうが僕に取つては實に月下氷人です」

「君も隨分食を撰ばん男だね」

と主人は遠慮なく突込んだ事を云ふ、

「自然流てす」
と案山子君は一寸笑つだか、
「その女が即ち第二候補者てす」……

新刊批評

▲歐米紀遊二万三千哩　戸川秋骨著　服部書店發行

戸川秋骨氏の文名未だ大いに顯はれずと雖も、其一種新奇なる觀察をユーモラスなる筆致を以て描寫し、燥らず、駄洒落れずして而かも人をして破顏微笑せしむる所、宛然として英國ユーモリストの面影を見る。本書は氏が昨秋より今春に亘る五箇月間歐米を漫遊したる時の見聞を日記體に寄せるものにして、書中毫もセコンド、ハンドのことなく、卷を開けば讀み終るまで手を離す能はざる程面白し。甲書乙卷より抜き來て綴ぢ合せたる紀行書などとは殆んど同日に語るべからず。太平洋と太西洋と、北米大陸とを通過すること二回、英、佛、獨の名所を一見して行程二万三千哩、其間の出來事、總て收めて本書にあり。挿畫は和田英作、中村不折、岡田三郎助、長原止水、三宅克己、丸山晩霞氏等の筆に成れるもの廿葉あり。用紙、製本又頗る品よきものなり。(定價二圓五十錢)

▲天才(前編)　小栗風葉著　隆文館發行

「萬朝報」に掲載せられて昨年の創作中最も目覺ましきものゝ一なりし風葉氏の「天才」はこたび、一卷に纏められて美裝して世に出づ。吾人は繰り返し〳〵熟讀して風葉氏の苦心の多大なりしこと、及び其苦心の決して徒爲に終らざりしことを感ぜざる能はず、其澤を消し、燃しをかけたる文章の妙、複雜し混亂したる事件を明晰に書きゆく手腕、落付いたる調子、皆驚嘆に値す。附錄として生田長江、眞山青果二氏の風葉論百五十頁あり。長江氏は風葉の藝術を論じ、青果氏は人物を描く。青果氏のは非常に巧みに氏の人物を描きて興味饒し。(定價八十五錢)

▲花袋集　田山花袋著　易風社發行

大膽にして眞摯なる描寫を試みて昨年の小説界を騒がしたる「蒲團」を卷頭として、「隣室」「一兵卒」「少女病」「田舍ゆき」「ネギ一束」「春の町」「家婢」「アリユウシヤ」「マウカ」「縣道」「姉」「勝公」「キス以前」の十四編を集めて「花袋集」と名づく。此集に「土手の家」の見えざるは所謂其筋の干涉、病的に過敏になれる折柄なればなりといふ。「土手の家」の如き佳作を出版する能はずといふに至ては確かに文藝に對する壓迫の餘りに甚しきを慨せざるを得ず。「蒲團」と「少女病」は最も大膽なる自已描寫を試みたる點に於て勝れ、「隣室」は藝術品として優れたるを思ふ。風葉氏の「天才」「戀ざめ」等と共に次號の誌上にて詳評せん。(定價九十五錢)

▲羅馬觀光記　山田寅之助著　白鳥斯文閣發行

著者が羅馬に滯在中、見聞したる事件の中、主として基督教に關係あるものを書き記したるもの也。羅馬に趣味を持つ人、殊に羅馬に趣味を持つ基督敎徒に參考となる節多かるべし。(定價五十錢)

▲滑稽七人男　海賀變哲著　東明堂發行

少し燥る處もあれど卷を開いて讀み出せば笑はせずには置かぬといふ滑稽な書き振り、變哲氏の才華なか〳〵尋常にあらず、氣の鬱した時、話の種の盡きた時など本書を讀むも興あるべし。(定價六十錢)

▲落葉　薄田泣菫著　獅子吼書房發行

「國民新聞」「新小說」などに揭げたる著者の小品を集めたるもの、何れも幽婉なる調子を以て著者一流の感想を描く。少しくクラシカル過ぎる嫌はあれど、なかなかに奇警又は頓才ある觀察あり。詩人の散文としては上の部に屬するもの也。(定價八十五錢)

▲古今和歌集評釋　金子元臣著　明治書院發行

古今和歌集を最も詳細に、最も忠實に、最も懇切に評釋したるものにして學界を益すること尠からざる著書也。一首の歌について先づ釋を施し次に評を加ふ。冊數五、量に於ても質に於ても古今和歌集の評釋のオーソリチーたる價値あるを思ふ。(定價一卷二卷各四十錢、三卷四卷各四十五錢、五卷五十錢)

▲最新論理學　渡邊又次郎著　丙午出版社發行

元久しく東京法學院の講義錄に論理學を講じたる著者が新たに筆を起して、學生の參考、又は教科の用、又は一般好學者の爲めに論理學の大綱を記述したるもの也。所說簡にして要を得、且つ卷末に索引を附せるは極めて便利也。(定價一圓廿錢)

▲月魄(藤の卷)　菊地幽芳著　金尾文淵堂發行

東京每日電報に連載せられて江湖の喝采を博せるもの丶上卷なり。詳評は全部出版の上に讓るべきも、種は著者の「己が罪」など丶ひとしく外國物の飜案らしく、變化に富みて家庭の婦人連を喜ばし相なもの也。何れ其中、芝居などに仕組まれることとなるべし。(定價九十錢)

▲日本女鑑(第一編)　稻田白光編著　內外出版協會發行

中宮定子、淸少納言、紫式部、春日局、井上通女の傳記也。(定價四十錢)

▲謠曲評釋(五輯)　大和田建樹著　博文館發行

老松、八島、松風等三十七の謠曲に詳細なる評釋を附したるものにして謠曲硏究者には丁寧懇切なる手引草といふべし。(定價三十五錢)

▲福澤翁言行錄　藤田長江編　橋本書店發行

翁に親炙せし諸先輩に糺せし事實に、編者の批評を附したるもの也。「福翁自傳」以外、又多少の得る處なきにあらじ。(定價三十五錢)

▲鳴雪俳話　內藤鳴雪著　博文館發行

初學者をして俳文學の眞趣を味はせん爲めに說述したるものにして平談の中に飄逸の氣を寓し、通俗の中に高雅の趣を失はざる所鳴雪翁の手腕を見る。俳句に志す初學者の好參考書也。(定價廿八錢)

▲靈魂不滅論　柏木義圓著　警醒社發行

靈魂の滅不滅は大問題であつて、最も人の能く耳を傾くるところであらう、此篇も我輩から見ればまだその證明の仕方に於て著者の所見に首肯し得るには至らない、證明といつても盡く消極的に出て居つて、積極的のものはない、否や一つあるが、それは何とか言へば基督の復活を以て肉的に現れたと見ることである、すれば此復活の事實から詮議を要する事になる、著者は唯物論の靈魂を駁した、それには無論異議はないが

更に佛教の沒我論を迄攻撃した、之は我觀に於て甚だ論ずべき餘地がある、兎角今少し積極的の證明が出來なくては駄目だ（定價二十錢）

▲大石良雄言行錄　渡邊修次郎著　内外出版協會發行

誰も知る大石良雄の逸事やら傳記やら、書簡集やらを一輯したもので卷初には年譜系譜迄載つて居る、机上に置かば修養の一助になるであらう（定價金三十錢）

▲笑の山　漣山人著　光村合資會社發行

輕口やら、狂言やら、喜劇やら、笑話やら、切辛い生活の一方にも胸の垢を洗つて命の洗濯の出來る樣にと、漣山人きいた風な輕い筆先でさら〳〵さつと書き流した癖のないもの（定價四十五錢）

▲我國體の宗敎　龜谷天尊著　光融館發行

加藤博士の「我國體と基督敎」に對し、同書の各章に亘り、一々駁論を試みたもの、基督敎徒からの駁論は之迄新聞雜誌等に多く見受けたが、佛敎徒からは之を始めとする點に於て稱揚する、が論述の方法は博士の原著と同工異曲で、科學對宗敎の根本義を究明し徹せざるの憾がある。（定價金三十五錢）

▲社會主義運動史　木山熊次郎著　忠文舍發行

現在せる我國の社會主義者なるもののそれは知らぬ、彼等には眞面目なるものもあろうが又浮誇にして徒に煽動者たるに止まるものも少からぬと見る、がそれは兎もあれ資本主と勞働者、富豪と貧民との關係は何等か滿足なる解決を期待して、洋の東西となく目下社會主義なる名の下に頻に方策を求め居ることは確實だ、本書は廣く各國に於ける社會主義者の主張並に運動を說いて過去より現在に及んだもの、經世の志あるものゝ少からぬ參考となるは疑はぬ（定價金七十五錢）

▲現在と未來　武本喜代藏著　警醒社發行

基督敎の敎義により現在未來の關係を說き、吾人は神より出でゝ神に歸る、此世は假の宿りに過ぎずとするも、而かも此處に旅宿する中の行爲が他日の天上生活に於ける幸、不幸の標準となることを說いたもの、所說の通俗にして親切なるを採る（定價二十錢）

▲耶蘇が見たる三大觀

基督の宗敎的思想を神、人、自己の三大觀に區分し詳細に說明せるものである（定價金二十錢）

▲人生の健鬪　田村逆水著　博文館發行

十分に意力を發揮して實地に驀進する、青年に此意氣ありて常に心なる一大字典から不能の二字を省くことが出來やう、著者は觀じて「界は活動のものなり、社會は奮鬪的のものなり」といふ、此意氣によつて這般の文字を遣り、更に意力の權化たるガンベツタ、ガーリソン、ジヤンダーク、ガリバルヂー、シヤーレマン、リンコルン以下同類三氏の傳を添えて居る、薄志弱行たらざらんとする青年の必讀の書である（定價金三十錢）

▲國語學叢話　上田萬年講述　博文館發行

太陽誌上に現れた上田博士の論文を輯集したもの、題して國語學叢話といふ、言語學に造詣深き博士が、忠實に我國の言語文字に就いて述べられた意見を收めてあるから、左様に名づけられたてもあろうが、史話あり、時局談あり、笑話あり、更に終に添ふるに箕作博士の武者修業物語獨逸學生々活の二編を以てする、智識を得る他に趣味も伴つて居る。(定價金四十錢)

▲聖典物語　赤沼智善著　無我山房發行

釋尊の思想は廣大無邊で一代の中如何なる說法にも常に適切なる比喩巧妙なる寓話が時々處々に恰當して縱横に使ひこなされて居る、此書は漢譯藏經の中よりそれ等の粹を抜くこと五十餘種、童蒙にも分り易からしめん爲、通俗を旨として平たく書き改めたるもの、此種の著述の續出することを望む（定價八十錢）

▲四福音書　大宮季貞著　警醒社發行

スチヴンス、バルトン兩教授の對照四福音書を邦語に譯せるもの、原著は此類の著述中正確を以て稱せらるゝものといふ事だから、聖書研究者を益するところ多からう、

▲基督教安心論　高木壬太郎著　梁江堂版

著者が豐富なる學殖、深遠な識見を以てして、一々之を基督の教義に基き、人世に於ける幾多の問題を解決したもの、煩悶論以下通篇二十五章ある、世路嶮艱にして人に煩悶多し、此書は慥に此かゝるものを救ふに少からぬ効果あることゝ思ふ(定價金七十錢)

次號小說豫告

村稼ぎ（南小泉村第三）　眞山青果

校長の二子（完結）　小杉天外

題未定　小栗籌子

春期大附録

ぐうたら女

小栗風葉

ぐうたら女

小栗風葉

一

私が東京へ留學する其前の年、丁度十四の秋であつた。

其年の春私は小學校を卒業して、是から何うしようか、兩親も私の身の振方に迷つて居た時である。商家の子は商家の子相應に、何所か大店へ丁稚奉公に住込ませようか、それとも奮發して、名古屋の商業學校へでも入れて見ようか、何うしたものだらうと兩親も頻りに頭を惱して居た。然し、私自身は速うから最う丁と心は決つて居た。無論丁稚奉公なぞに行く氣は無い、名古屋の商業學校も御免だ。何でも東京へ出て、中學から高等中學、(其頃は未だ高等學校と言はなかつた)而して大學へ入つて文學士になる意りであつた。と云ふのは、此二三年前小學令が變つて、高等科で英語なぞを敎へるやうになつた爲めに、古い頭の敎師は皆淘汰されて、新に若い敎師が幾人も傭入れられた、其中に島田と云ふ英語の敎師があつて、其先生に私は東京行を勸められて居たからだ。

島田先生は何でも群馬邊の生れて、大學の豫備門を中途で歇めて、東京でブラ〳〵遊んで居たのを、今度の校長が緣續きの所から英語の敎師に呼寄せたのださうだ。若い元氣の好い青年で、私達生徒を能

く山へ海へ遊びに連れて行つては、隅田川のボートレースだの、飛鳥山の運動會だのと、東京の學生生活を面白さうに話してくれた。而して一人〱名を指しては、口癖に這麼事を言つて私達を勵したものだ。

「藤井、お前は數學か巧いから理學士になると可い。理學上の新發見でもして、世界の學術に貢献すると云ふやうな事になると、お前の爲めに東海道の此の陋臭い田舍が天下に響く譯だ。丁度秀吉が生れた爲めに、名古屋在の那の中村が歴史にまでも殘るやうなもので。」

「崎、お前は是非政治家になれ、辯舌は巧いし、阿父さんは郡會議員だし……それに來年からは、代議政治が實行されて國會が開ける。お前も政治學を修めて置いて、行々は代議士に打つて出る、而して政黨内閣が起れば一躍して大臣にもなれる。」

這麼調子で、今思ふと、先生は自分の空想を私達に當箝めて喋つて居たのだ。(其證據に先生は、其後又東京へ舞還つて、新聞記者にもなれば著述家にもなる、日露戰爭の時には軍事探偵にまでなつて、今では外國の公使館に居る)然し、其頃の私達の幼い頭は、何のくらゐ先生の辭に鼓吹されたか分らない。先生は「國民の友」の愛讀者で、死んだ紅葉山人と豫備門で一緒だつたさうだ。

東京では條約改正の騒ぎから憲法發布の大典、鹿鳴館の舞踏、男女交際論、新聞雜誌の勃興と云つた風に、新しい文明の潮が一度に押寄せたやうな有様、先生は毎つも目を輝かしながら、私達に其等の話をして聞かせる。私達は唯最う小い胸を躍らせて聞いた。

私は外の學課に比べて作文が得意だつた。學校に居る頃から新聞や小說を漁り讀んで、兩親からも折々小言を食つて居た。其所で先生は、

「松村、（私の性で）お前は文學を遣れ。文學と云ふものは天才の事業で、文明の花だ。ホーマーとか、セークスピヤとか、乃至ゲーテとか、日本では馬琴と云ふやうな文學者は、一國の文明が滅びても殘つて居る。究り不朽の事業だ。」

私が文學士にならうと云ふ目的の動機は是である。

二

島田先生は私が小學校を卒業すると間も無く、東京へ歸つて了つた。先生の在職は僅か二年足らずであつたが、それでも何のくらゐ鄕黨に感化を及ぼしたか分らぬ。一體私の鄕里は田舍に似合はぬ富豪の多い土地で、隨つて町民の生活が豊かである所から、土地の者が他國へ出るなぞと云ふ事は滅多に無い。私ぐらゐの者で見れば、先づ小學校を卒業すると、二三年主人勤めをして行儀作法を見習ふ。二十前後には最う嫁を貰つて、家業の傍ら茶や花でも拈繰ると云つた風、進取も發展もあつたものでは無い。それに、未だ其頃は東海道の鐵道も全通しなかつたし、東京と云ふと、昔の江戸下りと同じやうに臆劫がつて居た。況して五年も十年も東京に留學するなぞと云ふ事は、それまで全然例が無かつた。醫者の息子が僅か九里しか離れぬ名古屋の醫學校へ入つて、夏冬の休暇に、白金巾の兵帶兒を幅廣に緊めて歸つて來る。其れを見ても最う土地の者は能く言はない。若い者を手放して出すと、那通り生意氣に

なるとか、やれ陸な事は覺えぬとか言つて爪彈きをする。其位固陋な——善く言へば昔氣質の物堅い土地の風であつたのが、島田先生の鼓吹が動機になつて、私の學校友達は先生と前後して五人まで東京へ留學に出た。郷里では破天荒の事である。今まで安逸に慣らされて居た土地の若い者の頭を、何のくらゐ其れが刺戟し動搖させたか分らぬ。其れからと云ふもの、年々東京へ留學する者が殖えて、此節では私の郷里から學士だけでも十人近く出て居る。

て、一緒に卒業した藤井も野崎も上京して、頻りに東京の面白い事ばかり吹聽して寄來すし、先生は居なくなつたし、それに兩親の肚は決らぬ、私も其年の秋は鬱々と暮らして居た。家に居ても面白くない、先生から貰つた古雜誌を懷へ入れては、稻の黃色くなつた野へ出て、芝草の上に臥そべりながら讀んだり考へたりして居た、東京の事。先生の事。それから大學校、文學士、那樣事が始終頭の中を往來して居た。

或る朗かな秋晴の日であつた。私は每ものやうに小高い丘の枯草の上に腰を下して、仄やり東京の事を考へて居た。黃色く實つた野の向うに、里の根屋や白壁が不規則に並んで、其先に柳の植つた入江があつて、其向うに又新田が續いて、新田の向うが衣ケ浦の內海になつて居る。空氣は透通つて、海の向うの細かい漁師町まで浮繪のやうに見える。能く凪いで、藍を湛へたやうに濃く澄切つた海の上を、白帆が滑るやうに動いて行く。鯊釣船が數切れぬほど出て居る。其中に黑く塗つた大きな汽船が一艘、三菱會社(其頃は未だ今の郵船會社では無かつた)の持船で、橫濱と伊勢の四日市との間を往復して居るの

だ。藤井も野崎も先生も皆那船で東京へ行つたのだ。それから船は幾航海往復したらう。今日も亦横濱へ向けて出帆するのだ。煙突には煙が出て居る。私は何時東京へ行かれるのだらうと思つて、溜息を吐いて考込んだ。

野は明るく、而して靜かだ。和かな秋の日が隅々まで行渡つて、凝と退屈さうに照らして居る。里の方からパタン〳〵と云ふ怠けた梭の音が聞えて來て、刈入前の野は人子一人通らぬ。時折カラ〳〵と云ふ氣忙しい鳴子の音がして、パッと雀が翅上ると、稻の熟した香がフハリと鼻へ來る。と、後は又深として、梭の音のみ耳に入る。私は知らぬ間に睡つて了つた。

其中に、偶と人聲が耳に入つて目を覺した。今まで塞いて居た目が急に光を食つて、クラ〳〵と目映しい。私の前には二人の女が佇んだ。

「ちよいと、お前さん、少し物がお訊ねしたいんですがねえ。」と聞慣れぬ東京辯で言ふ。

私は慌てゝ目を小擦りながら、「は、何だな？」

「半田(私の鄕里の町名)に松村さんと云ふお店がある筈ですが、お前さん、お知りぢや有りませんか。」

「松村――松村は私の家だが……」と言ひながら、怪訝さうにヒョイと顏を擧げると、若い娘の姿が目に入つた。口を利いて居るのは其母親らしい中媼さんである。

「おや、それは可かつた。松村さんと云ふのは半田には一軒しか御座んすまいね。(急に辭使ひが叮嚀になつて)ぢや、お家のお島さんはお達者で御座いますか。」

「は、阿母さんは達者で居ます。」

「然うですか。私はお島さんのお若い時分お心安くした者ですが、今度東京から久振に出て來まして。次手に些つとお訪ねしようと思ひましてねえ。貴方はそれぢやお島さんの息子さんで？」

「は。」と言つた限、私は赤くなつて俛れた。若い娘に凝と傍で見詰められて居るのが極りが惡いのだ。

それから、私は二人を案内して家へ歸つた。歸る道々も、私は始終伏目になつて辭少なに歩いて居たが、媼さんは例の東京辯で色々と談懸ける。其話に依つて知つたのは、此媼さんの生れが、爰の町から三里ばかり離れた私の母の生家と同じ村で、東京へ行つてから今度始めて二十年振に歸つたのださうだ。見るもの聞くもの、皆能く變つたと言つて驚いて、

「東京よりも、却て田舍の方が變り方が劇しいものですねえ。」と附加へた。

半田と云へば此界隈での町だ。それを田舍〳〵と一口に言はれるのは忌々しくもあるが、さて又東京の人の目から見たらば無理もあるまい。私は肩身が狹いやうに感じた。

今は全く變つたが、其頃の私の鄕里の風俗と云ふものは、それは質素なものであつた。着物は皆手織の木綿縞で、何十萬と云ふ資産家の家族でも、精々其れに絹絲の交つたくらゐな物を着て居る。小學校の先生とか、役場の吏員とかで無ければ羽織と云ふものを着ない。何れも毛繻子の襟の懸つた丈の短い袢纏だ。若い娘でも少し赤々した扮をすると、直ぐヤシヤコラ(淫賣婦)のやうだと言つて卑しむ。白粉など無論常には塗らない。女の髪にしても、島田などと云ふものは一生に一度婚禮の時ぐらゐしか結

ばね。て、一般の娘風を言つて見ると、先づ母か姉が手束ねの鬢の引詰まつた銀杏返に、錬玉の簪ぐらゐを挿して、幅の狭い帯を背負揚も無しに平坦に緊めて、木綿縞の前垂を掛けて、而して例の毛繻子の襟の懸つた腰限の袢纏だ。それから、上方風とでも云ふのか、手織の木綿縞の上着に、際々しく紫メリンスなぞの半襟を刺して、紅木綿か何かの裾廻しを袘厚に取るのが其頃の娘風であつた。今思ふと、隨分野暮臭い厭な風であつた。が、それでも何所の娘が好いとか惡いとか、友達同士那樣噂を内々爲合つて、私達の仲間は一體に皆熟せて居た。

所が、媼さんの連れて居る娘は髮も高髷に結つて居る。雀斑を隱す爲めでもあつたらうが、白粉も濃い。葉出な格の絹物を重ねて、紫繻子か何かの幅の廣い全帶を恰好の好いお太鼓に結んで居る。而して口を利くと流暢な東京辯だ。私は島田先生に貰つた「都之花」と云ふ小説雜誌の中の、嵯峨舍主人が書いた「初戀」の女主人公が頭に浮んだ。其「初戀」は丁度自分と同じくらゐの少年が主人公であるだけに、其頃讀んだ小説の中で一番 私の心を動かしたものだ。殊に主人公の自敍體に書いてある所から、私は作者の實歷だとばかし思つて居た。

道々行合ふ者も、皆娘の姿を希しさうに見迎へ見送る。私は何だか肩身が廣い。けれど自分の家の者の田舍臭い小汚い風を思ふと、其れを母だの妹だのと云つて、此美しい東京の人に引合すのが耻しいやうな氣がする。私は家の閾を跨ぐと、急に又肩身が狹くなつた。

「お前はまあ、此の日の短いのに何所を遊び歩いとるだえ？」私の顏を見るなり母は行成呶鳴つた。

三

媼さんはお作と云つて、今年四十六である。元船乘の女房であつたが、亭主が沖で死んで、暫く後家で居た。其頃お針の師匠をして居て、私の母も未だ其時分娘で稽古に通つたものださうだ。一體船乘(和船の)の女房などと云ふものは、多く自墮落な者であるが、此お作と云ふ女も相應な道樂者であつた。死んだ亭主との間に立派な男の子のあるにも拘はらず、(其男の子が今は東京の家を遣つて居る)後家になつてからは色々な男と關り合つて、始終妙な噂ばかり立てられて居た、其中に彌張船乘で、女房子のある男と出來合つて、土地にも居られなくて東京へ逃げて行つたのが、丁度私の母が家へ嫁入つて來た前年ださうだ。それから今年で十九年になる。東京へ行つた直ぐ其冬に娘が生れたと云ふから、村に居る時から最う胎にあつたので、娘は今年十八だ。

娘の名はお雪と云ふ。私は名前までが美しいと思つた。此春爺さん(お作媼さんは自分の亭主を然う呼んで居る)の血續きの者と一緒になつたが、其れは爺さんの無理押付けであつて、當人のお雪さんは氣が進まぬのださうだ。無理に一緒にさせられた其婿と云ふのは、爺さんの生れた三河在からポッと出て來たばかりで、挨拶一つ滿足に出來ない田舍者ださうだ。女親の身になつて見ると、一人限の娘を那樣男に連添はして置くのは可哀さうで、今度實は別れ話を持出して來たのだと、お作媼さんは私の母に談した、私も傍で聞いて居て、お雪さんが可哀さうだと思つた。お雪さんは美しい高髷を重さうに俛れて、指に插した玉入りの指環を膝の上で弄つて居る。指の附根〳〵に笑靨のやうな窪みの出來た白い

柔い手の甲に、眞赤な襦袢の袖口が絡まつて美しい。

「那樣譯てすから、話の付くまでは是を近くに置かない方が可いと思いまして、今度まあお墓參り旁た恁うして出て參つたので御座いますが……何しろ爺さんが悉く親内贔負だものですから、本人の婿よりも、爺さんがジャン〳〵張つて居て始末に可けないんですよ。這地へ參つてから最う二十日近くにもなりますが、今だに話が付きませんで……と云つて、恁うして何時までも私が家を空けて居た日には、後が亂脈て、其れも心配になりますし、しますから、又出て參るにしても、一度樣子を見に歸つて見やうと存じましてねえ、それで今日はお暇乞旁た伺つたやうな譯で……いえね、速うから一度お訪ね爲たい爲たいと思つて居たんですが、それが延び〳〵になつて、到頭這麼立懸けにお伺ひするやうな事になつたんて御座いますよ。」

「それにしても、何うて貴方、汽船てなきやお歸りる譯にや行きやさんだらうがな。横濱行は今日最う出た筈だし、何道今度の上下までお待ちやさにやならんだて……なも、折角お來てゝおくれやした次手に、一三日まあ御緩くりと……」と母が言ふと、

「おや〳〵、今日出ましたか！それはまあ、殘念な事をしたぢや無いか、ねえ雪。」

「何方貴方、五日ばかりしましや、又別の船が四日市から入りますで……」と母はお雪さんに向つて、

「貴方も這麼在郷に、二度とお來てやすやうな事もお有りやさんだらうて、今度は緩くりまあお遊びやすな。」

「は、有難う御座います。」

お雪さんの只其丈の一言も、母の田舎辭に比べて、私の耳には甚麽に懷しく響いたらう。私は辭からして東京が好だ。あゝ私は何時東京へ行かれるだらう。此人達も次の便船では歸るらしい、私も一緒に連れて行つて貰ふやうな事にでも成らないものかと、那樣事を獨り考へて居た。

お作媼さんの話は、重造と云ふ息子の噂に移つて、是も爺さんと折合が惡くて困ると言ふ。爺さんとは元々做さぬ仲ではあるし、其所へ又息子の嫁と云ふのが呆れた女で、爺さんと一緒になつて自分の亭主を馬鹿にする。那樣風で自然家が面白くない所から、息子は暴ばかり起して、私などが何と異見しても肯入れない。最う子もあつて、來年は小學校へも行かうと云ふ其親が、始終家ばかり空けて居る。道麽風では永年私共が丹精して拵へた身上も、今に何うかなつて了ふだらうと言つて、媼さんは鼻を詰まらせる。母も何と言つて可いか挨拶に困つて居た。

「重さんはそれぢや、お子共が最うお有りやすのかな。私が知つとる頃にや未だ重さんも本の坊さんだつたが、最うお幾歳にお成りやすな？」

「今年最う二十六ですよ。爲やうが有りません。」と言つて、媼さんは私の方を見て、「お宅のはお幾歳て御座いますね？」

「十四になりますだが、男の子は是からが案じられてなも。」

「本當ですよ、其所へ行くと女の子の方が苦勞が御座いません。それて、今未だ學校へ？」

「いんえ、小學校だけは此春最う卒業しまして、是から何うしようかと思つて心配しとりますだがな。當人は貴方、何でも東京へ行きたいと然う言ひまして。」

「然うですか。それなら寧そ東京へ出してお上げなすつたら可いでせう。這麼田舍にお置きなさるより、東京なら甚麼お店へでも私共で御世話しますよ。」

「それが貴方、生意氣な事ばかり言ひまして――東京の學校へ入りたいのだて困りますがな。」

「へえ、學校ですか。」と媼さんは些つと面食つたが、「彌張商業學校とでも申すのへ？」

「へ。名古屋にも有るにや有りますだが、何でも東京の方が可いと言ひまして……」

「そりや然うて御座いませうとも。同じ修業なさるなら名古屋なんかより、東京の方が何しろ本場で御座いますからね。」と頷いて、媼さんは又私の方を見て、「東京へ被來るなら、私共でお及ばずながらお世話致しますからねえ。何なら今度の船で、一緒に被來つたら可う御座いますにねえ。」と然う言つてくれた。

四

お作媼さんが今度村へ歸つて泊つて居るのは、何でも遠縁の家で、追々と逗留の永引くに連れて可い顏ばかりも爲ないらしい。て、持做振は屆かなくても、氣の好い私の兩親の深切氣をホク〳〵喜んで、濟まない濟まないと言ひながら、前後五日――丁度橫濱行の汽船が四日市から廻航して來る前日まで私の家に遊んで居た。

其の五日間と云ふもの、媼さんは外出も何にもせず、毎日私の母を捉へては、爺さんや、婿や、息子や、嫁やの愚痴ばかり繰返して居た。お雪さんは毎も其傍に坐つて、退屈さうに欠を殺して居る。時には私の居間へ入つて來て、

「賢ちやん、（私は賢次と云ふ名で）貴方も一緒に東京へ被來いませんか。田舍なんかと違つて、東京は賑かで好い事よ。」と那樣事を言ふ。

かと思ふと、私の丁度讀返して居た「都の花」の、例の「初戀」の中の挿繪に目を留めて、

「それ、何？」と取揚げて見る。

私はハッと思つて眞赤になる。

「能く描いてあるわねえ、此娘の髷の恰好の好い事！何の芝居か知ら？」

私は何だか當の外れたやうな氣がして、ポカンと顏を見て居る。

それから今度は、私の机の上の硯箱を引寄せて、紙片の端に「新富座」だとか、「中村芝翫」だとか、「東京京橋區靈岸島」だとか、「あら〳〵かしく」だとか、色々な樂書をし始める。字は餘り巧くない。

私も一緒になつて、別の紙片へ「東の空」だの、「都人」だのと、些つと拈つた文句を書き散らしては、故とお雪さんの目に入るやうにする。けれど、お雪さんは見ても一向感じないらしい。

が、或時私の母が父に向つて、

「お作さんは餘程那娘が自慢らしいだけど、曩自分の着物の解けたのを縫つとるのを見たに、那人の子

にも似合はん不器用なもんだにな。那れでも東京ぢや濟んで行くのか知らん。」と言つて嗤つて居るのを聞いて、私は傍から口を出して、

「だけど、字なんか書くと巧いにな。」

「字は然うか知らんが……でも、小學校も中途で體が弱くて歇めたと云ふ話だもの、巧いてゝ知れたもんさ。」

「歇めたてゝ、巧いもんは巧いぢや無いかな。私は書くのを見たもの。」と眞赤になつて辯護したものだ。

所で、煮切らなかつた私の東京行も、お作媼さんのお蔭で漸と決る事になつた。今度媼さんが東京へ歸るに就いては、今までの那の亂脈な中には到底も辛抱が出來ぬから、娘と一緒に家を出て隱居する意りださうだ。すれば、女二人で小勢ではあるし、私の一人ぐらゐは、本の食扶持だけでお世話しようと言つてくれたからである。月謝や小使は何所へ行つても同じく要るものだ、食扶持だけで世話をして貰へるのもなら、名古屋へ出して素人下宿などさせるよりも、却て安揚りかも知れぬ。私は先づ約ちい母を勘定盡くから動かして、而して父にも納得させた。結局來春の入學期までには、お作媼さんを賴つて上京する事に決つたのであつた。

私は東京の島田先生や、藤井や野崎や、皆に宛てゝ早速其旨を報じて遣つた。

お作媼さんは一度村へ歸つて、而して半田前から横濱行の汽船へ乗込む爲めに、其翌々日重ねて私の家へ暇乞に寄つた。

「それでは賢ちやんも、春になつたら出てお來でなさいよ。」と媼さんの言ふ尾に附いて、
「お待ち申して居てよ、ね賢ちやん――早く被來いな。」とお雪さんも言つた。

五

翌年の三月、私は父に連れられて上京した。

數へ年の十五、生意氣なやうでも未だ小兒だ。今まで親の手元にばかり居て、外へ出た事は無し、私も獨りでは有繋に心細いし、兩親も亦獨り手放すのは心許無かつたのだ。で、父と一緒に例の三菱會社の汽船で横濱へ上つて、而して海岸通の三階造の旅館で中食をして、其時父が天保錢を一枚紙に包んで茶代に置いた事を、今でも覺えて居る。それでも宿の男が荷物を擔いで、故々ステーションまで送つてくれた。横濱からは汽車で、(父も私も始めて汽車と云ふものに乘つたのだ)新橋のステーションへ着くと、豫てお作媼さんに聞いて置いた賃錢で車を傭つて、眞直に靈岸島へと行らせた。私は横濱の町で最う肚膽を拔かれて居たので、東京へ着いてからは格別驚かなかつた。

お作媼さんの家は米問屋で、靈岸島の商船學校(元の)の傍に、三河屋と云ふ看板の出た店が其れである。媼さんは直ぐ近所に家借りをして、其頃最う娘と二人で別居をして居たが、私共は左も右くも其店へ俥を着けた。

豫て媼さんがお世話になつて濟まぬと云ふ禮手紙も來て居るし、爺さんも息子も、息子の嫁も、一家擧げて初對面とは思へぬほど歡迎してくれた。其中に別宅の方からお作媼さんも來る、お雪さんも來る、

狹い家の中は人で一杯になつて、其中でゴタ〳〵酒なぞ出る。

去年お作媼さんが私の兩親に談して居た口振では、東京へ逃げて行つた其當時こそ隨分苦しみもしたが、今では相應に內福に暮らして、店も靈岸島界隈では一二の米問屋であるやうに聞いて居た。で、私は鄕里の家造から想像して、少なくとも間口の四五間はある店構で、奉公人の二三人ぐらゐは使つて居るだらうと思つて居た。所が、來て見ると、田舍の私の家の半分も三分一も無い。店は僅か二間半の間口に二間の奧行、入口から直ぐ糠だらけの板敷になつて、其所に米の見本が四五俵積んである。而して疊二枚丈が床になつて、其狹い所へ帳場格子だの、懸硯だの、火鉢だの何だのと、腰を下す所も無い。格子障子で仕切つて、直ぐに六疊の茶間、其橫に二疊の間と臺所とあつて、二疊の間には階子段の上り口が附いて居る。茶間の奧に最う一間長四疊と云ふ妙な間取りの薄暗い一間があつて、其所には簞笥やら葛籠やら、那樣物がギッシリ積重ねてある。便所へ入れば、兩便一緒の三尺建だ。那邊にも這邊にも所帶道具がゴタ〳〵置き並べてあつて、何所も彼所も滿遍無く米の糠で白く汚れて居る。障子の棧も、疊の表も、人の頭も、皆白い。狹い薄暗い家の中は、足の踏場も無いほど亂雜で、而して糠塗れだ。

其晩は大川端の船宿（と云つても遊船宿では無い、諸國から上つて來る船頭衆の定宿で）へ案內された。狹くとも家へ泊めてくれゝば氣安いが、恁うして見す〳〵錢の出る旅籠へ案內されては、父も落着いては逗留も出來ない。究りは氣毒がらせて早く歸す肚だらう、是だから東京者は薄情だと言つて、父

は恐しく感情を害して了つた。お作婆さんの案内で翌日一日淺草上野と見物して廻つたが、二日目の午過、船宿の周旋で、伊勢廻りの帆前船に便乘して歸國する事にした。三河屋では切めて汽船便のあるまで逗留するやうにと留めたが、父は胡麻鹽頭を振つて、

「何分家の事が心配でなりませんし、それにまあ那れだけ見物させてお貰ひましや結構だで、是で私は歸りますがな。帆前船だかて丶、風の都合さへ好かつたら二日二晩で伊勢まで延しますし、第一船賃が助かりますてな。汽船のやうに高い賃錢を取られんでも、「船頭衆へ本の心附けぐらゐで載せて行つてくれますげなで……へ。お蔭樣でまあ私も安心して歸りますで、何うかまあ悴の事を宜しうお願ひ申します。」と強情に暇を告げた。

それから艀の舫際まで送つて行つた私を、小蔭に連れて行つて、

「何だか知らんがゴタクサした家で、那中へ又お前が厄介になつとると云ふ事は、餘程氣苦勞だらうと思ふが、何うせまあ人中へ出りや家に居るやうな譯には行かんで……の。お前も其所は氣を利かして、誰にも成るたけ當り障りの無いやうにしとるが一ち可いぜ。」と注意した。

私は涙含んで聞いた。父が艀へ乘移つて、愈よ舫も解かれて漕出した時には、涙はホロ〳〵と意氣地無く頰を濡らした、實を言へば、父の勘定高いのと、田舍氣質全出しなのとが、お雪さん始め三河屋の人達にも耻しくて、早く帆前船で歸るやうに私が勸めたのだ。成程風都合さへ好ければ、二晝夜で伊勢まで延しもしよう、けれど、一つ天氣が狂ふと、何所へ何う吹き寄せられるか分らぬのは私も知つて居

る。途中には遠州灘と云ふ難所もある。私は父の安着の通知が來るまでは、有繋に寢覺が惡かつた。が、然し其時は私も少年の單純な頭だ、三河屋へ歸つて、島田先生へ上京の通知を書く時には、最う父の事も忘れて居た。其手紙の端へ、今度斯うして出京したからには、私は飽くまで先生のお辭を奉じて、是非とも文學を以て一身を貫く決心だと添書した。而して自分も愈よ東京の書生生活に入るのだと思ふと、胸のみワク／＼する。其翌日は丁度日曜日を幸ひ、私は朝早くから家を出て、地圖を便りに藤井を訪れ、野崎を誘つて、三人一緒に島田先生の所へ押懸けた。私の文學志望は父の許しを得たものゝやうに僞り言つた。而して文科大學へ入る其の先づ順序として、高等中學の入學に尤も便宜な中學校を選んで貰つて、保護人には先生の知人を賴んで貰ふ事にした。（先生は其頃下宿住居であつたから）是は後の話だが、私が何と云ふ商業學校へ入つたか、入學の證になるものを送るやうに父から言つて寄來した。私は其時苦し紛れに、勸工場で活版刷の受取用紙を買つて、其れへ故々版本屋で彫らせた「大日本商業學校印」と云ふ大きな角印を捺して、束脩と月謝の請取證を僞造して送つたものだ。今思へば立派な法律の罪人である。其後も毎月然うして授業料の請取證を僞造して送つて、半年餘りも國元の兩親を欺いて居た。

六

三河屋の手狹な住居に呆れた私は、更にお作媼さんの隱居家へ行つて見て驚いた。普請は新しいが、何しろ六疊と四疊半の二間限だ。外には二疊敷ばかりの臺所と、庇間のやうな小庭と――庭には石炭壺

か散ばつて居て、磯馴が一株に、格南天とか云ふ刺のある低い常葉木がションボリと二本、日陰に萎けて、近所の工場の煙突から吐き出す煤煙で葉も幹も黒く染つて居る。風下の時なぞは家の中まで煤が舞込むとかて、白地の物なぞ浮かり椽側へ出しては置かれぬさうだ。長家建て、壁一重隣の高話が手に取るやうに聞える。其頃私の郷里なぞでは、第一長家建と云ふものが無かつた。それから貸家と云つても始めから貸家に建てたので無いから、甚　人の住居でも皆一軒建て、汁の實ぐらゐは何所の家でも構内に蒔いて　らと云ふので、借家住居をして居るものは先づ貧民の部だ。それに家屋敷と一口に言つて、家を持つて居れば必ず地面も附いて居る。私は然う言つた土地で育つて來て、始めて東京の此の小狹しい下町住居に入つたのであるから、鼻が支かへるやうで、立居にも氣が置けて、其當座の窮屈はなかつた。

私は此隱居家の方に寢泊りして、三度の食事は店の方へ通ふのであつた。家は狹いが、家族はお作嫗さんとお雪さんと、而して私と三人限、店の方と違つて靜なものである。嫗さんは尾張の生れだけに熱心な門徒宗で、築地の本願寺へ說教日毎に缺かさず出掛ける。後はお雪さんと私と二人、お雪さんは四疊半の茶間へ疊紙を擴げて、赤い片だの紫の片だのを縫つたり綴つたりして居る。私は六疊の隅に新しく求めた針桐の机を据ゑて、入學試驗の準備をして居る。自分で云ふのも變なものだが、其頃の私は實は秀才であつた。入學試驗の科目の程度を友達に聞いて、私は高を括つて居たから、每日暇さへあれば際所等を見物旁た古本屋を漁つては、硯友社の「我樂多文庫」や「文庫」の古本を買集めて揃へて居た。然

し白狀するが、お作媼さんの出懸けた日には私は決して出ない、お雪さんと二人て留守をするのが內々樂しみだつたのだ。て、試驗の準備も可い加減に飽いて了ふと、「我樂多文庫」や「文庫」を取出して讀む。家の中は深として、向ふ隣りの錺屋の槌の音が柏子面白く續いては歇む。表通を羅宇屋の汽笛が通つて、近くの工場て折々職工共の高笑するのが聞える。這麼路地の中でも、有繁に春の日は明るく障子一杯に射して、縫物をして居るお雪さんの顏は仄と逆上せて赤い。私は東京へ來てから始終然う思ふ。町を步いて居ても行違ふ女が皆美しい。身扮の好い所爲かと云ふに、お雪さんでも重さんの嫁さんでも、家では隨分扮も振も管はずに居る方だが、それでも私の鄕里の女などとは比べものにならない。私も行く行く妻を持つなら東京の女だ、と那樣事を考へながら、小說も餘所にして仄やりお雪さんの橫顏を這箇の座敷から見恍れて居る。と、膝を少し崩して橫坐りに坐つて居たお雪さんは、根の盡きたやうにホッと言つて坐直す拍子に、偶と私の方を見た。目と目が打突つて、お雪さんは無意味に和こりする。私は赤くなつて俛れる。

「最う幾時か知ら、日が永いわねえ。」とお雪さんは獨言のやうに言つて、「何か食べたくなつたわ。賢ちやん、又金鍔奢りませうか。」

て、私は二町ばかり先の菓子屋まで金鍔を買ひに遣らされる。お雪さんは間食が好で、其中でも金鍔が何より好だ。私は餘り甘い物は好まぬ方であるが。お雪さんの前だけは然も旨さうにして一緒に食べる。

「私も好だが、貴方も随分金鍔お好ねえ。」と言はれるのが嬉しさに、胸に痞えるのを我慢して食つたものだ。

金鍔を食つて、而してお雪さんの淹れてくれる茶を飲みながら無駄話をする。私は此時が何より楽しい。竹垣一重隔つた水口の方て、不意に甲走つた聲て、

「畜生！又毎もの瘡掻めが泼つてきやがつたよ。」と呶鳴るのが聞える。「本當に、何うするか見やがれ、今度見付けたら只措かねえから……本當にまあ、何て忌々しい瘡掻だらう！」

お雪さんは思はず耳を聳てたが、急に噴出しさうにして、慌てゝ金鍔の口を袖て抑へながら、

「お隣の上さんよ。」と小聲て言つて、私と目を見合せて、「犬の事なのよ」

私は頷く。赤い襦袢の食み出た袖て口元を掩つて、目でだけ和こりして見せるお雪さんの其笑顔が、私は惚々するほど好かつた。

旋て又私は机の前に返る。お雪さんも物臭さうに縫物を取上げたが、何を見付けたのか、「まあ！賢ちやん。」と仰山さうに呼んで、「貴方最う其机、汚してねえ。そら、其の小口の所。」

「えゝ、是やあの、インキ壺を押倒らかいたもんだて……」

「ほゝゝ、押倒らかいたの？」と私の口眞似をして、「何か布片を見付けて私、机被を拵へて上げませう。」

「何うぞ！」と私は力を入れて言ふ。

と思ふと、今度は又、

「次手に一つ、脉突を編んで上げませうか。甚麼色が可くつて？」

「甚麼色ても可いてす。何うぞ！」と私は頭を下げる。

けれど、お雪さんは約束だけて、明日になると最うケロッと忘れて了つて居る――何事でも然うだ。

私は知らなかつたが、前には爺さんも此隱居家て寢泊りしたものださうだ。所が、私の來た爲めに、四人では狹い所から、爺さんだけ店の方で寢る事にしたのださうだが、それが或る事情から、私と爺さんと入替りになる事になつた。

それは火事の晩てあつた。夜の十二時過ぎ、川一つ向うの深川に出火があつて、私は擦半鐘の音に喫驚して目を覺した。お作媼さんもお雪さんも慌てゝ飛起きたが、川向うと聞いて安心して、二人は直ぐに床へ入つて了ふ。私は東京へ來たてゞはあるし、火事希しさに獨り起き殘つて、寢衣の上に羽織を引被けながら川端まで出て見た。何れも川向うと云ふので落着いて居るのだらう、焔の照返しで屋根も庇もカッと赤くなつて居るにも拘はらず、軒並密りと寢鎭つて居て、明り一つ洩射す家も無い。寂しい川沿ひの片側町を、長提燈の影が疎に駈けて行くばかり。それでも河岸縁には、那邊這邊人の立つて居る影も見えて、やれ風が無いから駄目だの、やれ大きくなりさうも無いだのと、好な事を言合つて居る。深川も可也先方だと見えて、焔は低いが、何しろ雨氣を含んだ空へ一面に輝いて、大川の流は晝よりも

明るい。赤い空が水に映つてチラ〳〵焔の流れるやうな中に、大小數知れぬ船の影が一つ〳〵カツキリと浮出て、何の船にも黒い人影が突立つて居る。川上の永代橋は提燈の影が入亂れて、丁度火で出來た長蟲が宙を渡つて蠢めいて居るやうだ。後馳に駈着ける喞筒の氣立しい音が橋の上を轟いて行く。木遣の聲も聞える。私は東京の火事は勇しい華かなものだと思つて見て居た。

「賢ちやん、風邪を感きますよ。」

不意に聲懸けられて、私は喫驚して振返ると、其れはお作婆さんであつた。

「這麼静な晩は却て火元を粗末にするものでねえ。何だか氣になるから、些つと行つて店の方を見て來ますから、お前さん最う家へ歸つてやつて下さい、お雪が獨りで寂しがつてるから。」

て、私は急いで家へ歸つた。私の寐床は四疊半で、お雪さんと婆さんとは奥の六疊で寐るのだ。隔ての紙門が開いて居て、薄暗い三分心のランプの影に、赤い小枕と白いお雪さんの顔とが仄やり見える。

「火事は最う消えて？」と床の中から聞く。

「え丶、餘程下火になりました。」

「然う」と言ふと寐返りをして、恰好の好い島田が這方へ向いた。次いて優しい寐息がスヤ〳〵と聞える。

私は何と云ふ事は無しにホツと溜息を吐いて、而して枕に突伏した。何時までも睡られない。其中に消半鐘が鳴つた。

旋て長火鉢の上の八角時計は一時を打つ。お作媼さんは何うしたらうと思つて居ると、間も無く氣忙しい下駄の音がして、ガラ〳〵と門口が開いた。歸つたなと思ひながら、私は挨拶するのが面倒さに、目を塞いで睡つた振をして居る。と、後を閉めて上つて來たのは媼さん一人では無く、爺さんが一緒であつた。二人は奥の六疊へ入つて、何やらゴタ〳〵言つて居る中に、一旦閉めた紙門が又開いて、お雪さんが睡さうな顔をしながら、赤い細帯の爲だらない寐衣姿で出て來た。フハ〳〵裾風を立てながら、今まで寐て居た布團を運んで、私の足の方へ横に寐床を取る。而してピッシャリ紙門を閉めて、行成床の中へ潛ぐると直ぐ最う鼾が聞える。お雪さんの布團の端は私の床の上へ懸つて、足の方に重みを感ずる。私は凝と息を凝らして身動するのも憚られた。

奥の六疊では、押入を開けたり閉てたりする音がして、それから寐るのかと思ふと、媼さんの聲で、

「重造が今夜出たとは些とも知らないものだから、唯何だか火の元が案じられて行つて見たんだが、……本當に行つて見て可かつた！」と思はず力を入れて言つたが、氣が付いたやうにパッタリ歇めた。努めて低い聲で喋つて居るのであるが、邊が寐鎮つて居るので、私には能く聞える。然し爺さんの方は聲が掠れて居る所爲か、唯ブツ〳〵言ふだけて、何を言つて居るのか分らない。何うも察する所、年寄同士の嫉妬喧嘩らしい。

「那樣薄情けたつて駄目！　それなら何故這方へ寐に來ないのさ。え、何ね？　重造が歸らないから不用心だつて？　ふん、何ちが不用心だか……いゝえ、駄目〳〵、お前さんの肚は分つてますよ。」

「…………………」

「重造はね、お前さんとは義理の仲だから、言ひたい事も言はずに居るんですよ。血で血を洗ふやうな事を爲たくないと思つて、那れが外聞を管つて居りや、それを又可い事にしてお前さんが……だから暴も起すのさ。今夜だつて言はゞお前さんが遊びに遣つたやうなものだ……遊びさ、今まで歸らなけりや遊びに決つてらね。」

「…………………」

「馬鹿被仰い！　富吉（お雪さんの婿）の家は十里も二十里も有るんぢやありませんよ。橋一つ渡りや直ぐぢや無いか、何が面白くて泊らうと思つて　何うせ洲崎さ。大方又富吉の野郎が唆かしやがつたんだらう。」

「…………………」

「いゝえ、お前さんは親内贔負だから那樣事を言ふんだけれど、那見えて那れてなか〳〵富吉は食へた奴ぢや無い。私が未だ看張つてるから可いやうなもの、些つとでも是て目を放さうものなら、お雪だつて何を爲れるか知れやしない。今度と云ふ今度は、何でも彼でも田舍へ逐返して了はないぢや……いゝえ、深川の店なんか疊んで了ふてんす。些とや密との損得に換へられるものですか。」

お作姐さんの鋒先は婿の方へ逸れた。と思ふと、何か爺さんが言つたのが切懸になつて、今度は嫁の方に惡口が移つた。

「それ、それ、それだから御覽ぢやい！　お前さんが其了簡だからお民が增長するのさ。嫁の分際で、

只の那れが増長だと思ひますか、皆お前さんが増長させるんだ。本當に、私や重造を明盲だと思つてやがる。重造も重造だ、那麼奴は叩出して了へば可いのに、お人好の涕垂しだもんだから……可々、重造が出さなきや私が出してやる。那の小僧だつて誰の子だか知れたもんぢや無い！」と段々聲高になる。

「彌喧しい！」と爺さんは終に怺へかねたやうに呶鳴つた。「年寄の癖に何だ、見つともねえ。貴樣が那樣氣を廻して見るから、何を見ても可怪しく取れるんだ。對手になつてちや限が無えと思つて可い加減に皆が合﨟つてりや、途方も無え事を言出しやがる。馬鹿、可い加減にしろ！」

「可い加減にしろも能く出來たもんだ……」と媼さんも負けずに泣聲を振立てやうとするのを、

「えゝ、靜にしろ！　何時だと思ふ。」と爺さんが譴付ける。

すると、媼さんも有繫に小聲になつて、それから又クド〳〵クド〳〵と何やら口說出した。私は最う睡くなつて、後は聞かなかつた。

翌日から爺さんは隱居家の方で寐る事になつた。而して爺さんと入替りに、私は夜だけ店の方へ行く。皆お作媼さんの圖らひて、昨夜の嫉妬喧嘩の結果である事は言ふまでも無い。

八

翌日は雨であつた。私は店の方へ行つて朝飯を濟して、昨夜の火事迹を見に行かうと思つて小僧に道順を聞いて居ると、嫁のお民さんが、

「此の雨の降るのに――お舍しなさいよ、充らないから。今頃行つたつて、灰と燒木杙しか見るもな有

りやしませんよ。」と言つて留めた。

お作嫗さんは今日は氣分が惡いと言つて寐て居るさうだ。爺さんとお雪さんだけ朝飯を食ひに來て、而してお雪さんが歸る時に、お粥の用意をして持つて行つた。私も一緒に隱居屋へ歸らうかと思つたが昨夜嫗さんが誰の子だか分らないと言つた、其の勝太郎と云ふ今年七歳になる子が、私に繪を描いてくれと言つて放さない。それに重さんも昨夜出たまゝ未だ歸つて居らぬし、お民さんも何だか浮かぬ顏をして居るし、今日は乾度何かあるだらうと思つて。私は勝ちやんを對手に店で遊んで居た。

「勝ちやん、君は何時から學校へ行くね？」と私が聞くと、

「來月から。」と言ふ。

「學校へ行つて、それから何になる　」

「酒店へ行くの。酒店の番頭衆は意氣だぜ。そしてね、私早く大きくなつてお女郎を買ふの！　お女郎は綺麗だぜ。」

私は驚いた、大變な事を言ふ子である。最も酒店の番頭と云ふのは此邊の町家の女小兒の理想で、直ぐ町續きに、新堀の酒問屋が軒を並べて居るのだ。

「賢ちやん、私にお女郎を描いておくんな。」

「お女郎なんて、私は見た事が無いて知らんがな。」

「お女郎を知らんの？　田舍べいだなあ。」と勝ちやんは呆れた。

お民さんは臺所で朝飯の後片付をして居る、爺さんは茶間の長火鉢の前で莨を吹かしながら、何かブツ〳〵獨言を言つては舌打をして居る。其中に、

「お民、俺は些つと富吉の所まで行つて來るからな、那奴も一緒だとすると、店を何うしてやがるか心配だから、それから重造が歸つたら、お前からも能く言ふが可いよ、亭主の道樂を默つて見て居る女房があるものかな。那奴が家を空けるのも、一つはお前の爲向けが惡いからだ。」と然う言ひながら、支度をして出掛けた。

後でお民さんは、私を長火鉢の傍へ呼んで這麼事を言つた。

「賢ちやん、貴方は昨夜の火事の時、起きて被居つたの？」

「起きて見ました。」

「お媼さんが歸つてから大變だつたてせう。」と聲を密める。

私は返事に困つた。

「寐て了つて、能くは知りませんが……何だか遲くまてお爺さんと話してお居てました。」

「然うてせう。本當に困つたお媼さんてすよ。」青く剃つた眉を顰めて、「年が今、年だもんてすからねえ、皆那りや體の所爲て、那頃は女は爲やうが無いんてすよ。」

何の意味か其時の私には分らなかつた。後になつて知ると、其れは女の更年期の事であつた。

「重さんは何うお爲のてす？」と私は恍けて聞く。

「遊びに行つたんですよ。昨夜の騒も元はと云ふと、内のが家を空けたのが起りでさね。今日又行らずの雨とか何とか云つて、可い氣になつて流してるんでせうよ、呆れもしない！」と投出すやうに言つて、お民さんは簪でグイ〳〵頭を掻く。手束ねの銀杏返が崩れて、今日は色の惡い顏に後毛が零れて居る。

「賢ちやんなんかも、今に出掛けるんでせうね。」

「え、何所へな？」

「恍けてさ！分つてる癖に。」とお民さんは笑つて、「だけど、お上さんが出來てからはお舍しなさいよ、可哀さうだから。それにね、惡い病氣でも背負込むと、私のやうに最う小供が出來なくなるからね。」

私のやうな少年を捉へて、這麼事を言ふ姉さんだもの、其伜がお女郎買を志望にして居るのも無理は無いと思つた。

「本當に内のも暢氣ぢや無いか。可い加減に歸つてくれないと、又私が小言を食はなきや成らないわ。お爺さんは私の差向けが惡いからだと言ふんだけど、私が何う爲向けたつて那れが直るもんですか。若い者ぢや有るまいし、何も彼も丁と承知し拔いて遣るんですもの。本當に、這麼家へ來なきや可かつたと沁々思ひますよ。彼處へ嫁付く前に、仕事師の所へ行く事に大略決つてたんですが、つい氣が迷つて這麼家へ來て了つて……私今では本當に後悔してるんですよ。」

灰平して火鉢の灰を奇麗に平したり抑へたりしながら、這麼事を長々と私に聞かせる。私は對手になつて居るのも厭になつたが、と言つて立つには立たれず、足の痛くなつた膝をエゴ〳〵させて居ると、店の

方でお雪さんの聲が聞えた。中仕切の格子障子の隙間から覗くと、お雪さんは小奇麗な扮をして、門先から勝ちやんに何やら言つて居る。勝ちやんは店の板敷て、八公と云ふ眇の小僧と面子を遣つて居る。

「雪ちやん、お使？」とお民さんが聲懸けた。

「えゝ。姉さん、勝ちやんを些いと借りてよ。」

「何らへ？」

「山本先生まで！—獨りぢや私、極りが惡いから。」

「先生のお迎ひ？それともお藥だけ？」

「來て戴くのよ。勝ちやん、さあ、一緒に被來いな、歸りに好い物買つて上げるから。」

お雪さんは勝ちやんを連れて行つた。雨の中に紺蛇目の傘を翳して黄八丈の書生羽織を着て、白い素足に溜塗の足駄を穿いた背後姿が、私は目に殘つた。

「山本先生つて、醫者かな？」と私が聞くと、

「えゝ、厭な先生ですよ。」お民さんは口を歪める。

「醫者を呼ぶ程ぢや、お媼さんは除程お惡いだと見えますね？」

「何有、毎も決りなんですよ。山本と云ふのはね、お媼さんのお氣に入りのお醫者で、正直な話が、お媼さんは築地のお寺と山本先生とに入揚げて了ふんでさ。今にお雪さんまでお使物にするか知れませんよ、厭なお媼さんね。」と小い聲で言つて和やりと笑ふ。

「お雪さんは、でも富さんの方と……」と言ふ中に何故か、私の頬は熱くなる。

「然うですよ。富さんと一緒にして置けば文句は無いんですが、お媼さんが餘計なおセッカイばかりするものですからねえ。富さんも此節は、何だか暴を起してるやうなんですよ。」

「だけど、富さんはお爺さんが三河へ措いて來た自分の子だけなし、然うすると、お雪さんには腹違ひの兄に當る譯で……一體血の續いた夫婦は子孫に惡いと云ふ事を聞いとります。」と私は熱心に言つた。

「ほゝ、貴方は豪い事を知つて居ますね。」何が可笑いのかお民さんは笑つて「ですが……是は貴方にだけの話ですよ。お雪さんはね。其實お爺さんの子だか何だか分らないんですつて。お媼さんがね、田舍に居る頃から最もお腹にあつた子で……讀人知らずなのよ。」

私は始めて聞いたが、然し驚かなかつた。爰の家族に其位の事は希しくないやうに思はれた。家のゴタ〳〵して居る通りに、家庭も又ゴタ〳〵して居て何が何だか更ばり分らぬ。私のやうな明るい而して單純な家庭に育つた者には、唯妙な寄り集りとしか思はれぬ。

最後にお民さんは、這麼事を自分が言つたと云ふ事は、誰にも洩してくれるなと堅く口留をして、而して、

「可う御座んすか。誰にも――勝ちやんにもね。那子は小兒だと思つて、浮りした事を喋らうもんなら大變ですよ。小兒の癖にお媼さんにお佞かつて、有る事無い事何でも口付口するんですからね。だから、

私ても內のても少し內密事だと、那子の居ない所てするやうに氣を付けてるくらゐてすから。」と注意した。

午少し前に重さんはブラリと歸つて來た。門口を入ると、行成、

「八公、何だ此の板間は！俺が些つと目を放すと直ぐ骨を惜みやがる。サッサと片付けて掃いて了へ！馬鹿。」と小僧に呶鳴付けて、店の上口から「やい、民！民は何うした？雜巾を持つて來い。雨の中を來りや足拭の要るぐらゐは、言はなくなつて氣を利かせろ、鈍痴氣め！」

「おハコだよ！」お民さんはペロリと舌を出して、「小言でも言つて入らなきや、極りが耻しいもんだから……」

九

私は午飯を濟して隱居家へ歸ると、お作媼さんは青い顏をして寐て居た。而して寐床の中から、嫁や爺さんの讒訴を洗ひ浚ひ聞かせて、而して私に能く氣を付けて居て、若し變な素振でも見えたら知らせてくれと賴んだ。午前はお民さんに長々と聞かされ、午後は又媼さんに穴々と愚痴られて、私は机の前へ坐る事も出來ず、倦ざりして了つた。

其晩夕飯に店へ行くと、私と一緒に爺さんは先に濟して、お雪さんと入替るやうに隱居家へ行つた。今夜から私は這箇に寐るのだ。私は店の火鉢へ來て、重さんや勝ちやんや八公やと無駄話をして居ると、其所へ婿の富さんが遊びに遣つて來た。お作媼さんは田舍者だのポット出だのと惡口を言ふが、

私の見た所では、色の淺黑い小意氣な若衆である。唐棧の着物に刺子の前垂を弛目に緊めて、八丈の長襟の半纏を端被つて居る。詞も悉皆東京辯で、三河訛なぞ少しも無い。

「さあ、お掛けなさい。」と重さんは膝を寄せる。

「大寄りですね。」と富さんは腰掛ける。

「爺さんが行つたさうだね。」

「いや、跋が惡うがしたぜ。居るんですか。」と奧を指す。重さんは首を掉つて、

「搾られたね。」

「搾られるも搾られないも――半日聞かされましたよ。」

「可愛がられた報ゐさ。」

すると、傍に居た小僧の八公が、出拔けに大きな聲で笑つた。

「馬鹿！何を笑やがるんだ。」と重さんが譴付けて、「手前湯へ行つて來い。勝ちやんも行つて來な。」

「うゝん、私今夜行かなんだ。昨夜行つたから。」と勝ちやんは言ふ。

それから、芝居の話や角力の話で暫く市が榮えたが、富さんは何かの話から私の年を聞いて、

「十五おや最う、些いと女の子が目に付く頃ですね。」と言ふと、

「然うさね。八公なんざ、最う一昨々年あたりから聲變り爲やがつたからね。」と重さんが笑ふ。

八公は今年十七である。

「富さん、一度八公を連れてつてやつてお下んなさい——然ぞ溺れりやがるだらうな。」
「馬鹿言つてらあ。」と八公は赤くなる。
「私も一緒に連れてつておくんな。」と勝ちやんが言ふ。
「何だ、戯けた餓鬼だぜ、はゝゝ。富さんちよいと……」と言つて、重さんは何やら富さんの耳の端で呼いた。
富さんは頷いて、而して二言三言無駄口を叩いて、プイと出て行つた。奥ではお民さんもお雪さんも飯が済んで、臺所でガチヤ／＼洗物をして居る。
「さあ、勝ちやん、お前最う寐な。八公、手前早く湯へ行つて來ねえか。」と言付けて、私にも、「賢ちやん、貴方も八公と錢湯へ行つてなさい。而して早く寐ませうよ。今夜から貴方も這箇ださうだね、朝早うごすよ。」
て、私は手拭を持つて八公と一緒に出掛けた。湯屋は二町ばかり先の隣町である。途中まで行つてから、私は今夜出す意りで書いて置いた手紙の事を思出したので、八公に先に行つて居るやうに言置いて、手紙を取りに引返した。雨は霽つたが、道は泥濘つて歩き惡い。曇つては居るが月夜で、其所等が薄明るい。生暖い汐風が戰々と吹いて、足袋を脱いだ素足の冷々と心地好い晩である。私は曉られるやうな氣持で、何とは無しに唯嘻々と歸つて來ると、表戸を下した三河屋の店の暗い軒下から、二人の人影がスッと出て、商船學校の方へ消えるやうに曲つた。直覺とでも言ふのか、私は直ぐ然うと

察した。て、胸をワク付かせながら、密と店の角から商船學校の表門の方を透して見ると、曲つた直ぐ其所の板塀に靠れて二人は立つて居た。案の如く富さんとお雪さんとで、私はハッとして思はず背後へ退さつた。すると、向うでも直ぐ氣が付いて、

「誰？賢ちやんだね。」聲懸けたのは富さんで、ツカ〳〵と私の傍へ寄つて來て、「賢ちやん、貴方誰に言つても可いが、唯ね、お媼さんと勝ちやんだけには內密にしといてお下んなさいよ、ね、可うがすか、お願ですよ。其代りにね、今度賢ちやんに好い女を取持つから、可いかね。」と小聲で言つた。

私は何だか知らぬが、此時ぐらゐ腹の立つた事は無かつた。而して富さんよりも殊にお雪さんが憎くかつた。私は肩に懸つて居た富さんの手を振放すと、手紙の事も忘れて、行成今來た道を駈出して行つた。湯屋から七八軒手前の何やら稻荷の前を通る時、其所の鳥居の傍の屋臺店から、

「おい、賢ちやん〳〵、おい君、爰だよ。」と八公が呼留めた。私が立留ると、

「賢ちやん、君も燒鳥食はないか。」

言はれて氣が付くと、醬汁と脂肪の火に焦げる匂が香ばしく鼻に來る。見ると、屋臺の上の大皿に串刺の燒肉が並べてあつて、鼻缺の爺さんが澁團扇をバタ〳〵やつて居る。何だか薄穢くは思つたが、餘りに匂が好もしいので、私も衝い手を出して一串試みた。匂ほどには旨くない、それでも二串食つて、さて行かうと言ふと、

「今日は賢ちやん、湯は舍さうよ。」と八公は言ふ。

「何故、折角爰まで來といて。」

「でも、湯錢が無くなつ了つたもの。曩頃かつた賢ちやんのも、一緒に今燒鳥を食つ了つた。」

八公め、贅澤を遣ると思つたら、湯錢で燒鳥を食やがつたのだ。八公は稻荷の社内の御手洗へ行つて、其れへ手拭を突込んで、ヂャブ／＼頭と顏とを濡らした。恁うして家の手前、湯に行つた振をするのだ。私にも遣れと勸めたが、私は有繋に不氣味で、唯手拭だけ濕した。

其夜から私は八公と一緒に店の二階で寐た。二階と云つても、天井も張らない言はゞ屋根裏で、南京米の空袋が壁際に積重ねてあつて、糠と鼠の糞とで歩くも氣味惡い。それでも疊だけは敷いてある。八公は自分の寐床を取らずに、古襦袢一枚になつて私の中へ潜ぐり込んで、

「一緒に寐せてお下んな。俺の蒲團は濕ぽくて可けねえ。」

私は一緒に寐ながら、宵に見た富さんとお雪さんとの事を談すと、

「うん、那樣事は始中終さ。知らねえのは媼さんばかりよ。」と八公は言つた。

恁うして毎晩八公と一緒に寐て居る中に、私は虱を脊負されて、後になつてから殖えて困つた。

十

翌朝お雪さんと顏を合せた時、私は甚麽顏をするかと氣を付けて見たが、天で昨夜の事など覺えも無いやうに、氣も無い顏をして居る。それからと云ふもの、私は何だかお雪さんが憎いやうな忌々し

いやうな、自分でも分らぬ程苛々した心持がする。それにお作嫗さんは床に就いて居るし、と云つて店の方へ行けば、お民さんの愚痴を聞かねばならぬので、私は毎日のやうに出歩いてばかり居た。島田先生を訪ねたり、藤井や野崎を誘つたり、時には又一人で九段だの丸の内だのと遊び歩いて居た。けれど、月が替つて、其上旬神田の某中學校の入學試驗を受けると、成蹟は受驗者中の第三番と云ふ上出來で見事に入學した。其頃の風で、私は小倉の袴を脛限に穿いて、赤い靴下に半靴、軍人の持つやうな塗皮の鞄を肩に掛けてテク〳〵通つた。

何しろ靈岸島から神田の錦町まで通ふのであるから、朝は七時前に家を出て、午後は五時近くでなければ歸れぬ。飯を食ふと直ぐ最う夜で、私も暫く隱居家の方へ足踏しなかつた。すると、或る土曜日の午、午前中の課業が敎師の缺席で一時間早く終つて、十二時前に家へ歸つた事があつた。私は數學が人より遲れて居たので、今日から明日の日曜へ懸けてミッチリ其れを勉强する意りで、暫く目に隱居家へ行つた。

入口に見慣れぬ男の駒下駄が揃へてある。私はゝてなと思ひながら茶間へ通ると、長火鉢の銅壺に燗德利が入れてあつて、奥の六疊で男の笑聲が聞える。格子戶の音にお作嫗さんが立つて來た。病揚りだと云ふのに、酒でも飮んだものと見えて、目の縁を仄と赤くして居る。一口に嫗さんだの、寺詣だのと云ふと、如何にも年寄染みて聞えるが、年を云へば未だ四十七。今日は髪を櫛巻にして、黒縮緬の羽織をゾロッと引被けたのが厭らしく色ぽい。

「賢ちやんかね。今日は學校は？」

「今日は土曜日で半日です。お客さんかな？」

「先生ですよ。今日は私の床揚の祝ひに一口差上げてるのですよ。賢ちやんも那箇へ來ませんか。」

「私は酒は飲めませんて……それに今午飯を食べたばかりだて……」

「然うですか。そんなら爰でお燗番をして居て下さい、お鮨でも持つて來て上げますから。」

て、お雪さんが手鹽皿に鮨を盛つて持つて來てくれた。是も酒を強ひられたものと見えて赤い顔をして居る。火鉢の前にベツタリ坐つて、頰の熱てるのを兩手で摩りながら、

「先生が無理強ひなさるもんだから……カツカとするわ。」

「お雪、お雪や。」と媼さんが呼ぶ。

「はい〳〵。」と蓮葉な返事をして、お雪さんは銅壺から德利を出して持つて行く。

私は店へ歸らうかと思つたが、然し何だか氣になつて歸る事も爲得なかつた。鞄から數學の本を出して、長火鉢の傍で遣り懸けて見たが、奥の話が耳に付いて駄目だ。私は其の先生と云ふ奴は甚麽醫者かと思つて、紙門の間からチラ〳〵見て遣ると、年は三十ぐらゐだらう。髮を長目に別けて、薄い鰌髯を立てゝ、金縁の眼鏡を懸けた色の白い男で、私の目には何だか輕薄らしく見えた。

何の話からか、醫者はお作媼さんの年を聞いた。すると媼さんは、

「最う貴方、婆で御座いますよ。」

「丁度ぐらゐですか。」
「まあ可哀さうに、五十？」
「いゝえさ、四十——それとも一つ二つ出てお居でゞすか。」とチャラッポコを言やがる。
「有難う御座いますね。何かお奢り申しませうか——ねえ、雪。」
「おや、四五ですかな。それにしてはお若い。お雪さんの方はお幾歳です？」
「是は十九て御座います。何うも年ばかり加つて爲やう有りません。」
「爲やうが無い事が有るものですか、十九ぢや盛りです。最うポツ〳〵お嫁に行つても可い頃ですな。何うです？お雪さん、私が好いお婿さんをお世話しませうか。」
お雪さんは甚麼樣子をして居るかと思つて、私は紙門の間から目を光らして覗いた。別に變つた樣子も見えない、酒で仄のり染つた顏を少し俯けて、唯和こ〳〵笑つて居る。
「ね、お世話しませうか。」
「何うぞ、是非。」と媼さんが代つて答へて、「時に、先生の奥樣はお幾歳で被居いましたね？」
「知つてる癖に、那樣意地の惡い事を聞いちや困りますな。」
「いゝえ、那樣譯ぢや御座いませんが……少し御手元でお願ひしやうかと思ひまして。」
「何をね？妻は最う三十四ですよ。私より三歳上だ。」
「然うで被居いましたかねえ。實は是も、家に愆うして置いても爲やうが有りませんから、少しお手元

にても置いて戴いて、奥様に爲込んで戴かうかと然う思ひまして、ねえ。」

「それはお易い事さ。だが、妻は那通り病身で、月の半分は小田原の方に行つて居るから‥‥然しそれでも可ければ、何時でもお來でなさい。」

「おや、お願ひしたら何うだい、え丶、お雪。」

「は、何うぞ。」とお雪さんは事も無げに然う言つて了ふ。

お民さんの言草では無いが、婣さんの使物になつて、見す〱人身御供に揚がるやうなものだ。それをお雪さんも心付かぬ事もあるまいに、何と云ふ無考な人だらう。婣さんの言ふなり放題、全で自分と云ふものは無いも同じだ。私は襖越しに聞いて居て呆れた。體を然うして了つたら、富さんとの仲は何うする意りだらうと思つたが、其後も矢張富さんと出會つて居るのを些い〱私は見た。

這麼風で私もお雪さんに對する戀(?)も嫉妬も段々醒めた。其中にお作婣さんが、愈よお雪さんを醫者の山本へ行儀見習に住込ませやうと言出した。すると、爺さんが第一に反對する、其れが元で婣さんが又悍り立つて、家中がゴタ〱揉め出した。爺さんに食つて懸かる、嫁には當り散らす、重さんはそれを煩がつて家を飛出す。其中でお雪さんが富さんと逢引して居る事を、勝ちやんが何時か知つて婣さんに告口をする。婣さんの火の手は今度はお雪さんと富さんに移つて、泣くやら喚くやら、狹い薄暗い糠だらけの家の中は、誤解と猜疑と惡感情とで混亂した。而して小僧の八公は皆の目の屆かぬのを可い事にして、小錢を偷ねる。私は又虱ばかり殖えて困つた。

私も是では到底も勉强が出來ない。それに靈岸島から神田まで通ふと云ふ事は、なかなか難儀て、天氣の悪い日なぞは衝い遲刻勝にもなる。て、私は國元へ委しく其譯を言送つて、神田の下宿へ移つた。

十一

それからの私は隨分波瀾が多かつた。先づ學校の違つて居る事が父に知れて、擦つた揉んだの揚句、漸と島田先生の取做して歸國せずに濟んだ。三年目に高等中學の入學試驗を受けて見事に落第した。それが元て頽れ出して、遊びは覺える酒は飮む、色々な拵事をしては國元から金を取寄せたが、結局父も愛相を盡かして學資を絕つた。然し田舍の伯母の情て、月々食ふだけの金を貢いで貰つて、コツ〳〵圖書館へ通つたり、短篇小說を書いて見たりして居た。其頃は最う藤井にも野崎にも絕交されて了つて、賴りに思ふ島田先生は、外交官試驗に及第して朝鮮へ赴任して居た。靈岸島の三河屋へは、頽れ出した當時一二度金を借りに行つて、其まゝ最う足踏しなかつた。

三河屋に居た時から丁度七年目てあつた。二三年前から私は或る有名な文學者に拾はれて、其人のお蔭て漸と世中へ出る事が出來た。て、私は少しばかりの手土産を添へて、三河屋へ借金を返しに行つた。其日は土用の最中てあつた。私は瓦斯絲縞の妙な新機の單物に、牛込の改代町の古着屋て買つた白博多の帶――と云ふと豪さうだが、私の先生が蛇の脫殼見たやうだと評された、變に白ぽい三圓何がしの博多帶をキウと緊めて、糊て持たしたペラ〳〵の絽の羽織を一着して、(夏羽織と云ふものは生れて始めて着たのだ)、先生の家の出入の俥に乘つて、一廉の紳士氣取て出掛けたものだ。其頃最う三河屋は八丁堀

へ引移つて居た。普請も新しく、以前のやうな狹い暗い家では無く、手廣く而して綺麗に住つて居た。店には知らぬ顏の番頭が坐つて居たが、後で其れが入公だと分つた。家込みではあるが、それでも風通しの好い八疊の座敷へ通されて、お民さんが洗濯の濡手を拭ひながら出て來た。下女も居る。生憎爺さんも重さんも店の用で出て居て、勝ちやんは小學校から未だ歸らぬと言ふ。皆達者で變りは無いさうだ。お民さんも以前と比べて肉附いて、髮も丁と圓髷に結つて、立派な内儀振になつて居る。私が居た頃には、お作媼さんの口が煩い爲めに、若い女盛を髮も滿足には結はなかつたものだ。

「貴方の被居る頃には、本當にお耻しい事ばつかりで……お媼さんも貴方、三年前に到頭亡くなりましてねえ。それからはまあ、那いふ厭なゴタ〳〵も有りませんで、今では内のも悉皆緊りましたよ。尤も其筈でせうよ、勝ちやんが最う高等二年なんですもの。」とお民さんは感慨深さうに言つた。

「お媼さんは亡くなりましたか。然うですか！」と私も有繋に感深かつた。「それで、お雪さんは唯今何うなさいました、矢張富さんと御一緒で？」

「いゝえ、富さんは今深川の方でお上さんを貰つて、店も繁昌するし、小兒も一人有りますが、氣毒なのはお雪さんですよ。貴方が家に被居らなくなつて直きでした。お媼さんが强つて那人を山本へ――覺えて被居いませう、山本と云ふお媼さんの贔負のお醫者――那のお醫者の所へ住込ませて、今では新富町に圍はれて居ますよ。爲やうが有りませんわねえ、那して居る中に段々年は加りますし、お爺さんも内のも心配して居るんですが……最う貴方、今年二十六になりますよ。」

二十六！最う然うなるかなあ！那の若くて美しかつたお雪さん！私には言はゞ初戀の人だ。懷しいも懷しいが、殊に定つた夫も持たずに、人の妾になつて圍はれて居ると云ふのが、私の好奇心を動かした。私は歸りに入錢の海苔を五帖買つて、車夫の澁くるのを無理に新富町まで廻らせた。午前に牛込の先生の家を出て、三河屋で二時間ばかりも永待させて、最う午である。暑さも暑し、車夫の澁くるのも無理は無い。私は腹が減つた。然し無けなしの小使錢で海苔を買つて了つたので、車夫も私も午飯を食ふ事が出來ぬのだ。

お雪さんの家は新富座の裏の狹い路地の奥だつた。妾宅とでも云ふと、船板塀に見越の松と決り文句にもあるやうな、小意氣な構のやうに思はれる。私も然う思つて訪ねて行つた。新富町邊の裏通と來ては、日本橋の濱町と相讓らぬ紛らはしい土地で、路地やら拔裏やら全て八幡不知の藪のやうだ。交番で聞き、蕎麥屋で聞き、酒屋で聞き、漸と搜し當てたのは、俥も入らぬやうな路地の奥の、亞鉛屋根の古い小い仕舞家であつた。門に吊下げた目隱しの簾を潜つて、三尺の土間へ入ると、十四五のお出額の女がジロ〳〵訝しさうに私を見る。

「お雪さんはお宅ですか。私は先年靈岸島でお世話になりました松村賢次ですが……」と言ふと、小女は默つて引込んで行つた。

上口が四疊半で、其所に長火鉢やら茶簞笥やらゴタ〳〵並べてある。隔ての襖を拂つて、次が六疊、其横に今一間小さい間があるやうだが、土間からは見通されぬ。小女は其所へ入つて行つた。すると、

暫くボソ〳〵と呼交す聲がして、旋て小女は何うぞお上り下さいと言つて來た。六疊へでも通すかと思ふと、然うては無くて、上口の四疊半へ鯉の浮形の附いたペタ〳〵の油團を出す。私は座に着いて、早速先づ扇を使つた。何しろ目の眩るやうな暑さである。屋根は亞鉛葺だし、路地の中で風は通さぬし、天井は低いのに家は狹い。それへグラ〳〵煮立つた番茶を出されて、咽が乾くから飲みはするもの丶、直ぐ汗になつてダク〳〵流れる。着物を通して白博多の帶へ浸染みさうだ。

着物でも着更へて居たと見えて、暫く經つてから漸とお雪さんは出て來た。見違へる程變つて了つて居る。途中で逢つても恐らく氣は付くまい。圓髷に赤い手絡をして、着物の格でも帶の色でも若作りにはして居るが、年は爭はれぬ。此春大病ひをしたと言ふが、成程色澤も惡いし、窶れて居る。あ丶、是が昔の那の若い美しかつたお雪さんかと思ふと、衰へ易い女の色香の儚さを沁々感じた。

故々訪ねては見たもの丶、さて何の話があらう、昔話をすれば却て先方に極りの惡い思をさせるばりだ。お嬶さんはお氣毒な事だつたとか、一雨欲しいとか、那樣事を充らなく話して居る所へ、白リンネルの洋服を着た一人の男がヌッと入つて來た。默つて靴を脱いで上つて、私の姿をジロリと見て、而して默つて奥の其の見通の出來ない間へ入つて行つた。無論お雪さんの旦那だ。顏は悉皆變つたが、金緣眼鏡だけは昔に變らぬ山本先生である。

「雪、雪。」と鋭い聲で呼ぶ。

お雪さんは慌て丶立つて行つた。私は小女の手前も甚だ跋が惡い、汗ばかり拭つて居た。すると、お

雪さんの聲で小女の名を呼んて、金盥へお冷水を汲んて來るやうに命じた。小女も立つて行つて、私獨り照れ切つて居た。其中に小女が用を濟して還つて來たので、私は例の海苔包を出して、

「何うも、些つと伺ひまして大層お邪魔をしました。是は充らんものですが……」と言つて歸り支度をすると、小女は急いて其包を奧へ持つて行つた。

其間に私は土間へ下りて下駄を穿くと、お雪さんが慌てゝ出て來て、

「唯今は結構な物を何うも……最うお歸りですか、誠にお早々樣で。」

「いえ、是から些つと外へも廻らねば成りませんから……然やうなら。」

私は逃げるやうに路地を出て俥に飛乗つた。車夫はブツ〳〵訴しながら太儀さうに挽出した。

其後も八丁堀の三河屋の前は一二度通つたが、私は寄りもしなかつた。相變らず地道に遣つて居るらしい。お雪さんは何うしたやら――今年最う三十八てある。(完)

祖父母

田山䕃

祖父母

田山花袋

『本當に困つた婆樣だ。お前のやうなかんの惡い盲目はありやしない!』

苦々しげに、腹立しげに、齒嚙をして祖父の罵るのを私はよく聞いた。と謂つて、其のかんの惡い盲目の祖母に酷く當るのではなかつた。手は引いて遣る、見えなくなつたものは捜して遣る、日が當つたと謂つては暖かい處に伴れて行つて遣る。傍で見て居てよくあゝ世話が屆くと思ふ位であつた。

天氣の好い日は、祖母は大抵椽側に出て日向ぼつこりをして居た。雜巾を刺すのと、糸を綵るのが仕事で、鼻唄を小聲で唄ひながら、頻りに襤褸をひねくり廻して居た。鋏、糸、針——殊にこの針が太い長い針で、手さぐりで糸を通すことの出來るやうに大きく穴が明けられてあつた。白髮頭を汚い鼠色になつた手拭で包んで、猫のやうに背を丸くして、時々疲れたやうに腰を延ばす。齒がすつかり拔けて了つたので、口の周圍の緊が無く、物を食ふと顏の面が半分位動く。

祖父に罵られても、大抵は默つて居る。鼻唄を續けて居る。そんなことは何うでも好いと謂つた風だ。でも何うかすると

『早く御參が爲たいナア。私のやうな業法人は早く死ねねえて困る……』

などゝ云ふ。敢て祖父に反抗する積ても無い。心から左樣思つて居るらしい。祖父はまた祖父で、「本當に、お前を後に殘したくない。一日でも好いからお前を先に死なせ度い」から云ふのが口癖であつた。

今でも眼前にちらつく。八疊二間の藁葺の古屋、南に面した椽側が長く續いて、祖母の丸い背に相對して五十坪ばかりの庭が前に展けられてある。霜に染つた錦木の實、目白がそれを啄きに來るのを、成長くなつたら、おとりて捕つて遣らうと私は幾度も思つた。松樹、椿、柿、其柿は御所柿で旨かつた。醬油樽を埋めた小さな水溜には、鮒や鮠やたなごの赤いのなどが放たれてあつた。庭と畑の境に丈の高い茶樹が並んで、其向ふには青々とした菜の畑——

母親は茶の間の八疊に居た。長火鉢、簞笥、鏡臺、古い汚い室で、棚にはがらくた道具が一杯載せられてあつた。朴の樹の大きい裁物板、鋏、針箱、賃仕事に忙しい母親は少しの間とても針を留めなかつた。

祖父母は其頃もう餘程老いて居た。祖父は七十五六、祖母は七十二三、私の九歲位の時まではまだ健全て、雨の降つた日などには、祖父は私を結付帶で背負つて、學校の送迎をして呉れたものだが、段々元氣が無くなつて其頃はもう餘り小言も言はなくなつて居た。

飯時分になると、祖父は祖母の傍に行つて、「婆さん、飯だ。立たつしやい」といふ。『もう飯かナ、早いナ、日が短いナア』と祖母は言つて、鋏は鋏、針は針、さし懸けた雑巾は雑巾と、整然と所在の分る

やうにして置いて、膝の上の塵やら埃やらをとん／＼と叩いて、そして立上る。祖父が手を執る。そろそろと蟲の這うやうに歩いて、躓かぬやうに閾を上つて、そして茶の間に行く。

長火鉢の傍に大きい古風な處々剝げた黒塗の膳が二個。祖父の飯碗は非常に大きかつた。祖母は膳の前に敎へられて坐つて、飯碗と箸とを鳥渡觸つて見て、さも滿足したやうに顏を上げる。晴々しい氣色が何處となく顏に行渡る。眼はひたと盲いて居るが、輪廓の正しい、鼻の高い、額の廣い顏で、若い時は美しかつたらうと思はれる。殊に色が白い、思切つて白い。誰だか、お婆樣のあの美しい眼が潰れて了つて……と言つたのを私は子供心にも覺えて居た。其眼は非常に美しかつたさうだ。

母の盛つた飯碗を祖父が先づ受取つて、祖母に手渡しする。これが汁で、これが肴でと言つた風に其時其時の菜を敎へる。祖母は箸を取る前に、丁度基督敎信者のお禱と言つたやうな不思議な眞似をして、そして飯を食ひ始める。

祖父は昔の人で、中々大食であつたが、祖母は極めて量が少なかつた。飯よりも菜の旨いもの珍らしいものを喜んで食つた。最後の一椀を終る頃、祖父が、

「お幾！お飯か？」

と聞く。

いかな時でも、「お幾、もうお茶か」と言つた例が無い。「情愛があるのだねえ、お茶かと言つたことは唯の一度も無いよ」と若くして父に死別れた母は此老夫婦の睦しさを感心して居た。

茶になると、祖父も、祖母も、定つて揚枝を使ふ。其揚枝が大きくつて黒い。これは祖父が閑暇に任せて、茄子の枝を削つて置くので、『お幾、お幾のを削つて置いたよ、揚枝は新しいのに限るナア』などゝ互に語り合つて居る。

食後の會話は平凡なものだ。近所の話、作物の話、東京に遊學に出て居る孫の話。

『早くナア、先藏（孫の名）が仕上げて、東京に行かれるやうになると好いがナ』

『もう直きだア』

『まだ直きなものか。今は學問々々ッて難かしいからナ。昔なら、劒術の免許の一つも取れば、勤めに出られたものだが……』

『本當さな、鐐（私等の父の幼名）など十五で一人扶持貰つたんだから……殿樣がお廢しになつて、侍でも平民でも今のやうにかう一緒になつては……』と言ひつゝ、少し途切れて、『それにお節（母の名）も大變ぢやてなア。鐐に早く死なれたばかして、老人の世話を燒かせて……。早くお參が出來れや好いけど、それも儘にはならねえてナア』

と祖母は笑つた。

『ナアに、祖母さん。先藏が立身するまで生きて居て、東京に行つて、旨い肴の一つも上げますから』

『なアに、はア、私等は東京などへ……もうお參さへすれヤ』

要するにこんな話だ。暫くすると、祖父は祖母を伴れて奥に行く。母は裁物板の前に坐る。やがて椽

側から祖母ののどかな鼻唄が春の日の蜂の唸聲のやうに間斷なしに聞えて來る。

祖父は唯遊んで居るのも退屈だと言ふので、內職に紙袋を張つた。舊式な天神机に古い書籍や反古の紙を伸して、終日倦きずに刷毛と竹篦とを動かして居る。そしてそれが二三百枚も溜ると、町に賣りに行く。

乾物屋が主なる得意で、何でも四五軒はあるらしい。それで得た錢は、酒を買ふ補助にする他、祖母と吾々孫共に今阪饅頭を買つて來て呉れることゝ、なまり節を買つて御馳走することゝに費される。其頃は汽車などの便利が無いので、海に遠い此田舍町では、海魚などは滅多に食ふことが出來なかつた。肴と謂つても精々なまり節か目の赤くなつた鹽鰯位のものだ。それを一年に五度か六度、祖父が紙袋を張つた錢で御馳走して呉れるのを、吾々孫共は喜んで樂みにして食つた。

て、其紙の材料を得る爲めに、祖父は紙屑屋、古本屋から古い書籍を多く買つた。丸い大きい屑籠を庭先に下して、紙屑商が祖父といろ〳〵懸引をして居るさまは、今でも眼の前に見えるやうだ。古本は小學讀本に四書五經、それに小說本が多かつた。近松の淨瑠璃本を其中から發見して、是は袋にして了ふのは惜しいと言つて、後々まで讀んで面白がつて居た。淨瑠璃と言ふものは面白いものだ。人情がよく書けてある。爲めになることが多いと言つて居た。其時の記憶では、桂川の二字が私に讀めた。桂川連理柵を祖父は其古反古の中から發見したのだ。

午後四時頃になると、豆腐屋が寄る。毎日一個づゝ屹度買ふ。これが祖父の晩酌の料だ。祖父の晩酌――私の覺えてからは二合がお定りだッた。子供が喧しいと謂ふので、椽側の一隅、庭の樹や碧い空の見える處に、座蒲團と御膳とを持つて行つて陣取つて、小さな陶器の火鉢に、行平鍋を懸けて、一個の豆腐をヤッこにして、ぐつ〳〵と煮る。夕月の空を仰ぎながら、一杯一杯と嘗めるやうにして盃の酒を啜つた。これに越した快樂は世に無いと言つた風だ。

祖父は有名な酒客であつた。酒の上の喧嘩口論、それを何の位行つたか解らなかつた。親類でも祖父の酒癖の悪いのには恐毛を振つて居た。母もつく〴〵困り果てゝ居た。けれど私の覺えてからは、もうそんな亂暴をしたのを見たことは澤山無い。お定りの二合が無くなる頃には、日がもうとつぷり暮れる。顔は可成に紅くなる。舌が稍々縺れて話が難かしくなる。茶の間に來て夕飯を食ふ。祖母は其頃既に食事を濟して、茶を飲んで例の大きい揚枝を使つて居る。

夕飯が濟むと、すぐ祖母の手を執つて、奥に引込む。夜の物を敷くのに、滅多に母の手を煩はしたことがない。祖母のと自分のとを並べて敷いて、寢衣を着改へて、便所に行つて、さつさと寢て仕舞ふ。時には、

「婆樣、まだ起きてるか？」

などと聲を懸けることもある。祖母は夜も晝も同じ闇なので、洋燈を着けない暗い中に、障子を前にして孑然と坐つて、晝間爲殘した雜巾刺をせつせと遣つて居る。鼻唄の調子が闇に響く。

彼岸とか節句とかには、母の會計から別に酒を買ふので、祖父は、夥しく醉ふことがある。寢かして

も寢かしても起きて來て仕方が無い。さうかと思ふと厠に行つて倒れて起すことも何うすることも出來なかつたことなどもある。そして其の醉つた時には、定つて昔流行つた小唄らしいものを歌ふ。

『可愛いあの子に――』

といふ文句のある唄だ。『そら、あの可愛いあの子が始まつた』と謂つては、母はいつも笑つて居た。

かういふことが一度あつた。

醉つて、醉つて仕方が無い。母の力では何うすることも出來ない。床を取つて、寢衣を着せて遣つても起きて來る。そしてもつと酒を飮ませろ……といふ。

祖母が留めると、

『お幾は默つて居れ。盲目は危いから傍に行つて居れ!』

と一喝する。

『本當に困るねえ、お爺さんは――だからそんなに飮みなさんなとあれ程言ふのに……酒を飮むと何時でもあゝて……』

祖母は暢氣な調子だ。鼻唄がすぐ出る。

母はかういふ時には、いつも近所に遁げて行くのが例だ。其時も母は私を連れて戶外に出た。けれど醉漢と盲目とを放つて置くのも心配なので、寒い暗夜を雨戶の外に立つて內の樣子を覗いて居た。

『お節、お節』

と戸内では呼ぶ聲がする。

返事が無いので、

『お節、お節！』

と、茶の間に來たらしい。

『何處かに去せやがつた、あの女め』

げい——ッといふ音がする。

『お節？　去せやがつたナ』

『お爺樣、そんなに醉つて‥‥もう澤山ぢやないかね』

ゆつたりした祖母の聲だ。

『去せやがつた？』

と奥の室に戻つて來た。

『お幾、お幾！』

『何だね？』

『去せやがつた。年老をつたナ、お幾。年を老つては駄目だ。』

『お爺樣の御株が始まつた。』

『お株たア何だ』と言つたが、すぐ調子を落して、『お幾、本當に年老つちや駄目だ。あの時分は‥‥お

幾も美つ……くしかつたものぢやのう。……可愛いあの子に――』

と例の唄を歌つた。

祖父はぐつたりとした様子て、暫く聲が聞えぬ。

少時して、また『お幾、お幾』

『何だね？』

『お幾、もう寢やうかナ』

『えゝえゝもう御やすみなさいよ。醉ばらつて本當に仕方が無い。』

『むゝさうか、醉ばらつて仕方がねえか。嫌はれたナ、よし、よし、女房にも嫌はれた。寢やう、寢やう』

起上つた氣勢だッたが、ドッと物の倒れた音がけたゝましく聞えた。

『あ、痛〳〵』

祖母の叫び聲だ。

●

倒れた祖父はすぐ起上つたらしかつた。

『ほ、これはしまつた』

『しまつたぢやないよ、本當に人の頭に石頭を打付けて、おー痛、痛い』

『これは御免！』

「御免ぢやないよ、早くおやすみなさいナね、本當に剛つく張の爺樣だ！」

と優しい祖母も遂に怒つた。

「寢やう、寢やうぢや」

と言つて、祖父も今度は本當に床に入つたらしい。暫くして、『可愛いあの子に――』といふ唄を歌ふ聲がする。五分も經つと、漸く靜まつたらしく、四邊がしんとする。夜風が寒い。

「もう寢たやうだね」

と母が私に囁く。

『あゝ――祖母さんの鼻唄が聞える』

『さうだね』

で、母と私は戸内に入つた。

祖父は滯ては其生立は輕い身分だッた。けれど後には祖父の名を藩て知らぬものはない位に立身した。飛鳥も落すやうな江戸家老の御氣に入りて、萬事家老の下にあつて、目覺ましい働きを爲た。封建時代ては、身分といふことが一番大切で、輕い處から鎗一本の士分になるのは容易のことてない。その容易てないことを祖父はした。棒つかひの達人て、弓術の達人て、それて數學に非常に達して居た。勘定方から立身して、後には代官となつた。

祖父は此家へ養子に貰はれて來たのだ。來た時には家は貧乏で、道具などゝいふものは少しも無かつた相だ。古い行燈と本箱と茶釜、祖父以前の家具で今に殘つて居るのは、此三個ばかりである。其養家に娘が一人居た。其娘は老いてまだ生きて居た。中元には佛樣にお參りをすると言つて、よく家に來たことがある。白髮の顏の赤い好い婆樣だッた。祖父は此家附の娘を振つて振つて振り拔いたのだ。家では無論祖父に其娘を添はせる積りであつたが、祖父は何うしても厭だと謂ふ。あの娘を女房にする位なら、こんな家には居らん、今からでもすぐ出て行くといふ。けれど其娘が醜いのではなかつた相だ。裁縫もよく出來たし、性質も發明だし、行儀も正しかつた。祖父の此娘を嫌つたのは別に理由があつた。同じ弓術の達人の家に美しい娘が居た。祖父はそれに戀ひして居た。娘も祖父を戀して居た。問題は中々難(むづ)かしかつたが、漸く家附の娘は他に嫁入させることゝなつて、祖父は其の戀せる美しい娘を得た。

祖母は其美しい娘であつた。

祖母は性質の優しい、何處までも從順な、女らしい女であつたといふ。夫を扶けるといふよりは、夫に扶けられて松に縋つて生存する蔦と言つたやうな質であつたらしい。盲目(めくら)になつたのは三十七歳の時で、母などの話に聞くと、吃驚(びつくり)して、逆上して、それから眼を病(わづ)らつたといふことである。それは丁度私等の父が十八九歳の頃で、劍術に行くので、朝早く起きて飯を炊いた。父は竈の前で火を燃やす、祖母は流元の傍で味噌を磨つて居た。祖父は江戸在藩で其時不在であつたそうだ。不圖祖母は屋根裏を掠めて一道の光のかゞやくのを見た。あゝ今お天道樣が上つたなと思つた。けれどこれは朝日の最初の光

てはなかつた。父の燃した竈の火が、餘り勢好く盛になつたので、それが低い屋根裏の蛛の巣に傳はつたのであつた。て、其の小さい藁葺の一軒屋は朝食前にぺろ〳〵と燃えて了つた。祖母は吃驚して氣絕したのを父が負つて辛うじて戶外に出た。此時から祖母の弱い性質は愈々弱く、物を恐れる傾向が著しくなつた。そして其翌年眼を病つて、遂に盲目となつた。祖父は江戶から歸つて來て、何うかしてぼんやりでも好いから見えるやうにと、當時有名な醫師にも見せ、人の敎へるまゝに信心もし、湯治にも伴れて行つた。けれど其眼は遂に治ることを得ずして終つた。

だから私の母の此家に嫁いて來た時は、祖母は旣に盲目であつたのだ。安政年間の御國替、藩主は羽前山形から今の上州舘林に移されたので、私の母は其國替の移轉のことをよく私等に語つて聞かせた。其時私の二番目の姉が母の腹にあつた。長い十日以上の道中、百里足らずの路を馬で通した。朝早く暗い中に宿場を立つ。祖父は先の驛へ行つて荷物の指圖、輕尻馬の始末を爲る。父は跡に殘つて宿賃馬子賃の勘定を精算する。其間に挾まつて、祖母の馬と母の馬とがてく〳〵と行く。朝、宿を立つ時には大抵一緒に出るのだが、段々其間が遠くなつて、晝飯には先の祖父と後の父と一緒になることは滅多に無い。で、母は大きな腹を抱いて、其時三歲の女兒(私等の一番の姉)と、盲目の祖母の世話を爲なければならなかつた。五月の山路、藤の花が崖に懸つて綺麗に咲いて居る。兩掛の中では、女の兒が繪草紙を持つて遊んで居る。向ふを見ると、遠い處に祖母が馬に乘つて、がつくり〳〵行く。何とも謂はれぬさびしさを感じたさうだ。

「お婆樣はね、其頃からか　惡るくつて、手を引かれないでは、一歩でも歩行くことが出來なかつたからねえ。それに、腦が惡　て宿に着いて晝飯を食はうとすると、頭がぐら〳〵して起きられないのだもの、そして半晌も突伏して居るぢやないかね。あの御國替の時には本當に困りましたよ。それに、宿場の馬子などゝ謂ふものは、人が惡いもので、馬を乘替る時など『これは大變な荷だ。一人は盲目て、一人はぼてれんだ』などゝ惡口を言ふぢやないかね。いくら侍の女房でも女で子持だから怒る譯にも行かずさ、あの位困つたことはたんと無いよ。」

と母はいつも語る。

山形からの路、あの金山峠を超えて、山中七宿の風景の好い間を通つて、福島に出て、那須野を横切つて、宇都宮から古河、それから館林と一家の人々が來たのだと思つて、私は母の若い時を想像した。二本指した封建時代のことが懷かしい。

祖父は世間で活動して、成功しただけあつて、家庭でも非常に難かしい人だつた相だ。父と祖父と母との間の關係は、何時も家庭に時ならぬ波瀾を起した。母は私等子供の爲めにのみあらゆる苛責をも忍耐し盡したと私等に語つた。維新の騷動、奧羽の戰爭、續いて封建制度の瓦解、家祿をのみ頼りにした士族が其日其日の生活に追はれるさまはまことに悲慘であつた。祖父も父も母も皆この恐るべき大波を被いて、苦勞に苦勞を重ねた。十年の月日は家庭の衝突と生活の不安と幼い兒等の厭ふべき啼聲との中に過ぎた。父が東京に出て職を警視廳に求めるやうになつたのは、立身出世といふ考もあつたらしい

が、實はこの祖父との衝突を免れたい爲めであつた。であるのに、間も無く西南の戰爭、父の戰死、一人取殘れた母は三人の兒等を抱へて、故郷にある老祖父の手に倚らねばならぬ運命に遭逢した。故郷での八年、これは比較的平和であつた。子に先立れた祖父、夫に取殘された母、二人とも氣が勝つて、正直て、負け嫌ひではあるが、悲しい淋しい同じ境遇が却つて相剋せる二人の性質を融和させた。父の死が二十五年來相容れなかつた祖父と母との心を一にした。私等が物心の附いてからは、祖父は氣丈てそして優しい好い老人てあつた。

夏の土用の蟲干、其時祖父はいろ〱の物を私等に見せて呉れた。刀劍が非常に多かつた。備前長船の重友の鋭利な短刀もあつた。長押に懸けた長い鎗の鞘も拂つた。棒術の免許、弓術の免許、それが卷物になつて居る。祖父は得意になつてそれを私等に說明して聞かせた。幅物がまた多かつた。雪舟の羅漢は『死解のお別』の時に藩公から紀念として賜はつたもの、其表裝が立派で大きいので、我々風情の低い床の間には長過ぎて充分に懸らなかつた。町の古書書商は、何うかして祖父を騙して、この貴重な書幅を買取らうと思つて、好くこれを見せて貰ひに來た。祖父は自慢さうに喜んで見せて遣る。時には値などをつけさせて見る。母は其を隣の室て聞いて居て、あの幅物ばかりは騙されて賣つて呉れなければ好いがといつもはら〱して居た。其他文晁と容齋との幅があつた。具足が二箇、弓が二張、その矢の根を貰ひたくつて仕方が無かつたけれど、祖父が決してそれを私等に呉れなかつた。

祖父の衰へ始めたのは、それから一年程經つてからのことだ。始めは何うも工合が惡い、眼が霞んで仕方が無いと言つて居た。酒も二合は飮めなくなつた。

『何うも酒は旨くなつて困る』

と口癖に言つて居る。

紙袋の内職はとうに止めて了つた。何處の酒が好いとか、何處の酒の分量が好いとか、間暇に任せて、町中の酒屋を買ひ廻るのを樂みにして居たが、それももう厭になつたかして、私が其代に德利を下げて町に酒買ひに行くことゝなつた。祖母の世話ももう碌々爲なくなつた。

加減が惡いと謂つて、寐て居ることが多い。何處が惡いかと聞いてもそれは解らない。氣分の好い時には、それでも椽側に出て、日向ぼつこりを爲て居る。眼が惡いので、字を讀むのも大儀になつたらしい。紅絹で絶えず眼を拭つて居た。椽側に並んで座つて居ても、滅多に祖母と口を交へない。祖母の鼻唄ばかりが聞える。

『祖父樣、此頃は滅切弱つた』

と或時母が言つた。

また或時母と祖母とが次のやうな話をして居るのを聞いた。

『祖父樣は此頃大變弱んなすつた樣だ』

祖母は鼻唄を唄ひながら、口に入れた駄菓子をむしや〳〵させて居たが、

『さうかえナ。困つたナ。一日も早く私の方を引取つて下されや好いだに』

とまだ口をもぐ〳〵させて居る。

『醫師に懸ると好いてすけれども』母が言ふと、

『醫師に懸るのを厭だッて言ふかね。もう七十七だてナ。今少し丈夫て居て貰はねえと、私も困るし、お節も困るし……』

『本當ですよ』

『一體何處が惡いんだかね？』

『何處と謂ふことも無いんだ相てすからねえ。眼は惡いてすがね、少し。』

『醫師にかゝる方が好いけれど……』

『左樣しませうよ、ねえ』

祖母は存外平氣て居るらしく、手拭て包んだ白髮頭を上向きにして、頻りに雜巾を刺して居た。

何ても秋が暮れて、もうそろ〳〵寒くなつて來る頃だッた。栗が熟して、毎朝懷に拾ひ切れぬ程落ちた。うすら寒い風が廁に近い南天の葉を吹動かした。町の醫師が來て、診察して歸つたが、矢張、何處が惡るいといふてはない、老病だから、もう仕方があるまいとのことだ。

古い家屋の一間、床の間には拙い蘭の幅が懸けてあつた。天神机は一隅に押附けられて、上に算盤や反古や硯箱が塵の積つたまゝに置かれてある。押入の襖は灰色に汚れて、處々破れて居た。天井は煤け

て、鼠の小便の跡が歴々と眼に附く。北の隅に、古い、錠前の飾の多い簞笥があつて、其中には祖父の一生の種々の紀念を留めた衣類やら手紙やら古錢やらが入れられてある。祖父は押入を脚の方にして、南に面して寐て居た。厚い夜着で、襟の天鵞絨が黒く光つた。半禿げた頭を木枕に載せて、稍々瘦せ氣味の顏が出て居た。枕元に藥瓶、菓子、其前の障子には秋の末の日影がくつきりと線を爲して照つて、風ががさ〳〵と庭の草木を鳴して通る。障子には祖母の手拭を被つた影が半分移つて、例の鼻唄が靜かに聞えた。

祖父はドッと床に就いたのではないから、をり〳〵身を起す。夜着に凭つて懵乎として居る。椽側に出て見る。眼に見えるものを注意して見て居る。けれど總ての物がもう其身とは何の關係も無いと言つた風で、一生を偕に經て來た祖母の猫背の丸い姿も深く心にも留らぬらしい。

庭では小鳥が賑かに鳴く。

『拙者奴は先程から、此處に控へて待つて居りまするが――』

と、突然大きな聲が聞えた。祖父が床に就いてから一月ほど經つたある夜深のことである。母は吃驚して飛起きた。

『拙者奴は最早一晌も、此處にかうして控へて居りまするが。何の御取次も御座りませず、いかゞ致した儀に御座りまするか、何卒よろしく御取次を――』

大きな聲が闇に響く。

慌てゝ洋燈を點けて奥へ行く母の後について、私も行つて見た。忽ち眼に入つたのは、寐衣のまゝの祖父が、座敷の一隅に、壁に面して整然と座つて、頻りに辭義をして居る姿であつた。

祖父はとう〳〵老耄けて了つたのだ。

『御忙しいことは萬々心得えて居りまする儀に存じますれど――』

其聲がいかにも大きい。

母は洋燈を下に置いて、急いで、其傍に行つて、

『お祖父樣、お祖父樣、夢でも見たんですか？』と言つた。

けれど祖父は夢を見たのではなかつた。四十年も昔、權勢ある家老の下について活動した時のさまが、今し幻影となつて、この垂死の老人の頭腦を占領したのであつた。

『これはお姫樣――奥樣で入らつしいまするか。存じも寄らず失禮のことを申し上げまして、何うか――』

と頭を疊にすり附けて頻りに丁寧に辭義をする。

可笑しくもあるが、それ處ではなかつた。

『お祖父樣、お祖父樣』

と呼んで見たが矢張駄目であつた。

『爺樣、何うかしたかえ？』

と、祖母は心配になると見えて、寢床から身を起して聞いた。

これ〳〵と話すと、

『それは困つたね、』と祖母は盲目ながら、起上つて、

『お祖父樣、しつかりしなさい』と聲を懸ける。

けれど祖父はそんな事を耳に入れるほど正氣でなかつた。

續いて大きな聲で

『私奴も御心に懸けて頂きまして、思ひも懸けぬ立身を至しまして、冥加に餘ります次第、御高恩のほどは決して一生忘るゝことでは御座りませぬ――』

『昔の夢を見てるんだねえ』

かう言つた祖母の聲には、一種の悲しい調子があつた。

『さうですねえ、困りましたね』と母は言つて、『お祖父樣、お祖父樣！』と肩を搖つて見た。けれど矢張甲斐が無かつた。

仕方が無いので、いろ〳〵になだめ慊して、寐床の中に寐かして遣つた。けれどまたすぐ起返つて大きな聲を立てるので、其夜は殆ど眠らずに過した。

翌日は朝から熟睡して居た。眼が覺めてももう意識は全く無かつた。うるんだ眼、しまりの無い口、幻影が絶えず頭腦を通ると見えて、昔のことを秩序なく口走つた。醫師を呼んだが、何うすることも出

來なかつた。で、かういふ容體が三日續いて、四日目の夜死んだ。

呼吸を引取つたことを祖母に話すと、『あゝ遂々御參りしたか、南無阿彌佛陀々々々』と言つて、盲いた眼から涙をぼろ〳〵と流した。

祖母も其後長く生きて居なかつた。

椽側の一隅、座敷の一隅、同じやうに障子に向つて、太い針に麻絲を透して、せつせと雜巾を刺して居たが、祖父の百ヶ日が濟むと、俄かに病ひ出して、其五日目に苦む所もなく祖父の後を追つて行つた。『お祖父樣は平生からお祖母樣の身の上を心配して居たから、吃度御迎に來たのだらう』と母は謂つて居た。

蜂の唸るやうな鼻唄は永久に絶えて了つた。夕日は田舍家の空しい長い椽側にさびしく射した。

（完）

村塾

正宗白鳥

村塾

正宗白鳥

寄宿舍のはづれ、松の樹に蔽はれた櫓風の高い古堂から、ドン〳〵と太皷が鳴つて、擂鉢の底のやうな平地を越して、向うの山へ響き渡る。その最後の音の消えぬ間に、袴を着けた二十歳前の少年が、正門や通用門から打つゞいて、幾人となく現はれて來る。校舍の石壁を背にした丁字形の細い道路に溢れて、麥の中、菜種の中にも散らばつた。

今澤貞吉もその一人だ。文章軌範と靖獻遺言とを、風呂敷にも包まず左の脇に抱へ、右の手は木綿の兵子帶に挿み、同じ年頃の通學生A君と無邪氣な話しをしながら、草履穿きて畦道を傳つた。この學生とは四五日前に、東京の雜誌の交換を約してから、急に懇意になつたので、毎晩往來して、文章の議、などをしてゐる

「君は何故寄宿舍に入らんだ」

「僕あ入りたいんだけれど、親爺が寄宿舍を嫌つてるから」

「さうかい、昨夕は谷村が蒲團蒸しにされたさうだな、寄宿舍の奴あ亂暴だ」

「何だか賄征伐をやると力んでる奴がある、喜公も生意氣だから擲ると云つてるよ」

「寄宿舍の者あ、碌に勉强もせんで、そんなことばかり考へとる、僕等は矢張通學して、餘暇には文章でも書いた方がいゝねえ、君」と、A君はさも深く感じたように云ふ。

やがてA君は支道へ分れた。

「ぢや失敬」

「今夜は僕の家へ來玉へ、紅葉亭の方へ散步しよう」

今澤は「あの男も面白いいゝ人間だ」と思つた。此頃は凡ての人が懷しい。新しく知合になつた村の人も學友も、凡て懷しい。

二三步すると、麥と麥との間に女の背が見える。よく見ると宿の娘だ。十七だと云ふが、色が白く髱があつて可愛らしく、そして親切だ。これも懷かしい一人。

娘は薫春から腐つた木の菜を攫み出して、畝の中へ散らしてゐたが、彼れが近づくと莞爾として、汚れた手で頭の手拭を取り、恭しく挨拶して、

「もうお歸んなさるかな」

「いゝや、今日は午後からお休みだから、少との間、何處かで遊んで歸ります、晝の御飯もゆつくりでよろしい」

「左樣かな、最少しすると、向ひの叔父さんも魚市から戻つて來ませうから、何かお魚を持つて來て呉れませう」

「ぢや、それ迄僕は腹を減して來る。」

今澤は肥料の香ひが、畝の中から湧き上るのに眉を顰め、急いで通り拔けた。小溝の丸木橋を渡り、道側から馬の背ほど高くなつてる空地へ匍ひ上つた。柔かい草が一面に生へてゐて、寢ころぶと肱や首筋にひやりと觸れる。それが何となくいゝ氣持だ。雌椢の歪んだ葉が疎らに空を遮つて、眞晝の光も眩しくはない。雲雀の聲が獨り忙しく、近く遠く聞える。

彼れは今年の三月――明治二十五年――初めて兩親の膝下を離れ、この山間の百姓家に、自分で寢床をのべ、獨り淋しく眠るやうになつてから、天氣さへよければ、殆んど毎日この空地へ來る。時には國民新聞や少年園を漢書の間に挾み、放課時間に讀みに來ることがある。或大家の「熱海だより」に「上に幽禽の囀ずるを聞き、下に淸瀨の咽ぶを聞き、ヲルヅヲルスの詩を誦し候」とあるを讀んで、小さい胸を躍かせ、自分もその境涯に身を置いて、ヲルヅヲルスの代りに、靖獻遺言の屈原傳を朗讀したこともあつた。時には母の手紙を持つて來て、繰返し〳〵暗記する程讀んで、遥かに故郷の春を思つたこともある。或は袂に駄菓子の袋を入れて、この木蔭で腹一杯に食つては、喉が乾くと、熊笹に縋つて後の溪流へ下り、淸水に口を浸すこともある。

しかし今日は讀むべき雜誌も新聞も持つてない。食ふべき菓子も持つてゐない。只寢ころんで春の空氣に浴してゐるばかり。やがて兩手で頰杖ついて、目前にちら〳〵する糸遊を眺め、ピイツク〳〵と雲雀の口眞似をした。それも厭くと、何だか眠くなつて。暫くウト〳〵してゐた。

車力の音に夢が融けて、寢たなり目を開くと、數町先きの彼れの宿のあたりから、淡い煙が舞い上つてゐる。

悠長な鼻唄と共に、道の曲角から竹籠を擔つた達公――宿の娘の所謂叔父さん――が現はれた。

「貴下は何をしてゐなさる」

「何でもない、お前の歸るのを待つとるんだ、甘い魚があるかな」

「あるとも、まあ下りて見なされ」と、竹籠を下へ置いて、鉢巻を取つて、それを廻して風を呼ぶ。

今澤は投げ出されてる書物を拾つて、懷中にねぢ込み驅け下りた。達公は竹籠の柴を掻き分けて、

「そうれ、黑鯛もあらあ、針魚もあらあ」と指示した。

「甘さうだな」と、今澤はさも欲しさうに云つて、針魚の長い嘴を抓んで見る。青い縞が日を受けて燦く。

達公は自分の子供でも綾すやうに、

「さあ一緒に歸りませう、歸つて料理して上げます」と、竹籠に蓋をして擔つた。

野道には通學生は消えて、寄宿生はまだ散歩に出て來ない。達公は黑い脚に太い筋を浮かせて、先きに立つて行く。今澤は肩上げのある粗い絣の袷を着て、減き腹に强い食慾を感じて、後からついて行く。

達公は本職の畠仕事の傍、魚賣りをして、三日に一度位は三里あまりもある海邊へ出掛ける。惣領の喜助は寄宿舍の賄方に入つてゐる。そして今澤は宿が達公の家と向ひ合つてるので、風呂にも入りに行く、怠屈な時は話をしにも行く。初めは達公の顔が恐かつたが、腹の中は柔しい親切な人らしく、二三度會

うとこれも懐かしい一人となつた。家族の者が皆んなして可愛がつて吳れる。入學當時旅窓の淋しさ退屈さをこの家族によつてどれ程慰められたであらう。「貴下はこんな山の中へ來て、お甘い者が食べられんからお困りぢやらう、不味い者食べて瘠せちや、國のお母さんが泣きなさる」とは、達公の女房の口癖て、團子やお萩が出來ると必ず持つて來て吳れる。魚市へ行くと屹度魚を屆けて吳れる。そして今澤は母から送つて來る小使錢の半ばは、この魚代に拂つてしまう。

彼れの宿の前は鬱蒼たる山、木樵の斧の音も手に取るやうに聞える。彼れは開け放した部室で飯を食ひ、母への手紙を認てゐると、「御勉强ですか」と、靑脹くれの背の高い男が日を遮つて前に立つた。壯太と云つて、喜助と同じく、寄宿舍の賄方だが、中々大志を抱いてゐて、暇があれば學科を傍聽してゐる。前からこの家へは遊びに來てゐたが、今澤とは同國だといふので、遂に懇意になり、古雜誌などを借りて行く。

「君は今日講義を聽きに出ましたか」と、今澤は手紙を卷いて仰向いた。

「いや行きません、今日はごた／＼してゐましたから」

「君、今日の靖献遺言は大層面白かつた、中野先生は甘いなあ」といつたが壯太は何時ものやうに乘出して來ない。

「さうですか、僕はもう暇を貰つて國へ歸らうかと思ひます」と、何となく萎れた色が見える。

「何故歸るんです、え、君」と、今澤は少し驚いて問ひ詰めた。

「何でもありません、只國が戀しくなりましたから」
「だつて、君は此校でうんと勉强するつもりで來たんでせう」
「しかしもう厭になりました、學問も厭だし、この村の者も厭だし」
今澤は腹の中で「變だな」と思ひ、相手の顏をジロ／＼見て、「君、寄宿舍の者あ、蔭に不平を云つてるさうだな、何かあるんですか」
「なあ、何だか知らんが、今に騷動があるてせう」
「蔭の中では喜公が惡まれとるさうだが、どうしたんでせう、あれもいゝ人だがなあ……昨夕も遲くこの家へ來てゐた」
「さうですか、どんな話をしてゐました」と、壯太は厭に聲を低くして、目を据ゑた。
「どんな話だか僕あ寢つちまつたから知りません」
「ふゝん」と云つて、壯太は考へてゐたが、暫くして「ぢや貴下はよく勉强なさい、當分お目に掛れんかも知れません」と云つて、お辭義して机の前を離れた。
娘は門で鎌を磨いてゐる。壯太は屈んで娘と何か話をしてたが、やがて娘を小突いて、怒つた顏をしてスタ／＼と行つてしまつた。今澤は驚き呆れた。そして書きさしの手紙に向ひ、村の靜かで景色も佳いこと、住民の善良なること、學課の面白いことなどを美文調で書いて、それを封じながら、壯太の事を考へた。

この家には夜になつて、よく村の百姓や寄宿舍の賄方の連中が遊びに來る。しかし世間話ばかりて、別に纏つたこともない。壯太も宿の老爺の好きな狐餡を買つて來て、父娘二人に自分の行末の大望を話しなどして歸るばかりだ。壯太はよく「私だけは他國の者だから、どうも仲間と折合が惡い」と零してゐたが、達公は度々宿の娘に向つて、「今澤さんなんか、遠方から來てゐなさるんだから、不自由なことが多からう、氣をつけてお上げよ、他國の人は大事にせねばならん」と注意する程だから、他鄕の者を虐待する譯はない。

て、彼れは暫く疑つて見たが、別に壯太と深い關係があるのでもないから、間もなく忘れてしまひ、聲を出して靖獻遺言の復習をした。折々木の倒れる音、木樵の唄が聞える。復習が終つた頃、その唄も止み山も靜になり、春の日も山へ入つた。狹い谷間だから、日の隱れるのが早いが、容易に暗くはならぬ。淡い長閑な夕暮が長く續く。今澤は閾に腰掛けて、朧ろに霞んだ達公の茅屋を眺めてゐると、宿の娘が「向ひに風呂が湧いたからお入りなさい」と知らせて來たので、何氣なく

「壯太さんは播州へ歸るさうですね、どうしたのか知らん」

と聞くと、「私、存じません」と、卒氣ない返事をして、何時もの愛嬌を見せて呉れなかつた。しかし今澤は不思議にも感じない。そして丸裸になつて、小さい野菜畝を横切り、野天の据風呂へ飛込んだ。半月が次第に明るくなるのを眺めて、柔かい湯に漬つてゐると、裏口から達公が來て太い柴を無雜作にへし折つては燒べる。

「よく弱いてるから、もうよろしい」と云つても、
「大事な子に風でも引かせちやならん」と承知しない。今澤は燃え上る火の、達公の頑丈な赤い顔を照らすのを見てゐたが、
「叔父さんは力が強いだらうな」
「強いとも、十人力だ、貴下位は手の表でさし上げらあ、村の若い者でも私にや降參するからな」と大きな聲で云つて、ハツ〳〵と笑ひ、「學問する人は、何んて皆弱いんだらう」
「そりや色んなことを考へるから、百姓してるやうにボンヤリしちや居れんもの」と、今澤がマセた口を利くと、達公はへゝんと嘲笑つて、
「百姓でもボンヤリしちや居りませんぜ、貴下なんかこそ、今の間は本を讀んで達の魚でも食べとりや、外に云分はないんだから結構だ、しかし貴下だつて、今に心配事が出來て來る、乾度出來る、今歳十四におなりなさるんだから、卒業迄まだ後四年だ、この村にゐる間に、もうそろ〳〵量見方が違つて來まさあ」、
「そんな事あ本を讀んで知つてらあ」
「さうでないて、壯太なんかどな、エラさうな口を利くと、私が云つて聞かせます、私の目にやお前達の腹は見え透いてるつてね、達公は明盲でも頭にちやんと四書五經が備つとるんですぜ、だから忰にもちつとばかりの學問をせんでも、親爺の敎へをよく聞け、それで澤山だと云ふんです。忰もあれて親爺

の子だ、ヘマな眞似をして耻を掻くやうなことはしません」と、息子の自慢をして、獨りて笑つた。今澤はいゝて鯱のやうになつて聞いてゐた。

その夜今澤は散歩から歸ると、直ぐ寢床へ入り、朝まで夢一つ見ずに熟睡した。起きると例の如く畦傳ひに學校へ向つた。通學生の溜りへ入ると、既に四五人集つて賑やかに喋べつてゐたが、その一人が今澤を見ると、

「ぢや今澤君に聞いて見玉へ」といふ。

「何だい」と、今澤は驅けてその群へ入つて目をきよろ〳〵させた。

「君はまだ知らんのか、昨夕の賭方の喧嘩を、喜公が打たれたさうだぜ」

「え、喜公が誰れに」

「壯太といふ奴に」

「本當か、何故だらう」

「だから君に聞くんさ、君は二人ともよく知つてるから」

今澤は驚いてよく聞くと、壯太は刄物を持つてゐたので、他の者は恐れて近づかず、喜公は思ふさま打たれた、そして壯太は昨夕から寄宿舍にゐないさうだ。

この噂は放課時間毎に話題に上り、達公が賭部屋て怒鳴つてる樣を報告する者もあれば、その原因を研究する者もある。學校は一日これて賑はつた。

學課が終ると、今澤は例の木蔭で休んて、書物を讀み草の香ひに浸つて、最早喧嘩の原因などを念頭

に置なかつた。

その晩、彼れは近頃覺えた詩吟をしながら、谷川に沿うて散歩した。宿の娘は鍬を洗つてゐる。側には二三の百姓が脚半と草鞋を投げ出して足を洗つてゐる。玆でも高い聲で喧嘩の噂だ。

「喜公も意氣地のない奴だのう」「播州者なんかに毆られるなんて村の名折れだ」「彼奴がまだ村にゐようなら袋叩きにしてやるになあ」と、口々に憤慨してゐる。

「何でも壯太の野郎が惡いに違いない。ちつとばかりの學問を鼻にかけて、漢語なんか使やがつて、平生から小憎らしい奴だつた」

「全體彼奴生意氣だ、新田の辰の娘に艶書をつけたといふぜ、女を口說くに小六ケ敷艶書にも及ぶまい」

「他國の奴に女を荒らされて溜るもんか」と皆んなで笑つた。宿の娘は鍬を擔いて急いて歸つた。入違つて達公が佛頂面をして來たが、今澤が蹲んで道を防いでるので、

「そうら。退いた〳〵」と邪慳に云つて、彼れを突飛ばすやうにして、馬をザブリと水へ入れた。水は四邊へ飛びかゝる。

「達さん、壯太は行方知れずか」

「何であんな無茶な事をしたんだらう」と、左右より問ひかけた。

「播州の奴あ畜生だ、穩順さうな面をしてやがつて」と、達公は凄い顏をして、手綱で馬を打つた。

今澤は目を丸くして恐々見てゐたが、やがて逃げるやうに川下へ下つた。水は月光を乘せて耳語くやうに足下を流れてゐる。彼れは生れて初めて他郷孤獨の感を覺えた。(完)

生れざりしならば

眞山青果

生れざりしならば

眞山青果

人物

都築龍作　代議士
夫人幸子
子息潔　文科大學生
森桂子
石見某　副院長
某　盲人

その他、院醫、看護婦、手代、人夫等出づ。

處　某外科醫院
時　現代

某外科病院の一等病室。西洋室。四月中旬の午後、二時を過ぎたり。空低く曇りて、南の風吹く。
中央に寢臺あり。白き寢具、白き毛布、白き枕など正しく整へあり。枕頭に檢溫表、藥壜、袂時計など置く。正面は白く

高き壁にて中央に兩開きの硝子戸あり、露臺に續く。左右に硝子窓。直ちに道路に望む心持にて、植込の梢、電柱の肘など窓より見ゆ、いふ迄もなく階上の室なり。壁上に一面の大油繪をかゝぐ。ラファエルのマドンナ像を模寫せるもの。患者寢ながら見んための便を圖りてや、低目に掛けたり。天井より患者の枕近く鐘形硝子製の吊花瓶を下げ、手にかなへたる草花を挿せり。寢臺の裾（上手）少しく前寄りて圓テイブルあり、三四脚の絹張り倚子、裝飾付きの腕倚子を置く。正面の壁より左左へ鍵形に折曲げて、上手は付添室に續く入口、下手は廊下につゞく出入りの腰高障子、磨硝子。下手の鍵形の壁際（ベットは下手を枕にす）に皮張りの長倚子あり。上手の同じ壁に添ふて雜具入を兼ねたる唐木製の洋風化粧臺あり。こゝにヒヤシンスの盆栽、寫見鏡、一輪挿、詩集めける洋書五六册を見よげに飾る。壁間そこここに大小の懸額數面あり。重に風景の水彩畫にて、輕快に紫だちたる色彩のもの多し。

幕明く。

潔、二十二、白き筒袖の病院服を着てベットに腰かく。少しく病衰のさまはあれども、髮ぐせ軟かに眼中凉しく、若き人の優しき感情を表はせり。右の足、膝頭に繃帶せるを裾にくるんで、前に据えたる倚子の上に投出し、俯向きて詩集らしき本に讀耽ける。

室内の掃除を今漸くすませたるところと見え、桂子は看護婦と共に、額面その他の調度の整頓にいそがし。桂子、十九、色白く頰豐かに、諸事内氣なる娘。女子大學の生徒。年頃の割に幾らか地味なる紫紺がゝれる被布を着たり。言葉尻の掠れる癖あり。

潔。（讀書の目を擧げて）もう好いよ、桂さん、然うやつてお置き、後で誰か片付るだらう。

桂子。え、でももう直きですから、序に片付けて置きませう。

潔。今日は大變働くね。

桂子。ゑゝ、些つとは。(と笑ひながら、化粧臺の上なる盆栽ヒヤシンスを取上げて)まアこんなに萎れて了つて、水を遣らないからなんてせう。

潔。どれお見せ。(と近寄せて見て)お母さんだよ。始終ソワ／＼ばかりして居て、花なんか氣も付かないんだもの。何うしてあゝ燥急なんだか、日に一度ぐらゐ日に當てると好いんだ。

桂子。(潔に近く)甚いわ、葉の色もこんなに枯れて了つたわ。外へ出して置きませう。(と盆栽を窓の外に出す)

話の中に看護婦去る。

潔。然し、ヒヤシンスが枯れるなんて、餘り縁起でもないね。(と桂子を見て微笑む)

桂子。何うして?

潔。何うしてッて事も無いけど、好く世間で然う云ふぢやないか。

桂子。(故と聞えぬさま、大額の前に立ち)それからこのマドンナ像ね、毎日同じものばかりで何でせうから、何か別の額と取換えませうね。飽きたてせう。

潔。何有好いよ。ラフアエルの筆だ。それだけは何時まで見ても飽きが來ないから不思議さ、五年以來僕の戀人なんだもの。

桂子。本當に何うしてこの繪がそんなに潔さんの氣に入るのでせう、飽ッぽい人なのに妙ですことね。

潔。一つは似ても居るからさ、目付なんぞソックリだ。

桂子。 誰に。(後向のまゝ)

潔。 誰ても好いさ。

桂子。 だから誰てすよ。(と牀を踏む)

潔。 (笑ひながら)誰にても好いよ。

桂子。 (誘はれ笑して)可笑しな人ね。

都築夫人幸子、潔の母、急しく入り來る。三十九と云へど、小格にヒンナリせる姿付ゆゑ三十位にしか見えず。扮裝もそれに相應せる若好ゆゑ、潔の母と云ふより姉と云ふに近し。流行の縞の羽袷を裾輕く着て、派手好みの帶、襦袢、襟、細きプラチナの鎖を襟にかけたり。

夫人。 (急しく腕倚子に掛けて)駄目、駄目。

潔。 ぢや今の電話は然うぢやなかつたんですか。

夫人。 まるて聞いた事もない家なんだよ。銀座の何文館と云つたッけ。そして、お父樣への用なんだもの。

桂子。 (化裝臺を片付けつゝ)てはお召は未だなんですね、何うしたと云ふんてせう。

夫人。 (帶より金時計を出して)もう二時過ぎてる、氣が揉めるね、誰か使を出して見やうかしら。

潔。 その店だつて電話がありませう。

夫人。 越後屋? だから電話を掛けて見たらね。今仕立て居ますから、最う少し待つて下さいと云ふの。

潔。それなら爲方がないさ。六時ッからの會なら大丈夫間に合ふ。使を出したつて同じ事だ。

夫人。でも最初は今朝の八時迄ッて約束なんだもの。若しか今度後れると折角の間に合はなくなる。あゝこんな事なら寧そ餘計の店へ頼めば好かつた。ほかの物ばかり出來たつて何にもならない。それに天氣の模樣も變だし、何うも一降り來さうだ。ねえ桂さん、今朝の新聞には快晴とあつたね、全く天氣豫報ぐらゐ當にならないのは無い。

潔。(噴出して)又初つた、お母さんのお株だ。全るて駄々ッ子だ。

夫人。何とでも被仰いよ、自分の事で無い人は笑つてるさ。ねえ、桂さん。

桂子。屹度來ますわ、伯母樣。越後屋だつて今晩の事を承知しきつて居ますもの。

夫人。然うだらうね。

潔。呆れる。今自分て電話をかけて置きながら、直ぐ又氣を揉んでるんだもの。それぢや手が付けられない。

夫人。お前は大きに落付いてお出だからね。

潔。お母さんよりや落付いて居るさ。

夫人。偉いもんですよ。(と笑ひつゝ、偶と氣が付いて)あ、然う〳〵スッカリ忘れッちやつた、大事な手紙を書くんだつけ。(と化裝臺の上よりサック入の料紙文庫を持出し、卓の上にて急しく何か書き初む。卓上に突俯して他に見せぬやう片肱を小供らしくかまふ。)

看護婦、散霧器を携へて入り來る。

看護。（夫人に向ひて）些いと御部屋を消毒致しますから、何うぞお立ちなすて。

夫人。（書損じの紙をぺり／＼引裂きながら、氣さくに）さア／＼、何うぞ御遠慮無く。

看護。臭う御坐いますよ。

夫人。石炭酸てせう、大丈夫、私は却つてその臭を嗅ぐと頭が爽々して好い氣持なの。

潔。（不審さうに）おい、何んて又今日に限つて消毒なぞするんだ。

看護。何う云ふものてすか、醫局から然う申付かりました。（桂子に）お孃樣、貴方は？

桂子。ぢや潔樣、私はヒヤシンスに水を遣つて來るわ。（と盆栽を持つて去る）

看護婦は柱、壁、牀なぞ消毒し初む。夫人は考へては書き、考へては書き、二三枚を書損じて引裂く。

潔。（ベッドの上に足を投出して、又詩集を取上げしが、下へ置きて）大層長いお手紙てすね。何所へ出すんてす。

夫人。伯父樣へ。（とペンを走らす）

潔。獨逸の伯父樣へ？何の用なんてす、僕の病氣ぢやないてすか。

夫人。いゝえ、そんな事ぢやない、何うしてなの？

潔。たゞ心配てすから――僕の事なら打遣つて置いて下さい。餘計な心配かけるばかりだもの。

夫人。本當に、そんな事ぢやないの。今は話せないけど、實はね。（と笑顏を上げて聲を潜め）お父樣の

爲めに大變お目出度い事が來るの、誰にも秘密よ。その時になつて屹度皆喫驚するわ。

潔。何んだらう。

夫人。何んでも。大變に〳〵好い事。(と書く)

潔。お父樣も御存じなんですか。

夫人。知つて被仰るとも。だけど、その時になつて見ると矢張り喫驚なさるわ。

潔。何んだな、洋行でもするのかしら。

夫人。まア默つてお出よ。後になると知れるから。(と夢中に書き居る)

潔。相變らず急しい事ッた。(と又詩集を取上げる)

桂子入り來る。

桂子。潔さん、貴方お存じなの。あの穢ない、凄い顏の老人を。蒼い傴僂の兒に手を引かれてる。

潔。どんな風?――盲目ぢやないか。

桂子。看護婦室の前に立つて、切りに貴方の事を聞いて居てよ。そりや氣味の惡るいほど痩削けた、白髮を伸して、爪の長い、凄オい人よ。指の先きが始終ピリ〳〵動いてるのね。そして、長い裾の着物を引擦りながら、廊下を煙のやうにスウッと歩るくの。

潔。あ、ぢや又來たんだ。何か聞いて居かたい。

桂子。何も知らないから私はその前を通つたてせう。すると、二號室〳〵ッて切りにこの話をして居

るから、私默つて聞いて居たのよ。あの二號室にお出なさる若い方に何か變事がないかッて、何度も々々諄いほど尋ねてるの。そして、取締が何の事もないと然う云つて聞かしたら、いや、そんな筈は無い、そんな筈はないッて、頸をひねつて何か考へて居たわ。貴方何うして知つて被仰るの。

潔。又かい、(心持聲を顫はせて)一昨日かも來て同じ事を聞いて居たと云ふ。

桂子。何んなの、あの人。

潔。按摩なんだ。四五日前に一度揉んで貰つた。

桂子。だッて、目はパッチリ開いて居てよ。

潔。内障眼とか云ふんだ。

桂子。あら、おやあの目は死んで居るの、まア厭！　道理て眞黒な、そりや何んとも云はれないほど眞黒な目だつた。人形の目ね、丁度あれなの。そして、俯向いて妙にニヤ〳〵笑つて居る顏ッたら、――人の話を馬鹿にしてるやうに――はア〳〵ッて云ふ度に、眞黒な口の中が見えたわ。まるで洞穴のやうに冷たく黑かつたわ。

夫人。潔さん、謙遜の遜と云ふ字は何う書きましたッけね。

潔。孫の字の下に辶です。(と答へて、桂子に)それに、あの手の冷たい事ッたら無いんだ。揉んで了つても氣味が惡るい、まるて死人に觸られるやうだ。

桂子。まア厭だ！　何故またそんな者を病院なぞへ入れるんてせうね。

夫人。努力の努は？

潔。奴の下へ力です。

夫人。あ、然う／＼。(と書く)

潔。あれて易を見るんだ。この頃の晩、然うだ、お母様が歌舞伎座へ行つた晩、餘り退屈だから肩を揉んで貰つた。奴切りに僕の骨組など見て居たッけ、そして不意にね、貴方は今絶壁の上に立つて居る、右にも左にも路は無い、お若いのに氣の毒なものだッてね、妙な事ばかり云つて歸つた、それから、あゝして毎日のやうに看護部屋へ聞きに來るんだ。

桂子。まアそんな事を、言ふ事にもよるわね。何時頃から來てるの。

潔。つい此頃からだ。誰に斷つたと云ふんでも無く、あの傴僂に手を引かれて、ヅル／＼に入り込んでるんだ。然し療治も軟かいし、それにその八卦が上手だと云ふんで、近頃は方々から頼まれて居る。

桂子。そんな厭がらせを他に云つて、お金にする氣ぢや無いんでせうか。

潔。そんな事はないだらうね。療治の代は取るけど八卦のお錢は何うしても受取らないもの。

桂子。名前は。

潔。さあ知らん。手を引いてる傴僂の眞似して、お師匠／＼と皆呼んで居る。

夫人。(手紙を封筒に收めながら、偶と聞き付けて)桂さん、何の話、それ。

桂子。何んですか、妙な盲人の話なのよ。

夫人。あ、然う。(と別に氣にも留めず、何か考居る潔に手紙を出して)潔さん、御苦勞でも上書を願ひます。

潔。え、書いて置きませう。(とベッドの前に置く)

夫人。急ぐんですよ。明日の郵便船へ出すんだから。

潔。え〻。(と頭を抑えて老込む)

夫人。ちよツ、爲樣が無いね。ぢや桂さん貴方書いて下さい、伯林の大使館宛に。

桂子。伯父樣へですか、はい。(と卓に座りて書く)

夫人。(不審さうに潔を見て)何うしたの潔さん、又何か考へたの。好くないわ、元氣になさいな。あ〻草臥れた、肩が痛くなつた。(と又時計を見て)あ、最う二時半だ、越後屋は何うしたんだらう、今日なんか間を缺かせやうものなら、私それこそ承知しない。

桂子。(上封を書終りて)ぢや私最う一度電話をかけて見ませうか。

夫人。御苦勞樣ですけど、ぢや何うか。

前の看護婦、病室、付添室等を消毒し居たるが、この時出て來たる。

桂子。吉田さん、(看護婦の名)電話室は何方でせう。

看護。では御案内致しませう。

夫人。あ、些いと〳〵、桂さん。私餘程憤こて居るやうに云つて下さいよ。今度後れるやうなら最う着

物も何も要らないッて、好御坐んすか、キクパリですよ。

桂子。承知しました。(と立掛る)

看護。(潔に向ひて)貴方最うお湯へお入りでせうね。

潔。今朝入りました。

看護。ぢや、お爪を好く取つて置いて下さい、何れ今内科の御回診があるでせうけれど。

潔。爪だ？(と不審さう)

桂子、看護婦兩人去る。夫人はその間に化粧臺より編物を持出して潔の靴下を編初む。

潔。お母さん、今日の夜會は何時頃までかゝります。

夫人。さア可也晩いでせうよ。餘興や何か大分大仕掛けのやうですから。

潔。お歸りから直ぐ此方へ廻つて下さいますか。

夫人。え、直ぐ歸りますとも、着物も此所へ取寄せて、家へも寄らずに行つて來る積りだから。

潔。然うですか、何うか然うして下さい。僕は何んだか心細くて耐らない。

夫人。何が又心細いの。

潔。僕ア今日の手術が氣になつて耐らないんです。

夫人。何うして？ 氣の弱い人ね。

潔。又笑はれるかも知れないけど、僕は何うも普通の手術ぢやないやうな氣がする。死ぬとか活きると

か、何方にしても生命賭けの手術らしく思はれるんです。

夫人。お止しなさい、冗談にも。高がそんな腫脹一つ位で、生きたり死んだりして耐るものか。然う云つた日には底豆でも遺言を書かなきアならない。

潔。けれども、こりや唯の腫脹ぢやありませんよ。何しろ餘程惡性なものには相違ない。

夫人。神經ですよ。何故然う神經質なんだらう。男のやうにも無い、潔さんだからッて、將來抱負でもあらうと云ふ人が、高が根太一つぐらゐで死なれますかよ、馬鹿〳〵しい。

潔。貴方にや見えないんです。まア些いとこの額に觸つて御覽なさい、熱の潮退ッたらありません。惡寒はする。それに脈搏も變つたやうだ。ドッ、ドッと搏つてドッと休む時がある。（と自脈を引いて見て居る）

夫人。まア、あれだもの。困るね。そんなら些ッとは痛むとか疼くとか、何うかしさうなものだ。

潔。痛まないから猶心配なんだ。性の惡るい病氣ほど外に顯はれない。表面はシャンとして居るけど骨の髓が少し宛〳〵腐つて行くのぢやありますまいか。お父樣の足と場所が丁度同じだし、僕は二三日前から氣になつて耐らない。それに、あの腐骨瘡と云ふ病氣は遺傳すると云ひます。

夫人。（煩さげに、編物を投遣りて）最う〳〵聞きますまい、お前の相手になつて居た日にや際限が無い。意地になつて厭な事を聞かせるんだもの。

潔。でも僕は、今から斷つて置く、お父樣のやうな、あんな體になつて迄活きて居やうとは思ひませ

んよ。

夫人。あゝ、何うとも御勝手さ。

潔。お父様はね、あれて……

夫人聞かね態にて、潔の讀み卒せる詩集を取上げて、挿絵なぞ拾見ながら、小聲にワルツの曲譜を口號む、時々は足拍子。

潔。お母様！

夫人。…………

潔。お母様。

夫人。何てすね、煩さい。

潔。(少しく間を置きて)お母様は氣樂てすね。

夫人。えゝ、氣樂てすともさ。心配して何うかなつた例が無い。蚯蚓はね、この土を喰べたら何うしやうと心配しますとさ。

潔。鋏を取つて下さい。

夫人。(棚より爪切を取來りて)切つて上げやうか。

潔。獨りて取ります。(と受取る)

夫人。相變らず强情なのね。似ない〳〵ッて云ふけど、そんな所はお父さんにソックリだよ。血の統ば

爭はれないね。

滋。然しお父樣は自信があるから好い。飽迄底の底まで押して行く强い所がある。あゝして行けたら人生なんて恐しいものぢや無いかも知れない。

夫人。けれども、そりや近頃の事だよ。以前は矢張りお前のやうに弱い、取越苦勞の、神經質の人だつた。それを勵ましたり、慰めたり、私も隨分骨を折らせられたわ。全くよ。だから私は何時もお父樣にそれを云つて自慢するの。然もなけりやお父樣と云ふ人は一生貧乏學者で、書齋の中で終つたかも知れない。兎に角政治界の表面へ出て、他に何とか云はれるやうになつただけでも私の手柄なんだむ。

滋。あゝ、僕は何故斯う弱いんだらう。世間が恐ろしくなる。

夫人。體？そりや運動しないからさ、分つてるわ。今は爲方がないけど、今度病氣が癒つたら、些と張氣を出して運動して御覽。乾度好くなるよ。朝も早く起きて冷水浴でもして、出來るだけ身體を疲らせるやうにするんだね、然うすりや夜も好く眠られるよ。

滋。性分ですな、生れつきだ。お祖父樣やお父さんの惡るい結果に生れたんだ。斯うして三代から四代、段々と血が腐つて行くんだ。

夫人。それからお前は好く夜深しゝて書物を讀んでるけど、あれも好くないよ。ランプで頭が熱てるばかりでも好くない。血が鬱するもの。寢られないのが何より毒、これからは枕許へ蓄音機でも置いて

上げやう。そしてランプはお廢止にして電氣燈にするんだね、九時なら九時とチヤンと時間を決めて置いて、その時が來たら私がボタンを押して消して了ふ。例令お前が何と云つても聞かない。ね、好いてせう。然うすりや爲方がないからお前も寢て了ふだらう。好いね、それが一番だよ。

潔俯向いて爪を切る

夫人。ねえ、潔さん、潔さん。

潔。何です、お母樣。

夫人。私が折角話して居るのに、聞きもしないで、お前何を考へ込んで居るの。

潔。お母樣、僕の云ふのは身體なんかぢやないです。もツと〳〵大きい事なんです。貴方は何も知らないんですよ。

夫人。そら又初つた。十八番よ。一體私が何を知らないと云ふんだらう。何うせ私は學問が無いけど、四十年近くも斯うして暮して來たんだもの、潔さんなんかに較べりやこれでも幾らか世間も知つてる積りよ、それにお前やお父樣は、何時も二言目には何も知らない〳〵ツて然う云ふのが、私にやそれが何うしても分らない。學問? 理窟? 然うぢや然いてせう。ぢや何んだらう、何を知ら無いだらうと色々考へて見るけど矢張り判らない。全く不思議なの。云はゞお父樣だつてお前だつて私だつて同じ世間を——まア同じ道を歩いて居るやうなものぢやないか。それをお前達ばかり別の道を歩いて居るやうな顏して、お前は知らない〳〵ツて云ふ譯が、私には何うも飲込めない。

潔。 でも、同じ道を歩るいても、先を見る人と見ない人とある。

夫人。 まアお待ちよ。私に云はして頂戴。私も今それを云はふと思つてる所なのよ。世間と云ふ者は、然う難しいものでせうか。お前だつて私だつて誰だつて、同じやうに寝て同じやうに喰べて、そして爲る事も考へる事も皆同じ事して活きて居るんぢやありませんか。お前の世間だつて私の世間だつて同じだ。同じ中に活きて居るんだもの。それに、お前達ばかり然も〱偉い人、私だちと別な世界を見て活きてるやうな事を云ふ。それが第一私には判らないんです。それほど別な事を見て考へて居るのなら、何所か私どもと違つた活きやうをしさうなものだ。然うでせう、潔さん、私の云ふ事は何うです。

潔。 だつて、現在この胸の不安――この私の心配、恐怖、それはお母樣には分らない。丁度月の好い晩に外の景色を見るやうなものです。遠い森でも川でも好く見えるやうな氣はする。然しハツキリとは何も見えないで、直ぐ傍に立つて居るものに驚く事が度々です。あれが然うです、私どもの心なんだ。形は無論見えないが、何かしら恐しいものが直ぐ前に横つて居るやうな氣がしてならない。

夫人。 詰らない事が苦勞になりますね。何うて月夜にや形は見えません、見えるのは陰ばかりです。

潔。 その、その影です。黒く――眞黒くその影……

夫人。 可笑しいわ、ぢや、影を見て畏がつて居るの? ほゝほゝゝゝ、矢張り脳が惡るい所爲よ。まあ私どもに云はせると病氣の中ですね。

潔。　或は然うかも知れません。然し、近頃妙に氣が滅入つて、何だか今にも暗い冷たいどん底に落ちて行くやうな氣がするのは事實です。その不安たら何にも譬へやうも無い。次いて來る運命！あゝこの心持が誰に分かりませう。

夫人。それが詰り病氣なんですよ。

潔。　然しお母さんだつて、着物が來ない間は待遠しいでせう、氣が揉めるでせう。同じ事です。來る者を待受ける程不安な事は無い。

夫人。だつて私は着物だもの。

潔。　着物だからては無く、着物てさへてせう。途中どんな間違があつて時間の間に合はなくなるとも限らない、設令間に合つた所て、寸法を違つて仕立てたとか、職人の粗相からして……

夫人。お舍しなさいよ。然うて無くてさへ心配して居るのに。

潔。　矢張り心配てせう。

夫人。最う〳〵そんな話は舍しませう。聞くだけても氣に掛かる。お前と云ふ人は何故然う厭な事はかり云ふのだらう。——厭な事と云へば、大分暗らくなつて來た、降らないと好いがね。厭な天氣だ事。

潔は默然として暗愁に沈む處へ、看護婦廊下の外より

看護。副院長先生の御回診て御坐います。（と聲掛けてドアを開ける）

副院長、石見學士、四十三四、年の割に頭ツルリと禿げ、もの馴れて輕快なる言葉つき、態度。白き手術衣を着、看護婦二

人を遁れ、小股に性急なる歩き振。

石見。（夫人の會釋に答へて）また厭な天氣になりましたね、今に一降り來ますよ。御主人は、都築さんは。

夫人。最う既くに參る筈になつて居りますのですが、（と倚子を取りてすゝむ）

石見。いや、何うか、何うかお關ひ無く。然し何れお見えになる事はなるでせうね。

夫人。は、今日は議會も御坐いません筈ですが、何をして居るのですか。

石見。何しろ私どもと違つて、政事家の方は御繁忙なぐらゐでなくちや駄目です。實際お羨しいですよ。

夫人。何ですか最う朝ッから飛廻つてばかり居ります。

石見。兎に角些いと拜見致しませう。（と火鉢に焙れる手を揉みながら病床に寄り、笑ひながら）坊ちやん、今日は何うしましたね。（と診察にかゝる）

學士は潔をベッドに仰臥さして、胸部、腹部、特に心臟部を精しく診察して、尿利便通の事など色々尋ねたるのみに終らんとす。

潔。（寢ながら）繃帶を解きませうか、足は見ないんですか。

石見。（患者の瞳孔を檢しつゝ）なアに好うがす。私は內科だもの見ても解かりませんよ。そして今朝灌腸をかけたでせうね。

潔。え、昨晩も。

石見。然うですか、ぢや好しい。(と行かんとす)

潔。(不意にベッドに起上り學士の手を摑みて)副院長―　(と聲を顫はす)

石見。(驚きて)何んですな。

潔。僕の病氣は腐骨瘡でせう、右の足は腐つて居る。隱しても駄目です、僕は皆知つて居ます。

石見。誰も隱しやしませんよ。貴方は一體神經質過ぎる、不可ません、然う氣を焦つては病氣の毒です醫者の云ふ通りになつて穩和にしてると、坊のキイ〳〵は直ぐ癒る、後でお母樣が御賞美をドッサリ下さるとさ。

夫人。何ですね、潔さん。失禮です、手をお離しなさいな。

石見。まア好うがすよ。この坊ちやんは形ばかり大きくても、からヤンチヤて困るんです。ね、都築さん、はゝはゝゝ。

潔。ぢや云つて下さい、僕の病名は何です。今日の手術は何です。切斷でせう、僕の足を切るのでせう。

石見。そりや君、僕に聞いても駄目。僕は内科だもの。

潔。でも院長は敎へてくれません、今日まで何度も聞いたんです。

夫人。潔さん、貴方も判らなさ過ぎるね。病名は何うでも病氣さへ癒つたらそれで好いぢやありませんか。

潔。　僕には隱してるんだ。乾然然うだ。皆て相談して僕に隱して居るんだ。(と副院長の手を突離す)

石見。　然う氣を揉んぢや不可ん。然う氣を揉むと蟲が出ますよ。それよか一日も早く癒つて、鎌倉か何所か轉地でもするんだね、桂子さんと云ふ美しい看病人はあるし、理想ぢやないか、ねえ坊ちやん。(とおどけて肩を叩き)病院中評判だよ。(と笑ふ)

夫人も笑つて聞いて居る。

潔。　聞か無くとも好い。そんなに云憎いものを聞く必要がない。

石見。　云憎いッてね、そりや間違だ、僕等は商賣だもの。まア早い話が米屋にしろ薪屋にしろ、代物の價値が格別に騰貴したからッて、それをお得意樣に觸れずに居られますまい。同じ事でさ。氣の毒だ言憎いなんて居ては第一醫者と云ふ商賣が上つて了ひますよ、はゝはゝゝ。

潔。　何うても好いんだ。僕ア寧そ死んで了つた方が好い。(とベッドの上に突伏して了ふ)

夫人。　また、あんな事。(と眉を顰めて副院長に)あれで本當に困るんです。

石見。　一體お氣が小さいんですね。然し今の學問した靑年は皆あれですよ。宅の伜どもなぞも始終あれて困らせます。死ぬの活きるの云ふ問題を極めて容易に考へますからね。私だちにや分らない考ですよ。尤もこれが時勢と云ふなら爲方がありませんが、こんな時勢に生れるのは第一自分が損ですね。私どもの若い時にや思ふの考へるのと云ふ事が無つたものだ。(と笑ひて)そして、都築さんは未だお出なさらんやうてすが、——手術室の都合もある事てすが——兎に角お立會下さる事は下さる筈な

んでせうね。

夫人。本當に何う致したんでせう。他にも用事がありますから、参る事だけは必らず参るだらうと思ひます。

石見。おや、お見えになつたら直ぐ醫局までお出を願ひませうかね。お打合せして置く事もありますから、

夫人。承知致しました。

石見。潔さん、餘り氣を揉んぢや不可ないよ。煩悶病は不治の症ぢやよ、はゝはゝゝ、では奥樣。(と會釋して、看護婦と共に去る)

夫人。(學士を送り出して戻來り)あゝ、急に風が冷たくなつた。それに空も暗らくなつて來たやうだ。潔さん、お前薄着のやうだが寒むくは無いかね。

潔答へず。

夫人。本當に世話の焼ける坊ちやんだね。(と掻卷を着せながら、偶と心付きて聞耳を聳て)あ、――降出した、――雨かしら。(と慌てゝ窓際に駈寄り窓を開らく)

ハラ〳〵と雨の音。

夫人。あゝ到頭本降りになつて了つた。潔さん、何うしやう困つたね、西の方なんか眞暗よ。駄目々々それに風も出さうだ。困るねえ。(と時計を見上げて)おゝ、最う三時だ。

淑。(突伏したる儘)最う三時ですか、あノ、あと一時間だ。

夫人。何に？　手術に？

淑。えゝ。

夫人。最う舍しませうよ。そんな話をすると私まで氣が揉めるから。それでも、桂さんは何うしたんだらう。晩いね。

淑。(顏を擧げて)お母樣。

夫人。又なの、最う舍して頂戴。

淑。お父樣は何うしたんでせうね、三時だと云ふに。

夫人。なアに、最う追付け被來るよ。私も約束して置いた事があるんだから。

淑。然しね。お母樣。お父樣は何故この頃僕をあんなに憎むのでせう。もとはあゝぢや無かつた。

夫人。お父樣がお前を憎む？　そんな事があつて耐るものか、私よりお前を可愛がつてお出なさる。男親がそれては躾が付かないッて私が小言を申上げる位、そりや子煩惱だわ。それに憎むなんて、そんな事が聞えて御覽なさい、乾度腹をお立てになるから。今度の病氣だッて然うです。何も腫脹一つ位に大騷ぎして、入院までしなくてもと私は思つたんだけれど、お父樣は態々石見さんと相談して被來つて、無理に入院さした位なの。私が病氣したつてこんな事は無いよ。そして、あの心配して被在る樣子を御覽、議會に行つても氣になると云つて、日に幾度電話をかけてお寄來しなさるか知れないよ。

潔。　そりや僕も知つて居ます。然し近頃、――この二三日の樣子は確かに變だ。僕が何を云つても返事も碌になさらない。昨夜など何う見たつて僕を憎んでる樣子が見えた。

夫人。　何う變なの？

潔。　何うつて事もないが。確かに變だ。

夫人。　何か又被仰つたんでせう。あれはお父樣の癖だと思へば好いぢやないか。

潔。　そんな事ぢやありません。僕が醫者の診斷を聞いたら――今日の手術ですね。默つて、斯う睨むやうな目付で私の顏を見て、明日の事は明日知れる。明日を支配する力は人間に無い、と斯う云ふ。そして、それから何度聞いても默つて、腕組して返事もなさらない。

夫人。　そりや當前さ。お前のやうに然うクヨ〳〵明日の事ばかり考へてる人は無いもの。詰りそこを云つたものでせう。

潔。　それだけぢや無い、何かある、乾度何かある。

夫人。　煩さい人だね、その何かゞ分らないぢやないか。

潔。　僕にも分らない。然し苦しい。

夫人。　まア結構ですよ。誰だつて何か種があるからこそ心配もする。お前のやうにその種から探し廻るやうな心配なら樂なものですよ。

潔。　それが無いから苦しいんです。

夫人。また初めるのね。お舍し〳〵。そんな煙のやうな摑み所の無い話でも、お前が凝つと目を沈めて藷ぎ込んでるのを見ると、私まで何だか氣を煽られるやうで耐りません。好く似たものね。お父樣にも矢張り同じ癖があつて、時々妙な變哲も無い事を云出しちや他を困らせる事がおあんなさる。

凛。でもお父樣は根に強い所があるから好い、力もある。

夫人。もう〳〵そんな話は無い事〳〵。私はまア桂さんでも見て來やう。(と立上る)

桂子慌しく入り來る。

桂子。伯母樣、いま伯父樣が被行いました。

夫人。、然う、ぢや丁度好かつた。そして電話は。

桂子。伯母樣被仰る通り、然う掛けましたの。然うしますとね、先の番頭らしい人が云ひますには——。

夫人。そして、出來るんですか、出來ないんですか、結局。

桂子。大變あやまりましてね。何うか奥樣へは貴方から好しく申上げてくれつて、切りと私に頼んで居ました。

夫人。ぢや出來ないんだね。

桂子。いゝえ、今持つて參りますよ、直ぐお達け致しますから、三十分ほどお待ち下さいッて。

夫人。三十分ほど? ぢや乾度出來るんだね、それでは、まア〳〵好かつた。何うかと思つて、私本當に氣が氣で無かつた。桂子さん有難う。

この時、廊下の扉にカチッと把手に觸る音、ドシンと重き物の扉に突當る音。

桂子。あら、伯父様。

夫人。さう。(と扉に寄らんとす)

桂子。(小聲に)大層醉つて被仰ることよ。

夫人。(眉を顰めて)さう。又? 困るね。

扉を開きて郡築代議士入り來る。五十二三。背高く、肩幅廣く、逞しき骨格。半白の五分刈、軍人風の髭。中折帽を目深く、鼠色の長外套を着て、太き杖にすがり出づ。右の足は膝關節より切斷せる不具者なり。片手に新聞紙包の大額面やうのものを携へ、肩のあたりシタヽカに雨に濡れ、帽子の縁よりポツリ／＼と雫垂る。

郡築。寢てるな。(と潔を見ながら、その前を重く歩みて、腕倚子の上に重く腰掛く)

夫人。まア何うなすつたの、外套も何もビッショリよ、歩いて被來つたの。寒むかつたでせう、未だ降つて居ますか。困るわ。

郡築。あゝ。

夫人。まアその外套をお脱　さい。帽子も。

郡築。好い、この儘て好い。

夫人。好いぢやありませんよ、身體の毒です。(と自ら帽子を取り)さ、外套も。

郡築。煩さいな、この儘て好い。桂、咽が渇いた、紅茶か何か一杯くれ。(と動かず)

桂子茶を煮れに立つ。

夫人。またそんな剛情をお張なさる。不可ませんよ、不可ませんよ。さ、私が脱して上げます、お脱ぎなさい。（と忠實しく手を貸して無理に外套を脱がせながら額面をさして）貴方、そしてあれは何？ 見ちや悪るいんですか。

都築。お前など見て判るものぢや無い。

夫人。まア何うなすつたの、本當に今日は畏ろしい事、他をこんなに待たせて置きながら。（と濡れものを他の椅子へ始末する。）

都築。あゝ、用事があつた。

夫人。用があつた　そりや然うでせうけど、私一人にまアどの位氣を揉ませたと思つて。最う四時ぢやありませんか。あの時計を御覧なさい。

都築。時間を忘れて居たんぢやない。

夫人。だから、猶更ですわ。私はもう疾から〳〵心配で〳〵立つても居ても居られませんでしたわ、人が悪いのね。

都築。そして、石上博士は？

夫人。は、被來いました。そしてよ（と娘らしく頸をかしげて小聲に）あれは持つて來て下だすつたてせう。若しあの方が不可なかつたんぢやないかと思つて、私どんなに氣を揉んだか知れないわ。

都築。博士は何も云はんか、私は石上の方を聞いて居るんだ。

夫人。ほ、御機嫌が悪るい。何うしたんでせう、今日は。そして何所でそんなに召上つたんです。まア酒臭い事。

都築。内でも飲んだ、途中でも飲んだ。

夫人。ほう、暴風〱、何うして然う今日に限つて當り散らすのでせう、あ、何か面白く無い事があるんですね。埋らないわ。私ばかり。全體、貴方が悪るいんだ、後れたのを謝るのが當り前ぢやありませんか。

桂子紅茶を煮れ來る。都築は默然としてそを飲み居る。

夫人。貴方、そしてあれは好かつたんですね、早く聞かして下さいな、氣が氣でないんですから。

都築。あれとは、金だらう。

夫人。(聲を低めて)え、持つて來て下だすつたでせう。

都築。(思はず苦笑して)お前は相變らず氣樂だな、羨ましい。

夫人。出來なかつたの、え、出來なかつたの。

都築。總べてがその氣で居るんだ。それも好いさ。(と投出すやうに)その人のためにや何より幸福だ。

夫人。(氣の毒さうに)あら出來なかつたの、え、出來無くても好いわ、出來なくつても好いのよ。たゞね、何うだらうと思つて私心配して居たてすけど、都合は悪るいと云へば先だつて待つてくれます

よ。今まで一度だつてそんな事を云つた例がないんですもの、大丈夫だわ、今度はキッパリ私から然う云ひます。貴方の名を出さないで私一人の考で然う云ふわ、ね、好いでせう。

都築。（煩さげに）金は茲にある。（と懐より袱紗包の金束を投出す）

夫人。あら、本當に。（と袱紗を開きて員數を檢めて）貴方、五百圓！ これを皆私に下さるの、本當に？

都築。（苦笑しながら）何うせ見込まれたんだ。

夫人。難有う／＼。でも本當に皆頂いても好いんですか。

都築。要らなきア返すが好い。

夫人。厭ですよ、返すもんですか。頂けば私のものですもの、私の好きなもの買たつて好御座んすね貴方、好いでせう。

都築。そして、博士は何んと云つた、何か云ひ置いて行つたらう。

夫人。（金を算へながら）いゝえ、別に。

瀧。（突然頭をもだげて）お父様。

都築。起きたのか、何んだ。（と險しき聲、振り向きもせず）

瀧。曇副院長が來ました。そして、毎と違つて、胸部だの瞳孔だの、特に心臓を好く檢べて行きました。何うも樣子が變ですが、全體、今日の手術は何んです。

部築。それ聞いて何になる、患者は醫者にさへ從つて居れば好んだ。
潔。でも、身體は私のものですもの。
部築。然うだ、お前のものだ。私のものでも醫者のものでも誰のものでも無い。
潔。ですから僕は何うも——
部築。何うも？
潔。お父樣、僕は決心して居ることがあるんですよ。
部築。決心だ？ 決心とは何んだ。
潔。それは然し云ひますまい。お父さんは眞面目に聞いて下さらない。
部築。云いたくなけりや云はぬ方が好い。貴樣たちの決心は何うて泣く事だ、訴へる事だ、そして悔む事だ。譬にも鼬は叫び獅子は默すとある。はゝはゝゝゝ。待て〳〵、今好いものを見せてやらう。(夫人に)おいそのマドンナ像を外して、私が持つて來たこの像を掛けてくれ。
夫人。何故今日に限つてそんな甚い事を病人に被仰るの、氣にするわ。
部築。何んでも好い、その額を見せりや好いんだ。
夫人。(怪しみながら)本當に妙ですわ、暴風暴風。

と夫人は立上りて、倚子を踏臺に、マドンナ像を下して持來たれるユダの像を壁にかゝぐ、使徒ユダ、主の基督を銀三十枚に代へて敵にわたしたる後、深くその罪を悔みて、指を噛み地を凝視して悄然と樹下に佇立する圖なり。

郁策。これだ。(と指す)

潔。エスカリヲオのユダでせう、何と沈鬱な色だらう。見て居ても心が暗らくなる。少くとも中古の繪てすな、オランダですか。

郁策。繪を見せるんぢやない、その題字を讀んで見ろ。その繪の下に書いてある。

潔。If he had not been born これは馬太傳にある言葉です。

郁策。お母さんにも聞かせるやうに、日本の言葉に現して見るが好い。

潔。馬太傳の二十六章の二十四節にあります。キリストがユダを咀ふた言葉。その人生れざりしならば反つて幸なりしならんと新約全書にある、あれです。詰りこんな人は生れなかつたら幸福だ、生れたからこそ罪も犯す、その人の罪は生れた事にあると、云ふのでせう。深い強い主の同情が一句に盡きてるぢやありませんか。僕はこの句を讀む度に實に廣大な神の慈悲に打たれます。尊い言葉だ。實に、クリストは人間あつて以來の偉人です。

郁策。潔、お前でもその一句にそんな權威を認める事があるな。

潔。何故ですか。聖書は私小兒の時からの愛讀書です。一日だつて傍を離した事がない。(と枕許より手擦のせる聖書を取上げて)この通り、特に馬太傳などは詩として文學として、殆んど暗誦するまで愛讀して居ります。

郁築。然うだらう、お前は詩として讀んで居るんだ。(と嘲るやうに咽頭にて笑ふ)

潔不平げに口を噤みて父の顔み見るのみ。

夫人。この繪が何うかしまして。まア見ても厭な繪ぢやありませんか、恐ろしい、あの凝つと俯向いて中の指を噛んてる樣子を御覧なさい。

郁築。默つて見るんだ、そして深く〳〵考へるんだ。

夫人。何を――繪てすか。

郁築。繪ぢや無い、活きた權威ある言葉だ。

夫人。その生れざりせば何うとやら云ふ文句でせう。

郁築。潔、お前は何んと見る。

潔。この繪をてすか。

郁築。胸に手を置いて、好く深く考へて見ろ。

潔。僕にや分りません。

郁築。分らんでは濟むまい。遁げずにどん底まて考へて見ろ。

潔。何れ考へて置きませう。

郁郁。何れ考へて置く？ 何れとは何んだ、自分の事てはないか。繪を見たら直ぐ感ずる筈だ。

夫人。貴方、そんな無理を被仰るひまに、何故斯う〳〵だと繪解きしてお聞かせなさらないんてす。そ

の方が早いぢやありませんか。

都鶴。いや、私は云ふまいよ。口から耳へ聞く可き事ぢや無い、心の底、ズット底を探つて見ろ。キットト何ものかを感ずるに相違ない。

潔は俯向むきて何だか思ふ。

看護婦入り來る。

看護。奥樣、あの日本橋の呉服屋で御座います。御注文の品を唯今自動車でおとゞけ致したさうて御座います。

夫人。おや、然うですか、誰か參りまして御座いますか。(と出でんとす)

看護。いゝえ、あの電話で。

夫人。然うでしたか、故々何うも難有う、桂さん、衣服が出來たさうですよ。桂さん。(と呼ぶ)

桂子付添室より出て來る。

桂子。おや、それは好御坐んしたね。

夫人。今自動車で逹けたんですつて、あすこからぢや三十分もかゝりますか、四十分? そんなものでせうか。

桂子。どの道、もう直ぐてせうよ、伯母樣、お目出度う。さぞ、お待兼てせうね。

夫人。本當に、何うして私は斯う氣急てせうね、今の事が直ぐ今て無くちや、氣が揉めて爲樣がないん

てすもの。

益子。早く見たら御座いますこと。無、仕立榮え致しましたらうよ、本當にあの紫がかつた格は新しう御座いますよ。

看護婦入る。

夫人。然う〳〵忘れて居た、貴方、あの獨逸の伯父樣へ私から手紙を書きました、好いてせう。

都築。何と書いた。

夫人。何と書いたッて好いわ。何うて私が書いたんてすもの。貴方の爲に惡るいやうな事は一行だッて一句だッて書きはしません。貴方は默つて見て被在い、キット好い返事が來るに相違ありません。

都築。又お前の早合點だらう、それにも困るて。

夫人。困りませんよ、大丈夫、大丈夫困りませんよ。貴方の口からは、そら、男の口からは賴まれない事もあるてせう。そこを私からなら何んとても書けます。

都築。ぢや承諾の手紙だな。

夫人。何うてすかね、斯うと・・まア二月の後を御覽なさい、辭令を見て貴方はキット喫驚なさるに相違ない。

都築。最う出したのか。

夫人。えゝ、最う旣つくに。

都築。それなら何故私に一應相談しないんだ。困る。
夫人。あら、ぢや不可なかつたんですか。
都築。可けるも、不可ないも、何故お前は然う淺墓だらう。私の立場を思つて見るさ、私は主義を棄て、政友を棄て、そして節操を棄てゝまて、高が領事ぐらゐの出世は私に出來ると思ふか。
夫人。ぢや、何故伯父様からそれを云つて來た時、貴方は最初にキッパリ斷つて下さらないの。今になつてそんな事を云つても最う駄目よ。
都築。お前が餘りワイ／＼云ふから。
夫人。なんぼワイ／＼云つたつて、不可ないものならキッパリ云つたら好いてせう。それが貴方の癖よ、その時は何方付かずの事ばかり云つて居て、後になつて、必らず何とか彼とか難ケしい事を云ふんてすもの。爲樣がないわ。
都築。好い／＼。最う然う煩さく云つてくれるな、私は何うても好い。
夫人。ぢや、本當に、本當に不可なかつたんですか。
都築。出したものなら、今更ら何を云つたッて追付くまい。
夫人。出しやしません。
都築。何んだッて。
夫人。本當は未だ出しやしませんの。たゞ書いたばかり、こゝに有りますよ。(と先の手紙を出す)

都築。叉例の事だ。(と苦笑する)

夫人。だッて、貴方が色々難かしい事を云ふからですわ。

都築。困つた人だ。

潔。(突然顔を上げて)お父樣?

都築。何んだ。

潔。僕にや何うしても分りません。

都築。分らない筈はない、最少し深く考へて見ろ。

潔。この繪と僕と全體何んの關係があるでせう。分りません。

都築。そりや、貴樣は繪ばかり考へるからなんだ。繪を考へる前に、先づ自分、自分と云ふものを考へて見ろ。自分が解かれば好い、繪の心も自然と分かる。

潔。自分の罪惡をですか。

都築。まだ分らんか。自分の生存……さうだ、生存と云ふ事を考へろ。何故、何故人間は生存しなければならぬかを考へて見ろ。キリストの言葉はこの場合ユダの罪惡に向つて放つた呪咀だが、換えて總ゆる人間にも云ふ事が出來るだらう。

潔。If he had not been born

都築。好し、考へろ!

潔。If he had not ben born

都築。まだ分らんわ、はゝはゝゝ。ぢや、私がその繪を買求めた順序を話して聞かせやう。

潔。聞かして下さい、何うか。

都築。昨夜であつた。私は病院を出たのが十一時頃、銀座の露店を冷かしながら家へ歸つた。寒むい晩でな、電車の通りを眞直にヒユウと風が吹く。人通りも途絶えて、電車も赤い警燈のが多かつた。寒むい、寒むい、寒むい。

夫人。夕方からはチラ〳〵白いものが降つたぢやありませんか。

都築。降つた、粉のやうなのが外套の襟から吹込む。

潔。If he had not been born

都築。潔！

潔。は！

都築。お前の話ぢやないか。

潔。あゝ、僕は——

夫人。何うしたの潔さん。

潔。あゝ！（と深かき溜息）

都築。その前に私の心持も云はう。私はなその時、或る一事に甚く屈托して居た。云はゞ心の革命だ、

新しい革命だ。將に來らんとする革命の絢光は底に動いて、心は磁石のやうに搖れては居るが、さて、何うしてもその新しいものを摑む事が出來ない。影か、閃きか、その尖端が見えるやうで、摑めるやうで、扨それが出來ない。

凜。その或る一事とは何んてす。

部篤。ある一事ぢや、然う思つて居れ、何れ、自然に分かる時があるだらう。

夫人。だッて、大切なそれを話さない事には何も分からないぢやありませんか。

部篤。お前などの知らん事だ、この事…この事ばかりはお前などの知らん事だ。

夫人。だッて――

部篤。默つて居なさい。

夫人。おゝ恐い、また私にまで當り散らすんですか。

部篤。耳元でワイ〳〵云はれると、私の心は搖れるばかりだ。

夫人。おゝ、暴風〳〵。

凜。お父樣。

部篤。默つて聞くんだ。

凜。あゝ！（と俯向く）

部篤。すると、私は偶とあるものに目をひかれて立停つた。繪ぢや、こゝにある繪ぢや。この繪をチラ

と見ると、私は總身に強い電氣が傳つたやうな氣がした。先づ目に入つたのはその目付だ――、底の知れぬ深い目付、そして口付、そして最後にその文句に目が付いた。燒鏝と云はう、血の文字と云はう、心の底を覆顛返すやうなその文字が目に付いた。

夫人。まア不思議もありますね、貴方が繪なんか見やうたア思はなかつた。

郁彌。別に手に取つて見る氣もないから、その儘行き過ぎた。すると、妙に唆かされるやうに心が動く。それに、その繪を賣つて居る老爺の形相がよ。脣の厚い、瘤鼻の、痩せたな、素ッ氣のない乾燥びた老爺ぢや。大通りでも夜深けは寂しい、鋪石を踏む下駄の音が遠く〳〵と響く。老爺は痩せた大きい掌を寂寞と膝の上に組合せて、凝つと地の上を見て居る。著しい代物はこの繪ばかり。外には古錢や、古花簪、別に目新しいものはない。まア賣物と云ふよりはこの繪の番人と云ふ形ぢや。價は幾らかと聞いた。老爺はヂロリと私を見上げて、フフンの鼻先に冷たい笑を泛べた。そして、黃色い歯を見せた。五圓と云ふ氣だらう、痩せた五本の指の裏を見せる。五圓かと念を押したら、フウンと笑ふ。で金を投出して私はこの繪を買つた。そして、昨夜は一晩枕元に置いて眺めた。ウヰスキイをチビ〳〵嘗めながら、夜明まで繪と對向ぢや。が何う云ふもんか些つとも醉はん。頭が始終氷で洗はれるやうな氣がして些つとも醉はん。その癖、眠りたいにも、氣は自づと興つて來て、飲めば飲む程心は冷たくなるんだ。なんぼ飲んだらう、イヤ、隨分飲んだ。それからズウと今まで飲つゞけぢや。

夫人。あら、そんなに召上つたんですか、道理で晝から變だと思つて居た。壜やも壜ぢやないか、あれ

ほど言付けて置くのに、そんなに上げると云ふ事はない。だから私が居なくちや爲様が無いのね。

郁榮。お前が居たつて駄目だ。昨夜ばかりは誰が何んと云つても飮んだに相違ない。

人。私が居れば、何と被仰つたつて上げるもんですか。上げませんとも、え丶〱上げませんとも。

郁榮。私は飮む、玆にちやんと持つて居る。（と外套のポケットを叩いて笑ふ）

夫人。あら、何うしませう。貴方、何うして今日に限つて急にそんな事をなさるんです、私何うしても上げません。お出しなさいよ。（と立寄りて壜を取らんとす）

郁榮。今日は飮む。はゝはゝゝ、飮むんだ。

夫人。不可ませんよ、貴方は今氣が立つてるから、そんな無茶を被仰るんですれど、後になつて屹度後悔しますよ、また屹度私に謝まらうと思つて。

郁榮。後悔しても、謝つても私は關はん、私は飮む。（とウヰスキイの角壜を出して、口を拔かんとす）

夫人。（涙ぐみて）不可ませんよ、不可ませんよ。（と引奪らんとす）

郁榮。はゝはゝゝ、餘計な世話だ（と先きの紅茶々碗に注ぎグイと飮む）

夫人。あら不可ない。（とコップを持つ夫の手に縋りて）桂さん、早く壜をかくして下さい、桂さん。

桂子。はい。（と云へど、流石に手を出しかねてモヂ〱するのみ）

郁榮。（やゝ聲を激して）おせつかいも大抵にせんか、私が飮むんだ。私だ飮むんだ。（とまたドク〱と注ぐ）

桂子。伯父様！
都築。今日は誰にも手は出させせん。私は飲む可き事があつて大に飲むんだ。(と快ささうに一盃を呷る。)
夫人。ぢや貴方は酒で氣を紛らさうとなさるの、それこそ卑怯ぢやありませんか、男子のやうでも無いわ。
都築。卑怯でも關はん、私は私の思ふやうにする。
夫人。(爲方なく思定めて)ぢや留めません、それが貴方の病氣なんだから、後になつて後悔なさるやうな事があつても私は知りませんよ。
都築。私はお前どもに助けられて生きてやせんぞ。
夫人。好うござんす。明日になつてもその言葉を忘れないで被在いよ。
都築。忘れるもんか。
夫人。今日は大層大きな口が利けます。
桂子。(獨りハラ〳〵して)伯母様。
夫人。好いんですよ、打遣つてお置きなさい、最う何時でもなんだから、又病氣が起つたと思つて居れば好いんです。
都築。また病氣！　然う病氣だ、お前方正氣な人の目には病氣とも見えやうよ。然し私が病人なら、お

前も立派な病人だ。

夫人。何んてすつて。

郡築。ま、ま、然う憤る事はない、憤るは神經の毒だ。又今夜眠られないつて騒ぐぜ。

夫人。知りません、何とでも被仰い。

郡築。お前は私を助ける氣で居やう。お前があつて、お前の伯父樣があつて、そして、僕は生きて居るやうに思つて居る。豈圖らんやだ、はゝはゝゝ。

夫人。何が豈圖らんやです。ハツキリ被仰いな。

郡築。云ふよ、云ふよ。私はお前や、お前の伯父樣に助けられて、一端の政事家、代議士になつた。書齋に引込んで書物と頸引して居べき私が、まア兎に角舞臺の表面に立つて活動する人になつた。酒の上が悪るい、節しろとあれば、はい好しいと素直に節する。本を讀むな、はい好しい。嗅煙草より英國煙草にしろ、はい好しい。と、まア斯うして何うやら人らしい事を云得る身になつた。處が、豈圖らんやだ。

夫人。貴方！

郡築。何んてす。

夫人。幾ら御酒の上でも、後で酒とばかりぢや濟まなくなる事がありますよ。

郡築。大きに然うだ。が、お前が私に世話燒くのを惡いたア云ひません。結構です、結構です、私は又

世話を燒かれるほどお前が可愛い。

夫人。 貴方何を被仰るの。

都築。 誰が居たつて關はんさ。詰り、お前の助力――まア大きく云つて――は私の爲めと云ふよりお前のためだ。お前は人に世話を燒かなきア活きて居られない人間なんだ。

夫人。 もう〳〵聞きますまい。貴方は貴方の思ふやうになさいまし。

都築。 はゝはゝゝ、いや酷しい立腹ぢやて。

最時より默然たりし潔やうやくに頭を擡げて。

潔。 お父樣、あゝ、僕は、僕は――

都築。 何んだ、又泣くか。好く泣ける涙だ。

潔。 この繪は恐しい謎てせう。

都築。 謎ぢやない、說明ぢや。

潔。 僕はこの恐ろしい謎を解かうたア思はない。このまゝソットして置いて、解きたくない、繪を見るのもいやてす、恐ろしい。

都築。 馬鹿者！ 目を眞直に好く見ろ。

潔。 あゝ。何うして僕は斯う弱いだらう。

都築。 瞬目もするな、瞼を大膽に沈つと見るんだ。

潔。　あゝ。(と蒲團に突伏す)

都築は颯つとその樣子を打見る、この時、看護婦入り來る。その姿を見るより、都築は行也。

都築。　あゝ最う手術の時間ですか。(と叫ぶやうに云ふ)

看護。　いゝえ、あのその前に院長が御相談したい事がおありなさうですから、些いと被來つて下さいまし。

都築。　私に？　何です。

看護。　私には分りませんが、何でも御打合せ致したい事があると被仰いました。

都築。　今行きます、院長室ですか。

看護。　いゝえ、手術室、第一號の。

都築。　第一號？　ぢや、大手術室だ。(と立ちてよろめく)

桂子。　あれ危い。(と支えんとす)

都築。　大丈夫。(と立直りて、潔の枕邊に立寄り)潔！　もう即ぐだ、用意しろ、用意をしろ、

看護婦と共に出て去る。夫人心配しながら送出す。

桂子。　(慌しく潔の傍に依り)潔さん、何うかなさいまして、え、え。

潔。　あゝ、(と突伏せるまゝ溜息をして)僕はもう絶望だ。

桂子。　何故。何故急にそんな事を被仰るの、え、潔さん。(と聲を顫はす)

潔。　今に解りますよ。今に。

桂子。　何故急に伯父樣はあんな事を被仰るのでせう。御酒のためなら好いけども、私何んだか心配でならないわ。

潔。　あゝ。（と俯向いて泣く）

桂子。　潔さん、何うなつすて、潔さん。聞かして下さいよ、私心配だから。（と頰を擦らんばかりに顏を差寄せて問ふ）。

潔。　そりや何んだか僕にも分つては居ないんだ。

桂子。　貴方にも？

潔。　でも、何か來る、屹度何か來る。何か恐しいものが屹度來るに相違ない。

桂子。　だッて、それが――

潔。　あゝ、來るなら寧そ早く來てくれゝば好い、遠くに足音を聞かせられる苦みは、面と向いた惡魔よりも恐しい。

夫人慌しく入り來り

夫人。　桂さん、來てよく〳〵、着物が出來て來てよ。

桂子。　え、何か。（とベッドを遠退く）

後より手代らしき男、風呂敷包みの衣裝函をさゝげて入り來る。

夫人。さア此方へ、晩かゝたわね。このテイブルの上に置いて下さい。何うしてこんなに晩かつたんです、まアどの位氣を揉んだと思つて。

手代。へえ、誠に御申譯が御坐いません。職人を擇んだものですから存外手間取りました。その代りには仕立を御覽下さいまし。手前どもゝ、自慢なんですから。

夫人。然うですか、それは〳〵。(と自ら風呂敷を解いて)まア、思つたよりは上出來。桂子さん〳〵來て見て下さいよ。

桂子。まア引立ましたこと。好い色ぢやありませんか、(と褄衽など見て)それに仕立も大層好く出來ました。

夫人。それだから、御覽なさいよ。皆なが派手過ぎ〳〵ッて心配したけど、矢張り私の眼が高かつた。それに、帶との配合もあるし、あの位の色でないと引立ちません。

手代。まア例しに召して御覽なさいまし。斯うして御覽になるより又一段お召勝りが致しませう。

夫人。着て見ませうか。

桂子。お手傳ひ致しませう。

と話して居る所へ、戸をする〳〵と開けて一人の盲人あらはる。六十以上、硬き白髮を總髮にして、猫背、這ふやうに手探りつゝ入り來る。

盲人。もし、もし。(とボク〳〵首を振りながら低聲にて何か云ふ。殆んど聞き取れず)

桂子。あら、曩の人よ。

盲人。もし、もし。

夫人。何んです、何か用事なのですか。

盲人。もし〳〵。(とズル〳〵部屋へ入り來る)

手代。耳が遠いやうです。(と側に進みて)按摩さん、何んぞ用事なんですか。(と耳元に大きく云ふ。)

盲人。……………(と何やら小聲に云ふ)

手代。え、え然うです――いゝえ・別に。(と大きく云つて)ね、奥樣、別に今日若樣の御病氣に變りは御座いませんね。

夫人。また、そんな事を云つて來たのですか。まア緣起でもない、何うしたと云ふのだらうね。

盲人。…………(頸を振りながら何か囁く)

手代。それて、あゝ。

盲人。…………

手代。違つてるよ、全るて、別に何にもない。何を勘違えして居るんだね。

盲人。…………(と冷たく笑ひながら頸を振つて聞かず)

潔。(顔を上げて)おい、盲人が何んと云ふんだね。

手代。何んですか。私には些つとも解らない事を云つて居ります。些と氣が何うかして居るのぢやあり

ますまいか。

盲人は手探りよりて潔の枕元に座る。

潔。おゝ母樣、貴方から聞いて見て下さい。何か屹度あるんでせう。

夫人。厭な事、私は厭やだ。薄ッ氣味が惡るいもの。

手代。何か若樣の體に大變な大難でもあるやうな事を申して居ります。全く何うかして居ますよ。

盲人。…………………(獨り何やらつぶやき居る)

都築は蹌踉として入り來る。

夫人。貴方、着物が出來て參りましたよ。

都築。(聞えぬさま)潔。最う手術が始まるさうだ。今擔架を持つて來る。

潔。僕は步きますよ。

都築。步くッて？　行く時は步るくさ。然し、(と氣を變いて)まアそれも好いだらう。

潔。何故です。

都築。何故でも好い、(と偶と傍の盲人を見付けて)あれは何んだ。

夫人。按摩なさうです。

都築。何しに來た。

夫人。何んですか知りませんけど突然入つて來まして、何か潔の身體に大變が起るやうなことを申し

て、皆の氣を惡るがらせます。多分氣が何うかして居るんでせうよ。ぢや私は些いと着物を着換えて參ります。

夫人、桂子、手代の三人、着物を持ちて付添室に入る。

郁策。（潔の枕元に立ちて）何？　お前の體に大難がある？——うむ、面白い。が、何うして知れた。

潔。それは分りませんけど兎に角、然う信じ切つて居る樣子です。

郁策。面白い、何か據る所があるだらう。（とツカ〳〵盲人の傍へ寄り）おい、お前それを誰に聞いた。

潔。耳が餘程遠いやうですから、大きな聲でなきア聞えません。

郁策。耳まで遠いのか。もう半分死んで居るんだ。おい、お前。（と盲人の手をグイと掴みしが、急に振放して）何うだ、何うだ、この手の冷たい事、全で魚のやうに冷たい。

盲人は空しく宙を見上げて、冷かに、偏屈らしく笑ふのみ。

潔。多分易の上にても顯はれたのでせう、冗談半分、二三日前に易を見て貰つた事がありますから、

郁策。む丶、そして何んと云つた。

潔。その時は別に何んとも申しません。暫らく考へて居ました。そして、何か變つた事が無いかと聞きます、何も無いと云ふと、頸を捻つて、はて、そんな筈はない、そんな筈はない、と云つて信じません所へ貴方が眞蒼な顏して入つてお出になつたのです。

郁策。一體、そりや何日の事だ。

潔。一昨日——いやその前の日。お父樣が院長と何か御相談のあつた、あの日です。

都築。看護婦が私に來た、あの日だな。

潔。然うです。お父樣、一體あの日に何の相談があつたのです。何うも氣に掛る。何うか隱さずに聞かして下さいませんか。

都築。(急に苦り切つて)それを聞いてお前は何にする。

潔。覺悟します、男らしく立派に覺悟をします。

都築。(仆るゝやうに椅子にかけて)覺悟をする? 覺悟をする位なら、何もそれを聞く必要はあるまい。聞いた上にするは覺悟ぢやない、諦めぢや。

潔。諦めても好しい。僕は……僕はこの二三日夜も碌々眠りませんよ。強いて云へばまァ來る可き運命の壓迫とても云ふのでせうか、始終心が動搖して、搔亂されて、不安で不安で耐りません。

都築。…………(俯向いて聞きながら、又卓上のウヰスキイの壜を取上げて、チビチビ飲初める)

潔。お父樣、貴方は隱して居る、屹度隱してお出なさる。僕は死ぬんのですか、不具者になるのですか、何うです、それを聞かして下さい。貴方は屹度知つて被在る筈だ。貴方の心の中に活きてる僕の身體は屹度最う今の僕の身體ぢやない。僕は知つてます、あの日から貴方の態度がガラリ變つた、お父樣、全體僕と云ふ身體は何うなるのでせう。

都築。…………

潔。ねえ、お父様。この指先の顫えを見て下さい。毎晩床の中に寝て居ても、始終ビクリと動く、これで目が覺めます。（と掌を打返し／＼眺めながら、涙聲に）ねえ、お父様。僕は夢さへ滿足に見られないんですよ。始終不安と恐怖とに襲はれて、眠つてる間も心だけは覺めて動搖して居ます。汗の滲むのも、筋肉の痙攣るのも皆現に知つて居る。愉快な樂しい將來の夢に醉つてる中でも、一つの冷たい自分は自分を離れて、冷かな悲しい自分の運命を見詰めて居るのです、云つて見ると、自分は確かに二つに分れて居る。一つの自分は高い所に居て、一つの自分の傷しい運命を見て　るんです。あゝ、この不安、この恐怖、あゝ、寧そ死んだ方が好い、見えない將來の恐怖に苦しむよりも、死んでも好い、生きても好い、唯この動搖と不安から免がれて落付いた安定の場所に坐りたいだけが望です。最う外に何にもありません、ありません。お父さん、僕はね、僕はね――（と泣く）

都築。潔！　最う考へるな。考へたつて何うもなりやせん。お前瘠せたぞ。（と側に寄つて、背なぞさする）

潔。（その手に縋つて）お父様、何うか聞かして下さい、隱さずに聞かして下さい。

都築。聞かすにも……聞かす事が無いんだ。それに、それにお前は、生れながらにして不幸者だ。心も身體も共に弱い、自分の腿の肉を喰つてまでも世間と奮鬪して活きる力が無い。生れた時既に敗けて居る。運命に反抗するのは力だ。お前にはその力が無いぞ。（と潔の手を見て）この、この蒼白い、瘠せ

た、飢えた腕ぢやとても駄目だ。お前は人世を何う見て居る。他の闘ふ姿、苦しむ姿を見て恐しいとは思はんか。慘憺とは思はんか。

凜。それは思ひます。他が泣きながら、踠きながら、喚きながら、これが人生だと叫んで居るのを聞く度に、僕の目を塞ぎたいほど悲慘に思ひます。

都築。お前もやがてその人生の中に泣き叫ぶ人だと思つて見ろ。

盲人。(ふと目覺めたる人のやうに、又)もし、もし。(と叫ぶ)

凜。お父樣、僕は何うなるんでせう。あゝそれを思ふと寧そ死にたい。活きてるなア厭だ。

都築。馬鹿者、死にたいとは何んだ。それが產まれたる父の前に云ふべき言葉か。

盲人。(左に、右にウロ〳〵しながら)もし、もし。(と聲を求む)

凜。そして、あの繪は何んです、あの繪の心を聞かして下さい。

都築。好く見ろ、そして考へろ。生れざりしならば却つて、幸福なりしならん。これを自分に放たれたる言葉として好く考へて見ろ。

凜。ぢや、僕はその‥‥

都築。ユダは犯した罪惡のため、多くの人は、與へられたる天分のため、世に榮ゆるは擇ばれたる人に限ぎる。疾める者は雀や鳩の生涯すら羨むと云ふ。紡がず耕さず活きる無爲の生涯が羨ましい。われ嘗つて餓えに死せる魚を見ず、而して人は多く傍路に仆るぢやて

盲人。もし、もし。（と手を擴げて、よろぼいながら都築の裾にすがり付く）

都築。何んだ、う、う。（と盲人の口に聞きて）何が來る、え、何が來る。（高く）何が來ると云ふんだ。

盲人。…………

都築。えッ聞えない。（と身を換す）

盲人ペトリと膝を付く。

都築。見ろ、この汚ない、醜い、耻づべき人を。これでも活きて居ると云ふ人だ。手は手として從がはず、足は足として從はず。耳も、目も、口も。總べて、體が體に背いて居る。それでも活きて居る。いや活きて居なけりやならん。思ふても見ろ、この人に、何の望みがある、喜びがある、滿足がある、單に生きん爲めに生きて居るんぢや無いか。耻しい事、傷ましい第一醜い事ぢやないか。

盲人。もし、もし。（と又縋り付く）

都築。煩さい、何んだ。（と好くも聞かず）あゝ、未だ生れざる魂。思へ、世界には未だ生れざる魂がある。幾千となく幾萬、いやそれに六十倍し、六十倍して倍して幾億となく無限にある。（激するまゝに其所此所を指して）いや、そこにもある。此所にもある。それ等に何の苦痛がある、抵抗がある。生れて苦しむと、生れずして苦しみを知らぬとは果して何れが幸福だ。私はこの繪のバプチスマに依つて、急にクリストを讀みたくなつた。昨夜、夜を徹して讀んだ。果して書いてある、善き樹は惡しき果を結ばず、惡しき樹は善き果を結ぶ事能はざるなり。これぢや。人は苗にして分たれる。火に投燒

べらるゝ樹は生れながらにその結果をそなへて生れて來る。

盲人。もし、もし。(と這ひ上るやうに縋り付きて何やら云ふ)

都築。見ろ、この、この老人を。斯の如く活きても、なほ生を誇り喜ぶ資格があらうか。斯くの如くにしてまで人は尙世に生きなきアならないのか。(と襟頸を摑んで顏を潔の前に突出さす)

潔。あゝ。(と突俯し聲を擧げて泣く)

都築。何を泣く、泣く間に考へろ、そして處決しろ。

處へ桂子何心なく、「伯父樣〳〵。」と呼びながら出て來りしが、この態を見て驚きて慌てゝ。

桂子。あッ伯父樣、何をなさるんの、危ない、伯父樣。

都築無言にて盲人を突離す、ヨロ〳〵と蹌きて前に仆る。

桂子。まあ、酷い。(と盲人の傍に寄りて介抱して起す)

盲人。(戸口の方を指して桂子に)あれ、あれ、……(と敎ふ)

桂子。(不氣味さうに)伯母樣、伯母樣。

夫人。はい〳〵、今行きますよ、些いと待つて下さいよ。何うだらう、このパチンの固い事は。(とは付添室にて獨言)

人の重き足音に雜りて數人の罵る聲外に聞こゆ。

潔。(恐しげに顏を上げて)お父樣!

都築は佇る、やうに枕元なるソフアに掛ける。

夫人は態と氣取りたるさまにて付添室を出て、無言にて潔の枕頭に立つ、着物を見せん心持なり。

潔。　お母樣、最う出るんですか。

夫人。　まだ間はあるけど、天氣の模樣が變だから早やく行かうと思つて。（良人の前に立ちて）さア貴方何うてす、矢張り私の云つたこの色が勝つぢやありませんか。

都築。　…………

夫人。　帶がこんな色てすもの、貴方の云つたあれなぞにしたら、それこそどんなに可笑しかつたらう。それにこの襦袢も、ね、然うてせう。私の方が目が高かつたわ。

都築。　う、う。（と懶げに聞居る）

夫人。　あら、う、う、だッて。（と口眞似して）本當に氣の無い返事だこと。些つたァ何とか云つて賞めるもんですよ、ね、似合ふてせう。（と袖など打返して見せる）

都築。　あゝ、（と兩手を頸に組んで長椅子に寢ころぶ）

夫人。　まア、未だ醉つて被在るんだわ。人困らせの旦那樣だ。（と濟して椅子へ）

看護婦と共に人夫三名擔架を持ちて入り來る

看護。　手術の用意が出來ました。

桂子。　こんな天氣ても？　何だか眞暗になつて來ました。

夫人。大丈夫よ。暗けりやチヤンと電氣燈もあるわ。
潔。擔架なんか要りません、僕は歩いて行く。
看護。いゝえ、でも些つとでも凝つとして被在る方が好しう御座います。
潔。僕は歩るける。(と立つ)
桂子。(その顏色に驚いて)まア、何うなすつて、眞蒼よ。
潔。なアに。
看護。貴方、矢張り擔架の方がお好しう御座いますよ。
夫人。(看護婦に)いゝえ、乾度病人あつかひされるのが厭なんでせうよ。だけど、潔さん擔架だつて好いぢやないか。何も大病人が乘ると決つた者でもないから。
潔。ぢや乘つたつて好い。(と擔架に乘り)そしてお父樣。貴方は立會つて下さるのでせうね。
都築。私は行くまいよ。
潔。だツて、私一人ぢや何んだか恐しい、ではお母さんでも好いから傍に居て下さい。
夫人。お母樣は今出て行く身體ですよ。
潔。お父樣。
都築。馬鹿、獨りで行け。
盲人。もし、もし。(と又立上る)

潔。（擔架の上より）お父樣、この繪の話、何うしても聞かして下さらないんですか。

郁榮。そりや言はん。獨りて、獨りて考へて見ろ。

潔。あゝ、責め殺されるんだ。

擔架去る。

遠雷の音、太粒の雨ハラ／＼と窓に鳴る。

夫人。あゝ、到頭本降りになつた、困るねえ。桂さん、眞暗だから、電氣を拈つて下さいな。

桂子。は、（と電氣燈を拈る、室内パッと明かになる）ねえ伯母樣、何うしたんでせう、今日の潔さんは餘程變ですよ。顏色も眞ッ蒼だし、それに、涙含んで被在つたわ。

夫人。（それには答えず、突伏せる盲人を見て）あら、未だ居たのね。何うしたんだらう。

桂子。手術ッて、唯傷口を破して膿を取る丈なんでせうか。

夫人。（盲人を見て）まア、何うしたんでせうね、この人は。

桂子。そんなら、潔さんは何故あんな心細い事ばかり云ふんでせう、私氣になつて／＼爲樣がないわ。

夫人。どんな事。

桂子。あら、聞いて被在らなかつたの、死ぬとか不具になるとか、そんな事を云つて居てよ。

夫人。また何時もの癖ですよ、煩悶病！

桂子。それに、この盲目の人も、最から妙に不氣味な事ばかり云つて、本當に何うしたんだらうね、伯

母様。吃度何か譯があるんだから伯父様に伺つて御覽なさいよ。
夫人。駄目〱、今日はお天氣が惡るい、荒れ模様だから。
桂子。ぢや、驗してすからこの盲目の人に易ても見て貰ひませう。私、氣になつて爲様がないもの。
夫人。まア、そんなに氣になる事？（と都築の方に寄りて）貴方、潔は見てやらなくつても好いのですか。
都築。お前は早く夜會へ行つたら好からう。
夫人。全體、擔架なんて、何故斯う大業に騷ぐのでせう。
都築。お前は何も知らないのだ。
夫人。又ですか、一體私が知らないんですよ。
都築。今に直ぐ分かるさ。
夫人。何を手術ですか。
都築答へず。
夫人。何んだらう、今日は妙に氣を持たせて、厭な事ばかり被仰るのね。私寧そ會へ行くのを止さうかしら。ねえ、桂さん。
桂子。だつて……、まア驗しに易ても見て貰ひませう。この人が却つて知つてるかも知れないわ。
夫人。然うね。（と進みなき顔）

桂子。（盲人の耳へ口寄せて）お前さん、易を一つ見て下さい。え？　まゝ、今の、あの潔さんのよ。

夫人。桂さん、何うせ見るのなら私のを見て下さいな。

桂子。（高く）ぢやね、女の人、三十九。

盲人。…………！

桂子。（盲人に聞いて）伯母様、孔の開いた錢を六枚お出しなさいッて。

夫人。そんなものは無い、銀貨ぢや不可ないか聞いて御覧なさい。

桂子。あのね、銀貨ぢや不可ませんか。好いの？　うむ、うむ、縦に？　横に？　六枚？　ただそれだけ？　一枚取る？　どれても好きなのを？　そして、うむ、うむ。（と盲人の言葉を聞取りて、夫人に）斯うなんですッて、その六枚のお錢を縦に好きなやうに並べるんですつて。

夫人。（銀貨入れより六枚の銀貨を取出して、云ふまゝに卓上に並べ）ぢや、斯うなんでせう。

盲人。…………

桂子。え？　なめかかたか、そして一枚取る？　それだけ？　え？　（卓上を見て）一番上が裏、それから表、次が表、表、表、最後が裏。（と盲人に敎ふ）

盲人は両手の指を三本づゝ出し、裏とある分を一本づゝ折る。

桂子。そして、伯母様、そしてその中から貴方のお好きなのを一枚取るんですつて。

夫人。はい。（と一枚取る）

桂子。(見て)取りました、四番目、表の方なのよ。

盲人。(や、驚きて)悪るいな。(と叫ぶ)

夫人。悪るい?　(と一歩乗出す)

盲人。…………

夫人。え、何?　澤風大過。

盲人。(正しく坐りて、や、明かなる聲、所々聞ゆるのみ)大過は棟撓むなり。往く…………亨る。大過は……過ぐる也。…………本來弱き也。…………過ぎて中、巽にして悅び行ふ。往く處あるに利し。大過の時、大矣哉。(と中指にて地を指しつゝ一句一句に句切を切る)

夫人、桂子、首を縮めてビク／＼と聞き居れどもその意を解しかれて、

夫人。そして、何うなんです、早く云つて下さい。矢張悪いの?　ぢや何う悪るいんです。

盲人。(靜かに考へて)才力共に弱く、志の時時を濟はんとして危難を顧みずして身を失ふに了る。破滅瞬目の前にあり、枯楊の華くなり。されど人知らず／＼。(勿論二人の外へは聞えず)

夫人。病氣?　いゝえその、目下の者の病氣は何うなんですつて?

盲人。疾を問へば大凶なり。

桂子。大凶ですッて、まア何うしませう。伯母様。

盲人。事既てに去る。(と明かに)

夫人。まア、それでは……(と良人の傍に駈寄りて)貴方〱、貴方。

郡蔵。何んだ、何を慌てる。

夫人。だつて潔の病氣は大凶ですッて、嘘でせう。嘘でせう。

郡蔵。あゝ、今頃は最う私と同じ身體になつた時分だ。

夫人。ぢや切つたのですか、あの腫物て、足を。

郡蔵。腐骨瘡ぢや、私に祟つた病氣が潔にも血を引いた。

桂子。まア伯母樣、何うしませう。(と涙聲に立竦む)

夫人。(急にボアをかなぐり棄て)それを、何故今まで私に隱して被在つた、何故聞して下さらない、そんな、そんな大病を何故早く聞かして下さらない。

郡蔵。それ、それ、その通り騷ぐもの。

夫人。騷ぎますとも、騷ぎますとも。私は些つとも知らなかつた。あだから潔はあんな妙な事ばかし云つたのだ。

郡蔵。もう晩い〱。追付きやせんぞ。

夫人。まア何んと云ふ言葉でせう、貴方は片意地だから、然う落付いて居られる。私には懸換の無い子です、一人の子です。

郡蔵。私にも子ぢや。

夫人。何んで知らして下さいません。

部築。同じ事ぢや、聞いても聞かんでも、總て同じ結果ぢや。

下女きよ風呂敷包を持ちて入り來る。

下女。あ、まだ彼在いましたね、好い鹽梅で御座いました、天氣がこんなですから、御合羽の用意をして參りました、それにお俥も玄關まで參つて居ります。

桂子。(蒼褪めたる顏して力なく)伯母樣

夫人。いゝえ、いゝえ、私もう行きません、何所へも行きません。潔が心配だ、何うなつたらう。(とスリツパアの片足脫げたるも心付かず、セカ〳〵して驅出す)

桂子。あれ伯母樣。お前もお出。(と下女を促してその後を追驅る)

風の音、雨の音、時々雷鳴の音。外は暮近き空合にて、電燈の光時々に明滅す。部築はソフアを離れ、肩を下して疲れたる人の如く、蹌き出てゝ、中央の腕倚子にかけ、さきの角壜を出して又ウヰスキイを傾く、盲人はその前に座したるまゝ寂莫と動かず。

遙かに夕餉の柝撃聞こゆ。

舞臺稍闇のまゝ暫らく沈默。次第に近づく雷鳴。電光を窓に見す。

桂子。(色を失へて驅來り)伯父樣、手術が濟みました。伯母樣が手術室の前で卒倒なさいました。

部築。卒倒?(と立たんとせしが、又ベタリと椅子に仆れて)まア好い、好い、打遣つて置け。

桂子。　何うぞ見て上げて下さい、大騒ぎですから。

都築。　好い〳〵。（と又切りに酒を呷る）

雷鳴激しく、硝子窓に響く。桂子恐ろしさにソロ〳〵と伯父の側に寄る。

看護婦、醫員など付添ふて夫人幸子を介抱し來る。夫人はきよの肩にすがりて力なく入り來る。

都築は酔體を起して立ちて迎ふ。夫人を見る、夫人も見る。兩方無言。やがて勧められて夫人は付添室に入る。

醫師、看護手當を施して去る。桂子も付添室に入る。

電光雷鳴。都築は椅子にかけて又酒を飲む。

やゝ程經て、

盲人。　もし、もし。（と手探りながら付添室に行かんとす）

都築。　（その襟を掴みて）おい、何所へ行く。何？　歸る、歸るなら其方のぢや無い、此方だ。

引擦るやうにして出でんとする所へ、副院長付添ひ昏醉の潔ハを擔架に乗せて入り來る。

石見。　御安心なさい、手術の經過は至極良好です。

都築。　切斷した足は。

石見。　後からお達けしませう。然し何を云つても若い内の事ですな、麻醉中も切りと何か戀の話らしい。心は戀人と囁きながら身體の足を切斷されてるなんかも面白いぢやありませんか、大方當人は切られた足で公園でも散歩して居たんだらう、はゝはゝゝ、これて後出血さへなきアもう大丈夫だ。（と云掛

けて、偶と酔態に心付きて）都築さん、大分行けましたね。まだ奥様が心配しますよ。若い奥様だ。餘り氣を揉ませなさるなよ、はゝはゝゝ

都築卓上に頭を埋めて言葉なし。話の中に人夫等看護婦と共に潔をベッドの上に移す。けい子蒼褪めたる顔して出て來たり遠くより病人を眺め居る。

石黒。（患者の脈部を診察して）ては鎭靜劑をこゝに置きますから、氣が付いたら飲まして下さい。なるべく安靜に。（と桂子に注意して去る）

人夫も去る。雷鳴次第に激し。

桂子窃かに潔の枕元へ立寄り、心配さうにその顔を打戍る。都築夫人、前の姿。顔蒼ざめ、髪も亂れ、衣紋も亂れたるまゝ、上靴も穿かず落付かぬ態にてスル／＼と出て來りて枕元に立ち、

夫人。潔さん、潔さんや。（と二三度呼掛けしが、患者の昏酔せるを見て、喪心せる如く良人の傍に立ち目を据えて、）貴方！

都築は言葉なし。

夫人。貴方、潔は最う駄目なんてせう。院長は何んと云ひます、貴方、貴方。こんな事なら何故早く私にも聞かして下さらない。昨日からも一昨日からも貴方は知つて居て隠して被在つたのだ。私は最う何うなれば好いんてす、私は潔に濟みません。

都築無言。患者潔はこの時、苦しげにうゝむと呻く。夫人はツカ／＼と寄りて、顔さし寄せ。

夫人。潔さん、氣が付いたの、潔さん〳〵、潔さアん。お母さんも茲に居る、桂さんも居るよ、潔さん〳〵。

桂子。(氣を揉みて)伯母樣、然うお氣を揉んでも爲方がありません、靜かにして居るやうにとお醫者も申しますから、那方へ被行つて休んで被在いまし。まア、お顏が眞ッ蒼。

夫人。(突除けるやうにして)潔さん、潔さん。(患者又うゝむと呻く。)

夫人。おゝ苦しいの、然うだらうね。苦しいの、苦しいの？

桂子。伯母樣、然うお氣を昂らしちや不可ません。

夫人。潔さん〳〵。潔さん。

郁榮。(ツカ〳〵と寄り、夫人を引離して)何んだ、馬鹿な眞似。潔は死にやせん、唯……不具者になッたゞけだ。

夫人。そんなら何故前から私に聞かして下さらない。それに、斯うなる者を摑いて貴方は何故曩きあんな酷い事を被仰た。

郁榮。何うて生れ損ひだ。

夫人。生れ損ひでも何でも私の兒です。

郁榮。あッち行け、そして寢てるんだ。

夫人。貴方は醉つて被在る、この病人の潔に曩き何を被仰つた。貴方こそ那方へ行つて被在い。

潔。（うゝんと唸きて）お父樣！（と幽かに）

夫人。（良人を遮つて）あれ、貴方默つて被在い。潔さん、氣が付きましたか潔さん、さ、これをお飲みなさい、これを。（と藥お飲ます）

潔。（ピジャ〳〵と唇を鳴らして）お父樣は。

都築。（ぬッと顏を突出して）う、何んだ。

潔、物に怖ぢたるやう、あッと叫んで又昏睡に陥らんとす。

夫人。それ御覽なさい、それ。まア潔さん何うして、潔さん。

桂子も共に名を呼ぶ。潔やゝ正氣づきて水など求む。夫人。桂子切りに介抱する時。電光窓に一閃して、轟雷耳を聾く。桂子夫人思はずアッと叫んで耳に蓋す。夫人も顫え上りて、「もし、もし、」と呼びながら人居る方に擦寄る。都築一人肩を聳かして立つ。

潔。（却つて平氣、目をパッチリ開き、聲も明確して）お母樣も桂さんも居るね、（と起上らんとして仆る）

夫人。あら、何うして？　潔さん。

潔。足に觸らして下さい、足に。

桂子。何うして、痛む？　そして胸氣持が惡るいやうな事はない？

潔。お母樣、お父樣は？　聞いて下さい、私は足を切られたやうな氣がする。

夫人。（ギヨッとしながら、故と）そんな事があるものかね、など切開したばかりの事だから氣を採まないて凝つとしてお出なさい、ね、ね、動くと心持が惡るくなるよ。

潔。全身痲醉だ。

夫人。大丈夫よ、あれんばかりの腫物で足を切られて耐まるものかね、神經ですよ、氣の所爲ですよ。

潔、切りに周圍を見廻はすうち、前のユダの像を見付けて、

潔。お母さん、あれ、あれ、（と蒲團に頭を埋む）

夫人。（不審さうに）あの繪、何うかして。

潔。あれを取つて下さい、見ると恐ろしい、恐ろしい。早く、早く取つて下さい。

夫人。あゝ、この繪。（と何心なく取除けんとする所へ、都築は突然）

都築。不可ん、取つちや不可ん。

夫人。何故不可ないんです。

都築。好く目に染み込む程見せてやれ。

夫人。だツて、あんなに厭がつて居るものを。

都築。厭だと云つたら首根ッこを掴いても見してやれ、斯うするんだ。（と行成潔の蒲團を引剝ぐ）

潔。あゝ、お父樣、最う赦して下さい。

夫人。あれ、何をなさる、厭がるものに無理をなすつて。（と手を拂はんとす）

都築。何をする、お前の知つた事ぢやない、衣服、指環、ブロッチ、お前の心配はそれて澤山だ。

夫人。不可ません、貴方は曩きから潔を責殺さうとなさるんだ。

都築。責めるんぢやない、覺醒さすんだ。

夫人。何と被仰つても不可ません。あれ、お放しなさい。

都築。なに、不可ない。(と荒らく掠れたる笑聲を聞かせて)昨日まてた違ふぞ、最うお前の權威は無い。
今日は總て新しくなる時が來たんだ。

夫人。何が新しくなるんてす。

都築。お前は妻としてその良人に、母としてその子に、强き權威を持つてると信じて居る。そりや然し
然うだつた——昨日まて。然うだ、昨日まて。然し今日は最う行かん。次の新しい時が來たんだ。

夫人。何故不可ません。貴方はお酒に醉つて被在るから、例の病氣てまた亂暴をなさるんてすね。

都築。亂暴ぢやない、蹈むべき新しき道を蹈むんだ。

夫人。何が新しい道てす。

都築。お前にや見えまいよ、今日は總て新しき道が開けて居るんだ。

夫人。私は何うしても止めます。

都築。止めて見ろ。(と嘲笑つて)潔、目を塞ぐな、見ろ、見ろ、見るんだ。

桂子ははら〳〵して切りに二人を宥むるをも聞かず、都築は潔の襟頭を引摑んて無理にユダ像と顔を合さしむ。

潔。 あ、あ、お父樣。

都築。 見ろ、見ろ、見ろ。

夫人。 何をなさる！

雷鳴又烈しく、窓硝子にビリ〳〵と響き、電氣燈フッと消えて、室内は眞闇となる。

夫人。 あれ、貴方、潔！

潔。 お母樣、あゝ、あゝ。（と怖える聲）

桂子。 伯父樣！

雷鳴又烈しく、電光切りに窓に閃く。

やゝ暫くして看護婦燭臺を持つて入り來る。

看護。 電氣が止まりましたから。（と顫ひ聲にて走り去る）

風雨雷霆の音、轟然、喧然。

都築起ちて四方の窓を明け放つ、外の音愈に甚しく聞ゆ。

夫人。 あれ、何故開けるんです、閉めて、閉めて、閉めて下さい。

都築聞かぬ顏にて枕元に立つ。

潔。 （聲も切れ〳〵に）閉めて、閉めて下さい。

都築。 見ろ外の暴れを。

夫人。 あ、貴方は氣が違つた！

郁策。 大丈夫だ、はゝはゝゝゝ、大丈夫だ。

潔。 お父樣、貴方は私を何うなさらうとするんです。

郁策。 狼狽いるな、何うなさる？ そう云ふ體がお前自身の身體だ。

潔。 僕の身體？

郁策。 自分の身體を顧ろ。

潔。 （急に聲上げて）足を觸らして下さい、足を。

郁策。 それ。（と潔の身體を引立てんとす）

桂子。 あれ、伯母樣！

夫人。 貴方、そ、然うしてまて——（と立竦むのみ）

郁策。 それ、觸つて見ろ（と引起す）

潔、漸く自分の足を探り得て、あツと叫んで倒る。

雷鳴。二人の女は耳を蔽ふて伏す。

郁策。 見たか、分つたか。それが貴樣の身體だぞ。

潔、肩を顫はして歔欷すのみ。

郁策。 貴樣の前途は略見えやう。俺と貴樣と同じ道を蹈むんだ。貴樣は生れながらにして人生の落伍者

だ。弱者だ。敗北者だ。
潔。お父様。(と聲をあげて泣く)
都築。何を泣く。
潔。僕は最う……僕は最う……
都築。足ばかりぢやない、貴樣の如き弱者は心も不具だ。この旋風のやうな、(と外を指し)それ、その外の暴風のやうな人生と戰つて、苦んで、勝つて突拔けるほどの勇氣があるか、私でさへ苦んだ。過去の四十幾年は惡戰と苦鬪の歷史だ。その力のないその身體で、その心で貴樣はこの暴風雨を侵して見事突ッ切る勇氣があるか。
夫人。(徐々立寄りて窓を閉めんとす)
都築。(心付いて)何をする、見せてやれ、見せてやれ。
潔。寧そ死んだ方が好い。
都築。が、然し死ぬるほどの勇氣も貴樣にや無い、耻は死を以て償ふと云ふ。貴樣のやうな弱者は耻を耻ぢずに、穢なく見臭く十年も、十五年も、長く〳〵活きる人なんだ。
潔。では私は何うなれば好いんです。
都築。それは然し云ふまい、自分の事だ自分で考へて見ろ。そして處決しろ。
潔。無理です〳〵敎へてくれないのは無理だ。
都築。私は言はぬ。
電烈しく閃く。

潔。あれ又鳴る。窓を‥‥窓を‥‥
都築。貴樣あれが恐しいか、臆病者！
潔。桂さん、窓を。
都築。誰も閉めちや不可ん。目を明いて、耳を開いて、あの、あの音を聞け。
夫人。(喪心したる人の如く)貴方、窓だけは‥‥潔は小兒の時から雷嫌です。
都築。不可ん。潔、今のは遠いが段々強くなつて來るぞ。
潔。あゝ。
強雷の音。
都築。何んだ卑怯な、頭を擡げて聞け。
潔。お父さん。
都築。聞け、好く聞け。
盲人。もし、もし、
都築。(雷を指して)世の中はあれだ、暴風だ、戰だ。耳を塞いて、息を殺して、そして活きて居て何になる。目を立て、肩を聳かして吾が足を踏んで活き得るが眞の人の世だ。そして、眞の世界はもう我々のものぢやないぞ。祖父樣は私の身體に勇氣と力とを與へなかつた。私もお前に勇氣と力とを與へなかつた。父が子に、子は孫に‥‥あゝ、われ〳〵は遂に擇ばれざる人なのだ。
潔。If he had not been born
都築。同じく仆れる時が來たのだ。仆れる時が來たのだ。

潔。電閃く。

潔。あゝお父樣。

都築。まだ恐しいか。

潔。あゝ。

都築。貴樣は遂に活き居る奴ぢやない。恐いか、又來るぞ、今度は今度は前よりもズット烈しく來るぞ。

潔。あゝ。

强電、强雷。

都築。それ見ろ、今光つた、あれだ、あれが來るんだ。

潔。お母樣。

都築。逭げるな、聞け。

强雷、間もなく又閃く。

都築。それ、又來た、又來た。

潔父の手に縋付く。夫人桂子は牀に突伏して死者の如し。盲人は空しく空を見上げて寂然たり。

頭上にはためく雷。

都築。それ、それ、それ。

潔。あゝ(と悶絕す)

都築狂者の如く笑つてわが子を見戍る。

幕後、しばらく雷の音を聞かす。

幕

校長の三子

小杉天外

校長の二子

小杉天外

一

新吾は歯磨刷毛の水を切りながら、木槿だの枸杞だのの、こんぐらかつた樣な枯垣に著いて、庭から續く屋後の野菜畑へと出た。手水を使つたばかりの新しい顔を、冷たい空氣が、正面から付打かる、昨日の雨の水溜を跳ると、メリヤスの窄袴下を徹して、裾風が思はずも脚を立竦ませる。

薄日が役にも立たない光を投げて、畑の土は黒く濡れた儘て居る。採り殘された菠薐菜、霜に痛められてばしや〳〵亂れた京菜、坊主の出た冬葱、葉の黒ずんだ三月大根、それからひつ凍冷んだ樣な高菜……、どれもこれも、暦ばかりが節句過ても、雪の在る朝夕の山風に畏縮て、頭を縮こめて、土に噛り着いて顫へて居る。

野菜畑の右手に寄せて、養蠶の道具から肥料桶、炭俵、繩片、何でもがらくたを投込んで置く古い納屋が、ぼろ〳〵に穴の明いた荒壁で、家根は出くま引くまに崩れ掛つて、太い丸太を突支棒にして、宛然疲曳の老人の樣な具合に立つて居る。此の納屋の檐に近く、今が眞盛りの大きな駄椿が、紅い花を隙間もなく附けて、薄曇りの空に氣の重た相に茂つてゐるが、その根方では、跛の與助と云ふ、長いこと此の校長さんの家に奉公の下男が、手甲を塡めた皺だらけな手に大鉈を揮上げて、山と積むだ薪を割つ

て居るのだ。

「おい與助、」と新吾は聲を掛けながら傍に寄つて、「おい！」

與助は後の聲で辛と氣が着き、萎びた黄色い顏を惘然仰向いて、

「お早うごぜえます。今起きなすつたゞね。」と云つたが、並を外れた痩つぽちの、顏の小さな新吾が何枚かの綿入の上に、裄も丈も夜具の樣な親父の厚袍を襲ねた樣が可笑しく、

「恐ろしく着込みなさつたねえ、腦病てものは、體冷へるもんかね？」

「なに、失敬な、夥多着込めア何したんだ？」と新吾は忽ち眞になつて咎めた。

「はゝゝゝゝ、」と笑つた與助は、強い風が吹いたら轉びなさるべえ、と腹の中で思ひながら、口に出しては、「何ね、其樣ね着込みなさつたら、肩が張つて、餘計に頭は重かんべえと思つてね。」

「貴樣になんぞ何が分るか、默つてろ！」と下男とは云ひながら、自分と較べて倍も齡の違ふものを、犬猫の樣に叱り付けて、「おい、與助、鷄卵を何した？ 持つて來いよ。」

「鷄卵かね？ 鷄卵はね……」と與助は莞爾々々とやりながら、鉈を揮上げては薪を割るのである。

薪は櫟や小楢の交り、近頃山から伐出したばかりの生木なので、萎びた與助の腕でも、鉈の刃が當ると一緒に、面白い樣にさくりと割れる、新しい木の香が、ぱつと鼻を衝く、それを荒れた手でひつ掴んで、ぽいと右方に投る。力が入ると、椿の幹にこつと音して、機に大きな花がぽたりと落る。

「如何したんだ：？ 今朝は產まないのか？」

「なアに、産むには幾らも産むだけんどね……。」と、またも薪をさくり。
「おや如何したんだ？」と新吾は氣を苛々して、「おい、與助！」
與助は顰めた顔を振起して、
「今朝ね、旦那樣ア來て、悉な持つて了ひましたよ。」
「悉な持つてた？　其樣な事が有るもんか。」と咬付きも爲かねない險相。
「だとつて持つてッた物は詮方が無えぢやありませんか。」
「其樣な無責任な言葉が有るか、約束をした以上は貴樣にそれだけの義務が有るぞ！」
「義務が有るか何が有るか知んねえけんど、御主人樣が持つて行くものを貴方、奉公人の分際で何されるだね？」
「ぢや、何故隱して置かない？」
「私ア馬鹿だせッてもね、隱す暇が有りや、貴方に憤らせ無えても濟むだよ。はゝゝゝゝ。」と與助は汚い口を大きく開いて笑ひ、「一朝位え食は無えだッて宜えて無えかね、然う、美味え物ばかり食ひないッても、急に體が恢復るても有りますめえ。」
「分りも爲無いて生意氣な事を云つて居やがる。」と新吾は最う憤り切つて、暫く口をむぐ〳〵して居る。
「貴方もまた、私等ばッか强請ら無えて、公然に、父樣から貰ひなすつたら宜かッぺえ……。」と何處

か嘲ける樣な語調で、「大事の息子樣だ、なんぼ父樣だつて、鷄卵の二個三個惜みァしますめえ、隱して食はッしやるてが間違つてるだ。」

「餘計な口は利かんでも可い。」と與助の辭をひッ捺つて、「無い物は詮方が無い、今朝だけは勘辨して遣る。その代り、明日の朝からは必然と取つて置くんだぞ！」

「夫アね、取つて置けるなら取つて置くけんどね……。」

「其樣な曖昧な事を云つたッて可かん、必然と取つて置け、三個取つて置け。」

「はゝゝゝ」と與助はまた笑つて、「然う行けァ、貴方の都合は可えだねえ。」

「ぢや、俺の命じた事を肯かんと云ふのか？」

「貴方と約束するとへえ、後の理屈が可怖ねえから喃……。」と云ひながら鉈を把上げたが、瞥と畑の彼方を見ると、「何だねお村どん、またお使者けい？」

成程そのお村と云ふ、赤顔の、男の樣にがッしりした、三十前後とも見える下婢が、丸肥りの雙手に駒下駄を提げて遣つて來るのだ。

「下駄なんて持つて如何しだゞ？」

と與助がまた聲を掛けたけれど、お村は中々其樣な事は耳にも入れぬらしく、其處へ來るや否や、

「若旦那、貴方は本當に、仕樣が無えぢやありませんか！」と大聲で怒鳴りながら、い、い、ずきむき新吾の前に立ち寄つて、「此樣ね立派だ下駄持つてながら居てゐて、旦那の許履へてるだァもの……、さ、脱つせ

え、履き更えて下せえよ。」と其の提げて來た南部表の、茶色革鼻緒の掃除の綺麗にしてある兩抉を新吾の足下に突付けた。

新吾の履いて居るのは此物と違つて、鼠色のコール天鼻緒の嵌つた、不恰好な山桐の、夫も前の缺けた古くなつた薩摩下駄である。

「なんだ、此樣な下駄。」と新吾は自分の履いて居るのを貶し付けたが、然ればとて履き更へ樣とするのでも無い。

「其樣なこと云はッしやるなら履か無えが可えだ、自分の物て云や、大切に仕舞つて置く癖に……。貴方の樣な勝手な人は、一町四ヶ村の秦野は廣えてッても、本當に二人と無えだ、伊勢原にだッて無えだ……、私ア平塚にも居たどアけんど、平塚にだッて無えだ……。」

「こら！　何だ失敬な、」と新吾は負けぬ聲で叱り付けた、「貴樣の物でも履きはすまいし、生意氣な事を吐かすと恕さんぞ。」

「然云つたッて、私だッて、旦那樣から命令かッて參りましたよ。」とお村は憎々しく顏を突出して、「内野の旦那と出て行かッしやるんて、疾く持つて來うて、現在待つて居らッしやるて御座えますよ。」

「なに、内野？」と憤つて居ながらも耳に挾んで、「銀行の内野か？」

「當然さね、」とお村は何が何でも怒鳴つた、「玄關へ出て待つて居なさるだ。疾く履更えて下せえよ。」

「ぢや、大槻へ行く處なんだな？」と獨語をするのか下婢へ問くのか、孰とも分らぬ樣に云つて、「阿父

様風邪を感いたつてだつけが、戸外へ出られるのか？」
「ほゝん、貴方ぢや有めいしさ。」と鼻て笑ひ飛し、「些とや微と健康が悪えせつても、愚圖々々してなんぞ居ませんよ……、朝は夙く起きなさるだらうし、水で體は拭きなさるだらうし……、夫を、貴方はまア何事だ？　脳が悪えの、眠れ無えのつて、若え身そらて、懶る事許え考えて居なさる……。」
「此奴、主人に對つて……。」と云ひ樣、新吾は手に任せて薪を揮上げた。
「何なさるだ？」とお村は疾くも、薪を持つ手をぐわんづと摑んで、「何なさるだ？　薪揮上げて、私を打たうてんだね、小癪らしい。貴方に打たれる樣な腰拔ぢや無えだ……。」
而ると、默つて二人の爭ふ樣を見て居た與助は、跛の脚を曳きながら間に入つて、
「まア／＼、何だ何だ、止し無えなお村どん……」と、力に任せて新吾から奪取つた薪を、無理にお村に棄てさせて、「若旦那、貴方も宜しく無えだ、此樣な物て人を撲つて、負傷拵せえたら如何しるだ？」
「此樣な下等な奴は、殺したッて關はん！」と新吾は呼吸を喘ませて叫んだ、「失敬な奴だ、貴樣の樣な奴は家には置けん、一刻も置けん、出て行け……！」
「大きな事云はッしやんな。」とお村は嘲笑つて、「貴方に飯を食はされて居しめいし……、私ア。旦那樣と奥さんの奉公人て御座えますよ。ふん、其樣な事を云ふだら、貴方の方て出て行つたら宜かッぺえさ。」
「お村どん其樣ね事云ふもんてねえよ。何てッたッてこれ、男て一人つ子の若旦那て無えか、家督を

取らつしやる若旦那て無えか‥‥。」

「若旦那だら、若旦那らしく爲たら宜かッぺえ。日かな一日猿眼して、屑屑、屑屑、」とお村は咽喉を鳴して罵り續けた、「人の落度計か探してるだア！　大學卒業したが糞、人情も義理も、何にも知ら無えだ‥‥。」

と云ふと、またも新吾が躍蒐らうとするので、

「セア〳〵若旦那、」と與助は抱留め、「勘辨して遣んなせえ。お村どんだッて、別に悪氣は無えだからね‥‥。」

「去年の暮から轉がり込て來て、何一つ家の用事したこと有るだア‥？」とお村は匆々口を止めぬ、「理屈計か捏ね腐つたッて、體の利か無え阿母様に、看病一つした事も無えだ‥‥。それて何點が學者だ？　學者だら喃、自分の體べえ大切し無えて、眞似ても可えだから、親孝行でもして見せるが可えだ‥‥‥‥‥‥。」

「こら、退け！」と新吾は無理に與助の手を突離して、駸々母家を指して歸つて來た。

此樣な無識な徒に罵しられたのが忿懣に耐へぬ。普通の體格てあらば、此の場て思ふ儘に懲して遣らうものを、腕力を振うても彼奴には敵はぬ。奴故此う弱い物に產み付けたらう？　罪は親達にある、怨は親達にある！　精神力は何人にも譲らぬ心算ても、體力が伴はなければ、些細な障碍も除く事が出來ぬては無いか？　それも、此の缺點を償ふだけの資產とか、勢力とか、何か補助になる物を譲つて具れ

るなら可いけれど、親父なんぞ何樣な讓る物を有つて居るんだ？　と此う考へると、横濱の中學校を卒業したのも、東京へ出て私立大學の文科を卒業したのも、今は故人の石黒代議士の賜物である事から親父には殆ど學資も書籍料も貰つた覺の無い事が、新に湧いた出來事の樣に胸を燃やした。夫は、幼稚い際は大小便の世話にも成つたらう。洟も拭いて貰つたらう、箸は右の手で持つものと敎はつたらう、頭を垂げてお辭儀する躾もして呉れたらう、それから虛言は惡事であると云ふ事、楠正成は忠臣だと云ふ事……、種々敎へて呉れたらうが、其樣な事で親たるもの丶責任が終つたらうか？　其樣な世話に成つた位で、子は服從の義務、尊敬の義務、扶養の義務を生涯負はねばならんのか？

自分の學友も澤山ある、陸軍中將の次男、大名華族の一人息子、大坂の豪商の養子、全權公使を伯父に持つた者、稅金ばかりも十萬圓以上納めると云ふ越後の大地主の總領……、孰も自分より成績は劣つて居たが、碌に勉强をするでも無く、暢氣に學生時代を終つたものだ。彼等も人の子である、自分も人の子である。自分の樣な者でも親の恩を感謝する義務ありとすれば、彼等の感謝すべき其の義務の量は如何であらう？　不公平極まる話だ！　何故自分ばかりは此樣な家に生れた？　此樣な家に棲む者の子に生れた？　小學敎員の子なんぞに生れた？　と新吾は脚を立止めて、鴉の休んで居る藁屋根の、棟の蒲鉾の毀れかけた、煤けた我が家を悵然と眺めた。

二

古屋であるのに、元來が百姓家であツた。彼此もう三十年も昔のこととて、その頃は櫻井先生も何等訓導

とか云ふ職名で、小田原から此地の小學校に轉任したのであるが、差當つての假住居に此家の坐敷を借りたのが、後から願へば秦野に身を落着ける緣の絲に引張られた樣なものである。先生は此家で妻君を迎へ此家で息子の新吾も生れゝば、娘の登代子も生れた。確か在職十五年かの際には、學事に盡瘁せられた其の功勞を感謝す可く、町中の有志が醵金をして、建物も所屬の畑地も、悉な所有主の名を櫻井盛之に變へて了つたのである。

長い間には幾回か修繕もしたが、間取の勝手は矢張昔の儘である。庭に面して乾割れた椽側が長く走つて居る、椽側の廂に亞鉛家根を繼足して、平な自然石を沓脫に据えて、形ばかりの玄關が突出てゐる。此處から入ると、疊には厚い澁紙を上敷にした、天井の高い煤けた室が次の勝手の室まで長くぶッ通してある。

勝手の室には爐があつて、焚火の煙が燻つて居る、二枚折の古屛風を廻した上から、白手拭を冠つた病人の妻君がちら〳〵動く。その頭の向ふには、反古張の薄暗い北窓がある、袋に入れた種物がぶら下つてる、柱に鹽鮭の頭が光る、乾枯びた唐辛が釣してある、固餅の網が釣してある。

妻君は繼物をして居るのだ。光線の薄いのに、病中の眼の力は、一つ所を視詰めて居ると直ぐ朦朧する。幾回も針の手を息めては、蒼い顏を擡げて、大儀さうな呼吸をほッと吐いた。その胸の中では只だ平沼の師範學校に居る娘の事ばかり思つた。一昨年の暮から、足掛三年の長病で、此頃は醫師にも診せず、藥も飮まず、臥たり起たりして其日〳〵を送つてゐるのだが、孰せ此病で生命を奪らるゝものと諦めて居

る、また此樣な體で何時までも生きて居た日には、敎育の爲に世間の爲に、用務の多い良人の足手纏ひになッて、生活の費用の嵩む不機嫌な顏を見せられるばかりである。であるから、生きて居たいと云ふ慾なんぞ起す事もないが、只だ何も、離れて居る娘に會ひ度いのだ。胸も壓迫れば息切もする、身體を運かすと眩暈もする、何かして動悸が強くなると、今にも胸が破裂けるかと思ふ事もあれど、併し最う熟れ切つて了つた、未だ未だ此樣なことで死ぬ命では無いらしい。起居には不隨意であれど、これも不隨意なりに體を扱ひ慣れて、附切の看病人の手が要るのでは無い。加之に暑中休暇になれば、厭でも家へ歸る娘である、急に今が今會はなければならぬことも無いのだ。

無いのだが、夫でも何も會ひ度い。大切の修業中の者を、親の身で勉強の邪魔に成る樣な事をしては、醵金して、月々の學資を送つて呉れる町の人達にも濟まない。また學校の監督が嚴しいので、會はうにも呼寄せ樣にも、匆々難かしい手數を經なければならぬのだ。所詮夏の休暇を待つより方法は無い、それ迄耐へて居るより外は無い……、と斯う諦めた居るが、諦めた後から直ぐ、可愛い娘の顏が眼前にちらつく、親に優しい記憶が胸に浮ぶ、今頃は何して居ることやら、と心は其の方にばかり吸付けられて、果は何が何でも只だ會ひたくなる。

耐へ難て、良人には秘密で手紙を遣つた。別段に病氣が惡く成つた譯では無いが、近頃は目切身體が弱つて、時々此の儘息を引取る處かと思ふやうな事がある、お前の顏を見ずに死ては、阿母樣は行き所にも行き難る、學校の方も忙がしからうが、一夜泊りて歸つて來ては呉れまいか、と云ふ樣な事を、持ち慣

れぬ筆を持つて、假名ばかりの長いのを、二日も費つて辛と認めて、表書をば下婢のお村の名にしたのである。

待つて居た返書は五六日も遲れて、漸く昨日の朝屆いた。娘は課業に追はれて、手紙を認いて居る暇も無いのだと云ふ、それで、家へ歸へるなどは思も寄らぬが、阿母樣の病氣は醫師に掛けて、續けて服藥をして貰ひ度い、阿父樣も兄樣も、傍で觀て居ながら何故然う爲して呉れぬのだらう、私は甚だ憤慨する、と母にもお村にも解らぬ文字を交へて、僅かなれども私の小遣錢の中から、此だけを送つて上げる、何か滋養物を買つて食つて下さいとして、一圓紙幣が一枚卷込んである。

手紙を讀んで一回は落膽したが、落膽した中からも、娘の何時も侲幼なくッて、母親思ひて、それで中々の氣性張な處が、最う可愛いくて可愛いくてならぬ。一倍會ひ度さが增す。身體が利くものなら、此の送つて呉れた金を旅費にして、一寸と平沼まで行つて來やうものを、とまで想ふ。想ふた果はまた落膽する、溜息を吐く、織物の針の手を息める、而して針箱の抽斗から、懸針や小布片と一緒に入つてる娘の寫眞を取出して、煙の交つた薄暗い窓明りの下で、惚々と見恍れては、登代ちやん、と徐と息を被ける……。

「恐ろしく燻ぶすねえ、此樣なに燻さなくッても宜さ相なもんぢや無いか……。」と癇癪聲と與にがらり板戸を開けて、上の室から新吾が出て來た、「阿母樣、何か煮物でもするんですか？困るねえ、此う燻されちや。何を爲る事も出來はしない、新聞一つ讀む事も出來ない。」

母は脹んだ蒼い顏を上げて、

「然うけえ、彼室まで煙は行くけえ？」

「行くけえも無いもんだ、まア此方へ來て御覽なさい、」と云ひながら顔を顰めて、懷手の儘爐に近く立寄り、「些とも燃えて無いぢやないか、今から蚊燻でもあるまい……。寒けりや炭を焚べたら可いでせう。」

「えへゝゝゝ、」と母は笑つたが、徐ら火箸で燃片を寄せながら、「然う、お前の樣に云つてられるもんぢや無えよ。」

「可け無え、何故？」と突掛る樣に聞いたが、「ま、ま止して呉れよ、灰が眼の中へ入るぢや無いか！其樣なにつッ突いたッて燃えるもんか……。」

と云つても、母は囲爐裏に頭を屈めて、燻ぶッた鐵瓶の下を、ふう、ふう、と短かい息で燃すに掛つた。灰が渦を卷いて、家根裏までもと輕く舞上る。

「仕樣が無いなア……、」と新吾は舌を鳴して、心臟病と云ふ死病に取附かれて居る癖に、養生も衞生も何事も知らず、小さい狭い自分の經驗智のみを力にして、我の言葉など耳にも入れぬ頑固な母を見下ろして居たが、今更ながら其の無教育なのが腹立たしく、「阿母樣は煙を吸ふな好きなんだね？大變良いさ、藥服むより餘程利かア。」

母は辛と爐から顔を離し、煙の入つた眼を擦りながら、

「私だッて好きぢや無えけんどね……、炭を焚きやお前、薪の倍費るぢや無えか……。」と咳が出る。

「だから熾に燻したら可いだらう！而して體を惡くするさ。」と新吾は嘲笑つたが、「だけれどね、貴女が

たは、金さへ費らなけりや何でも宜からうけれど、僕は困ります、僕は希望の有る身體ですからね、病氣て居る中も止して貰ひます……。」
「何をよ？火を燃すのけえ？」
「然うさ！此樣な煙い家に居られるもんか。」
「えへゝゝゝ、」と母は笑つて、「其樣な事を云ふけんど、お前だつて東京で生れた人ぢや有るめえし、煙るから居られ無えもねえもんだ……、幼少い時から本當に、此の圍爐裏邊で育つたぢや無えかよ。」「えッ煩さい！解りもしない癖に剛情を張つて。」一口に母を云ひ消して。「僕は此の通り腦病で、終始醫師に掛つてるんぢや無いか！頭に障るから止して呉れと云つたら苦情云はずに炭にすりや可いぢや無か！」
「だからよ、炭にすりや費用が違ふッて云つてるぢや無えか。」と母はまた繼物を始めて、「お前なんて喃、所帶の事なんか解ら無えんだから、默つてるが可えだよ。」
「ふん、解ら無え？驚いたねえ……。貴女なんぞの一生掛つて考へる事は、僕は一時間で考へてるよ！何だ、此樣な貧乏所帶！毎日一俵宛焚いだッて、炭代が幾何するんだ？身體と炭代と何方が高いんだ？」
「然云つたッてお前、金つて云ふものは喃……。」母は暫く針を動かして居たが、「それもさ、阿父樣が學校へ出て居た時分なら可えけんど……、今はお前、金に成ら無えて家族殖えてるだァもの、詰めた上にも詰め無えぢや、私の務が缺けるて無えかよ！」
「ぢや、家ぢや金が無いッてのか？生活に困るッて云ふのか？ぢや、小田原の叔父樣の名で、横濱の銀行

へ預けて置く金は、彼は一體誰の金だ？」と新吾は眼を剝出して母に迫つた、「阿父樣なんざ僞善家と云ふもんだ！公共も糞もあるもんか……、他人前ばたり瞞着かして、熱心家らしく奔走なんぞしたつて、悉な私慾の爲なんだ、金が欲しさに彼樣な眞似をするんだ！」

「夫はお前、世の中にお錢の要ら無え人は無えから喃、」と母は嘲り返す。

「其樣な決めた樣な事を云ふもんぢや無い阿母さん！貴女は何を知つて、其樣な事を云ふ？自分の生れた家と、此家より他に、家庭と云ふものを見た事は無いだらう？」

「然うけえ？」

「阿父樣なんざ何だ、口でばかり教育家だなんて、現在息子が病氣て居ても、碌な醫師にも掛けないぢや無いか！阿母樣に對してだッて然うだ、醫師は愚か、藥一つ服ませんて置くぢや無いか！」

「なアに、私なんぞ、藥飲んで癒る身體ぢや有るめえしさ。」

「ぢやア、死んでも惜か無いんだね？」

「惜いたッてお前、時が來りや誰だッて死ぬて無いかね。」

「ふん、善く諦めたなア！」

「諦め無えて何うするのよ。」

「然うだらう、彼樣な阿父樣の感化を受けたんだから、悟つた筈さね！」

「新吾、何だつてよお前、」と母は膝を向き直つて、「一口上げに阿父樣を惡く云ひ腐つて！阿父樣のお蔭

てお前、然うやッて居られるて無えかよ?」

「はゝゝゝ、」と突然に高笑して、「阿父樣のお蔭だ?はゝゝゝゝ。」

「何可笑いだ!馬鹿!」と病身の母は息を　せて叱つた。

「阿母さん、少し考へてから口を利いたら可いだらう……。」

「な、な、何考げえるだ?考げる事ア無えだ!」

「ふん、阿父樣のお蔭て云ふけれどね、僕は、今日に至るまて、一度だッて親父から學資を貰つた事は有りませんぞ!書籍料だッて快く呉れた事は無いんだ!云はば僕は、自力て一人前の人間に成つたんだ!」

「お前も一人前の人間けえ?」

「一人前て無くて何だ?此邊の人間に較べたら、ふゝん……。」

「一人前の人間だら、親に安樂でも爲せて見さッしやい!」

「僕には其樣な餘裕は有りません!僕は、親に安樂させに生れて來たんぢや無いからね!」

「そんなら、何しに生れて來たゞね?」

「さア、何爲に生れて來たかね?」と家根裏を見上げて、「夫は、昔から未定の問題さ!」

「生意氣な事吐し居つて!一人前の人間てえな、親ア安樂させるに決まッてるだ!」

「然うですか　ぢや阿母樣は、親達に安樂させたんですか?」

「爲せたともね!」

「ぢやア、心から孝養を盡したんですね？夫は結構だ！」と鼻で笑ひ、「けれども、僕には出來ない！」

「何だッてよ新吾、お前、親を養なは無えて云ふだね？」

「無論さ。自分の生活の方法さへ立た無い者が、親の事なんぞ顧みる暇が有るもんか！僕には其樣な、本心を僞つた事は出來ん！」

「親ア養ふのは、何僞り此罰當り！」

「ふん、何でも可いさ」と新吾は爐邊を離れ掛けて、「親を養なへッて請求するなら、此方にだッて請求する事は有らア。」

「請求た何だ？大きな事許吐し居つて……」と母は我が子の背後を睨めたが、秩父銘撰の綿入に、白縮緬の兵兒帶を卷いたのが急に眼に着き、「其樣な柔けえ着物を不斷にひッ張り廻つてよ！自分ばかりへえ、何成つた氣で居るだ？」

「何を着たッて可いぢや無いか、悉な自分の腕で拵へた物だ。」と歩きながら云ふ。

「其樣な物を拵らへる錢有るなら、米の一俵も買つて、阿父樣の手傳するが可えだ！」と云ふ時、その息子の姿は上の室に入つて了つた。漆を塗つた板戸が、手荒くばたりと閉まつた。「此の親不孝奴！」と母はまだ睨めて居た。（次號完結）

二老婆

徐可秋老

二老婆

徳田秋聲

一

「ア、厭だ〱、此樣なとして生きてる位なら早く死んだ方が可い。」と云ふ下品な、速辯の、甲走つた聲が聞えると思ふと、ザアッと盥の水をあける音がする。自分は刷毛の手を休めて、腰硝子から不圖下を見下した。果して裏のお幾婆さんが井戸側へ洗濯に來てゐる。

二月末の、可恐しい寒い日で、朝から日の目を見ず、どんよりと重苦しい雲の蔽被さつた空、水氣を含んだ冷い風は、生物と云ふ生物を、チリ〱戰かせてゐるやうである。此樣な天氣には、運動に出るのも不愉快、人を訪問しても話が進まぬ。自分は行火に火を入れて、顔を顰めて寢てゐたが、ふと描かけてゐた、「冬の雜木林」の寫生畫に此感じを寫さうと思つたので、私とカンバスを引寄せて、窓から見える、四下の梢の、縮かまッてゐる狀など見ながら、野末の枯木立を想像してゐた。其頃は學校の出たてて、畫も拙かつたし、金もなかつたし、國から迎へた妻と二人で、新花町の「杉山えい」と云ふ婆さんの二階の六疊一間を假りて、其處で畫も描けば、客をも通し、起臥もしてゐた。古い家で、梁は、傾り、剝げた壁には新聞の附錄の畫など貼つてあつた。部屋代は確か月三圓であつたと記憶する。

其でもお榮婆さんは好い人であつた。否、好い惡いの詮索よりか、寧ろ變な婆さんであつた。

初めて此の婆さんの家を訪ねたのは、妻が田舎から來た當時、一昨年の夏であつた。貸室の札を見當に路次を入ると、其突當に、横に臺所口の附いた格子戸の二階家がある。何だか陰氣な家だと思つたが、兎に角戸を開けて案内を乞うたが、二三度聲をかけて見ても、誰も出て來ない。留守かと思つて障子を細目に開けて奥を覗込むと、五十餘の婆さんが、暗い茶の室の椽側へ出てお化粧をしてゐる。自分は適切聾だと思つた。

漸と氣がついて、此方を向いた顔を見ると、平顔の、目のショボ〳〵した、口の大な婆さんで、可也大きな丸髷の髪はツヤ〳〵してゐるが、入毛があると見えて、耳のあたりの鬢は薄く、眉も何だか塗つてあるやうである。が、一體に柔和の相で、物腰も嫻かである。自分は暗い臺所の入口の横に附いてゐる段梯子を上つて、二階を一見してから、階下へ降りると、婆さんは、大な土瓶から番茶を汲んでくれる。煙草盆も出してくれる。お世辭もなければ、口數も利かぬが、人間は正直らしく、家賃が六圓五十錢であるとから、去年の暮、裁判所の小使をしてゐた連合の爺さんに死れてから、獨で細々暮してゐると云ふとまで話して、チロ〳〵と自分と家内の顔ばかり見てゐた。

兎に角借りるとに決めて外へ出ると、妻は可厭な顔をして、「何だか厭味な婆さんね。加之家が薄汚くて、私はお茶を飲むのも氣味が惡い位でしたよ」と不平を言つてゐた。

・此の婆さんと昵むにつれて、身の上が段々判つて來た。宇都宮の產で、兄は今でも其町で有福な呉服屋であると云ふとも知れた。お榮婆さんは若い時分、死つた其爺さんと、少許の金を拵つて、東京へ駈

落して來たのだと云ふとも判つた。湯島て暫く下宿屋をしてゐたが、婆さんが一向大樣なので、段々と食込み、十五六年前に到頭此へ逐込められて了つたのだと云ふとも想像し得られた。婆さんの生活狀態を見てゐると、毎日唯モゾクサ〱してゐるばかりてある。釜を磨くのと、火鉢の掃除をするのと、其からお化粧をするのと、其がキチン〱と決まつた一日の仕事て、奈何かすると、肉厚の大皺の寄つた顏に白粉を塗つて、厚い唇に紅まて差してゐる。耳が不自由なからてもあらうが、人が何を言つてもハキ〱返辭をしない方て、碌々金の勘定も出來なければ、如何な困つたとがあつても、口へ出して零すだけの技倆すらない。

其當時は、貧しいながらに煤けた簞笥も据えてあつた。茶簞笥もあつた。着替も一二枚持つてゐたやうてある。が、此の婆さんの收入と云つては、自分が月々拂ふ三圓の部屋代だけなので、一年半ばかり居るうちに、身の周の道具を一つ賣り二つ賣りして、今ては鏡臺と、ブリキ落しの火鉢と、ランプが一つに、化粧道具の入つた菓子の空箱、手桶と赤土釜と膳碗が殘つてゐるばかり、臺所も部屋もガランとして、其處ら中ツル〱雜巾光のしてゐる暗い部屋の眞中に、お榮婆さんは相變らず、テラ〱蜻蛉のやうに光る大な首を据え、薄い目を瞬つて、一日モンゾリともせず坐つてゐる。

或日の午後、自分が二階て畫を描いてゐると、階下て誰やらシャ嗄れた聲て、婆さんに何か談じつけてゐる、其の尖がつた調子が耳についてならぬ。何の事とも解らぬが、借金取てあるとだけは推察される。其男は三十分ばかりて、ガラリと格子を締めて出て行つた。後て階下へ降りて行つて見ると、婆さ

んは火鉢の炭團を堀くりながら、去年の夏妻が着古しをくれてやつた、薩摩絣の單衣に裏をつけて綿を入れた、繼ぎ〳〵の着物に、縞目の計らぬ赤い双子の羽織を着て、心配さうにツクネンと坐つてゐる。周には晝お粥を煑た赤土釜に板を敷いたのと、化粧道具が一ト箱、雁首の凹んだ煙管に莨入、其と貧乏くさい下宿使ひの茶盆があるばかりだ。今のは何だと訊くと、据えた首を此方へ振顧けて、目眩さう目を擧げ、

「他は貴方大屋てすよ。」と鈍い口の利き方をして、敷いてゐた薄汚い布團を尻から引張出し、

「屋賃が滯つてゐるものてすからね。」と淋しさうに笑ふ。

「幾月溜つてゐるのて？」

「何ても先月て六月分だとか言ひましたがね、人の好い大屋さんて、爺さんの時分から、私達の堅いとを承知してゐるもんてすから、つい一度だつて小言を言つたとはないんてすけれど、此頃餘り滯るもんだから、一先立退いてくれと云つて來たんてすがね‥‥此處を出れば、私の體は行く處がありませんもの。」とウソ〳〵四下を見廻し、「もう賣るものと謂つても、何にも無くなつて了つたし、私ももう手も足も出なくなつて‥‥。」と頭髮から歪みなりの簪を拔いて煙管の雁首を掘りはじめる。

自分は憫れもしなかつた。婆さんの此頃の食料と言つては、三圓の間代きりて、其て細々とお粥を啜つてゐるとも能く解つてゐる。自分達が立退いたら、明日から口の干上るとも知つてゐた。婆さんは、二三日油を買ふ金がなくて、日が暮れると、直に戸締をして、土龍のやうに布團へ潜り込んで了ふとも、

妻から聞いて知つてゐる。

「何時まで其様なとしてゐる心算です。宇都宮の其實家とかへ相談してやつたら、如何かしてくれんともないでせう。」

「宮ですかねえ…、」

「現に兄さんが居られると云ふ位だから。」

「でも二三十年以來音信不通ですからね。先方も一切介意はね、私も決して世話になるまいと言つてやつた位ですから、加之もう代が替つてゐると云ふ話だし…。」と此樣な切迫つまつた場合でも、婆さんはノロタサしたもので、相變らずシホ／＼した目色をして、厭味なやうな笑顏を見せてゐる。

「しかし然う言つてるうちには、段々首が廻らなくなつて來るだらうから、今のうち何とか爲なけりやならん。第一病氣の時如何する心算です。」

「然うですよ。」婆さんは格別氣にもかけぬらしく、「生身のとですからね。」と同じやうなとを言ふ。

「其かゝ言つて、目が惡いから何一つ仕事は出來ませんしね、爲方がないから、少し知つた人に、何處か留守番でもさせてくれる處があつたらばと、其事を頼んでありますけれど、其がね、矢張捗々しく好い口も見つからないものと見えまして…。」と莨の粉を掬つて、少しづゝ吸つてゐる。

自分は溜息を吐いて、二階へ上つて了つた。

其から見ると、お幾婆さんは大した技倆ものである。
井戸は宿の横手の杉垣の、直ぐ其際にあるので、お幾婆さんの壊れかゝつた低い裏木戸が其側に着いてゐる。今では彼方此方水道が引けたので、此井戸の水を使ふ家といつては、お幾婆さんと宿の婆さんとの外に二軒しかない。中で一番用のあるのがお幾婆さんで、年が年中盥と洗濯板とを持出して、シャツや股引、半纏に腹掛、木綿の釋物や單衣ものゝ汚れたのをザブ〳〵洗つてゐる。指頭の千斷れるやうな、此様な寒い日でも、目暈がしさうな炎天でも、其を爲なければ、三度々々の飯が食つて行けぬので、怨言ダラ〳〵、嘔吐の出るほど水を汲んだり明けたりしてる。
お幾婆さんは、お榮婆さんから見ると、年が二つ三つ上である。顔のちんちくりんな、髪の色の惡い婆さんで、兎のやうな赤い目をしてゐる。性來底弱い質であるのに、營養不足の所爲か、色光澤の惡い皮膚が風に焦けて、土工をやつてゐる女に善く見る、彼のもつと希薄な色をしてゐる。看るから貧相な、チヨコマカした女で、早口に辯る愚痴が、人の胸に半分も應へぬ。毛が擦切れて、荒い地の見え透いてゐる、黒い縞の毛布に紐をつけて、其を腰の周に結へつけてゐる。此の縞毛布を見ると、自分が此處へ引移つて來た頃、亡つた連合の爺さんの事を思出さずにはゐられぬ。
爺さんは、死ぬ五六年前まで、車の梶棒に摑まつてゐた。車が挽けなくなつてからは、人の使行きや、引越の手傳、配物の持運びなどしてゐたものだが、小柄の、肉のブヨ〳〵した丸顔で、凸凹の頭がツルリと禿げてゐた。其の禿頭の皮が、所々薄汚い白癬に斑點つけられて、腫物の痕と云つたやうな風である。

此の爺さんが、夏の夕方、椽先へ出て、手拭地か何かて縫つたチャン／＼見一枚て、太い不合好な腕や、皺だらけの腹を露出しに、り／＼酒を飲んてゐるのを、自分は善く二階から見てゐた。朝顔の世話などもしてゐた。道具箱を持出して、羽目や木戸の破壞を直してゐた事もある。其時分は、婆さんも、今よりは多少元氣があつたやうてある。爺さんの酒のお相などもしてゐた。髯など剃つてやつてゐたよもある。椽先には、草双子などの畫に見るやうな秋草が深々と蔓つてゐて、垣根を這つて、廂まて上つた蔓から、糸瓜が夕風にブラついてゐた。芙蓉を心に、娼妓草や孔雀草が咲亂れてゐて、其處へ行水盥を据ゑ込んて、二人て睦じさうに、行水を使つてゐるのも、希しくなかつた。爺さんは晩方になると、澁團扇を持ちながら、燻る蚊遣て苦勞をしてゐたものだ。

「あれても、昔は何かだつたんてせうね。」と妻が何時ても笑つてゐた。

其時分から、お幾婆さんの體は、車鼠のやうにクル／＼廻つてゐた。口も可也煩い方て、朝から晩まて爺さんの世話を燒いてゐた。子供が一人あつたが、今は十四五にもなつたらう、爺さんの死ぬ少し前から、神田の指物屋へ年期小僧に住込したと云ふ話てある。お榮婆さんの口て利くと、婆さんは十三四年程前に、子供を一人に、風呂敷包を一つ抱へて、爺さんの處へ轉げ込んだ「あれは乞食てす」と言ふのてあるが、強ち然うてないとも言へぬ。

其爺さんが、夏の半過から滅切體が弱つて、所好な酒も餘り飲まず、始終浮かぬ顔をしてゐたが、其ても婆さんが口喧しいので、時々は半纏腹掛て、何か知ら仕事に出て行く。水も汲んてやつて居た。

するうち、まだ殘暑の酷しい九月の末の或夕方、爺さんは不意にコロリと死んで了つた。其死方が又酷く無造作である。

もう其處らの碧桐の葉が、所々赭くなつて破けてゐた。爺さんは常時の如く、秋草の繁つた垣根の側て、お幾婆さんに背を流して貰つてゐたが、旋て好い心持で、蚊遣の側で膳に向ひ、茸を一服喫して、猪口を手に取あげると、妙に手が顫へ出して、其まゝ仰ざまに顚覆つて了つた。

お幾婆さんは、變だと思つて、

「爺さん如何かしたの。え、如何かしたのかよ。」と側へ寄ると、もう目を白黑さして、ウン〳〵唸つてゐる。

婆さんは金切聲を振絞つて、杉山の婆さんを呼んだ。不斷は惡口を吐あつてゐる間であつたが、他に來て貰ふやうな人と言つては、近所に一人もない。丸い瓦斯燈の出てゐる「原」と云ふ新建の宅は、自用車まで抱込んだ某銀行の頭取で、其時綺麗な塀の奧から、冴えた琴の音が洩れてゐたし、其向の「三谷」と云ふ格子戸造は、下谷邊の或紳士の妾の宅で、是迄に遂口を利いた事もない人達であつた。

彼此して、醫者の來る時分には、爺さんはもう呼吸を引取つて、不斷飲古した、茶こびれの着いた湯吞から、婆さんが死水を啣んでやらなければならなかつた。

夕間暮の出來事で、陰氣な鈴の鳴る時分まで、爺さんの汗を流した盥の水は、浮垢を浮せたまゝ、星明に動く光つてゐた。草の中には蟲が鳴いて、何だか秋風らしい芙蓉の葉擦の音がザワ〳〵と、森とし

た幽暗い晩であつた。

お幾婆さんは、其晩から眞實の獨法師になつて了つた。

お通夜に行くと、其でも爺さんの知合が三四人集つてゐた。お幾婆さんは、十幾年前、爺さんと連添つてからの歷史を、切々に話して、何だか速に爺さんの人の好かつたとを吹聽してゐた。此頃體の工合の惡かつたとから、打斃れた前後の事を、人の顏を見る度に、赤い目を擦り／＼、繰返し／＼說明してゐた。自分が何樣なに爺さんを、大切にしてゐたかと云ふ事も、諄いほど聞された。

「何だか笑談のやうでね。」と杉山の婆さんは、爺さんの死を、身に染みても考へぬらしく、

「私も死ぬなら、何樣な風に死にたい。誠に手數がかゝらなくてね。」と言出す。

「だけど、何だか夢のやうでね。」と言ひ／＼、お幾婆さんは煩いほど、樒に水をくれたり、線香を立てたり、鈴を鳴したり、始終手を動かしづめてゐた。

「私が先へ死う／＼と思つてゐたら、到頭爺に先を越されてしまひましたよ。お醫者さまの藥一服飲まず、背一つ擦る間もなく、目を瞑つたもんだからね、何だか飽氣ないやうで……でもマア、あんな氣樂な死やうをしたかと思や、私や爺さん可羨しくて／＼、爲樣がございませんよ。何でも、後に取遺されたものは、割が惡うございますよ。明日から、又せッせと稼がなけや、後飯が頂けないんですからね。……アヽ可厭だ／＼。爺さんに死れやうとは思はなかつた。年中ヤレ腰が痛いの、ヤレ頭痛がするのと、生きてるか死んでるか、解らないやうな私が後へ後るなんて、こんな間違つたとがあるもんぢやござい

ませんよ。」とペラ〳〵舌つたるいやうな調子で辯る。

其から四五日の間は、「何だか笑談のやうだ」と家内と杉山の婆さんとか、其時のヿを想出しィは、爺さんの死方とお幾婆さんの周章てやうが可笑かつたと言つて、腹を抱へて笑つてゐたが、お幾婆さんは、其秋からガッカリ力落がして了つた。

お幾婆さんは、眞實生效のない生活をしてゐる。素より手頭で仕事の出來るやうな器用な腕は持たぬから、洗濯と水汲みをして、其で如何か恁か食つて行く。お榮婆さんが、暗い部屋のなかに坐込んで、マシリ〳〵と目を据えて衿元ばかり氣にしてゐる隙に、お幾婆さんの貧弱な體は、根の續く限り外でクル〳〵動いてゐる。一日休めば一日食はずにゐなければならぬので、始終死たい〳〵と言ひながら、今に一ト筋の釣瓶繩に噛りついて、ヤクザな生命だけを繋がうとしてゐる。辛い勞働に苦使ふだけの生命を、何の爲に繋いでゐなければならぬのか、其は自分にも判らぬ。如何かすると體が持切れなくなり、持病の寸白が起つて、二日も三日も寢て見るヿもあるが、寢れば直ぐ口が干上るので、爲うことなし又起きて働く。ビショ〳〵雨の降る日は、二町も三町もある處まで、人の宅の水を汲みに行つて、細い腕にバケツを提げ、破けた桐油を冠つて、其方此方の臺所口へ水を持込まして貰つて、其で幾許か宛惠まれて來る。天氣の好い日は、せつせと洗濯をして、洗物を竿にかけ、干揚げた奴を霧を吹くやら熨すやらして、其を晩方風呂敷で脊負出し、方々のお得意先を配つて行く。

お幾婆さんは、お榮婆さんのヿを「食はず貧樂」と言つて、非してゐるが、お榮婆さんは、「あんなに

迄して、私や生きてゐやうとは思ひませんわね。」と言つてお幾婆さんを蔭て嗤つてゐる。

「孰にしても、今一歩蹈外せば、乞食の境涯に落ちやうとする、危い線に辛うじて蹈止まつてゐるのです。」と言つて、自分の妻は笑つてゐた。

三

見てゐると、お幾婆さんは燥ぎ切つた盥に水を幾杯も汲入れる。盥の底からは粒々の白い泡が浮いてゐる。婆さんはバケツに一杯持出して來た汚れ物を半分ばかり水に浸けて、赭い細い手に仰えてゐたが、旋て其中から、青い棒縞の股引を一つ引張出して、シャボンを着けて、ゴシ〳〵板で擦りはじめる。脂氣の乏しい、頸の赭い鎚け髪が、栗立つたやうな首のあたりて、一つ一つ風に戰いてゐる。婆さんはガチ〳〵顫へてゐるやうてある。

何處の女中か、見馴れぬ二十二三の束髪の山出が、「お早う。」と言つて、提げて來たバケツを二つ、ガチャリと其處に置くと、

「此のお寒いのに、お婆さん能く精が出ますのね。」とお愛相を言ふ。

婆さんは手に着いたシャボンの泡を拭いて、腕て鼻を擦りながら、「いゝえ、精も根もありやしませんよ。此をやらなけりや、其日が過せませんからね。」と又ゴシ〳〵行る。「此の又二三日の寒さは如何てせう。私は腰が冷えて〳〵、如何にも恁にも動けないものですから、昨日は一日位、食べなくても好いからと思つて、樂をして見ましたがね、矢張食べずにや居られませんから、爲うことなし恁して働いてを

りますよ。」

「眞實ですね。」

「ア、莫迦々々しい……。今日は又可恐しい寒い……。でもね、何の彼のと言つても、今月一ト月ですよ。三月になれば、そろ〳〵櫻が芽ぐんで來ますからね、マア其迄の辛抱ですよ。然う思つて、目を瞑つて働いてゐますがね、何分にも此の體の弱いのにや克てませんよ。此樣なとしてヂボ〳〵生きてるよりか、速く死んだ方が優だと、熟々然う思ひますよ。」

下女は、「ハヽヽ」と高調子な空笑をして、水を汲みはじめる。

婆さんは尙何か御詫を並べ立てゝゐるやうであつたか、水を空ける音に消されて、能くは聞取れなかつた。

耳に染つくやうな其聲の聞える間は、畵を描く氣もしないので、自分は又行火に潛り込んで、何を考へるともなく恍乎としてゐた。

するうち婆さんは木戸を締切つて、內へ引込んで行く。ドンの鳴る頃まで、狹い庭で干物で苦勞をしてゐるやうであつたが、旋て宅へ上ると、障子を締めて多時は何のともない。股引やシャツからは、トく〳〵雫が滴つて、今にも雪の降りさうな空模樣である。婆さんは、腰に行火を當がひから、襤褸切や破けた足袋など取出して、それを綴はじめてゐるのであらう。

四時頃、學校から歸つて來た家內と一緒に――家內は其時分一ツ橋の職業學校へ通はしてゐたので―

晩飯の膳に向つてゐると、宿の婆さんの所へ、女の客が一人來てゐた。其聲は、如何やら髪結のお六と云ふ女らしかつたが、少時話してゐるうち、婆さんが二階の上口へ、綺麗に撫つけた、大きな頭髪を現して、些と出かけるから‥‥と云つて、何やら落着かぬ目色でモヂ／＼してゐる。

「お内儀さん何方へ」と妻が訊くと、婆さんはニヤ／＼して、身の周を見廻し、

「私もね、長くは此處にもゐられませんから、何處ぞ少時口を托けやうかと思ひましてね、お六さんが、實は其事てね、色々心配してくれますもんてすからね‥‥。」

「へエ、ちや其口があつたんてすか。」と訊くと、

「いゝえ、未だ決つた譯ぢやありませんがね、是から些と行つて見やうかと思ひましてね。」

婆さんは、障子際に立てある、自分の畫に薄い目を見据えて、氣の脱けたやうな顔をしてゐたが、

「どんな口てすの。」

「もう年が年だもんてすからね、骨の折れる處ぢや、迚も勤まりませんから‥‥」と少時何か考へるやうてあつたが、「宅は妻戀の下の、大きな酒屋てすがね、那處のお爺さんが、今茲何ても六十三だとか言ふんてすがね、別に不足のある體ぢやなし、奥の離房へ引込んて、氣樂に暮してゐるんてすけれど、何てすか、脚が少し惡くて、起居に不自由だとか云ふのてね、心寂しいから、誰か茶呑友達のやうな、介抱人のやうな老婆が一人欲しいとか云ふのださうてすよ。お六さんが、矢張那處がお得意先なものですから、行つて見ては如何かと勸めてくれますので、大して難しい爺さんてもないやうなら、私も行つ

て見やうかと思ふんですけれど。」

「大變好いぢやありませんか。」

「何ですか……。」

婆さんは、モゾ〳〵しながら引込んで行つた。

婆さんが出て行くと、間もなく、お幾婆さんが、家内から頼まれた洗濯物を持つてやつて來た。洗賃を少し餘分にくれてやると、婆さんは叮嚀にお叩頭をしてゐたが、例の體の弱いと云ふ話から、年々物價が高くなつて、陽氣までが、一と昔から見ると、餘程寒くなつたやうだと云ふ事、其から例によつてお榮婆さんの噂が出て、自分が慤して、手の皮の擦剝けるまで洗濯をして、其で漸う此の口だけ埋めて行けるのに、あの婆さんは、能くも今日まで日干にならなかつたものだ、今にお菰にまで成下つても、あの婆さんのことなら、苦にもしないだらう。貴方方がゐるから、倘しも助かつてゐるのです、と散々非難す。

「何時かの夏でしたよ。階下にも階上にも、同居人を三組も入れて、自分は臺所に布團を布いて寢てゐましたつけがね、那の婆さんは、其樣なにしても、體に樂がさせたいのださうですよ。」

家内が揶揄半分に、お榮婆さんの先刻のことを少し大業に話して、「何ても、大想お金のある宅ださうてすよ。」

「へッ」と笑つて、「婆さんは、赤い小い目を圓くしたが、

「ア、那の爺さんてせう。他は奥樣の前でございますけど、名代の女好きですよ。ぢや丁度好いかも知れません。」と汚い亂杭齒を出して笑ふ。

「でも、運の好い婆さんぢやないか。押ッ堪えてゐただけの事はあるわね。」

婆さんの顏色は急に變つて、挨拶も匆々、梯下を降りて行つた。如何かすると、不斷からお天氣屋の婆アて通つた女で、慍したむかッ肚も立てる。

四

風呂敷に化粧道具を一と箱、其に襤褸を一ト行李提げて、お榮婆さんが妻戀の酒屋へ引取られてから、二三日は何の事もなかつた。

お幾婆さんは、其後餘り姿を見せぬ。偶に外て行逢つても、妙に憤々して、見て見ぬ振をして行過ぎて了ふ。が、お榮婆さんに對する惡口は一層激しくなつた。近所界隈をアクザモクザ言つて、布令て行いてゐた事だけは確かてある。誰か顏出する者があるかと見ると、風評は必然妻戀の酒屋の風評て、終には聽かされる方が聽飽きて、誰も相手にする者がなくなつて了つた。

或日髮結のお六が、家内の髮を結つて歸りがけに、婆さんの處を覗くと、婆さんは相變らず庭て干物を取片着けてゐたが、お六の顏を見ると遂い其話が出て、一つ二つ厭味を言つて居るうち、到統大喧嘩が始まつた。婆さんは青筋を立てゝ、お六に喰つてかゝつたが、相手が氣象ものゝ、可恐しい痰火の切れる江戸つ兒肌なので、迚も敵はず、「此のよい〳〵婆アの死損ひめ！」だの「冬瓜の川流れ」だの「何

處の馬の骨だか知れもしない癖に、利いた風な口を利くんぢないよ」だのと、散々毒口を浴せられて、終には可悔がつて泣出して了つた。

自分は其日午後から、家を捜しに出てゐつたが、晩方歸つて來ると丁度其話で、お幾婆さんの宅を覗くと、成程婆さんは酷く沮げ込んでゐる樣子である。窓から自分達の顏が見えると、ピシヤツと障子を締切つて了ふ。

其日宅が漸く見つかつたので、明日早々此處を引拂ふ心算で、晩飯が濟むと、妻と二人で多くもあらぬ道具の始末をしてゐた。外は可恐しい風が吹荒んでゐた。

荷物が一ト片着き片着いたところで、自分は火鉢の火を起して、莨を吹しながら、明日から空家になる、此の家の事や、十五六年住古したと云ふ、老夫婦の事や、お榮婆さんやお幾婆さんの將來など想つてゐた。お幾婆さんの爺さんが死んだ夏の夕の模樣も、目に浮んで來るやうである。お榮婆さんが、死つた連合の爺さんと、宇都宮を出奔して、東京で彷徨いた、ずつと昔の事なども、想像に上つて來る。比較的裕かな生活をしてゐる人々の中に挾まつて、人生の底に哀れな殘年を、漸く蠢いてゐるやうな、二人の老婆の生活の果敢なさをも考へてゐた。此が何の意味か、自分には各別暗示される處もないやうてあるが、畫題は左に右二つ三つ出來た。

と見ると、妻はポツト上氣したやうな顏をして、默つて、コマ〳〵した小いもの丶始末をして居た。初めから陰氣だと云つて、嫌つてゐた此家も、もう今夜限て立退くかと思ふと、何となく氣が引立つて

ゐるのであらう。

するうち、未た宵の口だと思つてゐると、もう八時を四十分も過ぎてゐる。自分は憊れてゐたので、好い加減に段落をつけ、床を述べさせやうとしてゐると、不圖格子戸の鈴が鳴るやうである。大分經つてから、お榮婆さんが、ノツ〱と上つて來た。妻が愈よ明日立退きますから……と、此迄の挨拶などする。婆さんは、袂から貰つたのを收つておいたのだとか言つて、紙に裹んだ菓子を取出したが、立退くと聞くと、急に落膽した顏をして、口も利かず鬱いてゐる。が、一體がハキ〱しない質なので、自分達は氣にも留めずに居た。妻は又、お幾婆さんとお六との、今日の喧嘩の話をして、婆さんの身の上の氣樂な事を悦んでやり、茶を淹れて、愛相をしてゐたが、婆さんは一向浮かぬ顏色で、何か言ひさうにしては、言そゝくれ、取片着いた部屋中を、可懷さうに見廻してゐた。自分は、住馴れた此家が、明日から知らぬ他人の住居となるので、樣々の古い記憶が、婆さんの弱い胸に浮ぶのであらうと、其事を言出すと、婆さんは、一層目をシヨボ〱させて、

「私も長い間、此の家の厄介に成りましたよ。餘所へ出て見ますと、矢張住馴れた家が戀しいもんでね……加之、爺も此處で目を瞑つたし、私も、何はなくとも、此處の軒下で引取られやうと思いましたがね……。」とまう聲を曇らしてゐる。

「もう此歳になるてえと、何處へ行つても好い事はないものでね……。」

話が妙は滅入つて來たので、自分達は默つて了つた。婆さんは、今夜妻戀に少し取込があるので、一

ト晩だけ此處に泊めて貰ひたい、もう今夜限だから……と、言つて、九時過し過に、小いランプと、自分達が預つてゐた布團を持つて、悄々と下へ降りて行つた。

「酒屋の方も、餘り面白くないんてせうよ。」と妻は、送出してから呟いてゐた。

自分は間もなく、床へ入つて了つた。

一時間ばかりウト〳〵したと思ふと、ふと窓の外で、何やらザブリと云ふ音がした。釣瓶の音かと思ふと、其よりは少し強いやうてある。自分は現心に、何の事とも思ひつかずにゐると、ガサ〳〵風に鳴る樋の音と共に、「助けてくれ！」といふ聲が二タ聲ばかり、聞える。確に井戸の中からて、お幾婆さんの聲であると云ふ事も、明かである。

妻と一緒に、臺所口から飛出して、井戸端へ行つた時分には、中てはもうガタ〳〵顫へて居るらしく、「萬望お早く〳〵、後生てございます……。」と速に氣を焦つてゐた。

まだ十時少し過ぎた頃の事て、原ても三谷ても、明がカン〳〵點いてゐる。華やかな女の話聞が聞える。風は少し靜つたやうてある。暗い晩て、空には星一つ姿を見せず、如何やらポツ〳〵雨が落ちさうてあつた。

自分は表の武藏屋と云ふ車宿へ家内を走らせて、若い衆を一人應援に賴んでやると、ドレ〳〵と言つて、ゾロ〳〵三四人もやつて來た。中には細引に看板を振翳して、一杯機嫌の、可恐しい元氣の好い男も居た。て、婆さんは何の苦もなく、引揚られる。

水も少し飲んだであらう、顔にも所々の擦過傷があつて、腰でも打つたのか、碌々足も立たぬ。髪も振亂して、體中ビショ〳〵水が垂れる。皆は氣毒なうちにも、噴出したくなつて「如何したんだ〳〵。」と看板を差つけた。婆さんは眞蒼な顔を氣味の悪いほど顰めてゐたが、跛を曳きながら、口一つ利かず、解けかゝつた帯を引摺つて、口を開いたまゝ、喘ぎ〳〵木戸口から入つて行く。

醫者が來る時分には、寄つて集つて着物を脱し、其處に有合ふ袷の裏やら抜綿やら、手當次第に掻集めて體を包み、靜かに布團の中に寢かされてゐた。醫者は水を吐かして、人口呼吸を試みた。水を吐く時、口から多量に出たのは、未だ消化れ切らぬ食物であつた。意地汚く貪つたと見える。天麩羅が水の中にフワ〳〵して居る。若い醫者は唯眉を顰めて見てゐた。

三十分も經つと、お幾婆さんは、多少顔色が出て來た。口も利けるやうになつた。無論死ぬ心算であつたので、竿に縋つて、ヅル〳〵と一間ばかり下りたまでは覺えてゐるが、後は一切夢中であつたと云つて、面目なげに枕に突く伏して泣いてゐる。

自分等は、間もなく此家を引揚げた。

此騒ぎに、お榮婆さんが、顔を出さぬのも不思議と、自分は歸りがけに、其寢所を覗いてみた。婆さんは、枕頭に豆ランプを點けたまゝ、マジ〳〵目を開いてゐた。自分はお幾婆さんの助かつた次第を、手短に報告して、笑ひながら梯子を上つた。

* * * * * *

翌朝は豁如とした天氣である。自分等は何時にない早起であつた。妻が元氣よく臺所へ出たと思ふと、自分は不意に消魂しい聲に駭された。

急いで階下へ降りて見ると、お榮婆さんは、天窓の繩に垂下つて死んでゐた。寒さうな旭影が、蒼白い其死相を、上から照して居る。

＊　＊　＊　＊　＊

お榮婆さんは、耳が遠くて目が惡いので、其晩酒屋から暇を出されたのだと云ふ事實が、後で漸く解つた。(をはり)

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋區鎗屋町　良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）但本號特價欄外にあり

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵稅共		

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年三月廿七日印刷
明治四十一年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



四月一日より

一、第十五回新柄陳列會

一懸賞課題模樣圖案陳列

一懸賞寫眞優等印畫陳列

一新流行歐米雜貨見本陳列

一新古御婚儀用調度品陳列

一、寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右新柄會は我國染織業の改良發達を圖るを目的とし今回全國機業家の賛成を得て是迄に類なく一層盛大に開催致し候ものに有之尚は寄せ裂れ類は假營業場新築紀念の爲め特別澤山に準備致置候間實業奬勵の爲めと思召され新陳列場の御遊覽を兼ね賑々敷御來觀御高評を給はり候樣偏に奉願上候

東京日本橋駿河町

三越呉服店

天賞堂監製實用懷中時計發賣



本堂は毎に世界時計の製産地に店員を特派し彼國近時の流行と我國の好尚とを參酌し體裁優美なるが上に機關堅牢にして時報精確なるを目的とし專心監製せしめて之を輸入し汎く東洋諸國の需求に應じつゝありしが今回米瑞諸國よりの新着品は頗る時好に適するもの多數なるを以て此際特に大方各位に便利を謀り就中精良の品類數十種を選擇し其種類に從て十ケ年より三十ケ年迄の保存請合證を添付し左の非常廉價を爲すべし冀くは愛顧諸君此好機を逸せず現品盡きざるの中速に御需の榮を給はらんことを

●金側時計

十八金側無蓋18形（十三サイズ）中蓋付器械ニツケル15石入切天府アンクル龍頭卷（米國製）
乙種：價百九十五圓
甲種：價貳百拾圓

十八金側無蓋14形（零サイズ）中蓋付器械ニツケル7石入アンクル龍頭卷（米國製）
乙種：價六十五圓
甲種：價七十圓

十八金側ダイヤモンド六個入月星梨子地無蓋14形（零サイズ）器械ニツケル15石入切天府アンクル龍頭卷（米國製）
乙種（貴婦人用）價[illegible]
甲種（貴婦人用）價[illegible]

十四金側斜子無蓋13形器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價廿[illegible]圓
乙種（貴婦人用）價廿[illegible]圓
甲種（貴婦人用）價[illegible]圓

十八金側斜子無蓋13形器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價[illegible]圓
乙種（貴婦人用）價[illegible]圓
甲種（貴婦人用）價[illegible]圓

十八金側斜子無蓋13形器械ニツケル石入アンクル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價[illegible]圓
乙種（貴婦人用）價[illegible]圓
甲種（貴婦人用）價[illegible]
以下略ス

●銀側時計

銀側斜子16 17形片硝子器械ニ金皮ニツケルアンクル龍頭卷（瑞西製）
戊種：價八圓半
丁種：價九圓
丙種：價十圓半
乙種：價十[illegible]圓半
甲種：價[illegible]圓半

銀側斜子13形片硝子器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（御婦人用）價六圓
乙種（御婦人用）價七圓
甲種（御婦人用）價七圓半

銀側斜子無蓋13形器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（御婦人用）價七圓
乙種（御婦人用）價八圓

甲種（御婦人用）價八圓半
銀側斜子無蓋13形ニツケレーアンクル龍頭卷（瑞西製）
乙種（御婦人用）價十一圓
甲種（御婦人用）價十二圓半

銀側無蓋14形（零サイズ）中蓋付器械ニツケル7石入アンクル切天府[illegible]石入龍頭卷（米國製）梨子地側斜子側共同價
丁種（御婦人用）價十七圓
丙種（御婦人用）價十八圓
乙種（御婦人用）價十九圓
甲種（御婦人用）價二十圓
以下略ス

●鐵及白銅側時計

白銅側16形片硝子器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
乙種：價三圓八十錢
甲種：價四圓半

鐵側17形片硝子中蓋付器械ニツケレー本付二枚車シリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種：價五圓

白銅側16形片硝子器械流金アンクル龍頭卷（瑞西製）
丙種：價五圓
乙種：價五圓半
甲種：價七圓

鐵側16形片硝子器械流金二枚車アンクル龍頭卷（瑞西製）
乙種：價五圓廿錢
甲種：價七圓廿錢

鐵側13形片硝子器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種（御婦人用）價四圓

白銅側無地無蓋13形器械ニツケーレシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲（御婦人用）價四圓八十錢

鐵側無地無蓋13形器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種（御婦人用）價五圓
以下略ス

時計及寶石[illegible]外商
雜貨貴金屬美術品

東京市京橋區尾張町二丁目
【電話新橋特三三三二 三一五三】
天賞堂本店

天賞堂神田出張所 神田區表神保町（電話本局二六〇）
天賞堂横濱出張所 横濱市尾上町（電話八七〇）
天賞堂大阪出張所 大阪心齋橋北詰（電話東七二三）
天賞堂長崎出張所 長崎市鍛冶屋町（電話一二一九）

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可 明治四十一年四月一日[illegible]發行